註

1) 1以下，3までの記述はほぼ下記の文献に拠っている。
a)『丹生1・2次概報』(昭和39年)；b)『丹生総括篇』(昭和43年)。

2) 報文では，第3層までしか層の番号を振っていないが，その下の層まで記述があるため本文においては4層までとしている。

3) 石器の分類に関しては，鈴木忠司編『野沢遺跡』(富山県大野沢町，昭和55年)，p81等を参照。

4) 柳田俊雄「東九州の石刃技法の変遷」(『古代文化』第40巻第6号所収，京都，昭和63年)。

5) 柳田俊雄他『岩戸遺跡－第3次発掘調査報告書』(大分県清川村，昭和61年)。

6) 平口哲夫「横剝ぎ技法の諸類型その1～3」(『大平台史窓』6～8巻所収，昭和62年～平成元年)。

7) 平口氏の整理されたような横剝ぎの技法には，瀬戸内技法・三国技法・冠技法・櫃石島技法等があるが，それらの一連のものを発展的な変化の過程と見るか，衰退の過程と見るか等の考えがあり，編年的な位置付けは流動的であるといえよう。

## 第17節　第7地区D地点

### 1．発掘の経過

7－D地点は第3次発掘調査[1](昭和39年10月4日～10月22日)と第4次発掘調査[2](昭和40年10月13日～11月2日)の2度に亘って，三上班が担当，調査を行っている。

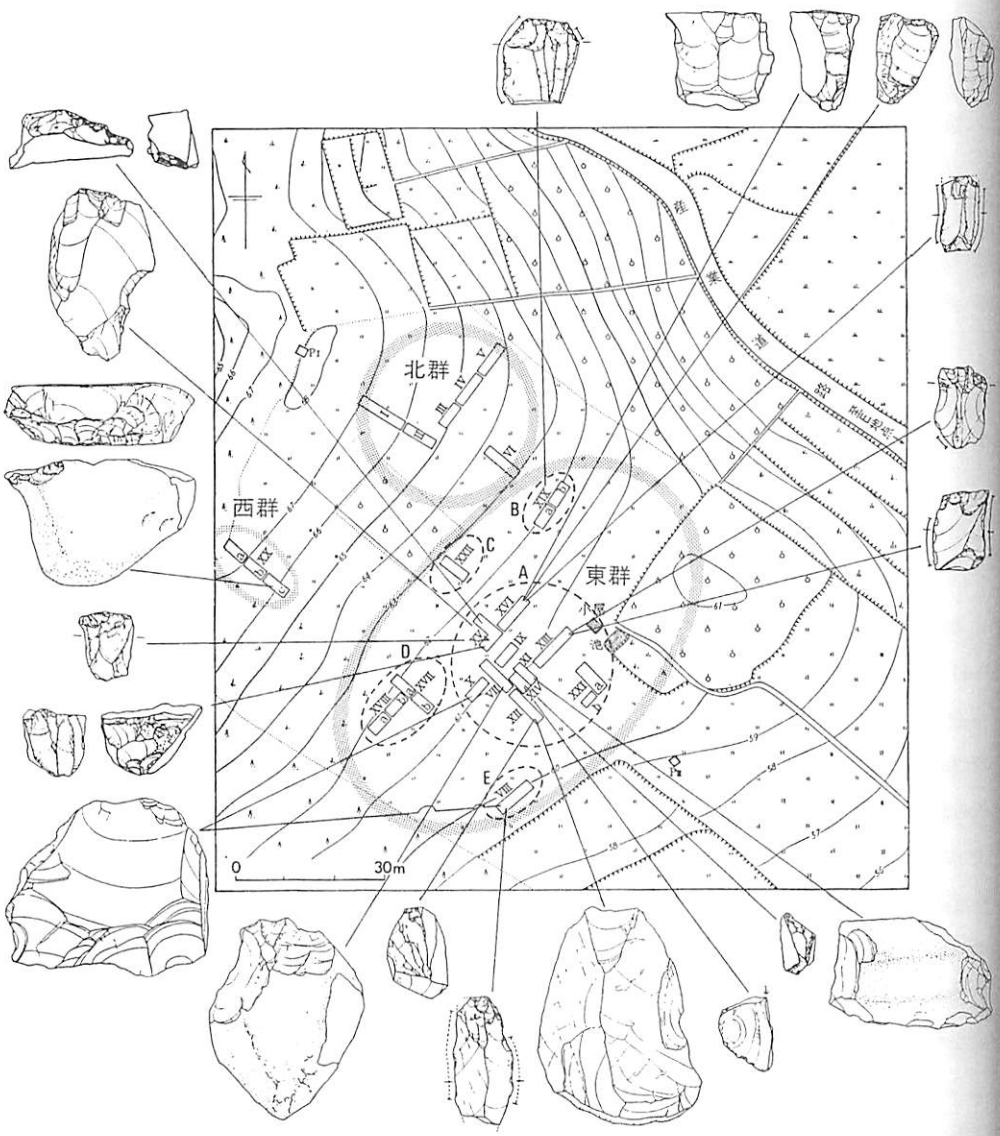
そもそもこの7－D地点が発掘されることになった契機は，同じ7－A地点の発掘の結果が予想を越えて良好であったため，このA地点との関係を明らかにする目的で近接する地域にも発掘が試みられたことによる。新たに選ばれたのはA地点北手の丘陵，この丘陵は大部分がブルドーザーによって削地されていたがその西南端は削地を免れ，松林を呈しており，ここにB地点を設定した。作業進行にともない層位が攪乱されていることが判明し，当初の目的を果たすことができなかった。ついで，松林中の本地点が調査される次第となったのである[3]。また第4次調査は『第3次概報』において本地点出土の石器を型式学的に3類に分類したが，これについて層位的裏付けとその妥当性を立証するために行われた発掘である[4]。

### 2．位置・地形・トレンチ

7－D地点は大字丹川字池久保を中心とする地域であり(第4地区付近の字延命寺西南方の南の"池久保"とは同名異地点)，地形的には西北の高い丘陵(標高約76m)から東南に向って低下した緩い傾斜面をなしている。そして，この丘陵の東南斜面にD地点は設定されている(図版Ⅳ上段)。

D地点の斜面にそって，まず2×10mのトレンチ(以下Ⅰトレンチとする)を設け，このⅠトレンチの斜面下方延長線上に2×7mのⅡトレンチ，そのまた最下方に直交するように2×5mのⅢトレンチを開ける。このⅢトレンチの延長約0.5mにおいて2×7mのⅣ・Ⅴトレンチ，2つを設けた。そしてまたⅢトレンチの下方9mに2×8mのⅥトレンチ，更にその南に2×8mのⅦ・Ⅷトレンチを開ける(第131図)。

これはⅥトレンチ付近で表採による遺物の多い事，その上，Ⅶ・Ⅷトレンチは Ⅰ～Ⅴトレンチの傾斜に続く平面となっているため，流れ込みによる遺物の移動が予想されたからである。そしてⅦトレンチに直交して2×5mのⅨ・Ⅹトレンチを設置し，そのⅨトレンチの下方に同様の大きさで




第131図　７－Ｄ地点地形・トレンチ配置図

XIトレンチを開けた。また，VIIトレンチの延長に２×８ｍのXIIトレンチを設定し，前述のXIトレンチに直交させる形でXIIIトレンチを２×10ｍの区画で設ける。加えてXIトレンチとXIIトレンチの間に２×４(?)ｍのXIVトレンチも設定した。

IXトレンチの上方にXVトレンチを２×５×６ｍのＬ字形に設置し，その北側に２×８ｍのXVIトレンチも設定した。次に先のＸトレンチの南側に２×10ｍのXVIIトレンチを開き，このXVIIトレンチの中央部南側に直角に２×８ｍのXVIIIトレンチを設置した。XVIIトレンチは細石器出土の可能性があったため（３次調査の際，XVトレンチで細石核が出土した），篩を使用し細石刃検出を試みたが発見できなかった。

本地点には発掘当時，小屋が一軒あり，それの北東に新トレンチ設定を考えたが，この地は以前

古墳があったとのことで，図の如くXIXトレンチを設けている。先述のXVII・XVIII両トレンチの上方の傾斜面に2×15mのXXトレンチを開けた。ところで，本地区においてブルドーザーの入っていない地域は小屋の西の桃畑のみなので，その場所にトレンチ設定を試み，XXIトレンチを1.5×3.5mの区画で設置し，次にXXIIトレンチはXVIトレンチの北方に2×6mで設置された。また斜面最上部と最下方には志村砂礫層の堆積状況を観察するため，2つの竪溝（$P_1$・$P_2$各々1.5m四方）が設けられている。本地区には，トレンチの密集している所とまばらな所があるが，これは前述の通り特に遺物の多かったトレンチにおいて，その付近を延長・拡大してトレンチが設定されているためである。総発掘面積は約343.5m²である。

## 3．報告対象・トレンチ

D地点Ⅰ～XXIIトレンチは斜面にそって置かれているが，最も上部に位置するXXトレンチと最下部のVIIトレンチの間は，距離がかなり隔たっており標高差も大きい。この様な広範囲内から出土した遺物群を一括して，同一遺跡の所産と考えるのは危険が大きいので，取りあえず，できるだけ小範囲にまとめて性格を把握していく事が望ましい。このためにX～XXIIまでの全トレンチを北群・東群・西群の3群に分け，特に東群についてはA～Eまでのグループ分けを行い，各群・グループで性格を考えていく事にする。詳細は以下の通りである。

北群：Ⅰ～VIのトレンチ。

東群：A→VII・IX・X・XI・XII・XIII・XIV・XV・XVI・XXIトレンチ。

B→XIXトレンチ。

C→XXIIトレンチ。

D→XVII・XVIIIトレンチ。

E→VIIIトレンチ。

西群：XXトレンチ。

表採：7－D地点で採集されてはいるが，台帳には出土トレンチの記載のない遺物を一括した。

北群は出土遺物が少数で，加えてその内，縄文時代の所産と思われる遺物が数点あるため，記述の考察対象とはしない。また$P_1$・$P_2$についても同様である。

## 4．土　　層

第1層　表土。ブルドーザー，耕運機が入っている攪乱層。

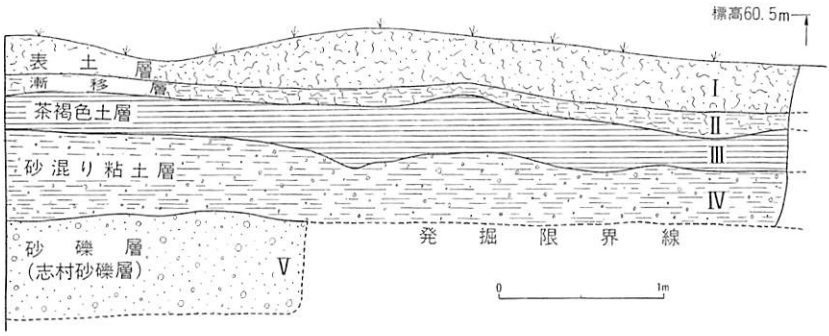
第2層　漸移層。茶褐色で鉄分を含み，攪乱層である。

第3層　茶褐色土層。鉄分を含み，下方ほど粘土質になる。

第4層　粘土層。灰青色を呈し小礫を含む。

第5層　砂礫層。黄褐色で腐食が著しい。小中礫が主で，鈍角の石英やチャートの小礫が安山岩・流紋岩礫中に混在していて丹生台地を構成する志村砂礫層に相当する。

第4層の粘土層は3次調査の際，砂礫層中への流れ込みで，局部的現象として解されたが，4次調査でこの層は，志村砂礫層直上にレンズ状になって重なっているものだという事が判明した。またこの粘土層は小江・早川両班の発掘地点にも見られ，大在層[5]（志村砂礫層と丹生泥層）とは不整合




第132図　７―Ｄ地点第12トレンチ北壁土層断面図

に堆積するものである(第132図)。

２のトレンチの設定でも述べたように，本地点では丘陵の斜面の上下に亘って広くトレンチが設けられているため其々に何ケ所かで志村砂礫層の堆積状況を見るべく，竪溝を掘っている。丘陵の頂部の$P_1$では地表よりすぐに砂礫が表れたが，Ⅵトレンチの竪溝では約１ｍ掘り下げても砂礫層は見当らなかった。しかし，斜面下方の$P_2$では約1.1ｍ掘り下げ，地表より約0.3ｍが置土，続いて約0.6ｍが表土，そしてその下に砂礫層が顔を出している。しかし，全体的な層序は先述の第１～５層までの見解の範囲を越えるものではない。

これらの観察を通して本地区の地層を次のように想定する。すなわち，かなり長い年月にわたり地表面に露呈した志村砂礫層に粘土層が堆積して，レンズ状に残留し，その上に志村砂礫層の風化して土壌化したものが，茶褐色の斜面色の斜面堆積物として重なり現存の地表を構成したという理解である。

## ５．遺物の出土状況

遺物が出土したのは第１～３層までである。しかし大部分のトレンチでは耕作のため茶褐色土層上部(第３層)以上は攪乱されており，層位学的な分離は不能に終った。

平面分布については正確なデータを欠いているため，トレンチ内で何点出土したかを示すに留まった。また，トレンチ設定が多数であるにもかかわらず，考察対象となる遺物の約70％にあたる石器が東群Ａグループに集中しており，第７地区の性格を考える上で非常に重要な位置を占めている。

また，表採品も全部で34点あり，この内縄文的要素の強いものを除いてトレンチ内から出土した遺物と関連性があると思われるもの，重要だと考えられるものについては合わせて紹介する。

## ６．石　　器

本地点の考察対象となるのは総計89点である。これは７－Ｄ地点遺物総数146点から，縄文的要素の強い物や石器とは認めがたい物，表採品の内重要とは思われない物等を除外した点数である。以下，東群(Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ)と西群，表採グループ各々について解説を行う。

１)東群Ａグループ

54点が発見されており，この数は，本地点の対象となる遺物のおよそ70％に相当する。その内訳は，トゥール類29・剝片類19・石核類６点となる。トゥール類には彫器１，打器３，加工痕ある剝

片3，使用痕ある剥片22点を含み，石核類に2点のチャート製の細石核を含んでいる。石質は流紋岩を主とし一部にチャート・安山岩を含む。以下に順を追って記載する。

A)彫　器(第133図)

剥片の先端を直角に折りとり，一端にわずかだがはっきりした彫刃打面を設け，折断面にファシットを設けた定型的彫器である(No.299)。

B)打器・石核類(第138～142図)

イ)打　器

打器は2点出土しているが，やや扁平な円礫の一端に加撃して刃部他を作出しているもの(No.351)と，分割礫を(恐らく二・三分割程度)用いた素材に加撃を行なっているもの(No.357)とがある。

No.351は，ほぼ拳大の円礫の半周に亘り片面から加撃を行い，緩やかな刃部を作出している。その側面観は正面側へわずかに傾斜し山形を呈しているが，所謂チョッピングトゥールではない。長さ109㎜，幅105㎜，厚さ53㎜，重量750ｇ。

No.352については，大型の楕円礫を荒割りし，先端部には正面側に一枚の深い剥離痕，裏面に3枚の浅い剥離痕を留め各々両面から加撃され，裏の3枚は正面の1枚の剥離によって切られており，その刃部は，尖らず直線状である。長さ168㎜，幅125㎜，厚さ70㎜，重量1580ｇ。

ロ)石　核

石核類は全部で7点あり，細石核を2点，大型のものを4点含み，残りの1点は円柱状を呈する石核である。以下，各々につき記載を行う。

No.328は角柱状の細石核である。背面と右側面は全面に，左側面は一部に自然面を残している。そのためか，石核体形を整えるための剥離はNo.329ほどは行われてはいないが，正面におけるフルーティングは左側面の広い面を切っている。石核の打面部は打面再生の痕跡であろうか。これ以後，1枚も剥離作業はなされていない。また，左側面頭部のみに，こまかな剥離が数枚入っている。チャート製。

No.329。舟底状を呈す細石核である。正面から右側面中程にかけてフルーティングが認められる。右側面のフルーティング以外の所には背面方向から加えられた，体形を整えるための大きな剥離が入っている。また左側面には同様な目的で施されたであろう剥離が各々2枚ずつ，下方向から小さく横から大きく入っているが，残りの面は節理面を留めている。頭部調整のためのこまかな剥離も見当らない。また打面は一枚の面で構成されている。チャート製。

No.353は厚さ3㎝余りの楕円形の円柱のような石核。残核の様子から打面が幅広・縦長の剥片がとられたと思われる。右側面の2枚の小剥離などは真横から，下端部の剥離も1枚ではあるがともに石核の平坦な背面を打面として加撃されている。また各々の打面にはそれを調整した剥離はない。この石核の背面はネガ面で，そのネガティブバルブは頭部に入った小剥離のため失われている。

No.354は大型礫を半割し，分割面を打面として自然面側に向ってほぼ全周縁部を剥離してい

る。また風化が激しく読みとりにくいが分割面側の縁辺にもわずかながら剝離痕が見られる。左端部は欠損しているため，性格を把握しにくいが，恐らく正面側と同様，作業面として利用されていたことと考えられる。正面上端からとられた剝片は厚手の大きめのもので，左右の体側部からとられた剝片は薄手の横長剝片である。長さ135㎜，幅85㎜，厚さ51㎜，重さ850ｇ。

No.355は自然打面の石核である。円礫を荒割りし，角柱状に整形し，礫面の残る丸い曲線部の頂点を打面として横長な二等辺三角形の剝片を取っている。長さ92㎜，幅131㎜，厚さ59㎜，重量1150ｇ。

No.356は大型礫を分割した後，右上端と下辺，左側面において自然面側を打面として大型剝片を分割面方向へ加撃してとっている。下辺においては打面幅の広い大きくて厚手の横長な剝片が，まず右端に於いて剝取され，次に左端，真中，最後にまた右端といったようにとられたため，波の様な緩やかなカーブが直線状にでき上っている。左側面では薄手ないしは不整形な剝片がとられた様に見える。長さ154㎜，幅135㎜，厚さ48㎜，重量1260ｇ。

No.357の石核は2分割した礫を素材とする自然面を留めた菱形のものである。作業は全て一端に同方向から施され，分厚く打面幅の広い大型の縦長剝片がとられていたようである。分割面を打面として一端に加工を施し刃部を作出しているように考えられなくもない。長さ153㎜，幅120㎜，厚さ68㎜，重量1530ｇ。

以下，念のために，石核と打器との判断基準について補足しておく。

①打面角が鋭角なら打器，鈍角なら石核とした。85°～95°の間に位置するものについては，次の2点に注目してみた。

②刃部の平面観。山形を呈すものは打器とし，刃部の縁辺が尖らず比較的平坦で，まんべんなく剝離が施されているものは石核と判断した。

③剝片を主に何枚取っているか，またそれがどのようになされているかもまた判断材料の一つとした。より多くの剝片が全体的に粗雑に取られていれば，石核と認識した。

C）加工痕ある剝片（第133図）

4例確認されている。形状からみて大まかに，横長なもの（No.300・301），縦長なもの（No.302・303）とに分かれる。以下各々に記載を行なっていく。

No.301は大きな打面を留めた厚手で頑丈な大型剝片で，左右両側縁に加工痕が形成され，特に右側縁は，そろってほぼ垂直に腹面側から調整されゆるい弧状をなしている。

No.300は厚めの剝片を利用している。腹面側の左側辺にまず斜めから大きめの剝離を入れ，湾曲部を作出している。またその腹面の頂点部は意図的に潰された様子を呈している。使用痕は腹面左側辺の湾曲した部分と，背面右側辺下端に見られている。前述の加工痕とした剝離も使用中のダメージによる割れかもしれない。また，背面に節理面を有し側辺に浅いノッチ状の調整をもつものは後述の例（No.322）にも見える。

No.302は下端が欠損している。背面は4面で構成されて各々その加撃方向を異にするが，背面下部の左側辺に並ぶ剝離痕は，ほぼ同じ大きさのものがきちんと並んでいるので加工痕と考え，RF

として分類した。

No.303は背面は平坦で，腹面側に山形に突出した稜をもつ厚手の縦長剥片を利用している。両側辺中程にゆるく湾曲した加工部分が認められ，周辺にもわずかに細かな剥離が並んでいるがこれは使用痕かもしれない。また左側面の縁辺下方にも使用痕が残っている。

D)使用痕ある剥片(第133～135図)

22点発見されている。縦長剥片10・横長剥片９・不定形剥片３点をそれぞれ利用している。

縦長剥片(No.304～313)を用いる例は１点を除き(No.312)，およそ５cm四方のワクに収まる小型・中型の剥片ばかりである。特に長さ３cm程の小ぶりの物が目立つ。

No.304は細石核調整剥片をトゥールとして利用したものである。背面左側辺と腹面右側辺に使用痕をもち，打面部は腹面から入ったこまかな剥離のため残ってはいない。背面右上半部から右側面にかけてフルーティングを留めている。

No.305はかなり打面の大きなエンブレム型をした剥片。頭部に入っている細長い剥離はフルーティングの痕跡であるかもしれない。そうであれば，細石核調整剥片をＵＦとして利用した事になる。

No.306は，細長い水平の打面を持ち長方形を呈す剥片。背面側の加撃は上下両方向からなされている。左右両側辺に渡り使用痕を有し背面頭部には小さな剥離が打面にそって並んで入っている。この様な剥片頭部に剥離の入るものはNo.314にも見え，性格を同じくする石核からとられたものかもしれない。

No.307は打面の小さなサーフボード状を呈する剥片で，背面は加撃方向の異なる面から成っている。

No.310であるが，提灯状をし，腹面左縁辺に使用痕を有する。打面は幅広で細長く，この剥片もNo.315とNo.339と同様，背面全体に，多方向からの剥離面を持つ。恐らくいずれも類似した石核から取られていると考えられる。

No.311はかなり厚手で，背面中央部に切り立った山頂状の稜の部分をもつ剥片であり，ほぼ平行する左右両側縁に使用痕がある。

No.312は大ぶりな剥片で，背面は様々な剥離方向の大小の面により構成される。使用痕はわずかに背面左側辺に認められるのみである。

横長剥片の使用例は縦長剥片より大ぶりの物が多い(No.314～No.319)。２cmワクに収まる物が２点，その倍の４cmのワクにはまる物が３点，また残りの４点はいずれも６cm大の大型な剥片である。特にこの大型剥片はかなり厚手で頑丈なものばかりである。

No.315は家型を呈し，背面左縁辺に使用痕を持つ。これも背面には多方向より剥離された面が残っている。

No.314は靴形をした横長剥片。かなり大きく平坦な打面を有し，そこが最もぶ厚い。背面頭部には小さくこまかな剥離が入っているが，真中の広い面はフィッシャーがほとんど見られず，素材の分割面かもしれない。使用痕は背面左肩の湾曲している部分と底辺について認められる。

No.318は厚めのおにぎり形をした剥片で，背面左側辺と底辺に渡り使用痕が見られる。下部の三

角形の面以外，総て上から加撃されている。

No.319は翼状の剝片である。打点部分が最もぶ厚く縁辺に向うほど薄くなっている。打面の左右両肩は横ないし背面側から加撃されている。また背面は左縁部と上部の剝離を残して，１枚の大きなネガ面で構成されておりそのネガティブバルブは上部の剝離によって切られている。

不定形剝片(No.320～322)利用例は３例ある。

Ｅ)剝片類(第135・136図)

全部で19点である。トゥール以外の資料から石核・裂片を除外したものを一括した。その内，重要と思われるもの４点のみを紹介する。

No.325は，正面及び左側面には石核の頭部調整と思えるこまかな剝離を残し，石核の正面左端から打ち取られている打面再生剝片である。

No.326は打面は幅広で平坦，背面左半分には石刃状剝片をはがした痕跡がはっきりと残り，また右半分は石核素材の分割面と思われる大きな剝離を有している。右下端部には２枚の剝離が下から入っており，加えて裏面右下部(断面図)にも数枚，剝離が入っている。あるいは，これも作業面調整剝片と捉えるべきかもしれない。

No.327は背面左半分いっぱいにフルーティングを有する厚手の剝片で，フルーティングに関しては全て上方向から剝取されているが，その隣の背面右の大きな剝離は横から取られ，はっきりとしたネガティブバルブを残している。また背面下端や右側面下端の剝離面なども横や下方向から剝取され，このような面は，石核の体部調整の為の剝離である。側面観はわずかに傾いた「し」の字状を呈している。

表皮剝片(No.324)は背面のほとんどを表皮が覆い，大きな打面と大きなバルブを有する剝片である。

２)東群Ｂグループ(第136図)

総点数２点でいずれも使用痕ある剝片である。１例は軍配を縦割りしたような剝片(No.330)で，背面左側辺の湾曲した部分とその周辺に使用痕が認められた。他の１例は寸づまりで(No.331)，背面側右半分にはフルーティングの痕跡を留める。細石核の作業面調整剝片をＵＦとして利用したものである。

３)東群Ｃグループ(第136図)

Ｂグループと同様２点だけとなり，内訳は使用痕ある剝片１，石核類１点となる。ＵＦは扇形の剝片を利用したもので(No.332)，背面右側辺から底辺にかけて，大きめの使用痕が並んでいる。石核類は角錐状を呈する立方体の裂片で，打面幅広の縦長剝片がとられており，いわば石核素材のようなものである。

４)東群Ｄグループ(第136・137図)

総数は13点となる。内訳はトゥール類８，剝片類４，石核類１点となる。トゥール類には加工痕ある剝片１・使用痕ある剝片７点を含んでいる。

Ａ)ピエス・エスキーユ(第136図)

右側面は折れにより欠損している。腹面上部にある主剥離面の様子から，厚めの剥片を断ち切ったものを素材としていることがわかる。素材を供給したもとの剥片の主剥離面は，恐らく背面上半部の面であろう。腹面下縁辺背面左側縁と左上端部には薄く小さな剥離をした上に，こまかな調整が施してあり，前者２ヶ所の湾曲している縁辺が最も薄くなっている(No.333)。

B)使用痕ある剥片(第136・137図)

ＵＦには，縦長剥片を利用したもの６点と横長剥片を利用したもの１点とがある。縦長剥片を利用するもの(No.334～No.337)は１点を除いて(No.334)，５cmの枠に入るものである。打面幅の広いものが目立つ。

横長剥片を用いた例(No.338)は打面は小さく剥片の右肩部分がぶ厚く，靴形を呈する剥片で，腹面側の底辺，背面上部の右側辺に明瞭な使用痕を有する。特に前者の底辺の使用痕跡は整然と並んでいるが左へ行く程，粗くなっている。

C)剥片類(第137図)

全部で４点あるが，１点を除き(No.339)，小型で性格不明の剥片である。No.339は下部が欠損しているものの，背面は東群ＡグループのＵＦ２点(No.310・315)と同一の剥離面構成をなしている。

D)石　　核(第137図)

チャート製の扁平な多面体の石核である(No.340)。残核段階では上方向からの剥離作業が主となっている。上面の平らな剥離面は打面として意識して剥離され，正面頭部の剥離は頭部調整の痕跡を留めているのかもしれない。なお，正面左端，右側面下端部，背面下部の湾曲した部分にも細かな剥離が比較的まとまって入っているが，十分にその性格を判断できなかったので，ここではとりあえず石核として分類したものである。

５)東群Ｅグループ(第137図)

資料数は２点で，内訳は使用痕ある剥片１，剥片類１点であった。前者は背面側左上端及び下端部が欠失してはいるが(No.341)，頭部に細長い小さな剥離が数枚重なったＹ字状の稜を持つ，石刃様の縦長剥片である。長く平行した両側辺域に渡って細かいが明瞭な使用痕を有する。後者は背面の半分に表皮を残存するティアー・ドロップ形の剥片である。

６)西群

全部で３例ある。その内訳は剥片類２・石核類１点である。

A)剥片類

いずれも表皮を残す厚手のもので，１例は打面幅の広い，長さ６cmの中型縦長剥片であり，残りの１例は厚さ４cmとかなり厚手でアクシデンタルな割れと節理によってはがれたと思われる不定形な剥片である。

B)石　　核(第143図)

礫面側を打面として一方向からのみ剥片を割り取っている(No.358)。取られた剥片は，打面が幅広で２cm四方位の短いもの，ないしは大きく寸づまりの厚手のものである。打面右肩に数枚の小剥離が，また右側面にも同様な剥離が何枚か入っている。これらを作業の際の打面ないしは側面調

整であると見られなくもないが，本個体の形状からしてまとまってされているといった印象は薄い。左側面と正面左端の剥離面は，ごく初期の階段の分割面であろう。

７)表採資料(第137・138・143・144図)

先述した通り，表採品34点の内縄文的要素の強い物を除き，その上で重要と思われる物を13点抜きだしてみた。地区内の位置は不明である。内訳はトゥール類10，石核類２，剥片類１点で，トゥール類には加工痕ある剥片１・使用痕ある剥片７・磨製石斧１・打器１点を含み，石核類には，チャート製の細石核ブランクが含まれている。

A)加工痕ある剥片(第137図)

背面右側辺中程に段状の剥離が重なった加工部分を持っており，その少し上付近には使用痕とも加工痕ともつかない，細かいわずかな剥離が入っている(No.342)。また打面部と背面最末端部には，小さいが細長い剥離が残っており，細石核の作業に関連する調整剥片を利用しているのかもしれない。

B)使用痕ある剥片(第137・138図)

２cm四方のワクに入る小型剥片(No.343・344)，それにより一周り大きい剥片(No.345～347)，横長剥片(No.348)，不整形剥片(No.349)の計７点である。横長剥片・不整形剥片はいずれも背面の大きな一つのネガ面と剥片の打点の位置とが近く，ほぼ平行している。

C)磨製石斧(第138図)

上半分が欠損しているが，厚さおよそ２cmの扁平な礫(あるいは厚手の剥片)を利用したものである(No.350)。両面の全域が研磨され，表面中ほどからその研磨面にかけては左斜めに緩く傾斜しているが，裏面はほぼ水平で表面ほど傾いていない。そして，表面の研磨面には刃縁部にそって，また裏面左下端部と右下端にも明瞭な使用痕が見られる。

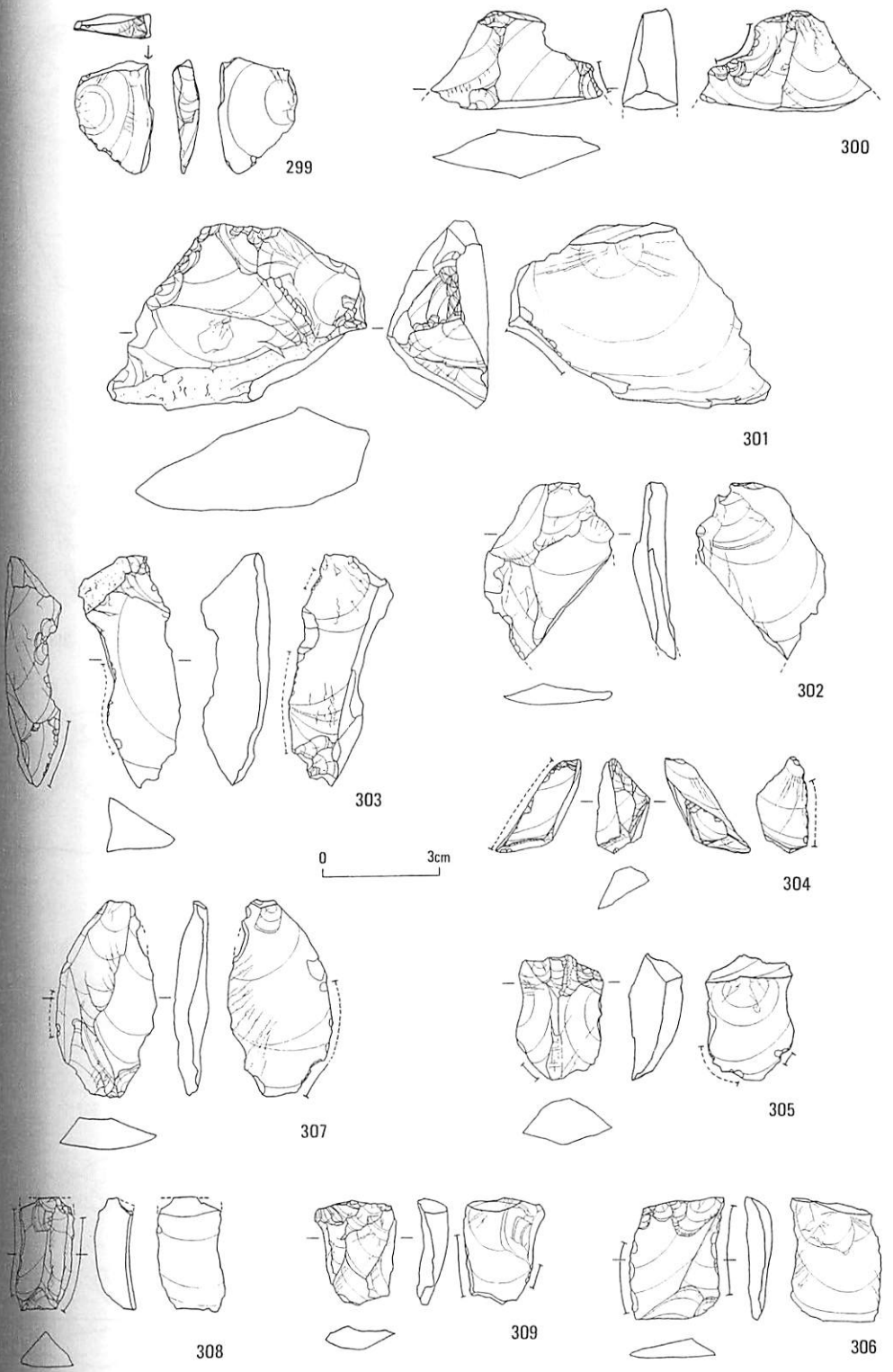
D)割　　器(第143図)

長楕円形の礫の一端に両面から交互に剥離を施し，取られた剥片は薄くスライスされた様な物がほとんどだが，表面先端の真中の剥離は小形で厚めのものが取られている(No.359)。長さ187㎜・幅117㎜・厚さ69㎜・重さ1550ｇの大型の割器である。かなりの重量があり，ほぼ全域に礫面を留め，剥離は一端のみでしかなされていないこと等から，割器として分類した。

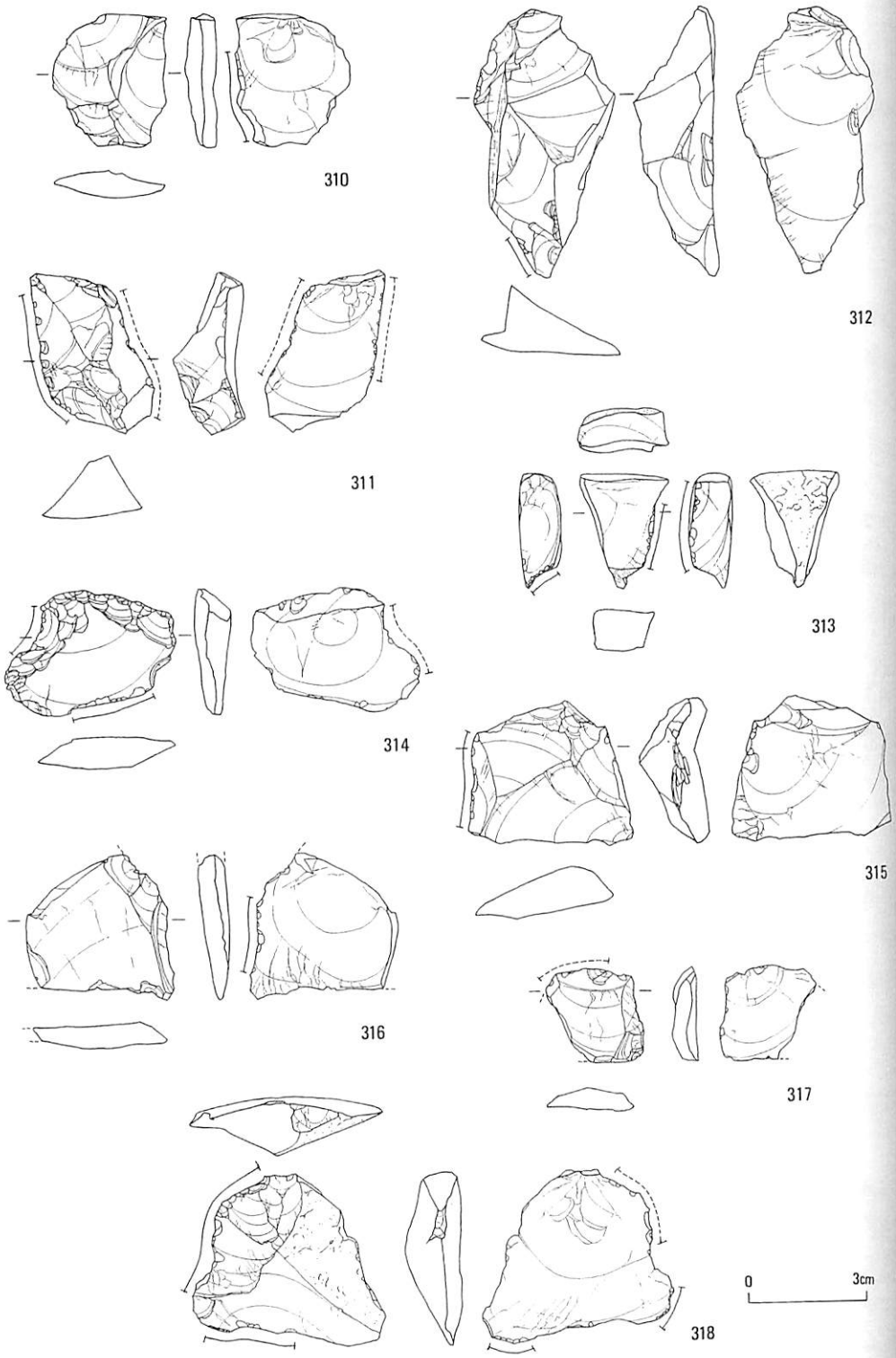
E)石核類(第144図)

チャート製の細石核のブランクと思われるもの(No.361)と球体に近い礫を素材とした表皮を残置する拳大より一周り小さいキュービックな石核(No.360)の２例である。

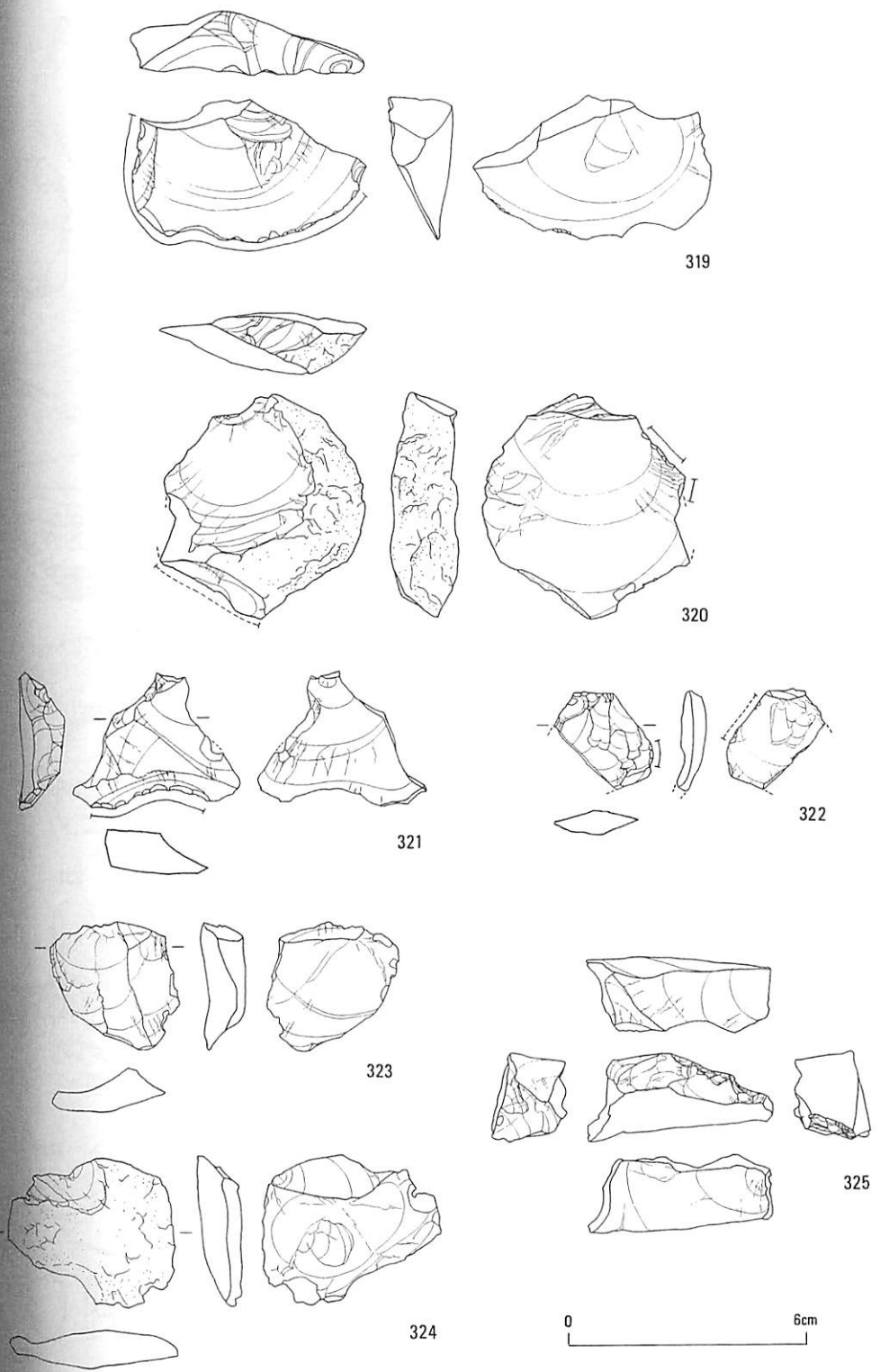
No.360の石核は正面では主に上下両方から中央に向って剥取されているが，剥ぐようにとられた表皮のネガ面を打面としている。背面の３枚の剥離と正面中央の２枚の面は他面に比べ，風化が著しく，切り合い関係他から剥離作業のごく初期に取られた物であろう。正面上半のネガ面は１番新しいもので，背面に大きくネガ面を持つ寸づまりの縦長な剥片がとられたと思われる。この１枚の剥離がとられていった全ての剥片を代表させることはできないが，規格化された剥片が順次供給されていったとは考えにくい。



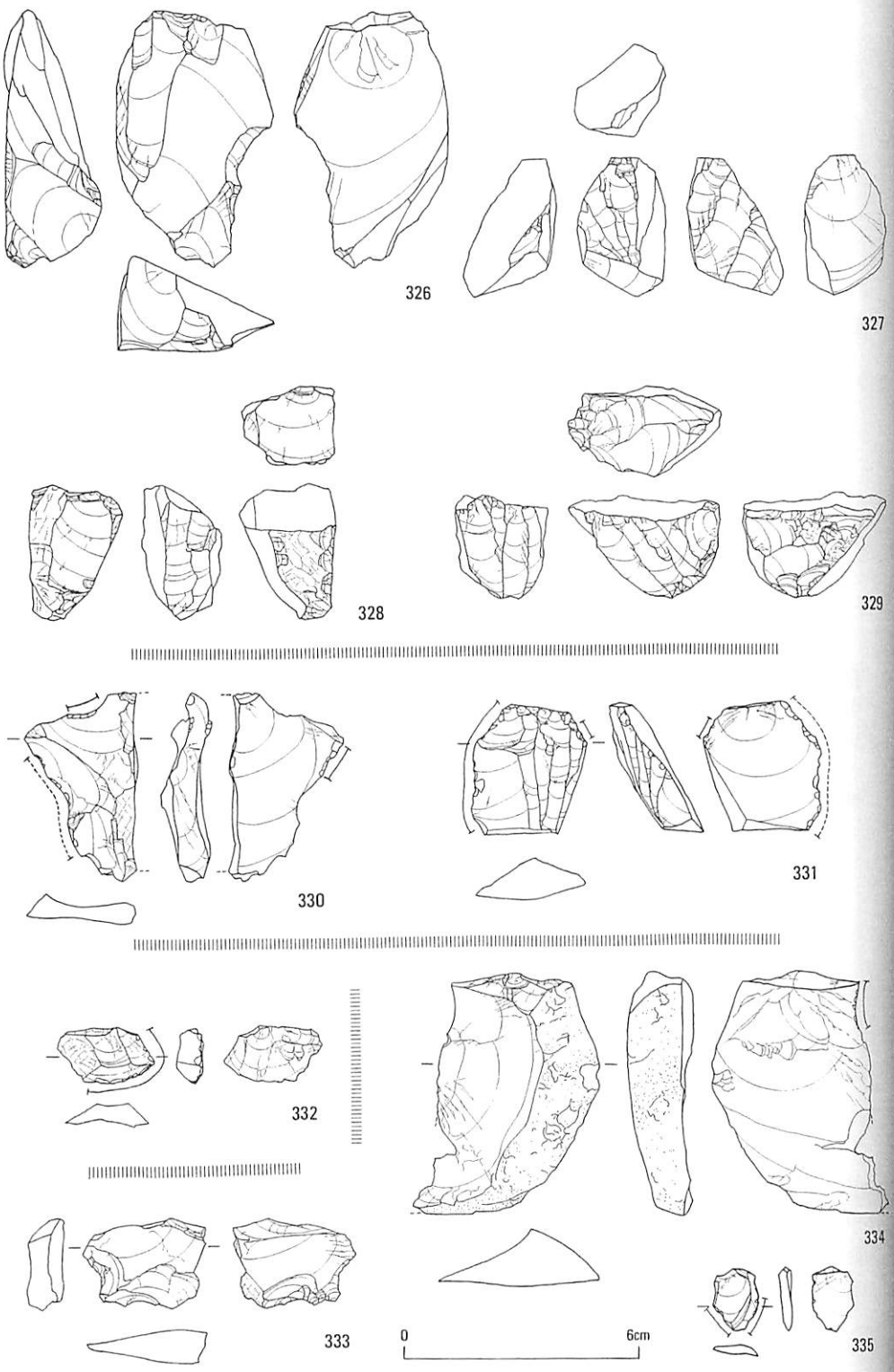

第133図　7－D地点石器実測図　1）



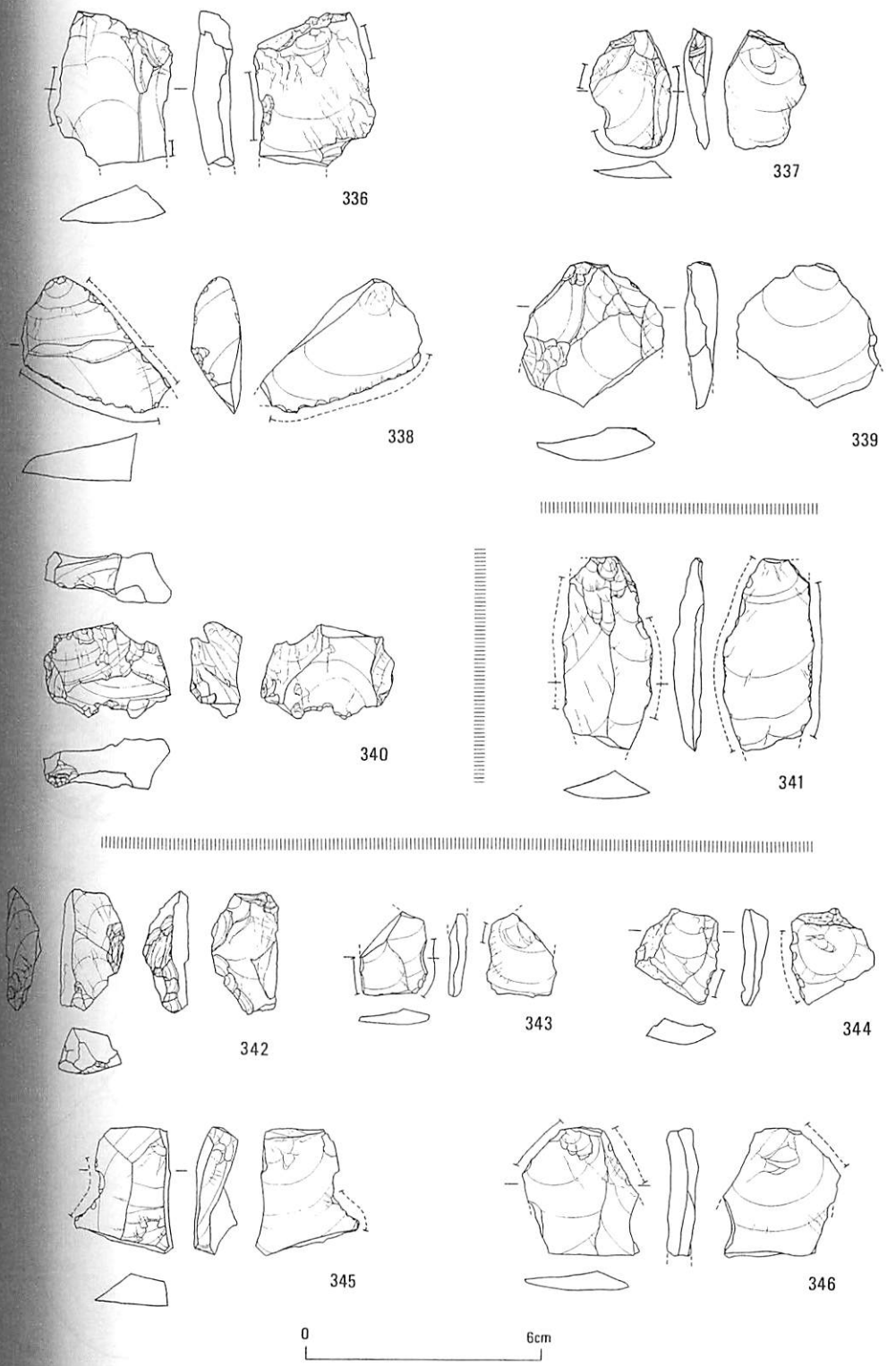

第134図　７－Ｄ地点石器実測図　2）



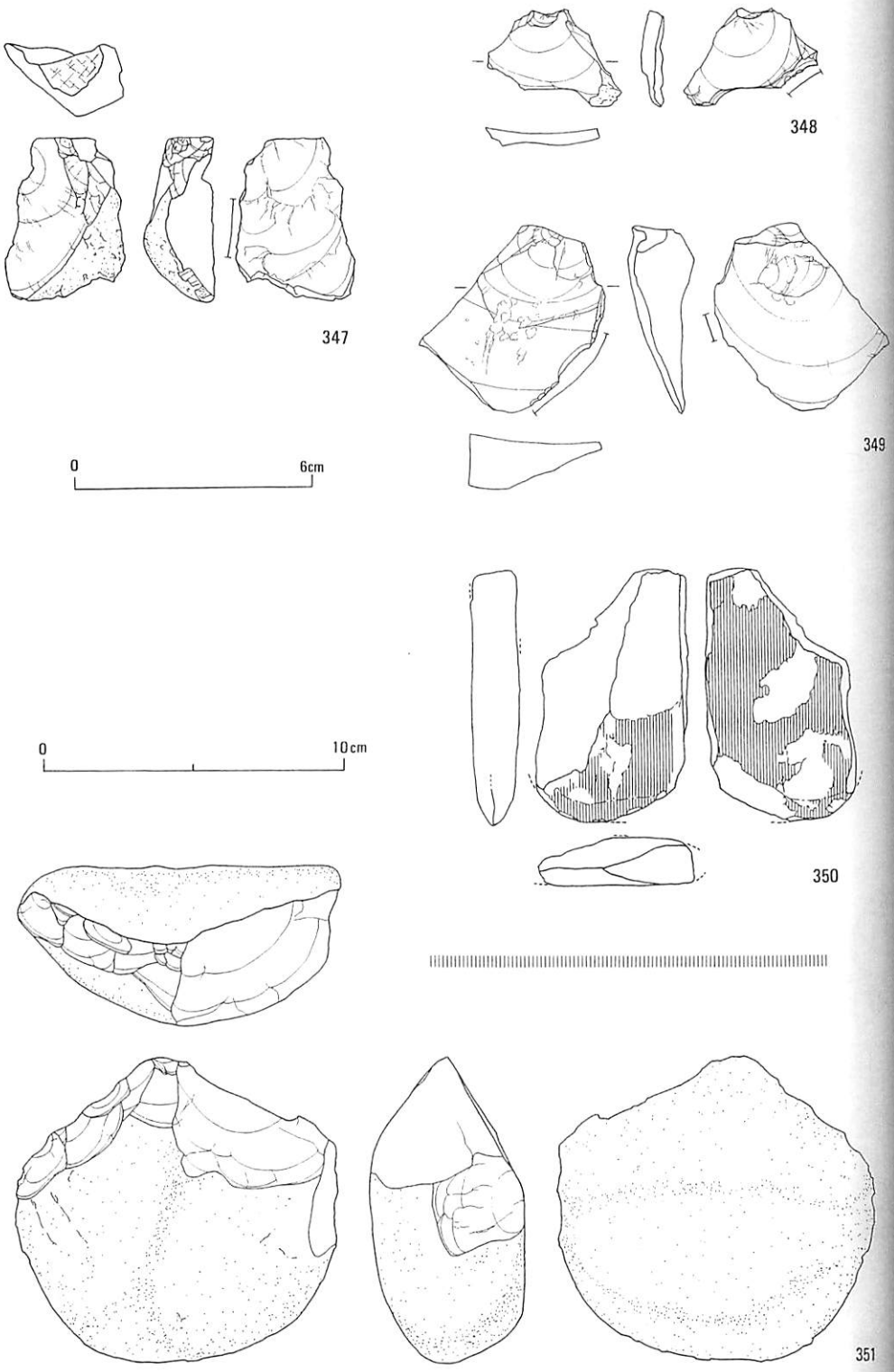

第135図　7－D地点石器実測図　3)



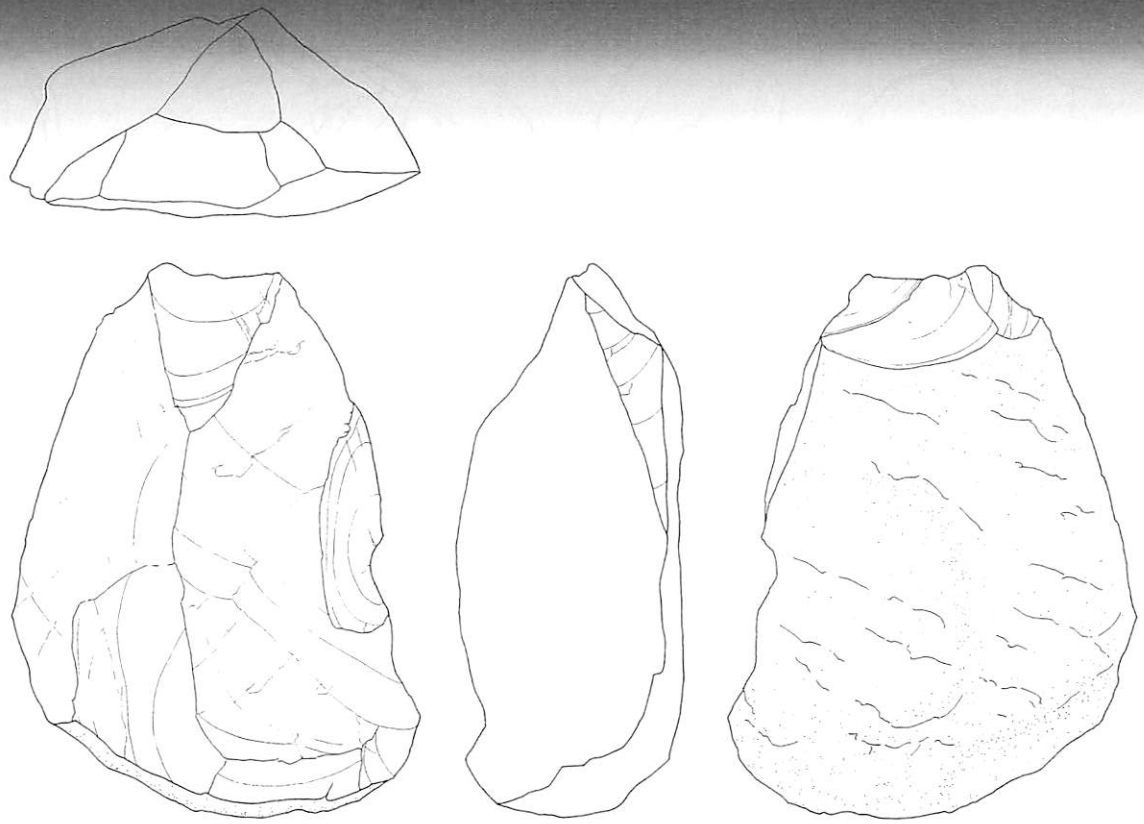

第136図　７－Ｄ地点石器実測図　4）



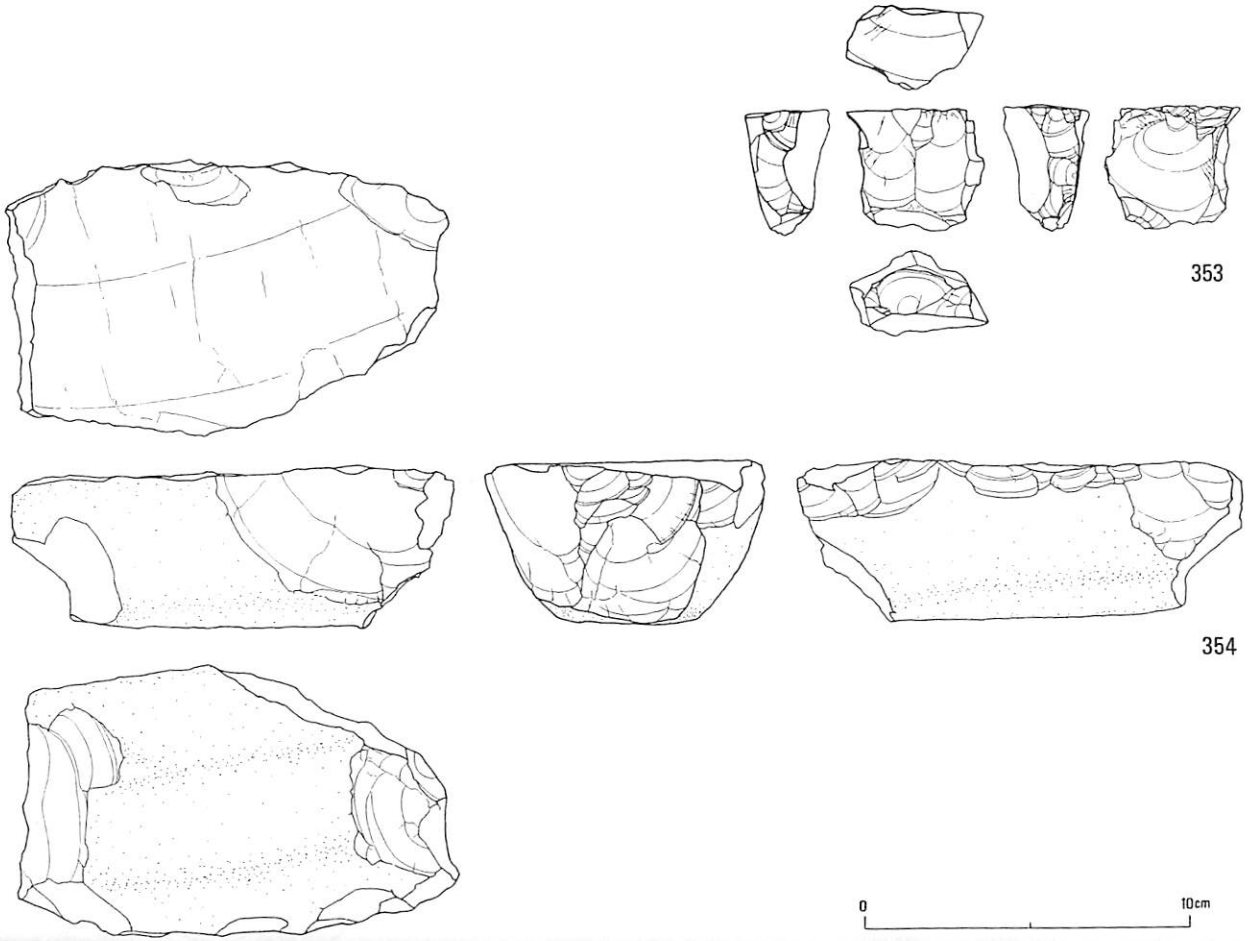

第137図　7－D地点石器実測図　5)



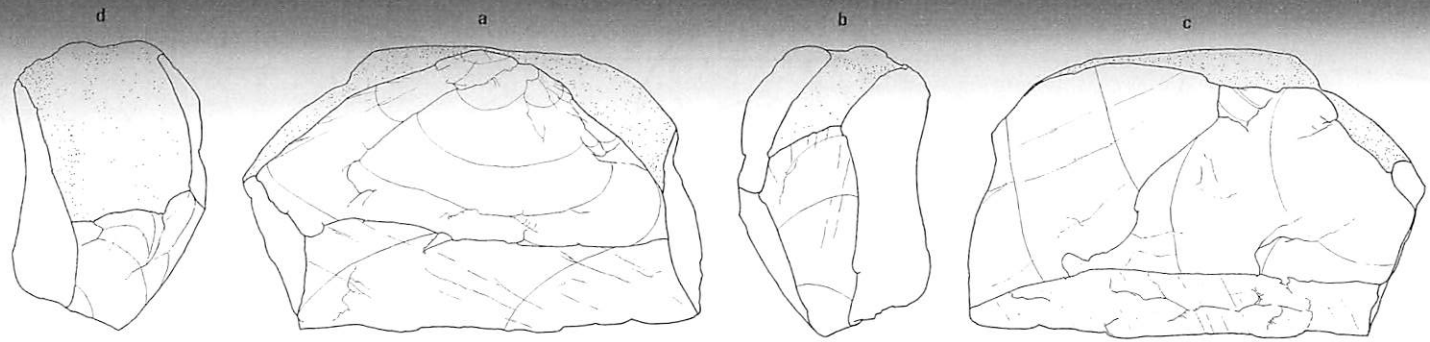

第138図　７－Ｄ地点石器実測図　6）

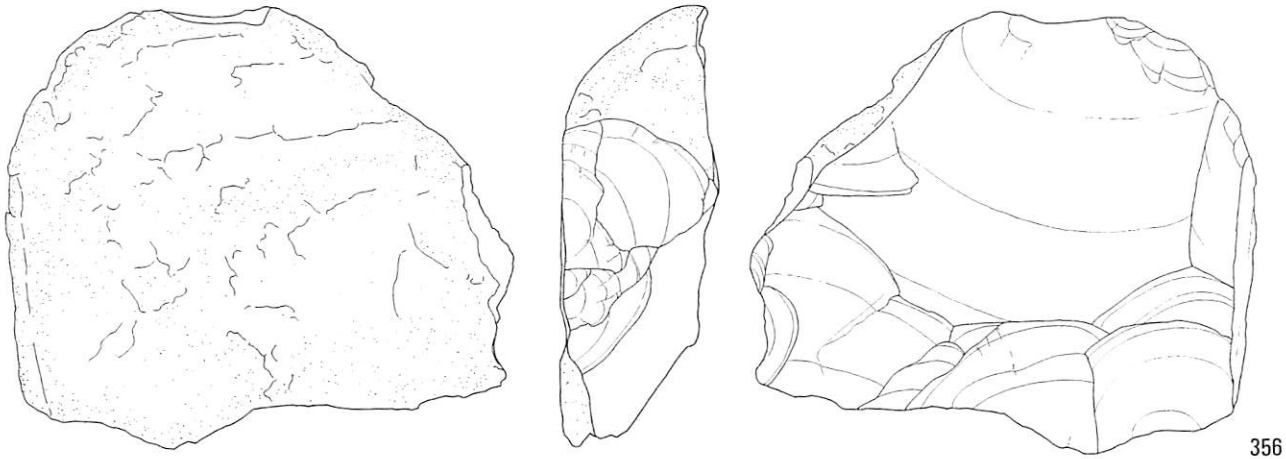


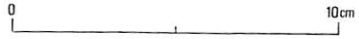

第139図　7－D地点石器実測図　7)



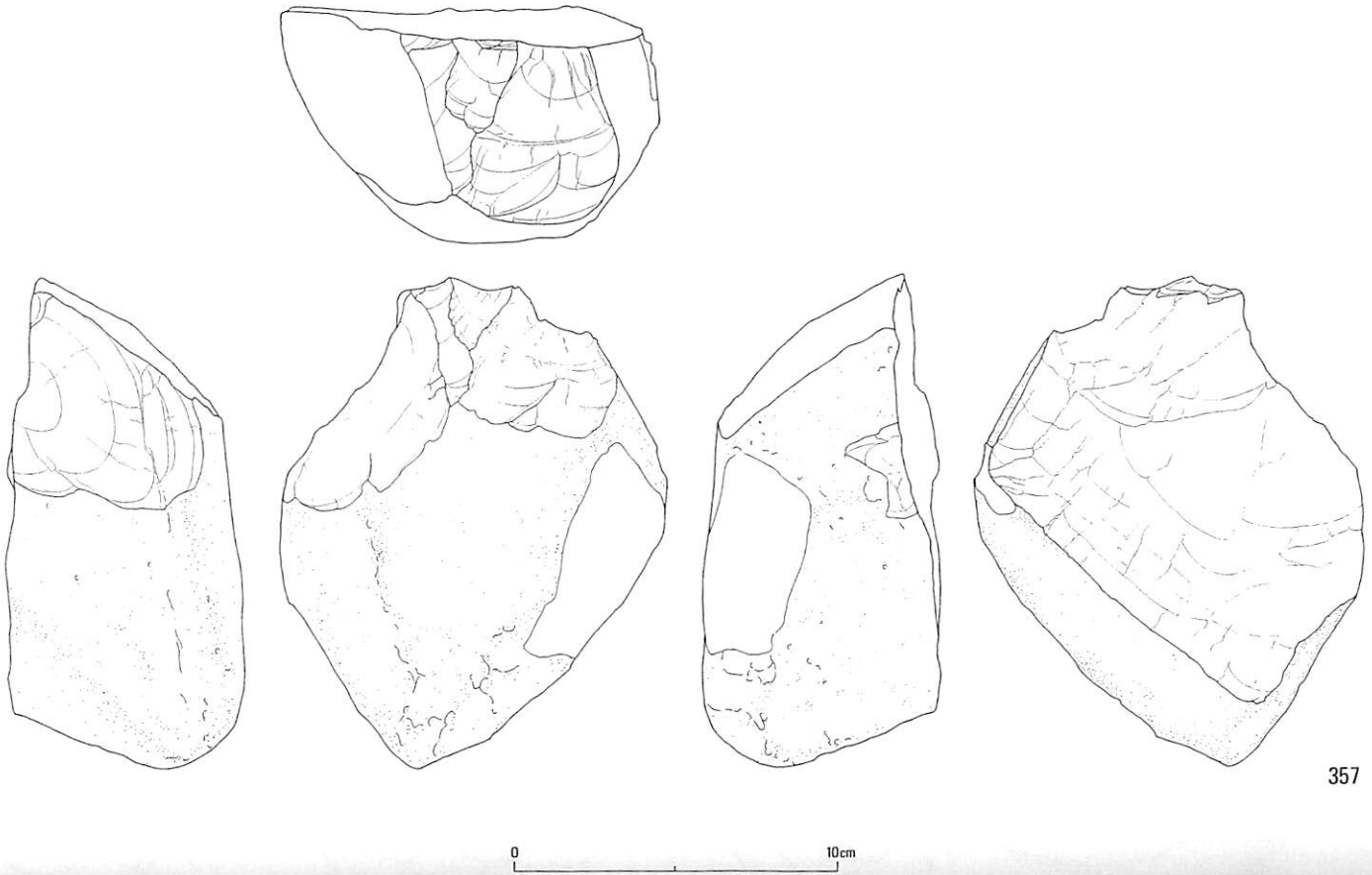

第140図　7－D地点石器実測図　8）



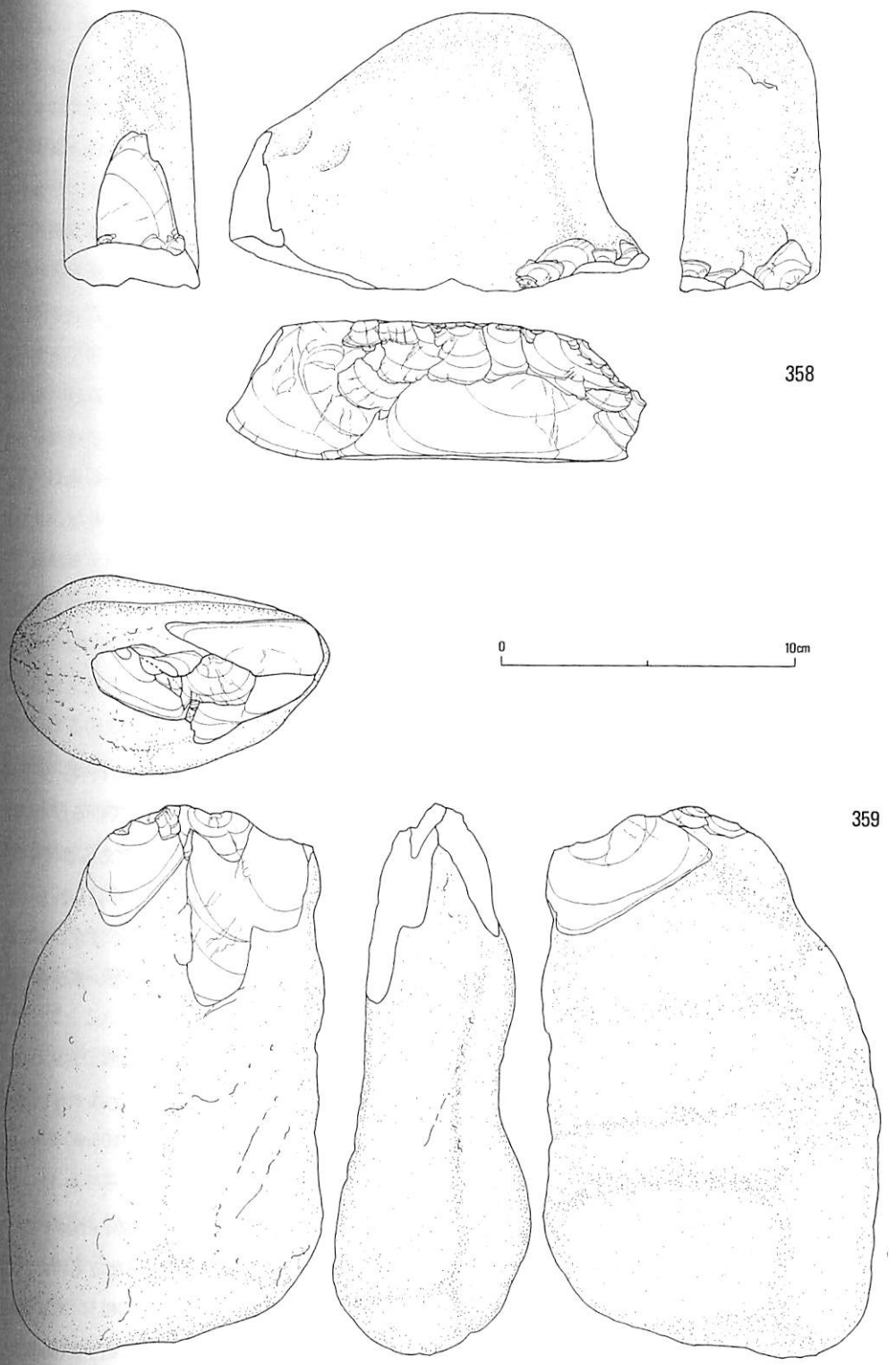



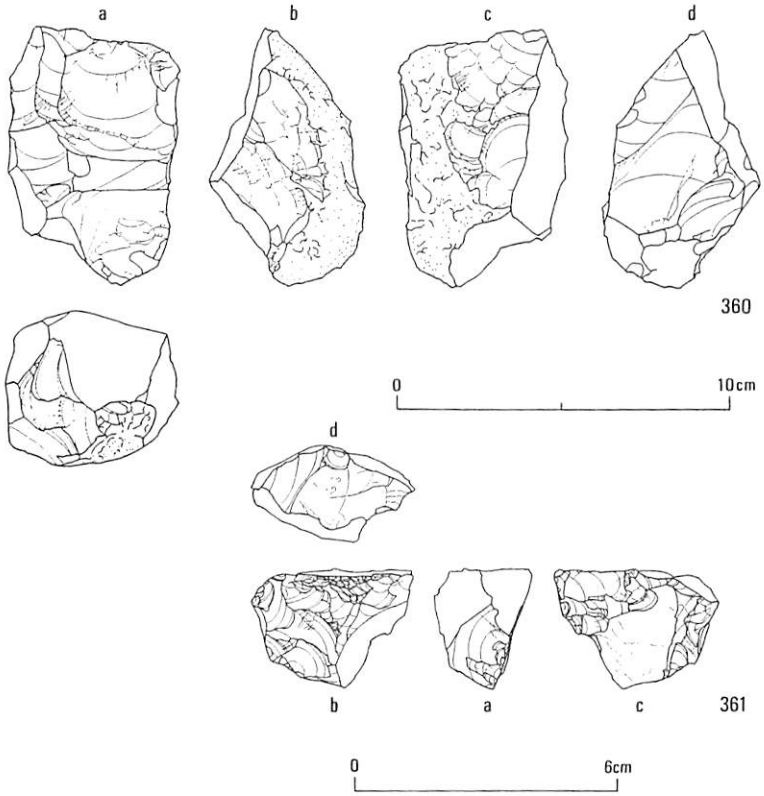

第141図　7－D地点石器実測図　9)




第142図　7－D地点石器実測図 10)




第143図　7－D地点石器実測図 11)




第144図　７－Ｄ地点石器実測図 12)

No.361は東群Ａグループで出土している細石核(No.328・329)に共通した技術基盤を持つ。少し切立った舟底状の体形を呈し，石核の左右両側には数多くの剥離が多方向からなされているが，いずれも一部，節理面を利用している。この点はＡグループ出土の細石核にも共通して言える事である。左側面には頭部調整とも言うべき細かな剥離が縦横に入っているが，右側面には全く見られない。また上面には２枚の浅い小剥離が入っていて，これを打面部の調整として見られなくはないが可能性は薄い。細石刃を剥取された箇所は見られず，作業面再生を行った部分も見当らない事から，まだ細石刃を剥ぐ以前のブランクとして扱った。

## ７．ま と め

これまで個別の記載をしてきたので，所属の時期がはっきりしているものは決して多くないが，ここで石器群の時期区分と遺跡の成り立ちを考えておこう。

### １．細石刃文化の石器群

明らかに細石刃文化期に所属すると思われるものは，細石核および同調整剥片(No.304～306・308・309・327～329・331・361)である。これらの石器群にはその石質や形状，手法の異なるものが混在している。その第１はチャート製細石核２例およびブランクであり(No.328・329・361)，木口面で細石刃剥離作業を行っている角柱状石核のグループである。第２は流紋岩製の一群である(No.327・331)。ここには石核を欠いているが，剥片自体の特徴の中に船野型細石核の作業面再生過程で生じ

た剥片であることが明瞭にうかがわれる例である。

No.305・306・309の3例はいずれも，体側部ないし作業面の調整剥片で，No.305は水平で幅広の大きな打面を有しており，背面側左半分の大きな面はフルーティングを一部切っており，恐らくその面は体側部調整のための面と思われる。No.306も体側部調整に伴うもので，No.309などは剥片の幅いっぱいの細長打面を持ち，背面には頭部に細かな剥離，それを除く全体には大小の剥離が打面部からなされている。このため，フルーティングの痕跡がわかりにくいが，その形状からこの剥片はわずかに石核正面の作業面に接した側面から剥ぎ取られた調整剥片であることがよく分かる。これらは作業面再生剥片とともに広野北遺跡[6]や宮地前遺跡[7]で述べられた石核調整剥片の特徴をよく示す一群と判断される。

2．ナイフ形石器文化の石器群

ナイフ形石器文化の石器群を構成する資料には，定型石器として彫器があるが，他は主として剥片と石核からその性格を窺うことができる。

剥片は全体的に打面幅が広く，剥片の背面が加撃方向の異なる面により構成されるもの，寸づまりなものが多い(No.310・315・339)。このような剥片は円盤状か多面体の石核から求心的にあるいは打面転移を行いながら剥取されたものと考えられる。

次に特徴的なものは，安定した縦長剥片剥離法を想起させる打面再生剥片，作業面調整剥片，石刃である(No.325・326・341)。後二者はかなり規格化された石刃を剥離する発達した剥片剥離技法の存在を予測させる。この他に若干であるが横長剥片(No.319)がある。

石核は3例ある(No.353・358・360)。主として打面が大きく幅広の縦長剥片を取ったもの，打面と背面に自然面を残し概して縦長の剥片を主として剥取したもの，作業面を多面にもち打面転移をしながら，背面に他方向から剥離痕を留める幅広な剥片を取った例である。剥片・石核からみて，資料数は少ないが多様な剥片剥離技法の存在が推測される。なお，大型石器(No.351～357・359)の帰属については，いずれの石器群に属すべきものか判断は保留しておきたい(第2部橋論文参照)。

3．トレンチグループ間関係と遺跡の成り立ち

D地点の石器群には二つの時期が想定できた。では，それらが各トレンチグループにどのように反映してくるだろうか。以下それについてみておきたい(第131図)。

細石刃文化期の石器群は，東群AグループのⅫ～ⅩⅥトレンチ，同BグループのⅩⅨaトレンチとに存在しており，特に船野型細石核に伴うものはⅫトレンチ(No.327)，ⅩⅢトレンチ(No.305・306)，ⅩⅣトレンチ(No.304)，ⅩⅤトレンチ(No.309)，ⅩⅥトレンチ(No.308)と東群Aグループ内に広く分布しているが，1点のみ(No.331)15m程，斜面上方を上がったⅩⅨaトレンチに位置している。一方，チャート系の細石核(No.328・329)は東群Aグループ内の斜面最上方のⅩⅤ・ⅩⅥトレンチと隣同士に位置している。AグループとBグループのトレンチとは15mほどの距離があるので，7－D地点には細石刃文化期のブロックが2ヶ所以上存したと考えた方がよいかもしれない。

ナイフ形石器文化期の石器群も東群Aグループに集中している。2点(No.325・326)が，Aグループ内斜面上方のⅩⅤトレンチに位置し，ⅩⅥトレンチにはNo.353の石核，ⅩⅣトレンチにはグレーバー(No.

299)，その斜面下方のⅦトレンチ(東群Ｅグループ)には石刃様の縦長剝片(№341)が出土している。基本的には主にＡグループ内の斜面上部から中心部にかけて集中し，一つⅦトレンチのみ，そこよりへだたっている。このような分布傾向からは，やはり少なくともＡ・Ｅ群の位置に複数のブロックを想定する方がよいであろう。なお，№356はＸ・Ⅶ両トレンチ出土例が接合したものであり，Ａ・Ｅ群が一定の距離をおきながらも関係を有していたことが窺われる。

（高　田）

註）

1）『丹生３次概報』(昭和40年)。

2）『丹生４次概報』(昭和41年)。

3）『丹生１次・２次概報』(昭和39年)。

4）註2)に同じ。

5）註3)に同じ。

6）鈴木忠司「細石刃文化」(『広野北遺跡』所収，京都，昭和60年)。

7）鈴木忠司「平安博物館調査地点の先土器時代石器群」(『宮地前遺跡』所収，大分，昭和63年)。

## 第18節　第８地区Ａ地点

### １．発掘の経過

８－Ａ地点は昭和38年10月８日から同年10月21日までの，第２次調査における調査区の一つである。[1] 早川正一班が調査を担当した。本調査区の段丘南縁に沿って農道が走り，ここはブルドーザーによる攪乱を逸れ，なおかつ太田亘氏が石器を採集されている所である。したがってこの農道が発掘調査地とされた。

### ２．位置・地形・トレンチ

８－Ａ地点は字百堂方面から東へ張り出した舌状段丘面上にある。標高は49mを測る(図版Ⅳ下段)。調査はまず段丘台地の東先端付近の農道部分に，４ｍ×1.5mの試掘トレンチを入れることから始めた。さらに東から西に向って幅1.5mで順次トレンチを入れ，長さ２ｍを一区として53区までを設定した。これらによって，農道を徹底的に発掘調査することにした。

### ３．層　　位

農道を掘り下げていった結果，層位を上層から順に記すと以下のようになる。

第１層　茶褐色土層。

第２層　黒褐色土層(腐植土)。

第３層　茶褐色土層。

第４層　赤褐色礫層。

第１層は，北側からブルドーザーによっておされて堆積した層で，本来の旧地表は第２層である。第３層は，岩宿時代の遺物が出土した層である。その成因は，元来永く地表面を形成していた第４層の上に，徐々に上位段丘から遺物とともに土砂が運ばれて堆積していったことによるものと考えられる。第４層は，東から西にいくほど検出深度を増し，東では地表下70cmから80cm，西では地表

下1.5mとなる。この第4層からは，遺物の出土はみられない。大きな円礫を含むこの層は延命寺砂礫層または城原層の礫層とみなされる。

## 4．遺物の出土状況

遺物の大部分は，第1層と第3層からのものである。そして一部は第2層(旧表土)から出土し，第3層は岩宿時代の遺物のみ出土している。第3層は本来の岩宿時代の遺物包含層と思われる。試掘トレンチ第14区では，第4層上面から流紋岩製の削器1点が出土している。

詳しい分布状態を知ることができないので，東から西に長く延びる発掘区のどの区に，より多くの遺物が分布しているかを見ておく。第0区～5区の間に比較的多くの遺物が集まる分布ピークがあり，第14～16区，第21～24区，第29～32区の間にそれぞれ小規模なピークを形成している。このことから，いくつかのブロックが存在していたことが予想される。そこで念のために，石器集中箇所ごとに石器群の内容を調べたが，特徴的な遺物が偏って分布することもなく，特に顕著な傾向を窺うことはできなかった。

## 5．石　　器

8－A地点の総遺物点数は，123点である。これらの中には，縄文時代の石器と考えられるものや，欠番となった遺物が含まれるため，岩宿時代の石器は91点となる。器種の内訳は，ナイフ形石器1点，削器2点，ピエス・エスキーユ2点，加工痕ある剥片7点，使用痕ある剥片3点，剥片・砕片61点，打割器・石核15点である(第7表)。

A)ナイフ形石器(第145図)

翼状剥片を素材とする国府型ナイフ形石器である(No.362)。厚い打面部全体に整形痕がおよび，背面の第一次剥離のネガ面は，中間に小さく残るのみで，ほぼ完全に除去されている。背面の刃部に相当する面はポジティブな面で，底面に相当する。主要剥離面側から背面にかけては，急角度で立ち上り，刃部角は45°を測る。断面形は，ほぼ三角形を呈する。また，刃部の主要剥離面側の縁辺は，刃こぼれにも見える調整痕が見られる。流紋岩製。

B)削　　器(第145図)

第一次剥離による縦長および短形の素材を大きく変形させない。No.363は，主軸をやや斜めにする幅広い縦長剥片を素材とする。背面側は，大きく3枚のネガ面で構成される。削器としての調整は，両側縁部に細かく鈍い角度で施され，主要剥離面側の右側縁上半に未調整部をわずかに残す。調整剥離は，すべて主要剥離面側から背面にかけてなされている。

No.364は，平行する側縁部をもつ分厚い縦長剥片を素材とする。背面は，中央に稜をもち横方向の大きな剥離面と下端部の自然面から成る。左側縁部に連続的な調整剥離痕がみられ，主要剥離面と背面の両面から相互補完的に施されている。

以上，2点とも，調整剥離が側縁長の3分の2以上に及び，加工が安定していること，調整加工によりエッジが鋭くなっていることから削器とした。石材は，流紋岩製である。

C)ピエス・エスキーユ(第145図)

No.365は，ほぼ正方形に整形された両面加工の剥片の上端部に，両面から階段状の細かな剥離が

第７表　第８地区Ａ地点出土石器一覧表

| 遺物番号 | 類別 | 出土層 | 発掘区 | レベル | 石材 | 挿図No. |
|---|---|---|---|---|---|---|
| Ⅶ-A－ 1 | B —— | —— | 0 | —— | 流 | 402-a |
| 2 | B —— | —— | 0 | —— | 流 | 383 |
| 3 | B —— | —— | 0 | —— | 流 | 392 |
| 4 | D —— | —— | 0 | —— | 流 | —— |
| 5 | A PB | —— | 0 | —— | 流 | 406 |
| 6 | A PB | 2 | 1 | −15 | 流 | 409 |
| 7 | B —— | 2 | 1 | −15 | 流 | 382 |
| 8 | B —— | 1 | 1 | —— | 流 | 393 |
| 9 | D —— | 2 | 1 | —— | 流 | 405 |
| 10 | A PB | 2 | 1 | —— | 流 | 414 |
| 11 | A RF | 2 | 1 | —— | 流 | —— |
| 12 | D —— | 2 | 1 | —— | 流 | —— |
| 13 | D —— | —— | 1 | —— | 流 | 404 |
| 14 | B —— | 2 | 1 | −23 | 流 | 401 |
| 15 | B —— | 2 | 2 | −23 | 流 | —— |
| 16 | B —— | 2 | 2 | −28 | 流 | —— |
| 17 | A RF | 2 | 2 | −30 | 流 | 369 |
| 18 | D —— | 2 | 2 | −38 | 流 | —— |
| 19 | A RF | —— | 2 | —— | 流 | 367 |
| 20 | A Sc | 2 | 2 | —— | 流 | 363 |
| 21 | B —— | —— | 2 | —— | 流 | 376 |
| 22 | A PB | —— | 2 | —— | 流 | 407 |
| 23 | B —— | —— | 3 | —— | 流 | 400 |
| 24 | B —— | 3 ? | 3 | —— | 流 | —— |
| 25 | A RF | 1 ? | 3 | —— | 流 | 370 |
| 26 | A RF | —— | 3 | —— | 流 | —— |
| 27 | B —— | 3 ? | 4 | —— | 流 | —— |
| 28 | A PB | —— | 4 | —— | 流 | 408 |
| 29 | D —— | —— | 4 | —— | 流 | 413 |
| 30 | D —— | —— | 4 | —— | 流 | 411 |
| 32 | B —— | 3〜4? | 5 | −70 | 流 | 395 |
| 33 | B —— | 3 ? | 6 | −30 | 流 | —— |
| 34 | B —— | 3 ? | 6 | −30 | 流 | 391 |
| 35 | B —— | —— | 7 | —— | 流 | 385 |
| 36 | B —— | 3 ? | 9 | —— | 流 | —— |
| 37 | B —— | 3〜4? | 9 | —— | 流 | 380 |
| 38 | D —— | —— | 9 | —— | 流 | 410 |
| 39 | B —— | —— | 10 | −5 | 流 | —— |
| 40 | B —— | 3 ? | 10 | —— | 流 | —— |
| 41 | B —— | 1 ? | 11 | —— | 流 | 377 |
| 42 | D —— | 1 ? | 11 | —— | 流 | —— |
| 47 | B —— | 1 ? | 13 | —— | 流 | 399 |
| 50 | B —— | —— | 13 | —— | 流 | 381 |
| 52 | A Sc | 3〜4? | 14 | —— | 流 | 364 |
| 53 | A Kn | 表土 | 15 | —— | 流 | 362 |
| 54 | B —— | 3 ? | 15 | —— | 流 | 394 |
| 55 | A UF | 1 ? | 16 | —— | 流 | 374 |
| 56 | B —— | 1 ? | 16 | —— | 流 | —— |
| 57 | B —— | 1 ? | 16 | —— | 流 | —— |
| 58 | D —— | —— | 16 | —— | 流 | 412 |
| 59 | B CRF | 3〜4? | 16 | —— | 流 | 390 |
| 60 | B —— | 2 ? | 18 | −25 | 流 | —— |
| 61 | B —— | 2 | 18 | —— | 流 | —— |
| 62 | A RF | —— | 18 | —— | 流 | 371 |
| 64 | D —— | —— | 19 | —— | 流 | 403 |
| 68 | A UF | 1 | 21 | —— | 流 | 373 |
| 69 | B —— | 1 ? | 21 | —— | 流 | 386 |
| 72 | B —— | 3 ? | 22 | —— | 流 | 402-b |
| 73 | B —— | 3 ? | 22 | —— | 流 | 387 |
| 74 | A PS | 1 ? | 23 | —— | 流 | 365 |
| 75 | A UF | —— | 23 | —— | 流 | 372 |
| 76 | B —— | —— | 23 | —— | 流 | 384 |
| 77 | A PS | 3 ? | 23 | —— | 流 | 366 |
| 79 | B —— | 3 ? | 23 | —— | 流 | —— |
| 80 | B —— | 1 ? | 24 | —— | 流 | —— |
| 82 | B —— | —— | 25 | —— | 流 | 379 |
| 85 | B —— | 1 ? | 26 | —— | 流 | —— |
| 86 | B —— | 1 ? | 26 | —— | 流 | —— |
| 87 | B —— | —— | 27 | —— | 流 | —— |
| 89 | B —— | —— | 27 | —— | 流 | —— |
| 90 | B —— | —— | 29 | —— | 流 | 389 |
| 91 | B —— | —— | 29 | —— | 流 | —— |
| 92 | B —— | —— | 29 | —— | 流 | 397 |
| 93 | A UF | 3 ? | 29 | —— | 流 | 378 |
| 94 | A UF | —— | 29 | —— | 流 | —— |
| 96 | B —— | —— | 31 | —— | 流 | 398 |
| 97 | A RF | 1 ? | 32 | —— | 流 | 368 |
| 100 | B —— | 1 ? | 32 | —— | 流 | —— |
| 101 | B —— | —— | 32 | —— | 流 | —— |
| 102 | A UF | —— | 32 | —— | 流 | 375 |
| 103 | B —— | —— | 34 | —— | 流 | 396 |
| 105 | B —— | —— | 38 | —— | 流 | —— |
| 106 | B —— | —— | 40 | —— | 流 | —— |
| 108 | D —— | —— | 41 | —— | 流 | 415 |
| 110 | B —— | —— | 45 | —— | 流 | —— |
| 111 | B —— | 1 ? | ? | —— | 流 | —— |
| 112 | A —— | —— | —— | —— | 流 | —— |

形成されている。流紋岩製。No.366は，両面加工で正方形に近く整形された小剝片の相対する2辺に細かな階段状剝離が形成されている。特に下端部背面側で剝離は顕著である。打面が小さく残る上端から，右斜め下方に截断されているが，下端まで剝離が抜けきれず，およそ3分の2のところで階段状に剝離している。加撃点付近にネガティブバルブを残す。流紋岩を石材としている。

D)加工痕ある剝片(第145・146図)

素材は，縦長および短形剝片を主体とする。調整加工は，側縁部に施されたもの(No.367～370)，上端の一部に施されたもの(No.371)，下縁部の主要剝離面側にのみ施されたものがある。

No.367は，広い打面をもつ厚い縦長剝片で，背面は，ほとんど自然面である。調整加工は，両側縁にみられ，右側縁部は主要剝離面側から，左側縁部では上半部は背面側から，下半部は主要剝離面側から主に形成されている。両側縁の立ち上りは急角度で，鋭利さを欠く。

No.368は，先細りで打面の大きい縦長剝片を素材に，右側縁部下半に細かな調整加工がみられる。すべて，主要剝離面側から入っている。

No.369は，広く大きな打面をもつ縦長剝片で，背面左半分にポジティブな面をもつ。調整加工は，右側縁下半にみられる。主要剝離面側から施されている。

No.370は，背に大きく自然面を残す不定形な剝片を素材とする。調整は，鋭利となった右側縁部にみられる。主要剝離面側に施されている。

No.371は，背面左半分に自然面をとどめる縦長剝片を素材とし，階段状に剝離した上端の縁辺部に，調整加工痕が認められる。

石材は，すべて流紋岩製である。

E)使用痕ある剝片(第146図)

縦長および短形の剝片を素材とし，薄く鋭利となった縁辺部に，刃こぼれ状の細かな剝離痕を連続して形成するものである。

No.372は，細長い打面部をもつ縦長剝片を素材とする。背面には2本の稜線が平行し，両側縁部は薄く鋭利になっている。この側縁部の二ヶ所に微細な連続する剝離痕がみられる。流紋岩製。

No.373は，No.372と同様，幅広い打面をもつ縦長剝片を素材とする。両側縁は鋭く，左側縁では主要剝離面側から，右側縁は背面側から連続する使用痕が形成されている。右側縁部の使用痕は，規則正しく細かな剝離面が並び，左側縁部では，粗い歯こぼれ状になっている。流紋岩製。

No.374は，頭部調整のみられるすづまりの短形剝片を素材とし，左側縁部下半および下辺部に非連続な刃こぼれ状の使用痕が形成されている。流紋岩製。

F)剝　　片(第147～151図)

これらの中には，縦長，短形剝片(No.375～381，383・384，386～389，400・401)，横長剝片(No.391～399)，不定形剝片(No.382・385)，打面再生剝片(No.390)がある。

縦長剝片には，No.375・380のように，背面側に側縁に平行する1～2条の稜線を形成する石刃状のもの，No.376・383・384・387・388などのように，横および斜め方向からの剝離面で背面を形成し，なおかつ主要剝離面側の剝離方向が，主軸に対して左右にやや振っているものがある。石刃状

剝片よりも，後者の剝片類の存在はより多く，特徴的である。打面を一箇所に限定せず，かなり頻繁に打面転位された石核の存在を窺わせる。一見，石刃状にみえるものも，後者の剝片を生じる剝片剝離技術の中で形成されたとも考えられる。

短形剝片は，細長い打面部をもち，貝殻状の形を呈するもの(No.378・379)，背面側に大きく自然面を残すもの(No.377・381・386・400・401)がみられる。これらの剝片は，背面に横方向や斜めからの剝離面を形成するものが多い。縦長剝片と同様の特徴がある。

なお，No.377は，礫片素材で，背面側は右側の薄い剝離面を除き礫表である。自然面を打面として剝離されている。No.381は，背面に大きく礫表面を残す表皮剝片であるが，その礫表面にあばた状の敲打痕を有する。敲石あるいは台石片の可能性がある。No.382・385は，礫素材の不定形剝片である。

横長剝片には，ポジティブあるいは平坦な底面をもつ有底横長剝片と，それ以外の横長剝片がある。有底横長剝片は４点である(第150図)。No.393は，打面部を，礫面と２枚の剝離面で構成する。剝離面は，本剝片を第一次的に剝離する際の調整ではない。背面側には，主要剝離面側と同一方向のネガ面を複数有している。背面における剝離は，左方向に向って順次形成されている。

No.394は，打面部と表面右半部を欠損する。背面側のネガ面は，主要剝離面の剝離方向から大きく左に振られている。

No.395は，背面側から粗く調整された広い打面を有する。この調整によって，主要剝離面の打点は除去されている。背面のネガティブな剝離面および底面の剝離方向は，主軸から大きく左に振られている。

No.396は，自然面を打面とし，打面部の調整はみられない。背面側には，No.393と同様，主要剝離面と同方向のネガティブな剝離面が複数切り合ってみられる。

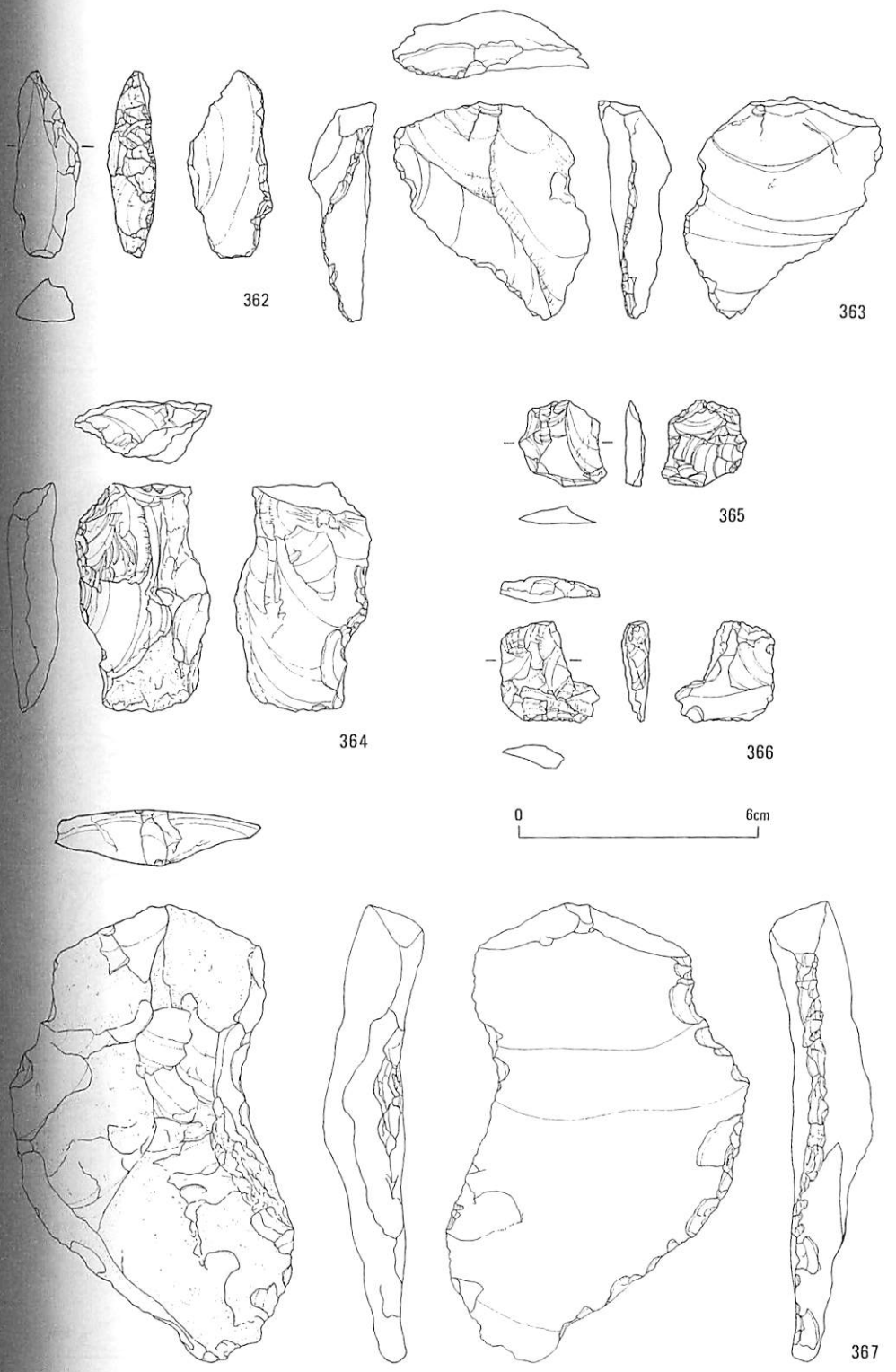
その他の横長剝片は，自然面を打面とするNo.391・392，背面に自然面を大きく残すNo.397，薄く小さな打面をもつNo.399，自然面を打面とし，背面側に横方向の剝離面が大きく形成されたNo.398などがある。No.398は，横長剝片ながら，縦長剝片No.376・384・387などと，背面の剝離痕に共通性がみてとれる。複設打面の石核から得られた剝片である。

打面再生剝片は，１点である(No.390)。石核素材の頭頂部から大きく２～３枚の剝片を調整しつつ剝離した後，横方向からの加撃によって頭部を打ち取った結果生じたものである。

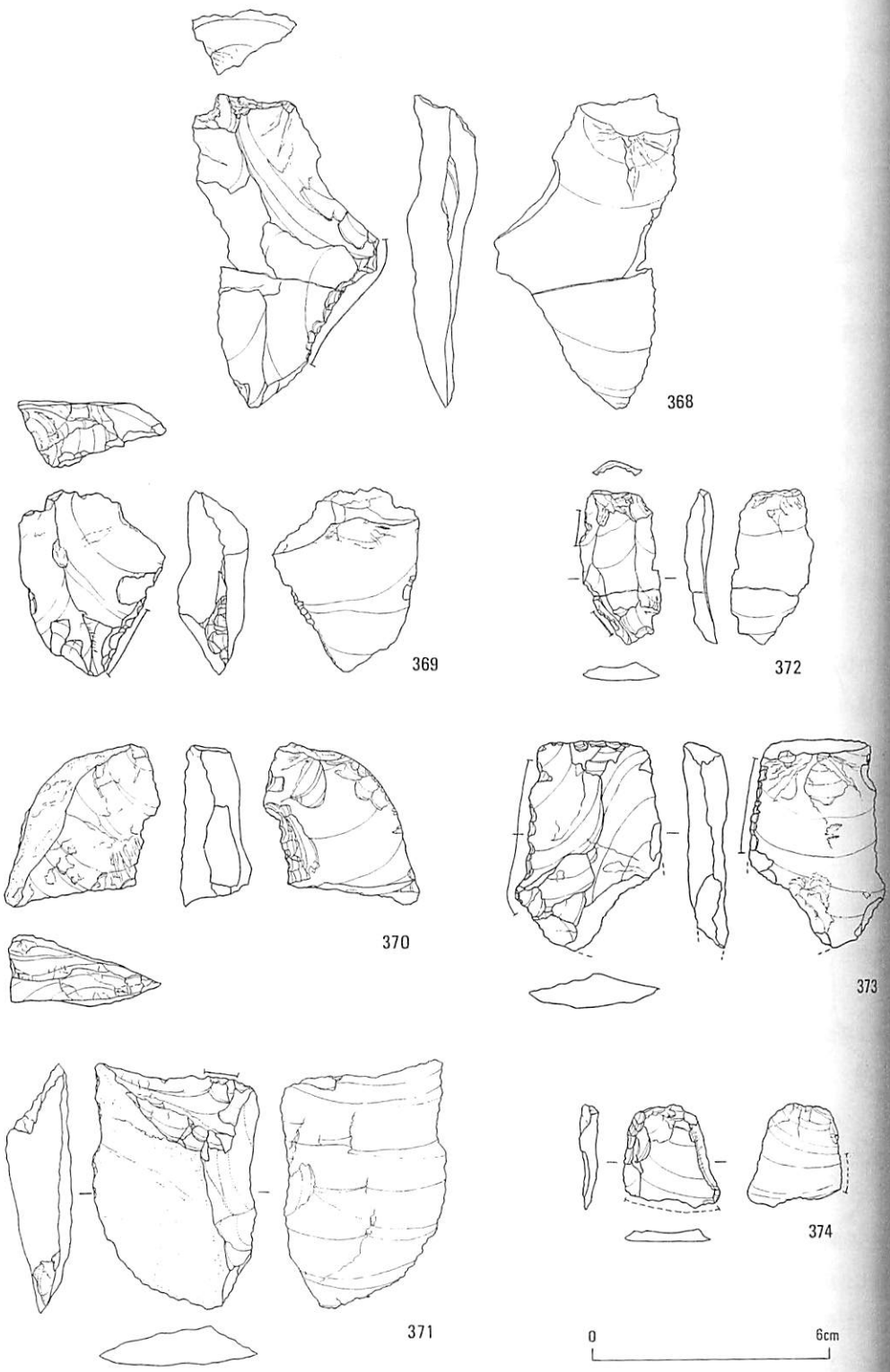
Ｇ)石核・打割器(第151・156図)

ここで打割器としたものには，石核として捉えた方がいいのか判断に迷うものが多く，これらのものも，石核と併せて説明していきたい。

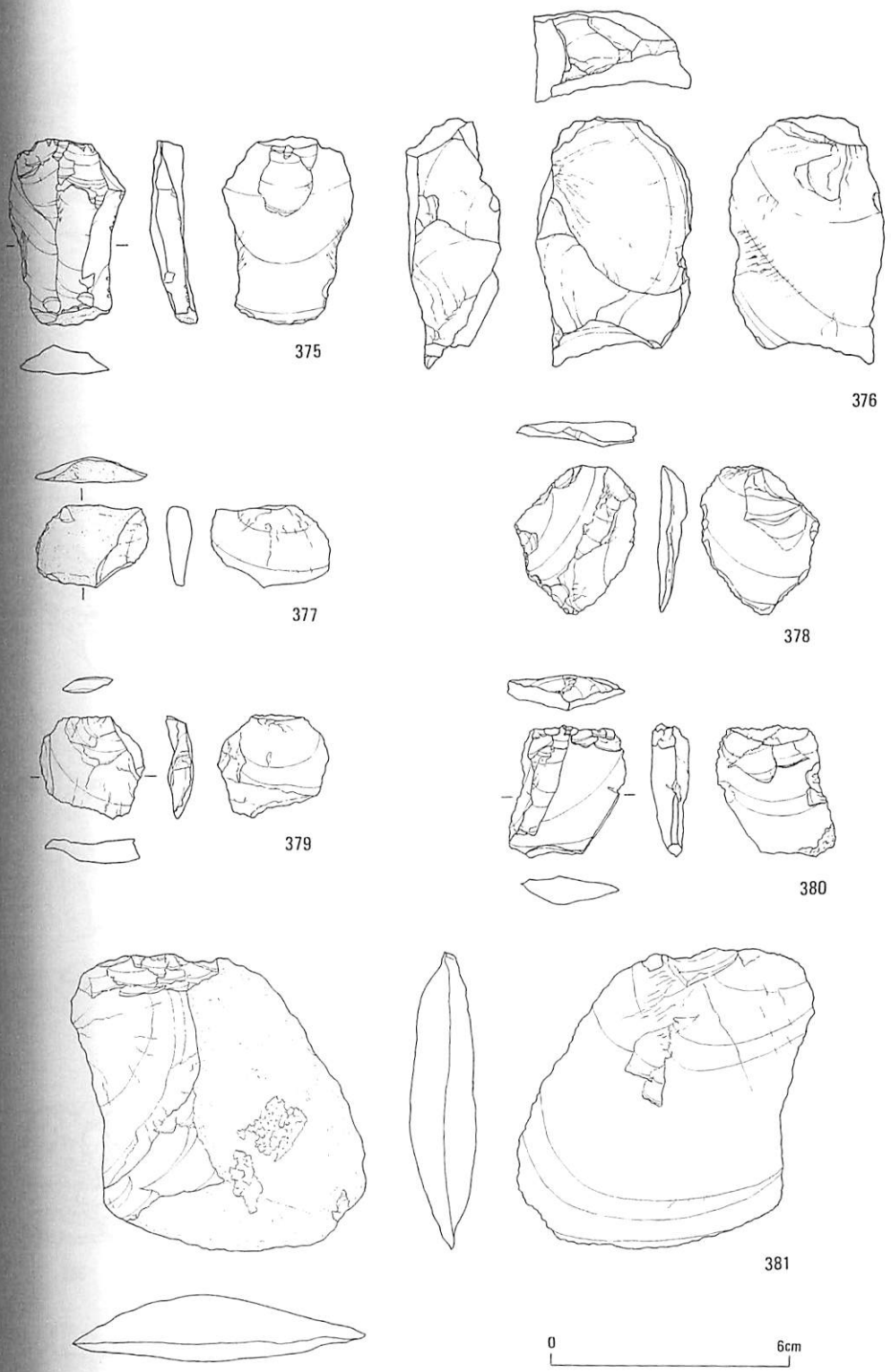
No.402～404の石核は，円礫を横方向から大きく打ち欠いて生じた剝片を素材とする。No.402とNo.404は，円礫面を背面および側面に多く残している。No.402は，側縁に打面調整を加え，平坦な上面を作業面にして，２～３枚の寸づまりの剝片を取っている。No.404は，背面および３つの側面に剝離作業面をもつ。上縁辺部は，剝離作業によって，鋭利となっているが，刃部とするには立ち上りが急なため，打割器とはみなせない。



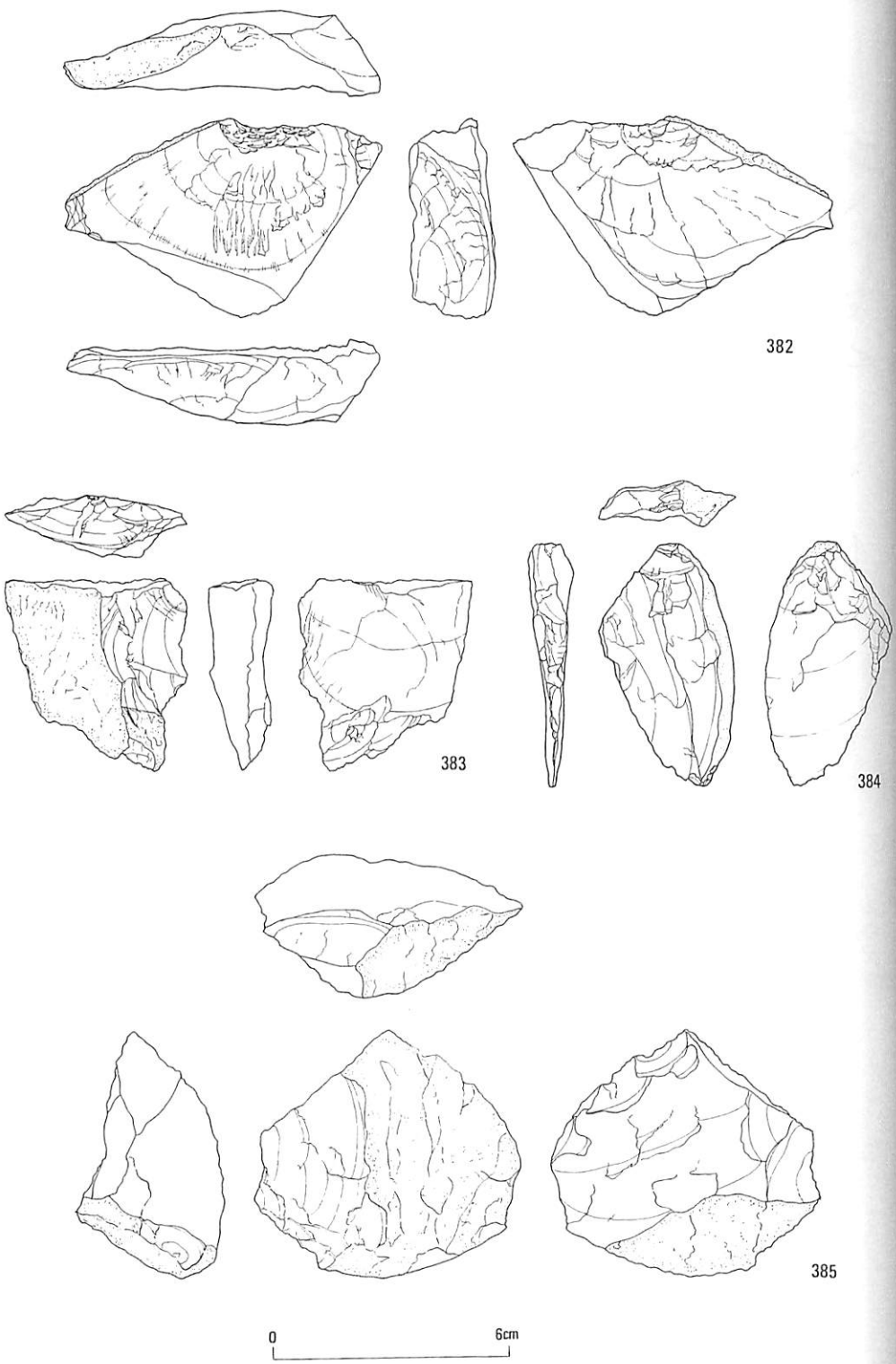

第145図　8－A地点石器実測図　1)



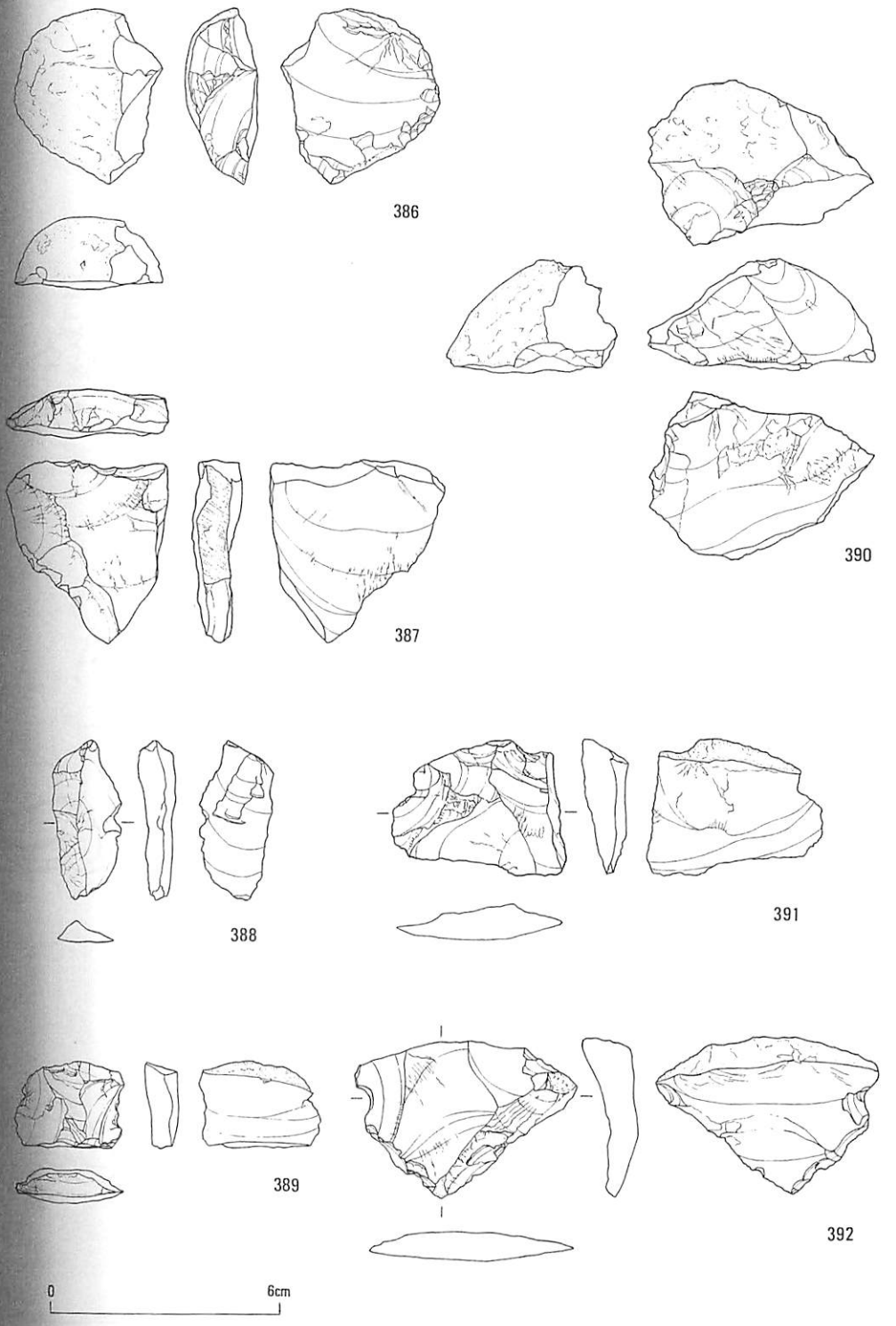

第146図　８－Ａ地点石器実測図　2）



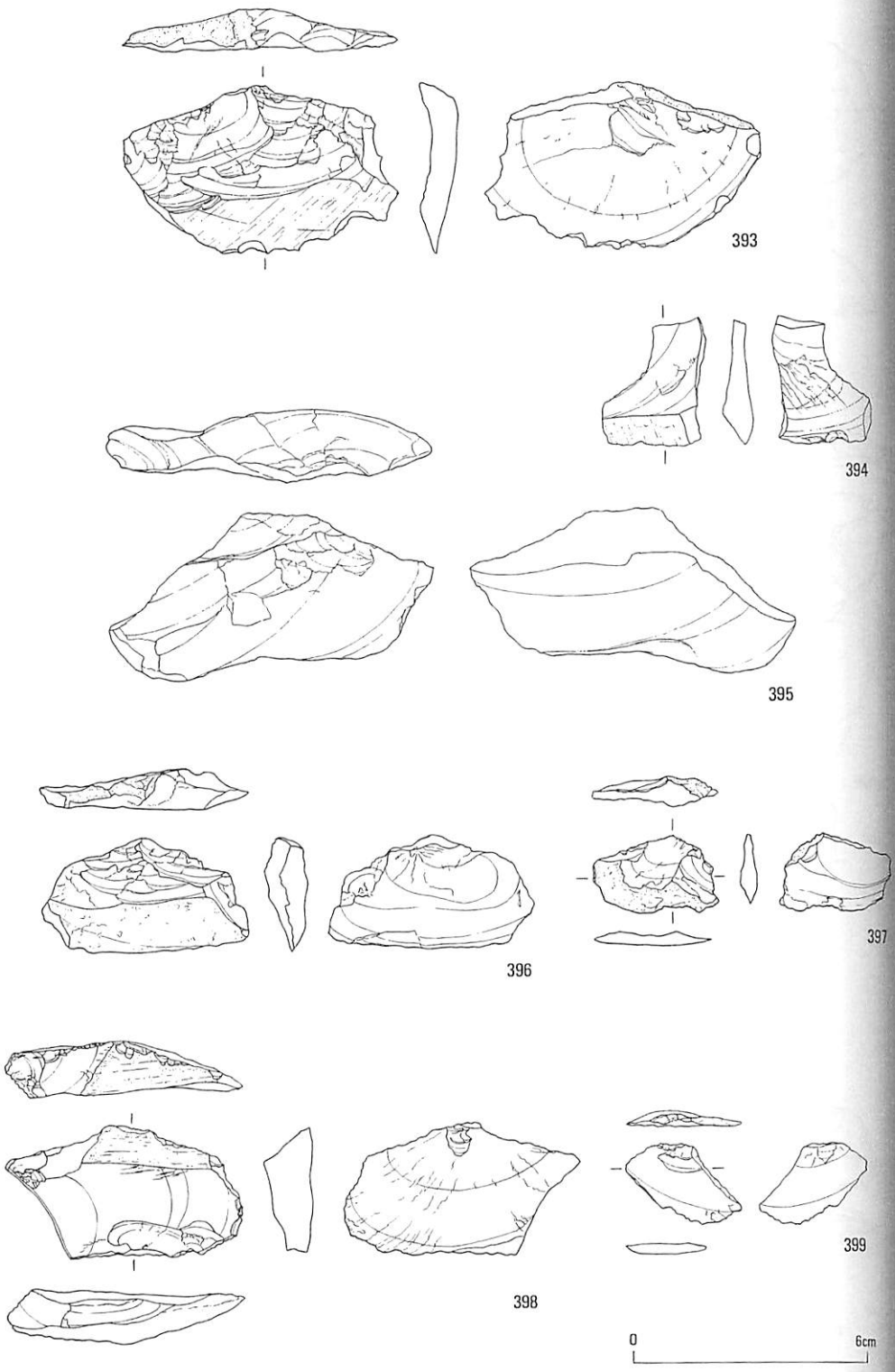

第147図　8－A地点石器実測図　3)



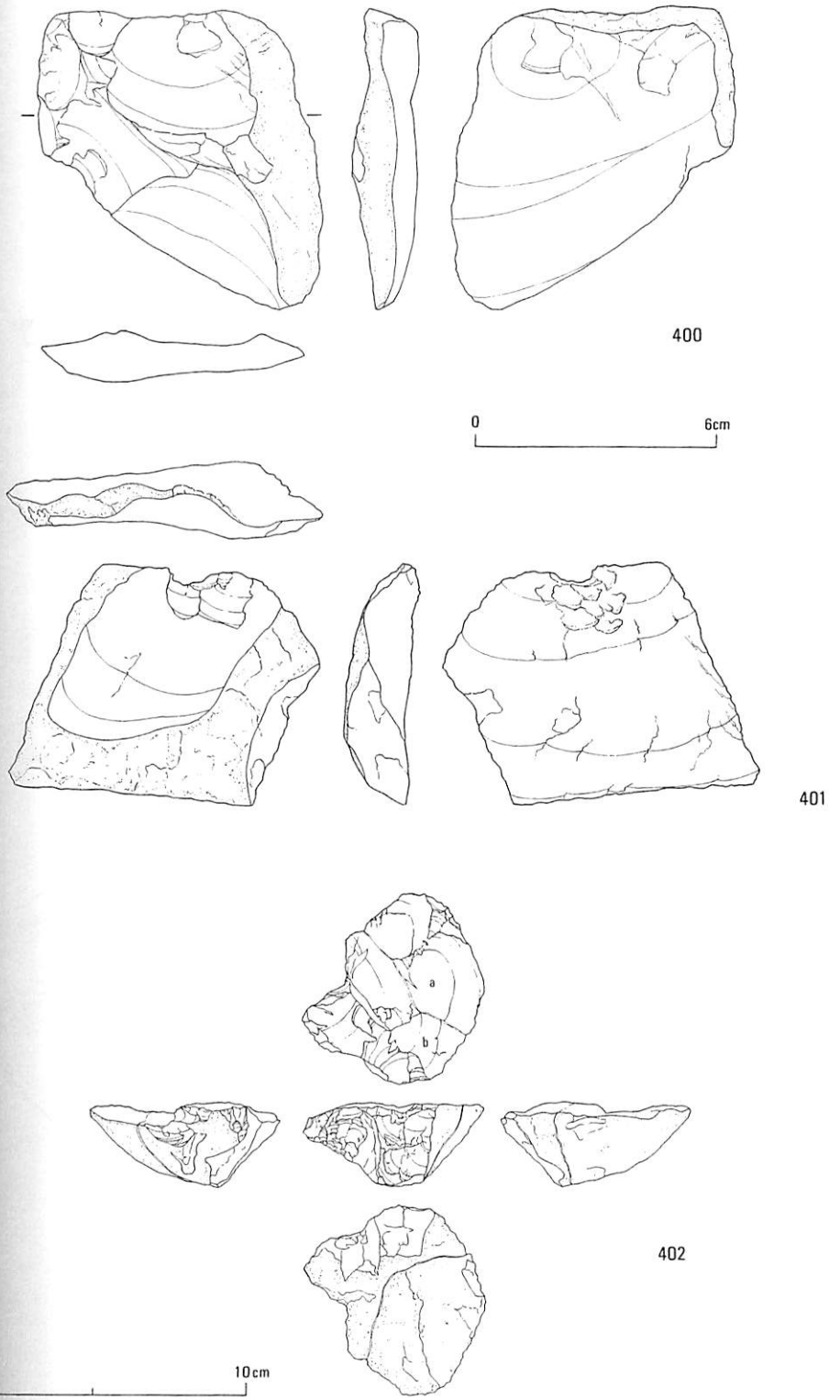

第148図　８－Ａ地点石器実測図　4）



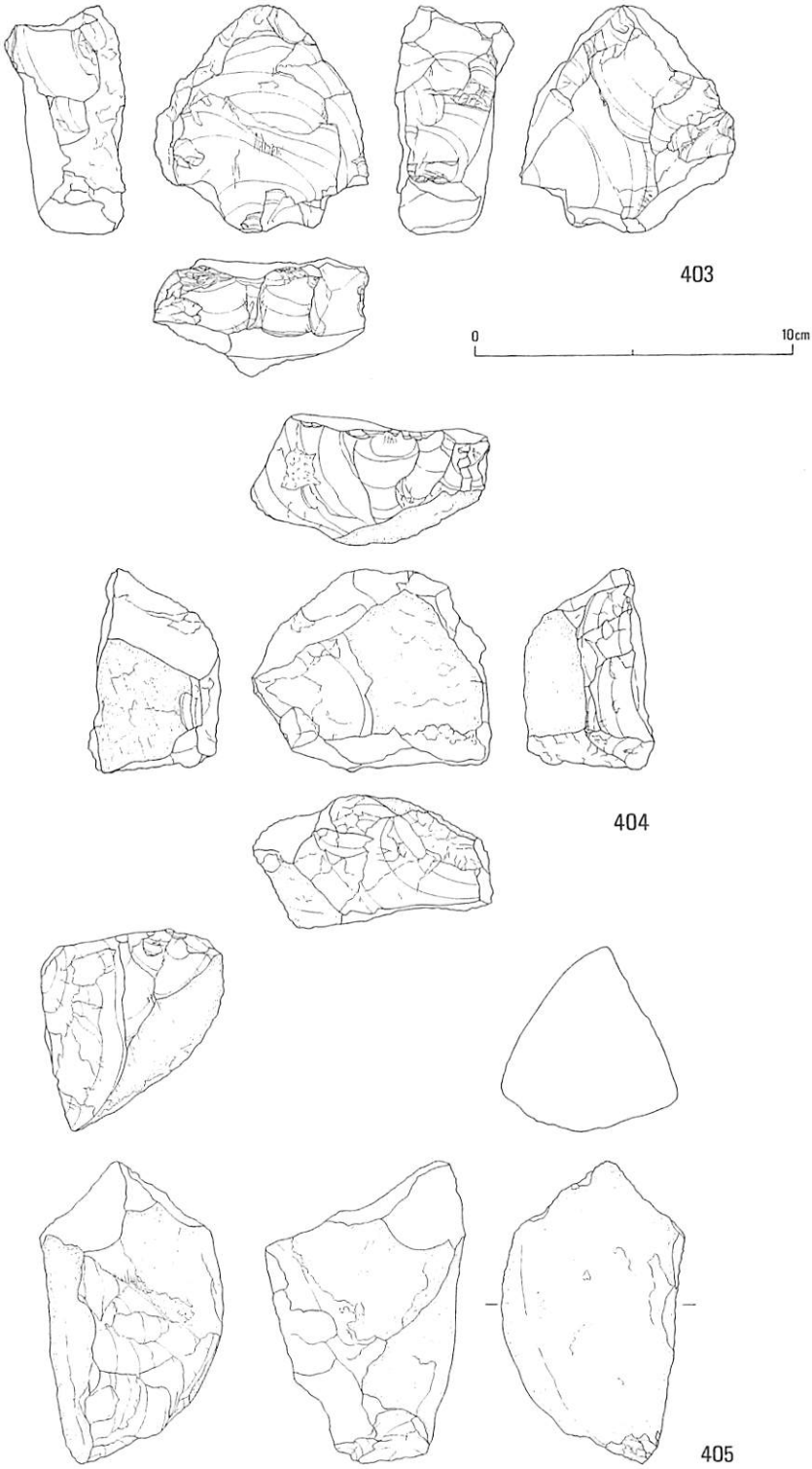

第149図　8－A地点石器実測図　5)



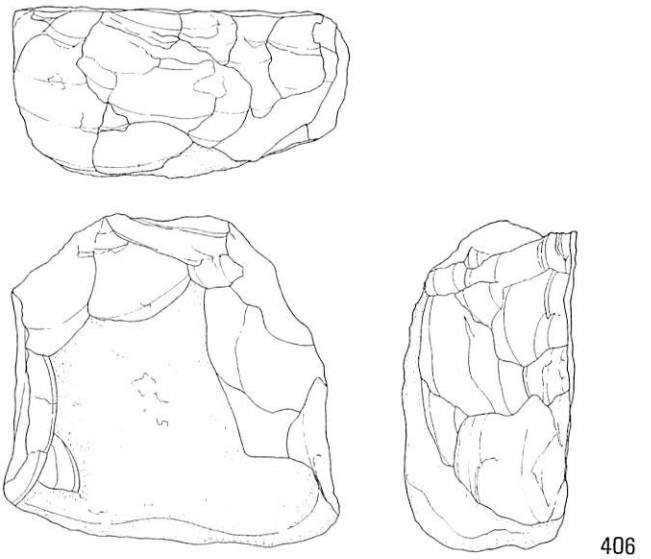

第150図　８－Ａ地点石器実測図　6）

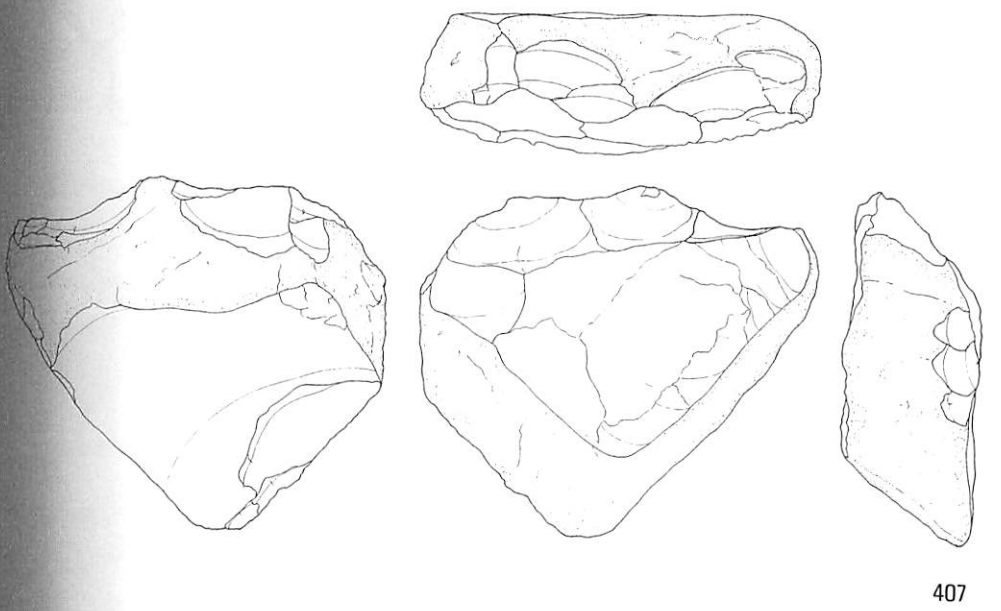



第151図　8－A地点石器実測図　7）

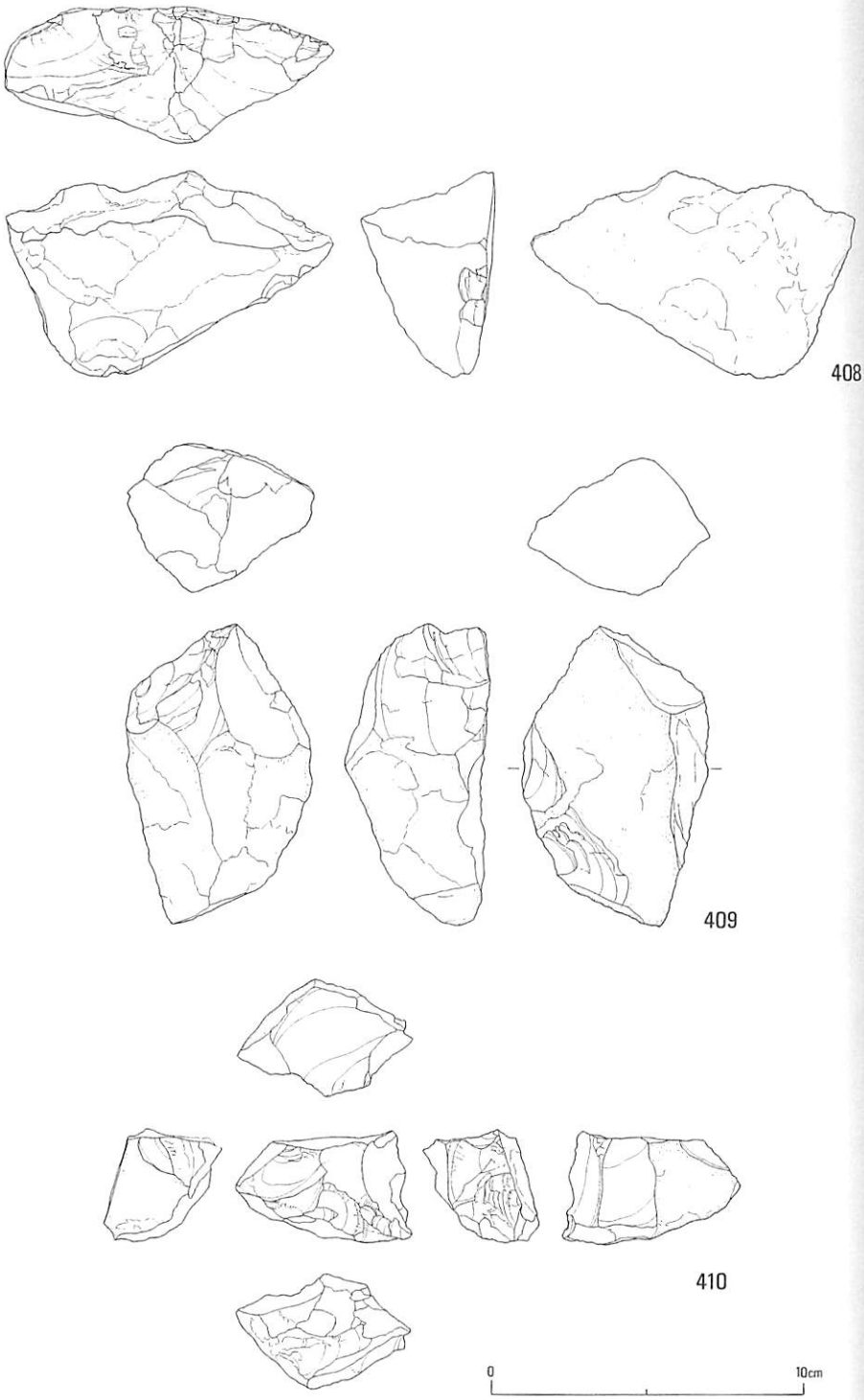



第152図　８－Ａ地点石器実測図　8）

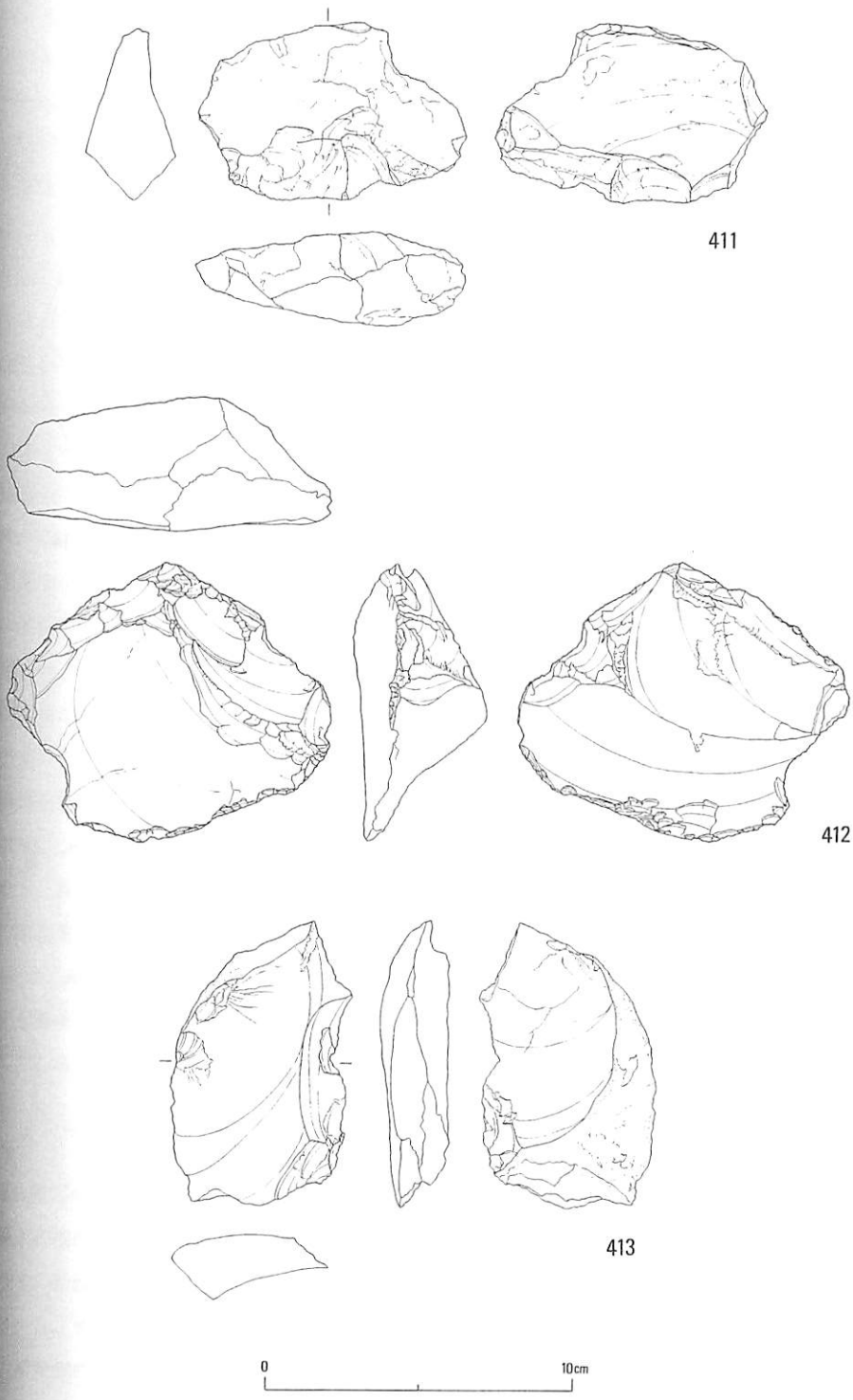


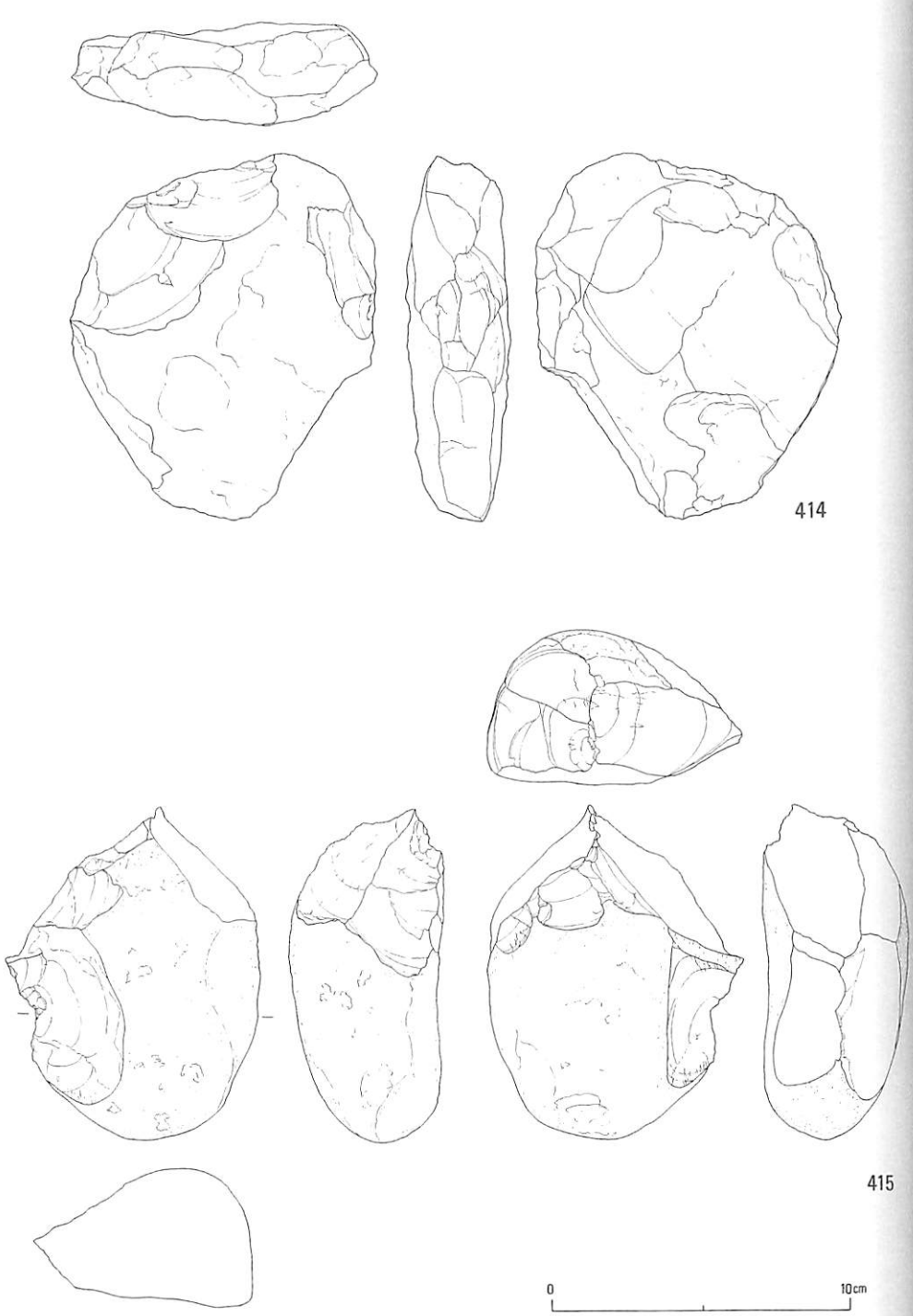

第153図　8－A地点石器実測図　9)




第154図　８－Ａ地点石器実測図 10)




第155図　8－A地点石器実測図 11）




第156図　８－Ａ地点石器実測図 12)

No.403は，円礫を輪切りにした厚い剥片を素材に，表裏面，下辺および右側面部を剥離作業面とする。表裏面からは，幅広い横長剥片が，側面側からは，寸づまりの短形剥片が取られている。打面部を頻繁に移し，多方向から剥片剥離作業を行っている。

No.405・407～409は，打割器のように先端部を尖らせたり，上縁部を剥離面によって整形したりするものである。しかしながら，粗く大きな剥離による先端部は鋭利さを欠き，上縁辺の加工は粗く，角度も立ち上りすぎて刃部の鋭利さがないことから石核とした。No.405は，先端部の他に，自然面を打面として側縁に剥片剥離作業面が形成されている。No.407は，上縁部を表裏から交互に，No.408では上縁部の片側礫面から，共に寸づまりの剥片を取っている。

No.406は，石核の可能性を残すが，刃部とする上縁辺および右側縁の剥離面の立ち上りが，No.407やNo.408ほど鈍くなく，剥離も入念に施され，稜も明確につけられていることから打割器とした。

No.410は，側面および下端面に剥離作業面をもつ石核である。側面の剥離は，上面部からの縦方向のみならず，横方向や斜め方向にも走っている。

横長剥片石核は3点である。No.411は，背面に礫面を大きく残す厚い盤状剥片を素材とする。やや山形となった上縁の打面部は，背面側が右斜め方向の剥離によって調整された後，主要剥離面側から横長および短形剥片を連続的に剥離している。No.412は，分厚い盤状剥片を素材とする。背面側は，左側縁以外は顕著な調整はなされず，山形となっている上縁部の主要剥離面側から，横長，短形剥片をとっている。表面の右上縁部から有底横長剥片を1枚剥離した後，打点を縁辺に沿って左に移しながら，短形の剥片を連続的に取っている。No.413は，円礫から打ち欠かれた厚い剥片を素材とする。背面側は，横方向の大きな剥離面と礫面で構成される。この剥離面を打面とし，主要剥離面側から横長剥片を剥離している。

No.414は，扁平な楕円形の円礫を用い，表面上縁部から左右側縁上半部にかけて，粗い剥離面をとどめる。裏面は，斜め上からの打撃により薄く剥れた面が広く被っている。自然面が多く残り，全体の加工度は低い。打割器の未成品であろうか。

No.415は，厚みのある楕円形の円礫を素材とする石核である。上端部から両側縁部にかけて，交互にそぎ落すように剥片剥離を行っている。また，片方側面部から横長剥片を，上端部に先行して剥離している。表面の小さな貝殻状の剥離面は，剥片剥離作業に適した稜線を得るための調整剥離である。

## 6．まとめ

8－A地点の石器群の特徴は，まず第一に，瀬戸内技法による国府型ナイフ形石器や，横長剥片・横長剥片石核の存在にある。国府型ナイフ形石器は，背面側のブランティング加工が底面にまで及ぶもので，断面が三角形となっている。大分県岩戸遺跡第6層下部からも国府型ナイフ形石器は出土している[2)]。また，このナイフ形石器と対を成す翼状剥片および翼状剥片石核の典型例は認められない。横長剥片であるNo.393・395・396のように，打面部の調整がほとんどみられずに自然面を大きく残し，背面に主要剥離面と同一方向の横長を含む複数の剥離面をとどめるものがある。こうした底面をもつ横長剥片は，三国技法の指標遺跡である西下向遺跡[3)]に類例がある。

横長剝片石核については，厚い盤状剝片を素材に，背面側に調整を加え，専ら主要剝離面側から横長および寸づまりの剝片を生産するものがある(No.411～413)。No.411・412は，打面部がやや山形を呈している。これは，翼状剝片を連続して効率よく取るための打面調整というより，打点を左右に移動させつつ，横長や寸づまりの短形剝片を生産した結果生じた形状である。No.413の石核は，やはり主要剝離面側から２枚の横長剝片を取っている。主要剝離面の剝離方向や打面部の形状から，瀬戸内技法に属するものではない。No.411・412は，横長剝片と同様に西下向遺跡出土の横剝ぎ石核の中に類似のものがあり[4]，典型的な瀬戸内技法の翼状剝片石核とは一線を画する。No.412のように，横長剝片のみならず，ポジティブな面から短形(寸づまり)の剝片を連続して取っていることから，櫃石島技法[5]や米ヶ森技法[6]との関連も窺える。しかしながら，櫃石島技法のように，打面と生産面を交互剝離するような技法は認められない。

第二の特徴として，削器・使用痕ある剝片に多くみられる石刃状の剝片と，不定型で主軸に直交もしくは斜め方向の剝離面をもつ剝片との共存があげられる。後者の剝片は，打面転位が頻繁になされた石核から生産されたものである。量的にもこうした剝片は多く存在している。前者の石刃状の剝片も，実際上は，後者の剝片と同じく，頻繁に打面転位された石核から偶然に生じたものである可能性も高い。

第三の特徴は，石核類について，表・裏面および側面に打面転位が認められること，打割器状のものが多くあることである。いずれの石核からも，打面部の稜をとりこみ，並行剝離を施して石刃状の剝片を取った痕跡はみられない。打面転位を頻繁に行うと，残核は立方体もしくは多面体状を呈し，得られた剝片は定型性に乏しくなる傾向が指摘されている[7]。背面に横方向や斜め方向の剝離をもつ剝片や，主軸を左右どちらかに振った形状の剝片に，こうした技術の存在が窺える。打割器状の石核をみると，打点を集中させる傾向はみられず，自然面や節理面を打面として，不定形剝片を剝離している。中には，稜を交互に剝離していったものもある。

以上のように，８－Ａ地点の石器群は，広く瀬戸内技法に関連するものと，縦長・横長・短形の各種剝片とこれらを生産した石核類に代表される。前者は岩戸６層下に相当しよう。後者の資料は，打点を集中させず長軸の稜線を交互に剝離した打割器状の石核の存在などから，南関東編年の第Ⅱ期(武蔵野Ⅴ～Ⅹ層)の後半[8]に相当するものとなろう。

(黒　坪)

註

1)　『丹生１・２次概報』(昭和39年)。
2)　清水宗昭・高橋信武・柳田俊雄『岩戸遺跡－大分県大野郡清川村所在旧石器時代遺跡第３次発掘調査報告書』(大分県清川村，昭和61年)。
3)　平口哲夫他『西下向遺跡－第一次・第二次発掘調査概報』(福井県三国町，昭和58年)。
4)　註3)に同じ。
5)　間壁葭子「香川県坂出市櫃石島採集の石器」(『倉敷考古館研究集報』第四号所収，昭和43年)。
6)　藤原妃敏・富樫泰時・村岡百合子他『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』(秋田県協和町，昭和52年)。
7)　松藤和人「西日本におけるＡＴ下位の石器群」(『国立歴史民俗博物館研究報告第13集』所収，佐倉，昭和62年)。
8)　鈴木次郎・矢島国雄「先土器時代の石器群とその編年」(『日本考古学を学ぶ』(１)所収，東京，昭和52年)。

# 第19節　第８地区Ｂ地点

## １．発掘の経過

８－Ｂ地点は，昭和39年10月４日～22日に行われた第３次調査[1)]で小林班が行っている。

## ２．位置・地形・トレンチ

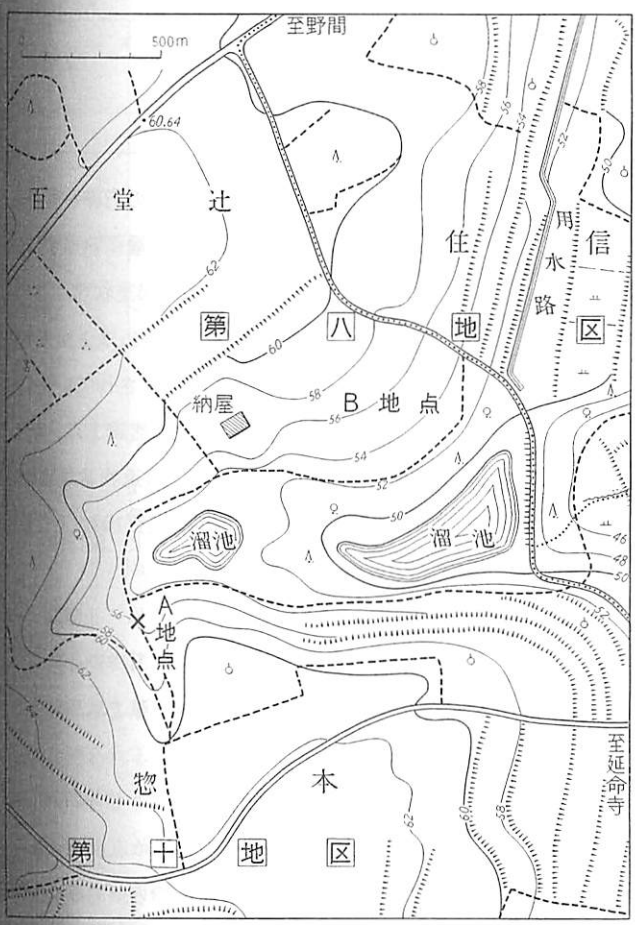
第８地区は，大字丹川字辻川ほかに属し，西の百堂辻を頂部（標高69ｍ）とし，東に向って，支脈状，階段状に低減する舌状の丘にある（第157図，図版Ⅳ下段）。

Ｂ地点は，Ａ地点の西に接する標高57～54ｍの緩やかな斜面にあり，当時畑地として，利用されていた。この地点の東南約15ｍの処には，大きな溜池が存在している。

Ｂ地点の調査では，12トレンチが設定され，総発掘面積は，392㎡に及んだ。またトレンチ内の区は，１区画２ｍ×４ｍ，拡張部については，３ｍ×４ｍとし，東西トレンチは東より，南北トレンチは北より区画番号をつけた（第158図）。

## ３．土　　層

８－Ｂ地点の層位は，６層に区分される。Ａトレンチ３区南壁の断面を示す（第159図）。




第157図　８－Ｂ地点，10－Ａ地点付近地形図

第１層　耕作土。暗褐色で礫をほとんど含まない。

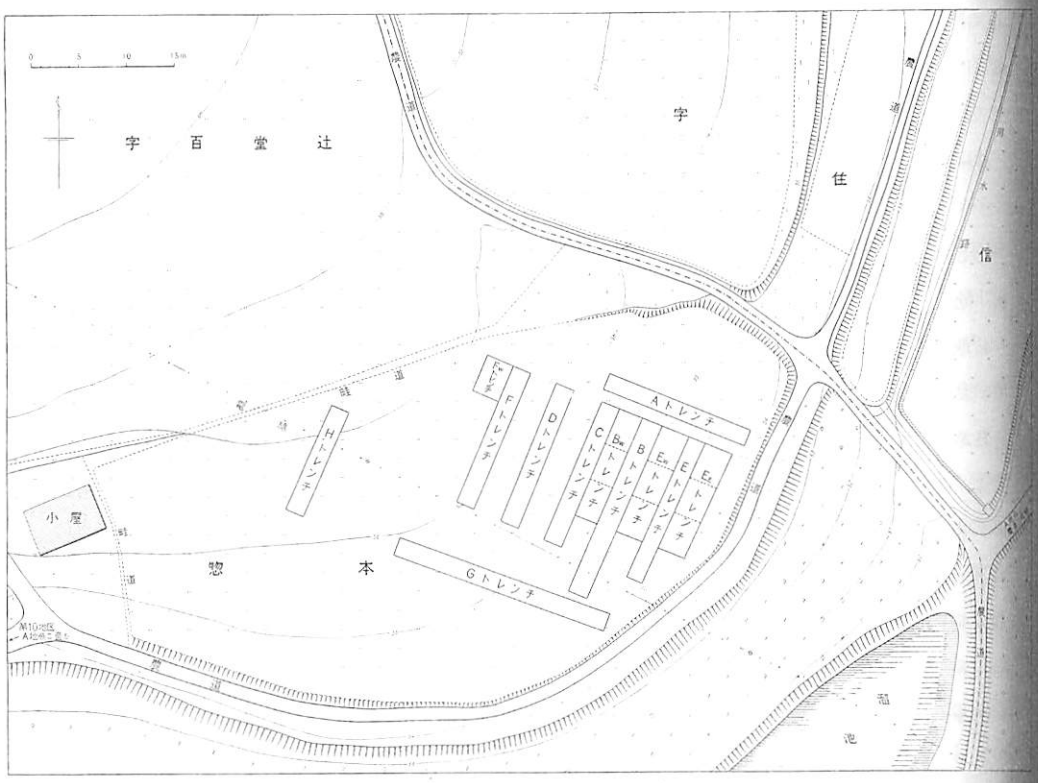
第２層　淡褐色土で第１層より明るい色調で，手ざわりも少し堅い。第２層が認められないトレンチもある。

第３層　褐鉄鉱を含む堅い粘土質土層で少し礫を含む明茶褐色土。

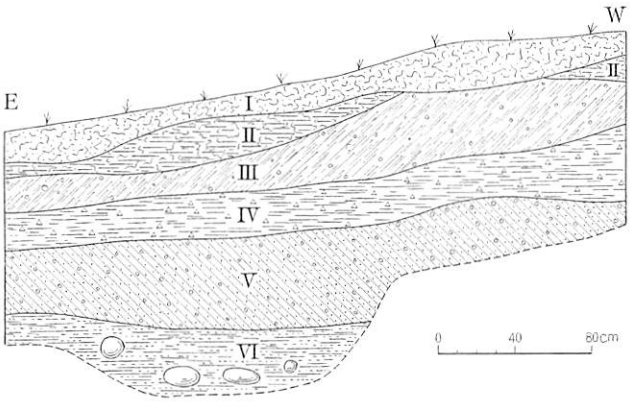
第４層　第３層同様堅い粘土質土層で，褐鉄鉱が見られず石英・結晶片岩の小角礫を多く含み色調がやや青みがかっている。

第５層　多量に小円礫を含み，土質も砂質である。

第６層　褐色と青灰白色のまだらな色調を示す粘土質土層。安山岩の風化し




第158図　８－Ｂ地点トレンチ配置図




第159図　８－Ｂ地点Ａトレンチ南壁土層断面図

た20cm大の円礫を含む。志村砂礫層に該当する。

４．遺物の出土状況

８－Ｂ地点の石器には１から104までの遺物番号が付されている(第８表)。このうち自然礫１点，新しい破損による２点(遺物番号ⅦB－30・31)を含むので実質102点となる。

A)平面分布

平面分布については，正確なデータがないため，トレンチ区内での出土点数を示すにとどまる(第160図)。遺物は，Ｈトレンチ以外の全トレンチで出土しているがＢ・Ew・Ｅ・EEトレンチに集中し，全体の約60％にあたる61点が出土している。特に石核については，全体の76％にあたる13点が出土している。

接合・個体識別の結果，８－Ｂ地点の出土石器102点のうち，同一個体別資料は４個体27点であり，２点以上の接合関係のある資料は８例19点である(第161・162図)。

平面分布，接合資料と個体別資料の分布状態から見て，Ｃ～EEトレンチで一つのブロックを形成するのではないかと考えられる。石核の分布，接合資料の中心がＢ・Ew・Ｅ・EEにあるので，こ

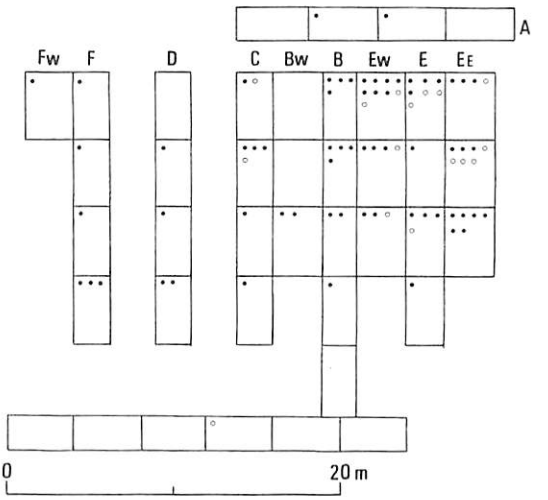
のトレンチ内に石器ブロックの中心があったと考えられる。

B)垂直分布

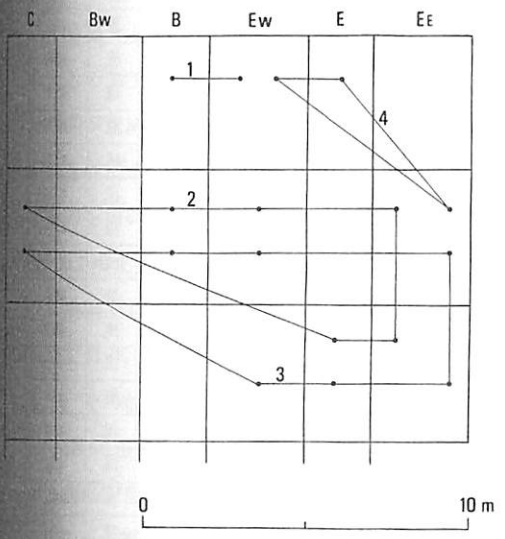
遺物は表土・第1層から第3層までに認められ，4層以下は無遺物層である。

各層の出土点数は表土・第1層29点，第2層33点，第3層27点である(表採・出土層位不明13点)。縄文時代の遺物は表土・第1層から10点，第2・3層からそれぞれ2・1点出土しており，これを除くと表土・第1層19点，第2層31点，第3層26点となる。

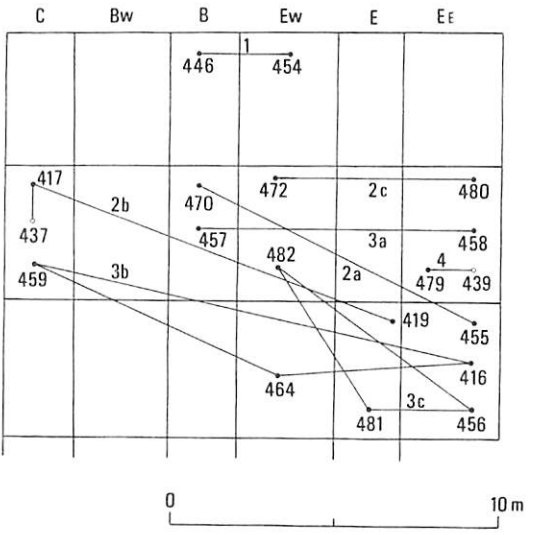
個体別資料の層位別出土状況は表採1点，表土・第1層5点，第2層7点，第3層9点で，接合資料については表採2点，表土・第1層5点，第2層6点，第3層5点となる。




第160図　8－B地点石器平面分布概念図
白丸は石核，黒丸はその他。




第161図　8－B地点個体別資料分布概念図
No.1～4は個体別資料番号。




第162図　8－B地点接合資料分布概念図
図中の数字は挿図No.1～4は個体別資料番号，白丸は出土トレンチ不明遺物。

遺物は第1層から第3層にかけて認められるが，第2～3層が遺物分布の中心であったのではないかと思われる。

## 5．石　　器

8－B地点からは102点の石器が出土，あるいは表採されている。このうち13点は縄文時代のものである。残り89点の内訳はナイフ形石器1点，彫器2点，楔形石器1点，礫器4点，RF5点，UF21点，剥片38点，石核17点である(第8表)。

第8表　第8地区B地点出土石器一覧表

| 遺物番号 | 類　別 | 出土層 | 発掘区 | 石材 | 挿図No. |
|---|---|---|---|---|---|
| ⅦB－1 | A　UF | 2 | A－2 | 流 | 438 |
| 2 | A　PB | 3 | A－3 | 安 | 477 |
| 4 | B　—— | 3 | B－1 | 流 | 446 |
| 5 | A　UF | 3 | B－1 | 流 | 423 |
| 6 | A　UF | 3 | B－1 | 流 | 442 |
| 7 | A　PB | 3 | B－1 | 安 | 478 |
| 8 | B　—— | 2 | B－2 | 流 | —— |
| 9 | B　—— | 3 | B－2 | 流 | 470 |
| 10 | B　—— | 3 | B－2 | 流 | 457 |
| 11 | B　—— | 3 | B－2 | 流 | 444 |
| 12 | A　UF | 1 | B－3 | 流 | 425 |
| 13 | B　—— | 1 | B－3 | 流 | 469 |
| 15 | B　—— | 3 | B－4 | 流 | 447 |
| 16 | A　UF | 1 | C－1 | 流 | 436 |
| 18 | D　—— | 2 | C－1 | 流 | 494 |
| 19 | D　—— | 2 | C－2 | 流 | 488 |
| 20 | B　—— | 2 | C－2 | 流 | 453 |
| 21 | A　Gr | 2 | C－2 | 流 | 417 |
| 22 | B　—— | 2 | C－2 | 流 | 459 |
| 23 | A　UF | 3 | C－3 | 流 | 428 |
| 24 | B　—— | 2 | C－4 | 流 | 462 |
| 25 | B　—— | 2 | D－2 | 流 | 467 |
| 26 | A　Kn | 2 | D－3 | 流 | —— |
| 28 | A　UF | 2 | D－3 | 流 | 430 |
| 29 | B　—— | — | D－3 | 流 | —— |
| 30(31) | D　—— | 1 | E－1 | 流 | 486 |
| 32 | B　—— | 1 | E－1 | 流 | 448 |
| 33 | B　—— | 1 | E－1 | 流 | 474 |
| 34 | A　UF | 2 | E－1 | 流 | 440 |
| 35 | D　—— | 2 | E－1 | 流 | 483 |
| 36 | D　—— | 2 | E－1 | 流 | 485 |
| 37 | B　—— | 3 | E－1 | 流 | 450 |
| 38 | B　—— | 2 | E－2 | 流 | —— |
| 39 | A　UF | 1 | E－3 | 流 | 431 |
| 40 | A　RF | 3 | E－3 | 流 | 419 |
| 41 | D　—— | 3 | E－3 | 流 | 481 |
| 42 | A　UF | | E－3 | 流 | 441 |
| 43 | A　PS | 3 | E－4 | 流 | 418 |
| 44 | B　—— | 1 | EE－1 | 流 | 473 |
| 45 | A　RF | 1 | EE－1 | 安 | 421 |
| 46 | D　—— | 1 | EE－1 | 流 | 490 |
| 48 | A　UF | 2 | EE－1 | 流 | 427 |
| 49 | A　UF | 1 | EE－2 | 流 | 435 |
| 50 | D　—— | 1 | EE－2 | 流 | 484 |
| 51 | B　—— | 1 | EE－2 | 流 | —— |
| ⅦB－52 | D　—— | 1 | EE－2 | 流 | 479 |
| 53 | D　—— | 1 | EE－2 | 流 | 480 |
| 54 | B　—— | 2 | EE－2 | 流 | 458 |
| 55 | D　—— | 3 | EE－2 | 流 | 492 |
| 56 | A　UF | 1 | EE－3 | 流 | —— |
| 58 | B　—— | 2 | EE－3 | 流 | 456 |
| 59 | A　RF | 2 | EE－3 | 安 | 420 |
| 60 | A　Gr | 2 | EE－3 | 流 | 416 |
| 61 | B　—— | 2 | EE－3 | 流 | 455 |
| 62 | B　—— | 2 | EE－3 | 流 | —— |
| 64 | B　—— | 表土 | EW－1 | 流 | 454 |
| 65 | B　—— | 2 | EW－1 | 流 | 460 |
| 66 | B　—— | 2 | EW－1 | 流 | 445 |
| 67 | D　—— | 2 | EW－1 | 流 | 487 |
| 68 | B　—— | 3 | EW－1 | 流 | 452 |
| 69 | D　—— | 3 | EW－1 | 流 | 491 |
| 70 | A　UF | 3 | EW－1 | 流 | 429 |
| 71 | A　UF | 3 | EW－1 | 流 | 424 |
| 72 | B　—— | 3 | EW－1 | 流 | 466 |
| 73 | D　—— | 1 | EW－2 | 流 | 482 |
| 75 | B　—— | 3 | EW－2 | 流 | 471 |
| 76 | B　—— | 3 | EW－2 | 流 | 443 |
| 77 | B　—— | 3 | EW－2 | 流 | 472 |
| 78 | D　—— | 2 | EW－3 | 流 | 493 |
| 79 | B　—— | 3 | EW－3 | 流 | —— |
| 80 | B　—— | 3 | EW－3 | 流 | 464 |
| 81 | B　—— | 3 | BW－3 | 流 | 463 |
| 82 | A　RF | 2 | BW－3 | 流 | —— |
| 83 | B　—— | 1 | F－1 | 流 | 465 |
| 84 | A　UF | 2 | F－2 | 流 | 434 |
| 85 | A　RF | 1 | F－3 | 流 | 422 |
| 87 | B　—— | 2 | F－3 | 流 | 451 |
| 88 | B　—— | 2 | F－3 | 流 | 468 |
| 89 | B　—— | 3 | F－3 | 流 | 449 |
| 90 | A　UF | 表土 | FW－1 | 流 | 432 |
| 92 | D　—— | 表土 | G－3 | 流 | 489 |
| 95 | B　—— | —— | —— | 流 | 461 |
| 96 | D　—— | —— | —— | 流 | 495 |
| 97 | A　UF | 表採 | —— | 流 | 439 |
| 98 | A　UF | 表採 | —— | 流 | 437 |
| 99 | A　PB | 表採 | —— | 安 | 475 |
| 100 | A　UF | 表採 | —— | 流 | 433 |
| 103 | A　UF | 表採 | —— | 流 | 426 |
| 104 | A　PB | 表採 | —— | 安 | 476 |

A)ナイフ形石器

これは，現物不明であり詳しくは検討できないが，遺物カードに残されたスケッチによると，打面を残した寸づまりの剥片の一部に調整が加えられたもののようであり，後述する８－Ｂ地点に特徴的な剥片剥離技法を基盤とするものではない。

B)彫　　器(第163・177図)

彫器は２点出土した。No.416は厚めの剥片の打面側に彫刃面を形成している。本例には剥片２点が接合する(No.503)が，うち１点は調整剥片であり，彫刃面の作出にあたっては背面側に調整加工を加えた後，その面を加撃していることが分かる。

No.417は剥片の末端部に主剥離面側から剥離を施した後，その面を加撃して彫刃面を形成している。彫刃面作出の際の加撃面に剥片が接合する(No.502)。

C)楔形石器(第163図)

厚めの剥片を素材としたものである(No.418)。上下両端には階段状の剥離がみられ，一方の側縁に截断面が認められる。素材剥片の主剥離面を大きく留めている。

D)打　　器(第171・172図)

４点出土している(No.475～478)。No.476を除いて完形である。大形の礫を分割して，分割面を打面として加工が加えられ弧状の刃部を作出している。加工が加えられた面には自然面のほか数枚の剥離面が認められ，加工は剥離面の部分を中心に行われていることから，打器の製作にあたっては刃部を作出する部分の自然面を除去する工程があったのではなかろうか。使用石材はいずれも粗粒なものを用いている。

E)加工痕ある剥片(第163図)

５点出土し，１点が現物不明である(No.419～422)。二次加工は施工部位がすべて一方の側縁に限られており，No.421が連続的である以外は部分的なものとなっている。また角度もNo.421は平坦であるが，その他は角度のある二次加工となっている。

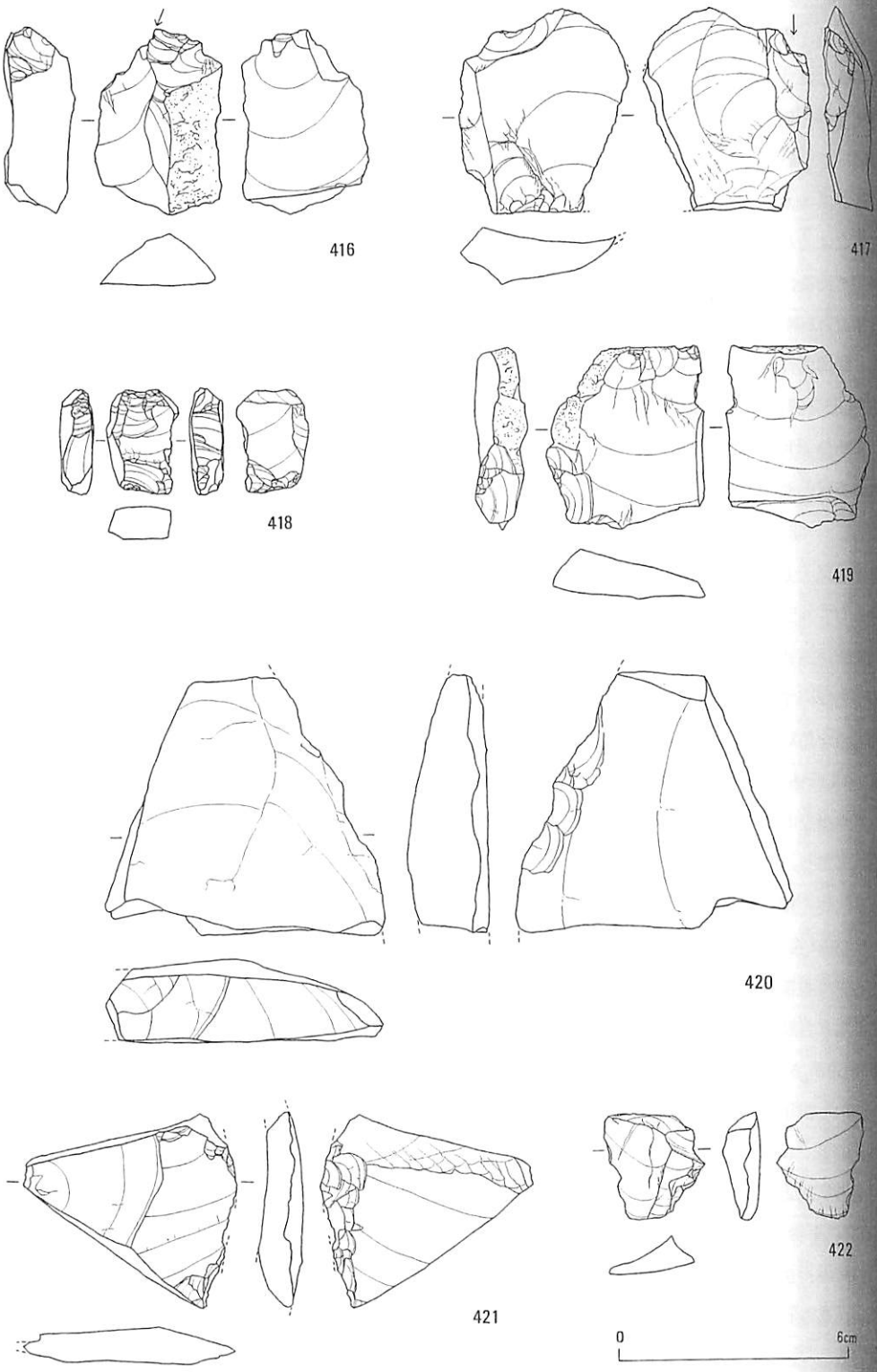
No.420は粗粒な石材を使用しており打器の可能性もあるが，本地点の打器が分割礫の自然面を有する側に刃部形成の剥離を行っているのに対し，本例は主剥離面側に加工が施されているため異なるものと判断した。

F)使用痕ある剥片(第164～166図)

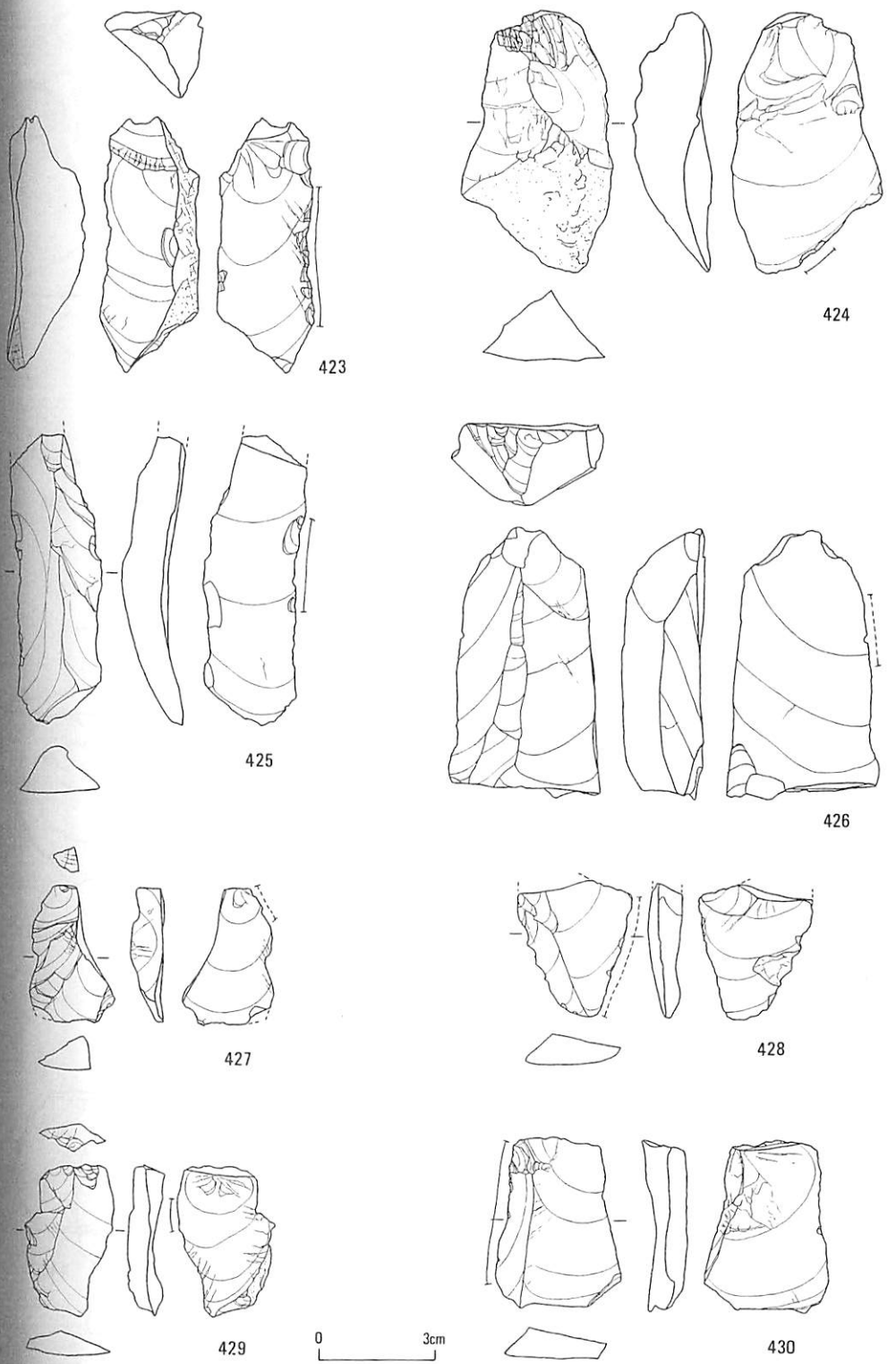
剥片を使用に供した結果残される痕跡には微細な剥離痕，つぶれ，磨痕(光沢を含む)などが考えられるが，８－Ｂ地点では微細な剥離痕を有するもののみ認められた。本地点におけるＵＦは大きさや形状などに規格性がみられず，No.425の縦長剥片のような整ったものばかり用いてはいない。No.437は彫器の彫刃面を形成する加撃面を作出した際の剥片であり(No.502)，同図439は縦長剥片石核の打面再生剥片である(接合図No.497)。またNo.432・433のように小さな剥片をも使用に供しており，一連の石器製作過程で生じた剥片を使用していたことが分かる。

G)剥　　片(第166～170図)

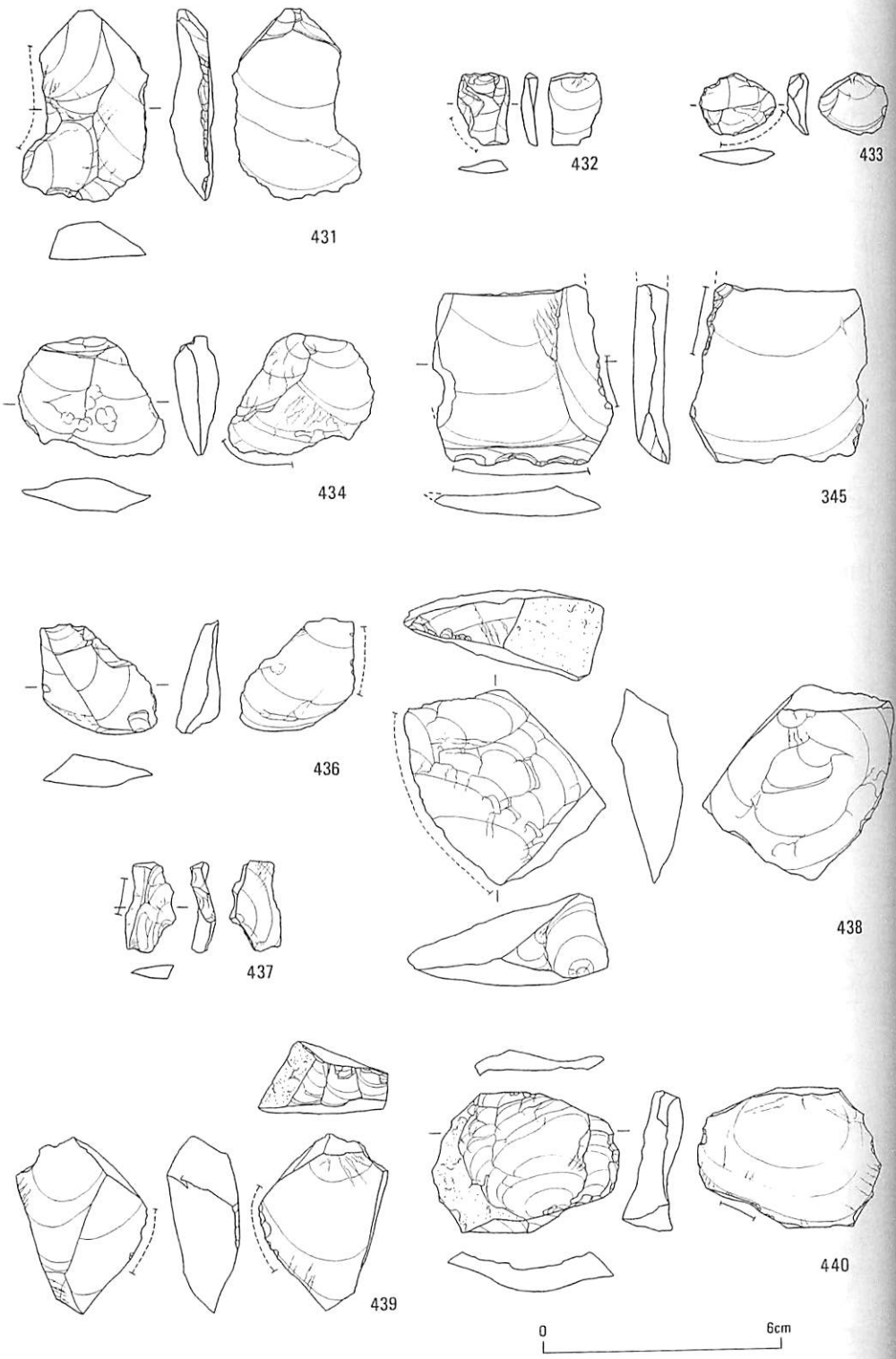
剥片の形状はＵＦも含めて分類すると縦長のもの(No.423～432・443～447)，横長のもの(No.437・



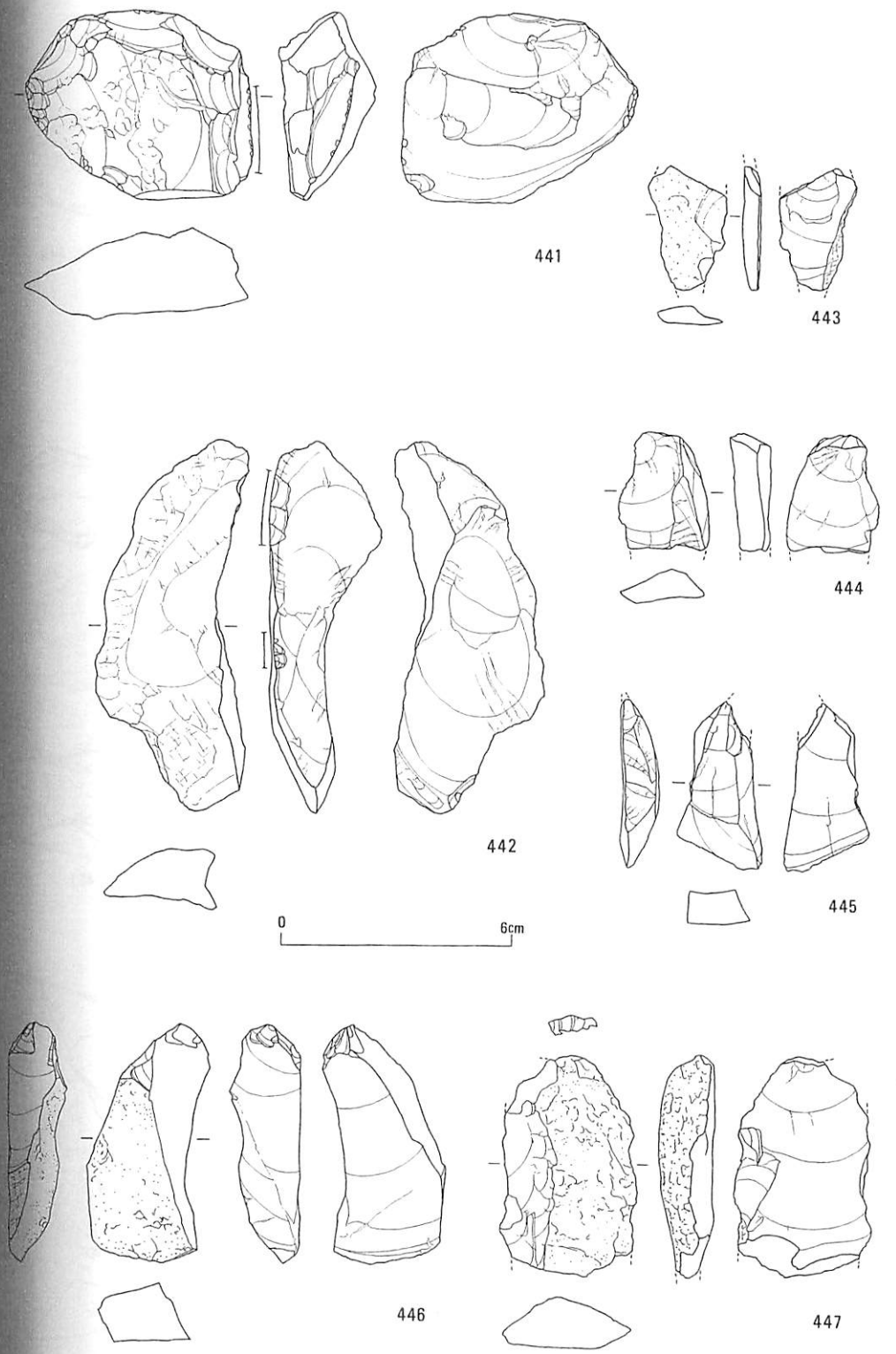

第163図　８－Ｂ地点石器実測図　1）



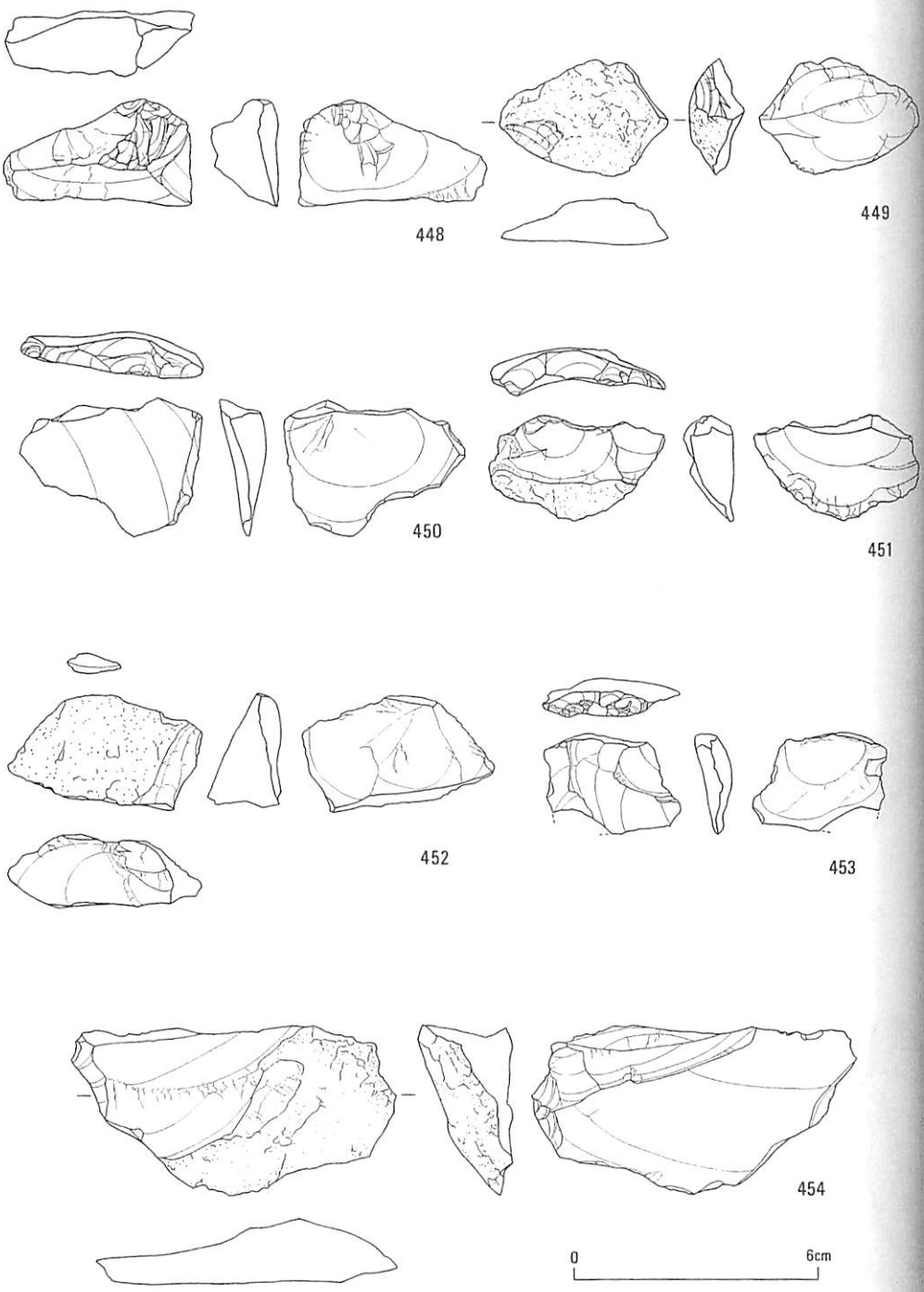

第164図　8－B地点石器実測図　2)



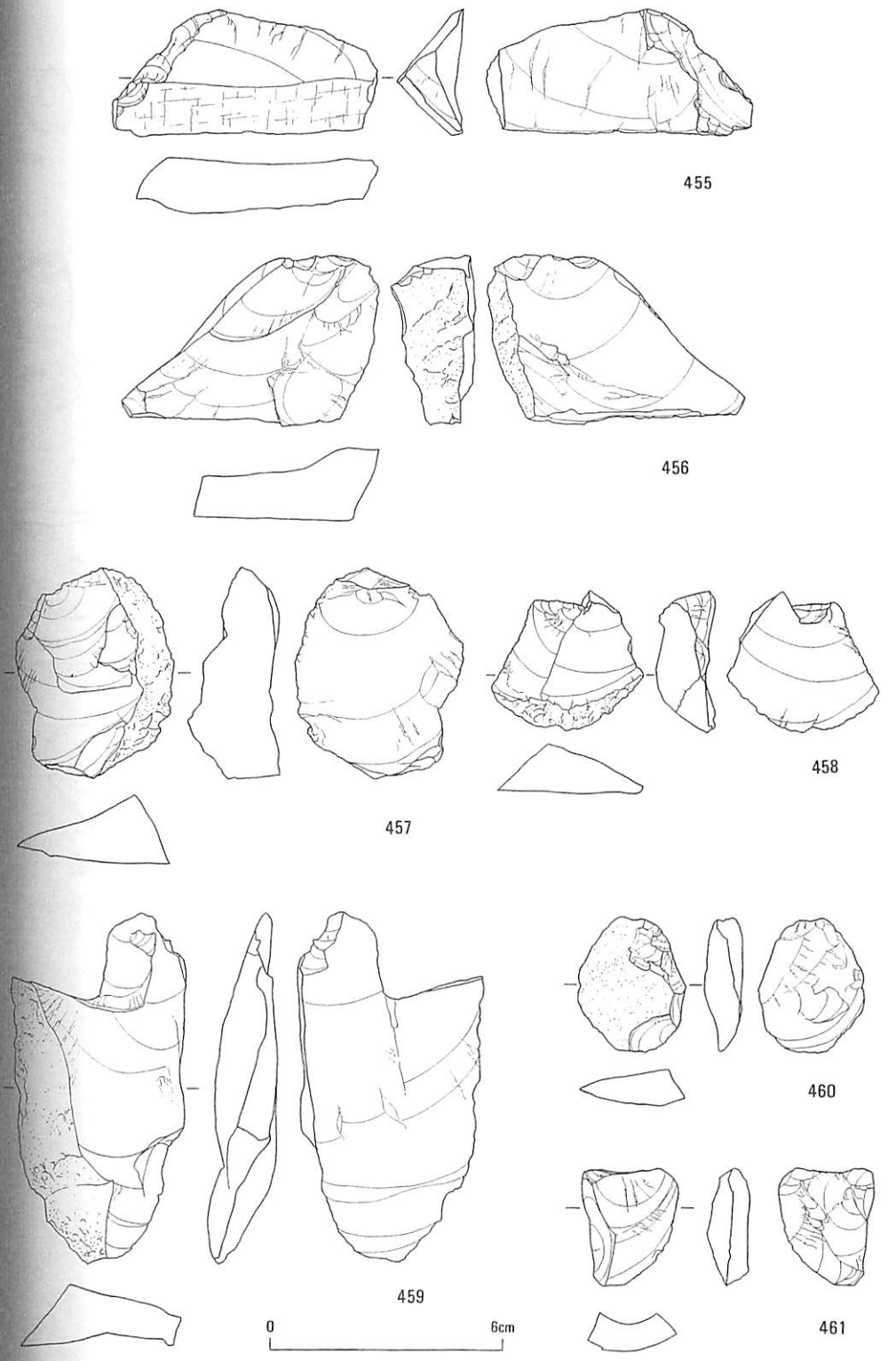

第165図　８－Ｂ地点石器実測図　3）



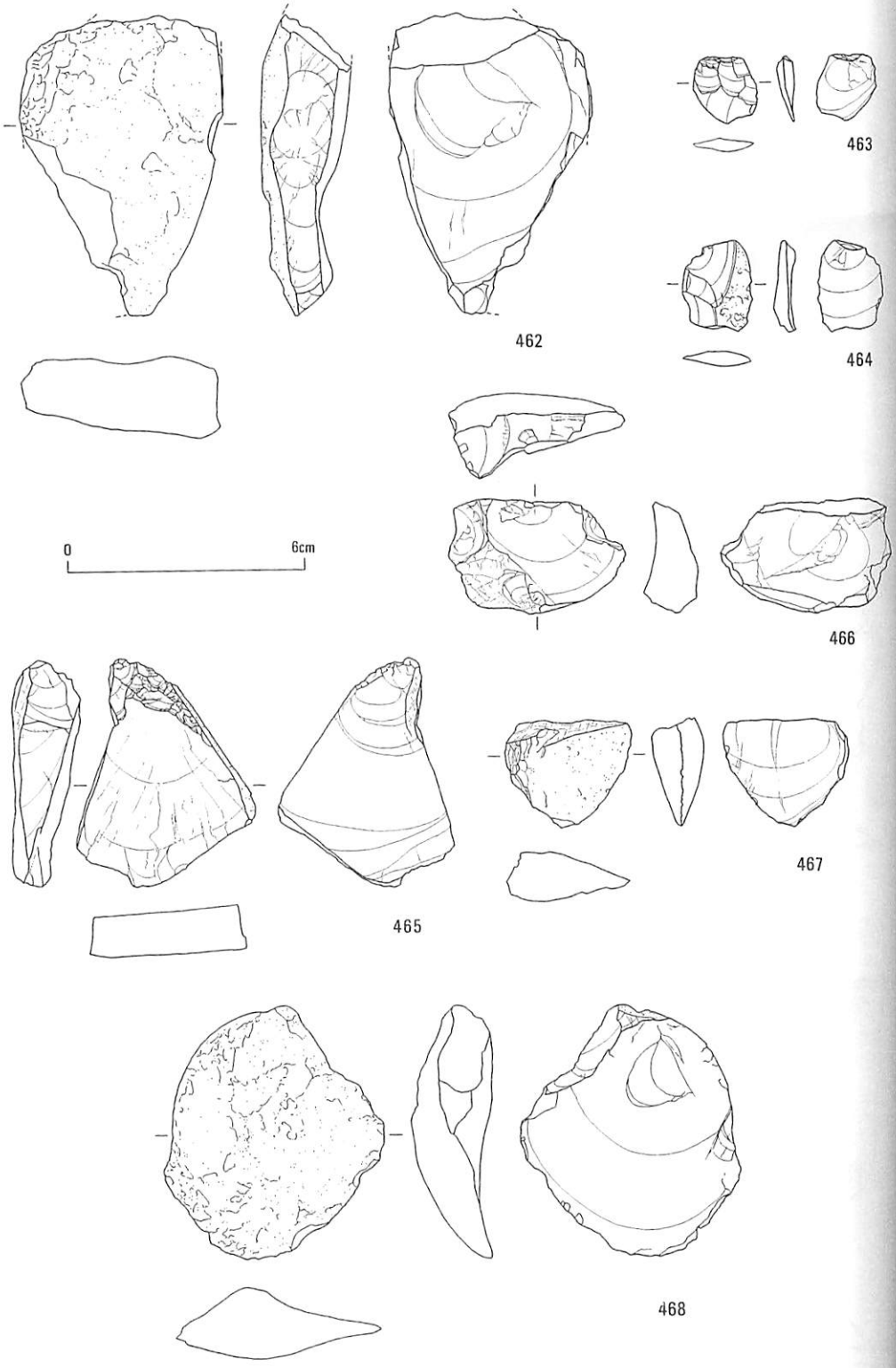

第166図　8－B地点石器実測図　4)



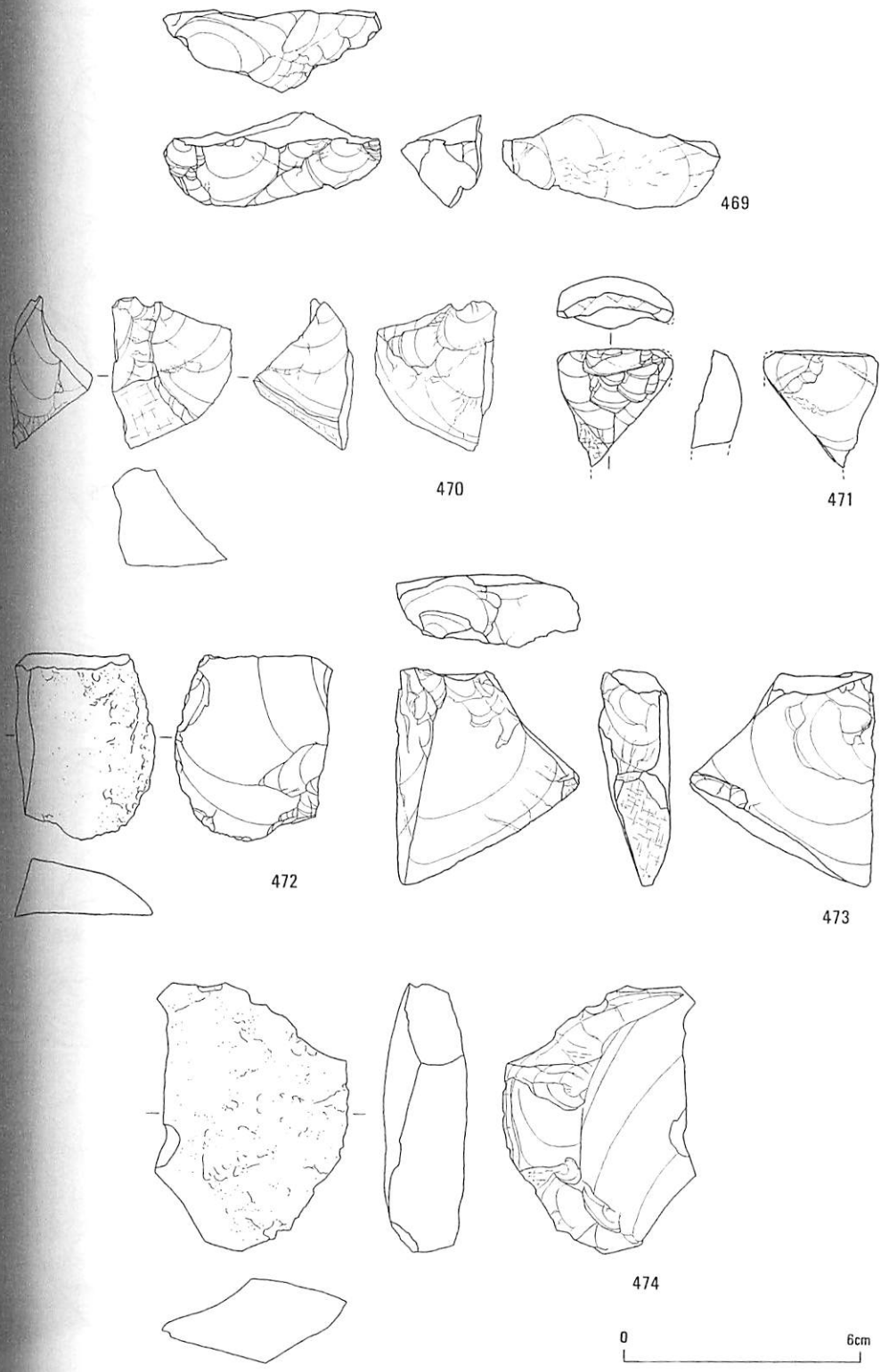

第167図　８－Ｂ地点石器実測図　5）



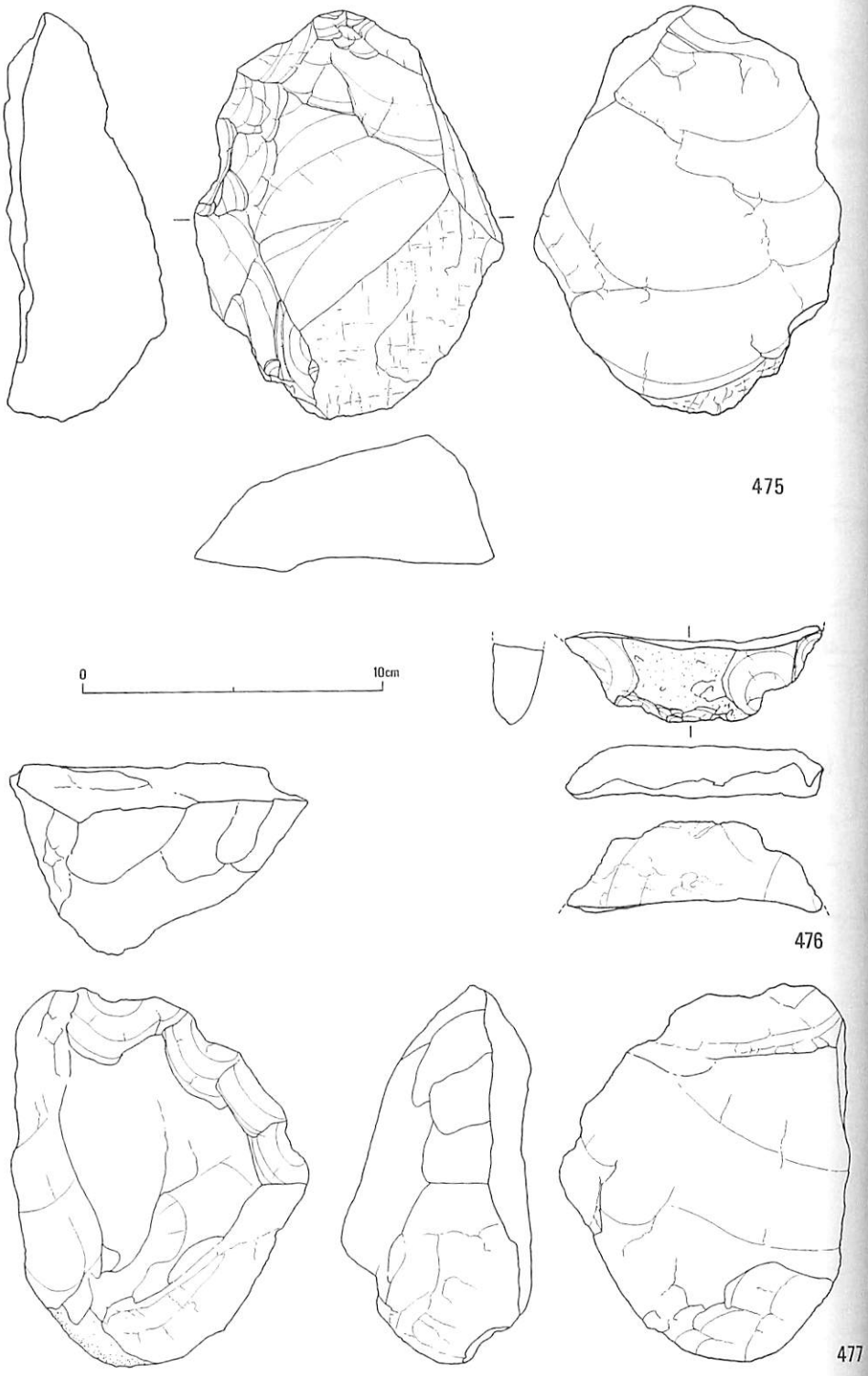

第168図　8－B地点石器実測図　6)



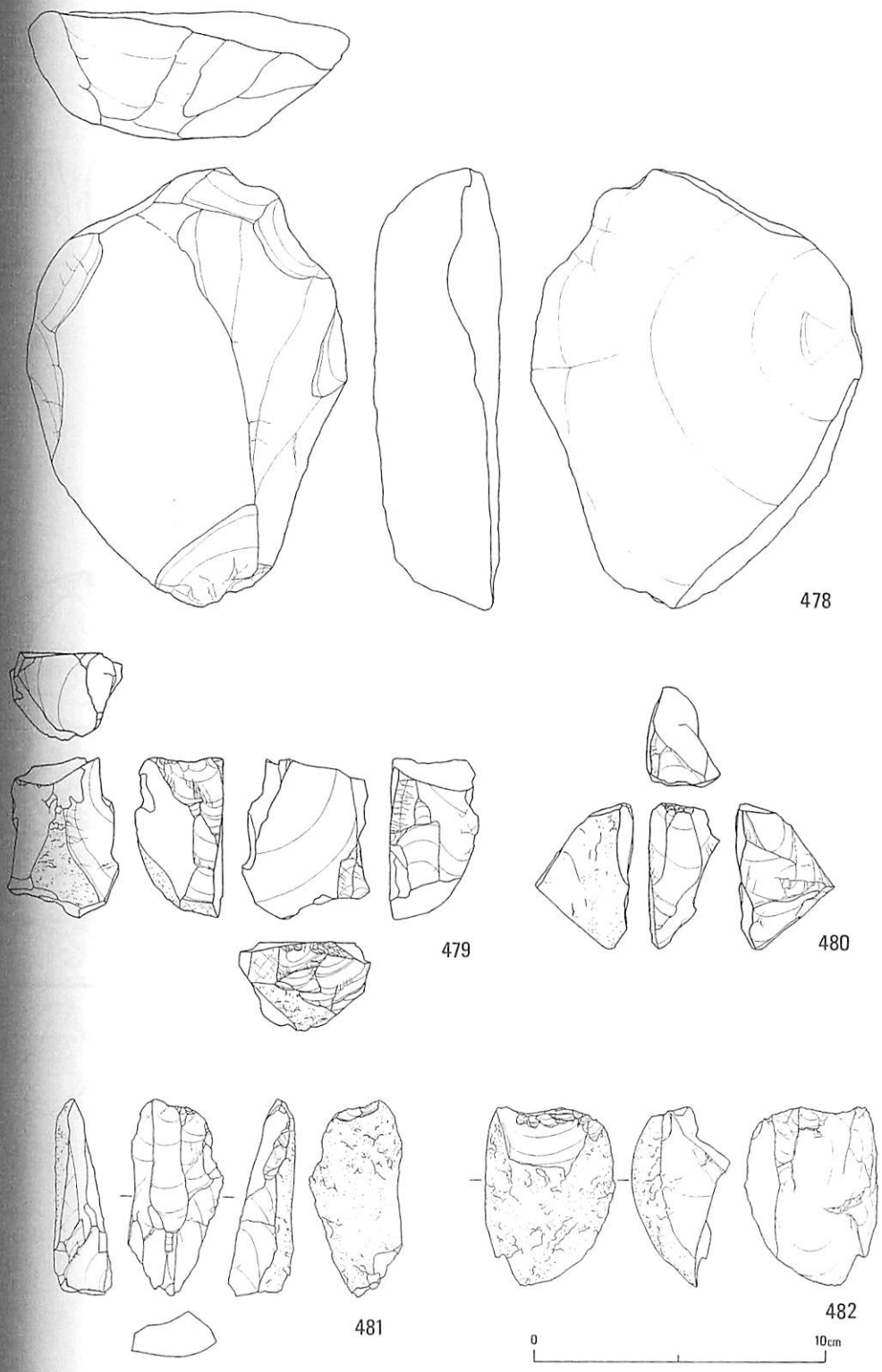

第169図　８－Ｂ地点石器実測図　7）



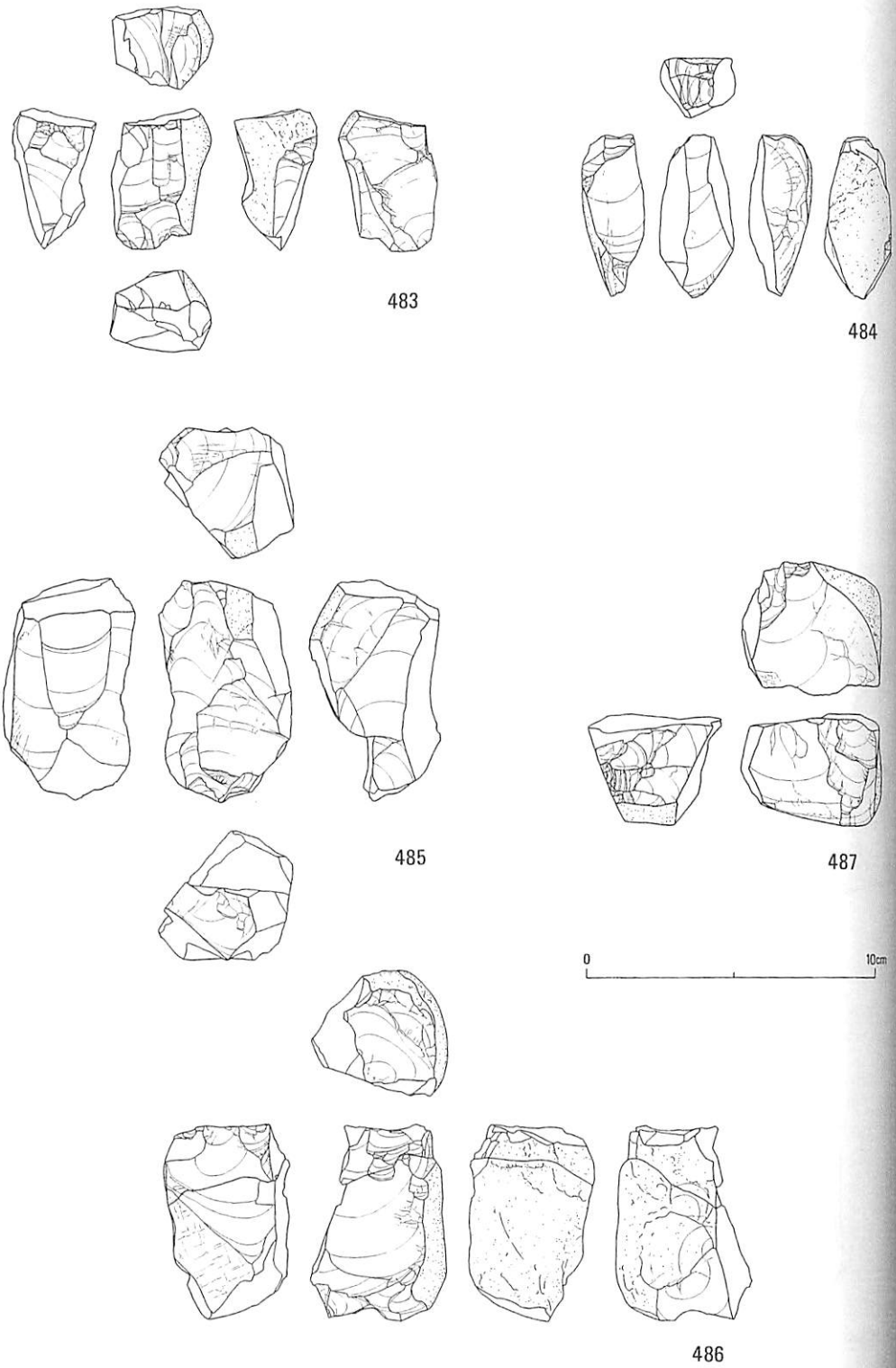

第170図　8－B地点石器実測図　8)



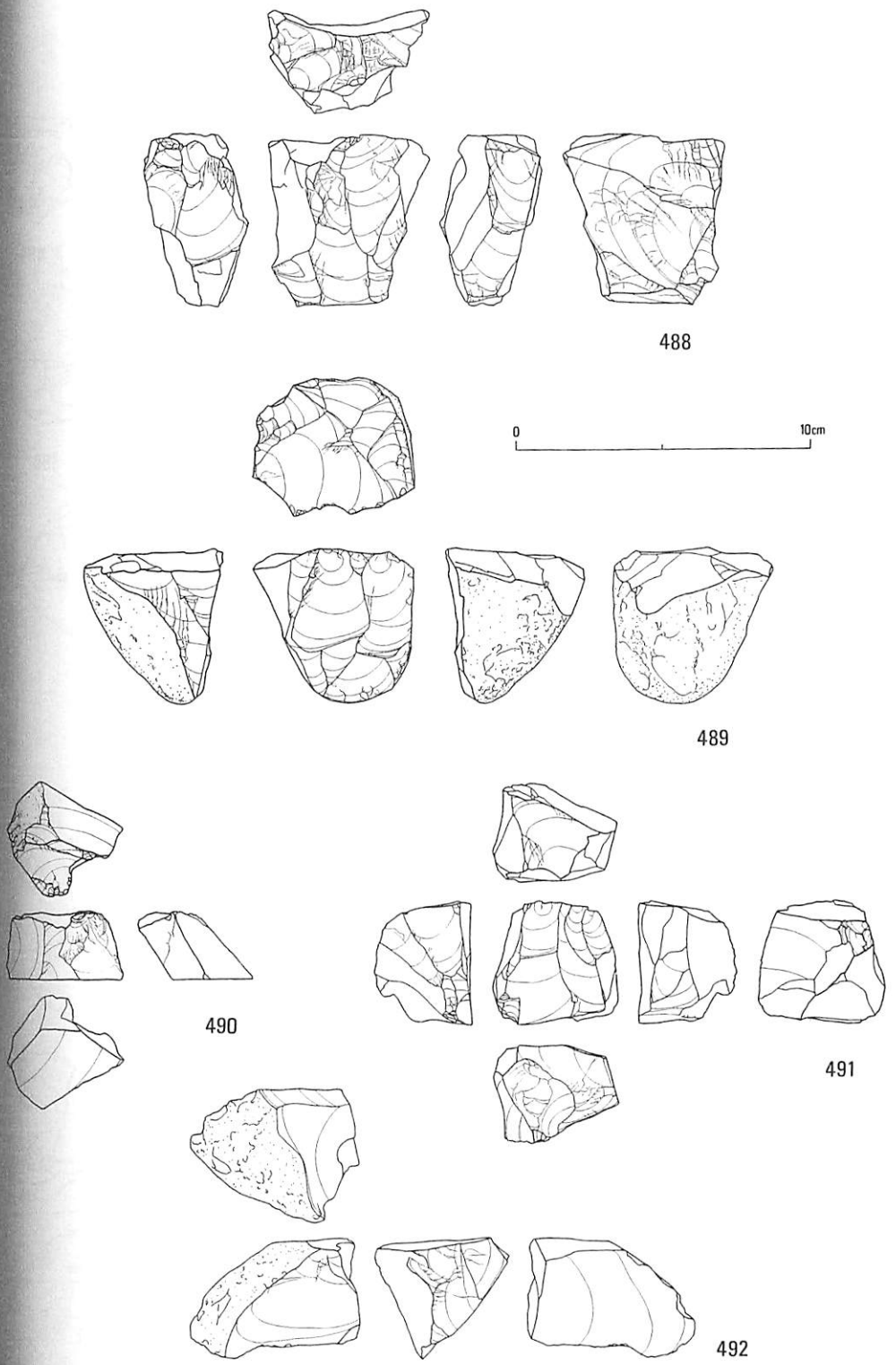

第171図　８－Ｂ地点石器実測図　9)



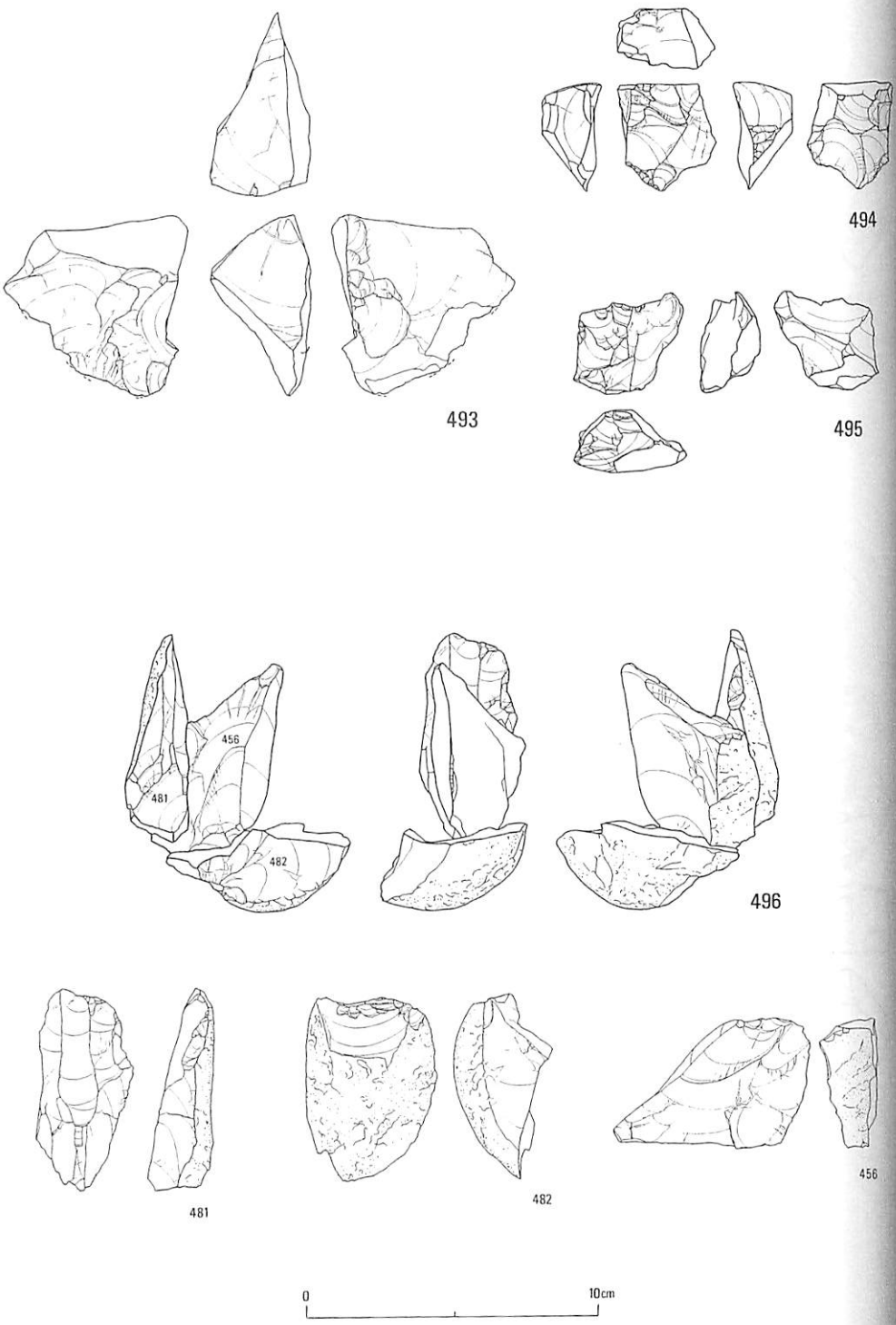

第172図　8－B地点石器実測図 10)



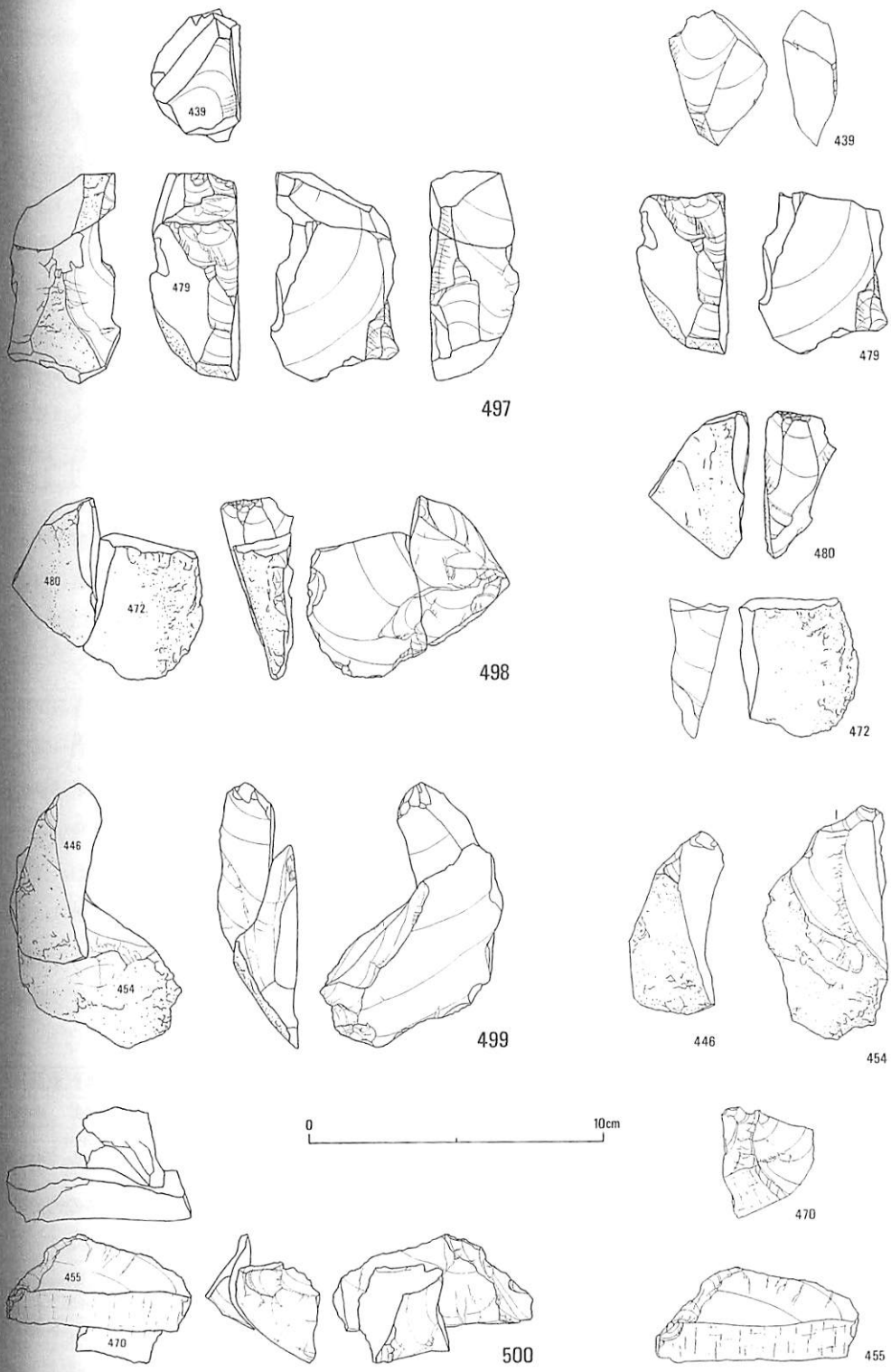

第173図　８－Ｂ地点石器実測図 11）



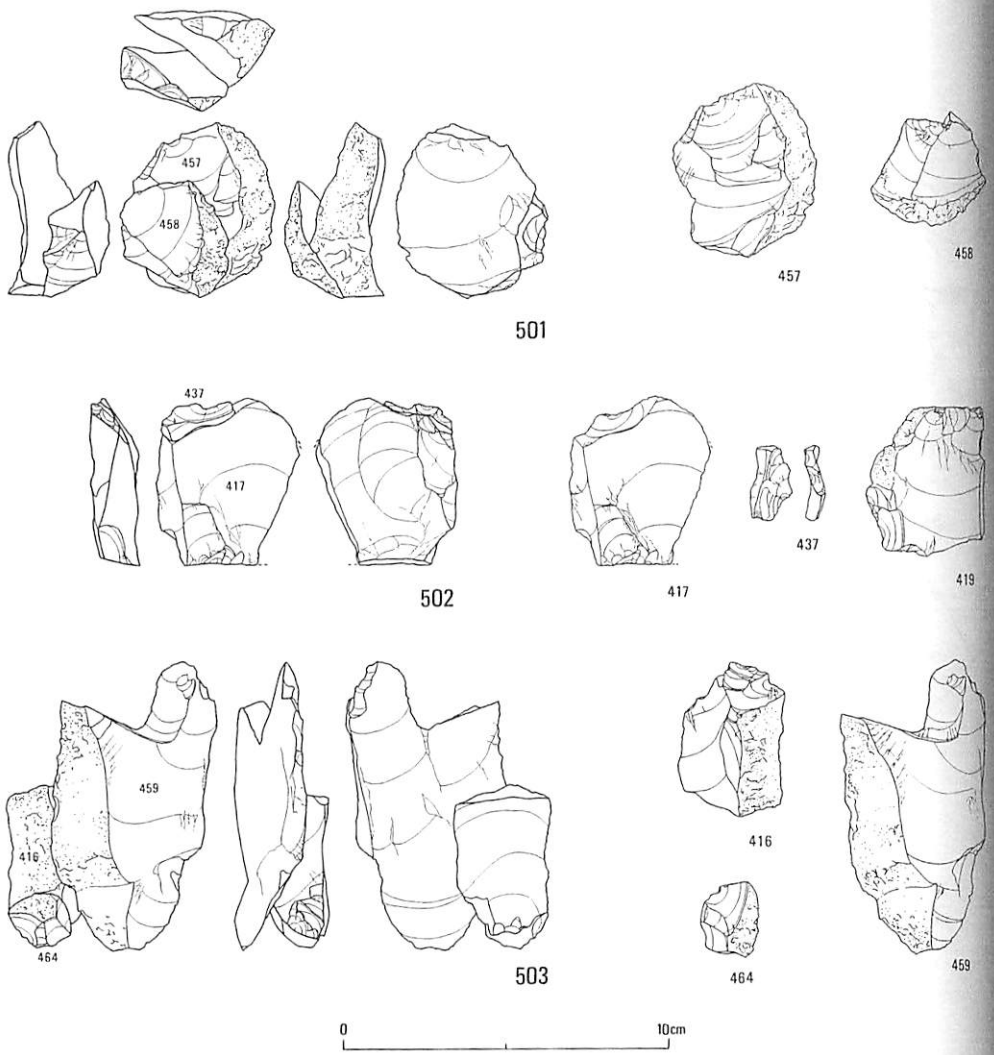

第174図　8－B地点石器実測図 12)




第175図　８－Ｂ地点石器実測図 13)




第176図　8－B地点石器実測図 14)




第177図　８－Ｂ地点石器実測図 15)

448～456)，その他不定形なものであり，不定形剥片が多い。

打面は残すものと残さないものがほぼ同じ割合で認められ，残置するもののなかで単剥離面打面が多い。

背面を構成する剥離面の方向は主剥離面に対し同一のものが多く，その他多方向，対向，同一及び直交などが認められる。また自然面を留めるものも多く，ＵＦなども含めて剥片全体の約40%を占める。

№429は背面右側に石核の素材面を広く残し，左側に主剥離面と同一方向の剥離を示す面が認められる。本地点には厚めの剥片素材でその木口面から縦長剥片を剥離する石核があるが，本例はこのような石核から剥離されたものと思われる。

Ｈ)石　　核(第172～175図)

本地点における石核はおおむね縦長剥片を目的剥片としている。

石核素材は剥片素材のもの(No.479～482・490・492～495)と礫素材のもの(No.483・485～487・489・491)とに分けられる。

打面と作業面は固定的なものが多いが，No.483のように両設打面をもつものやNo.494・495のように打面と作業面を転移させるものも存在する。作業面の範囲は石核の木口面あるいは半周程度にとどまるものが多く，全周にわたるものは稀である。

打面についてはNo.479のように打面再生剥片が接合(No.497)するものがあり，またNo.488・489には打面調整が認められるなど，打面の更新が図られていたものも多いようである。

石核の接合資料は前述の打面再生剥片が接合するものを除き，2個体認められる。No.481はNo.482(石核)およびNo.456(剥片)と接合(No.496)し，No.480はNo.472(剥片)と接合(No.498)する。これらはともに礫から得られた厚めの剥片を石核に転じており(後者では剥片をさらに半分割する)，No.456とNo.472も石核の素材として得られた可能性がある。

## 6．剥片剥離技法

8－B地点からは8例の接合資料が得られている(第9表，No.496～503)。このうち剥片剥離技法について言及できるものはNo.496～498である。

No.496は石核2点と剥片の接合例である。礫から厚めの剥片を剥離し，その剥片を石核に転じている。そのうち1点は剥片剥離の進行した縦長剥片石核である。No.497は石核と打面再生剥片の接合例である。礫を分割して得た分厚い剥片の木口面から縦長剥片を剥離し，打面再生を行った後に再び同一作業面で剥片剥離を行っている。No.498は石核と剥片の接合例である。礫を分割して得た厚めの剥片をさらに半割し，その一方を石核に転じている。剥片剥離は石核の木口面で行われ，縦長剥片を剥離している。

これらは石核素材の製作方法，あるいは用い方に相違はあるものの，おおむね同一の剥片剥離過程を示している。すなわち礫を分割して厚めの剥片を用意し，その木口面を作業面として縦長剥片を剥離する。作業の進行に伴い打面再生も行われる。打面は単設で転移はなされず，作業面も木口面に限定される。このため剥離された縦長剥片は背面に石核の素材面を残すものが多いと思われる

**第9表**　第8地区B地点接合資料・個体別資料一覧表

| | 接合資料 | | | 非接合資料 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 個体No. | 遺物番号 | 発掘区 | 出土層 | 遺物番号 | 発掘区 | 出土層 | 接合内容 |
| 1 | 4+64 | B－1+EW－1 | 1+表土 | 71 | EW－1 | 3 | 剥片2点の接合 |
| 2　a | 9+61 | B－2+EE－3 | 3+2 | 11,19 | B－2,C－2 | 3,2 | 〃 |
| b | 21+40+98 | C－2+E－3+不明 | 2+3+表採 | | | | 彫器と剥片2点(RF含む)の接合 |
| c | 53+77 | EE－2+EW－2 | 1+3 | | | | 石核と剥片の接合 |
| 3　a | 10+54 | B－2+EE－2 | 3+2 | | | | 剥片2点の接合 |
| b | 22+60+80 | C－2+EE－3+EW－3 | 2+2+3 | | | | 彫器と剥片2点の接合 |
| c | 41+58+73 | E－3+EE－3+EW－2 | 3+2+1 | | | | 石核2点と剥片の接合 |
| 4 | 52+97 | EE－2+不明 | 1+表採 | 33,34,36 | E－1 | 1,2 | 石核と打面再生剥片の接合 |
| | | | | 55,66 | EE－2,EW－1 | 3,2 | |

が，当該地区からそのような剝片は1点しか検出されていない。

この他に，礫を素材とし単設あるいは両設打面から縦長剝片を剝離する石核がある(第173・174図)。剝片剝離が石核全周にわたるものはなく，おおむね半周程度にとどまる。両設打面のもの(No.483)も，一つの打面に対応する作業面の範囲は限定されている。これらの資料は打面と作業面の切り合い関係から打面調整が行われていたことがわかり，縦長剝片剝離の進行に伴い適宜打面の調整が行われた工程が復元できる。

また素材は不明であるが，打面と作業面を転移しながら縦長あるいは幅広の剝片を剝離していた技法も存在する(No.494・495)。

8－B地点においては上記の3つの剝片剝離技法が存在し，縦長剝片の製作が主流となっている。

## 7．まとめ

8－B地点出土の102点の石器は縄文時代の遺物を除いて同一時期の所産と考えられる。平面的にはトレンチのほぼ全面から，層位的には第1層から第3層にかけて遺物が出土しているが，個体別資料・接合資料の分布から平面的にはC～EEトレンチにブロックを形成する。

出土遺物は定型的なトゥールに乏しく楔形石器・彫器・礫器・二次加工ある剝片・使用痕ある剝片が見られるにすぎない。ナイフ形石器については現物を検討できなかったことからその存在については断言できない。剝片剝離技法は縦長剝片作出を主体とするものである。

さて8－B地点出土石器群の編年的位置付けを行ってみたい。出土層位や遺物の形式的分類からの特定は困難であるが，剝片剝離技法を基に位置付けが可能である。

当該地区に特徴的な剝片剝離技法として分割礫または剝片を石核に用い，その木口面から縦長剝片を剝離する技術がある。大分県内にその類例を求めると岩戸遺跡第3次調査[2]における第6層上部出土石器群(岩戸6上石器群)が挙げられる。ここでは前述の剝片剝離技法を基盤とし，得られた縦長剝片の基部に加工を施した，素材の変形度の少ないナイフ形石器を生産している。8－B地点においてはそのようなナイフ形石器は認められないが，岩戸6上石器群との関係から当該地区の石器群はAT降灰以後のナイフ形石器文化期に比定できよう。

同様の石器群は香川県花見山遺跡[3]・岡山県鷲羽山遺跡[4]など瀬戸内地域にも確認されている。丹生遺跡の所在する大分県東部を瀬戸内海西岸とみるならば，8－B地点出土石器群は瀬戸内地域にまとまりをもつ石器群の一環と考えることもできる。しかし瀬戸内地域の層位的出土状況が劣悪であることを考えると，これらの石器群が同一時期に属するのかあるいは時間的前後関係を有するのかは断言できず，今後の類例を待って検討しなければならない。

(湯村・安部)

註

1)　『丹生3次概報』(昭和40年)。

2)　清水宗昭・高橋信武・柳田俊雄『岩戸遺跡』(大分県清川村，昭和61年)。

3)　西村尋文『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ　花見山遺跡』(高松，平成元年)。

4)　山本慶一「鷲羽山採集の石器と土器」(『倉敷考古館研究集報』)第6号所収，倉敷，昭和44年)。

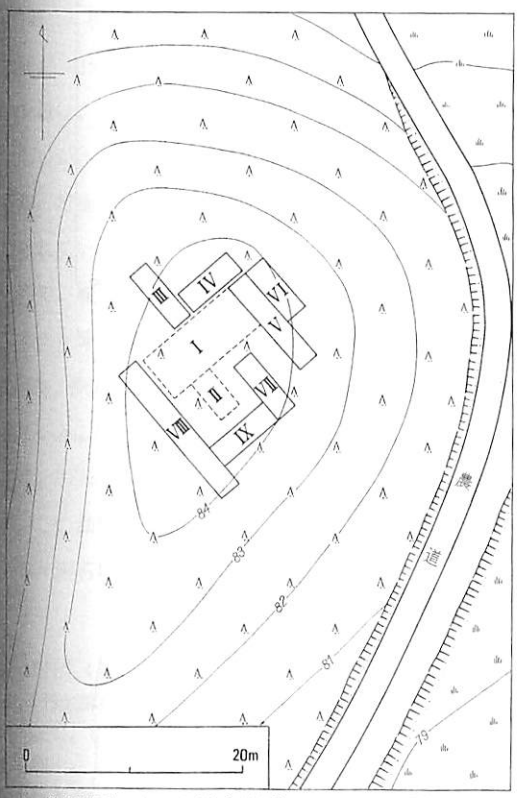
## 第20節　第９地区Ｂ地点

### １．発掘の経過

９－Ｂ地点は昭和40年10・11月に実施された第４次調査の際に三上班によって調査された[1]。ついで昭和41年９・10月，第５次調査においても江坂班によって継続調査が実施されている[2]。本地点が調査対象とされたのは，第３次調査までの調査からみて，丹生論争にかかわる古い石器は，標高約78～85mの丹生面に分布するらしいという推論を得るに至ったためである。

### ２．位置・地形・トレンチ

９－Ｂ地点は標高約83mの小独立丘陵上に位置する。産業道路がこの小丘の東裾を通っている。地籍上は字日暮に属する(第178図)。ここは雑木や灌木に覆われ，かつて開墾されたことがなく，石器の散布は知られていなかったが，かえって良好な包含層の存在が期待された。




第178図　９－Ｂ地点地形・トレンチ配置図

第４次調査では，トレンチはこの小丘の頂部に，10×４ｍのⅠトレンチ，これに直角に４×２ｍのⅡトレンチが設けられた。第５次調査では第１次調査の調査範囲を取り囲むようにⅢ(６×２ｍ)，Ⅳ(６×２ｍ)，Ⅴ(10×２ｍ)，Ⅵ(６×２ｍ)，Ⅶ(６×２ｍ)，Ⅷ(14×２ｍ)，Ⅸ(６×２ｍ)の各トレンチを設けた。

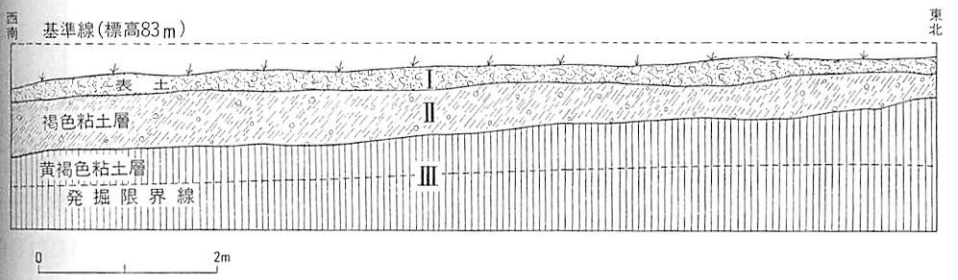
### ３．土　　層

９－Ｂ地点の土層は以下のとおりである(第179図)。

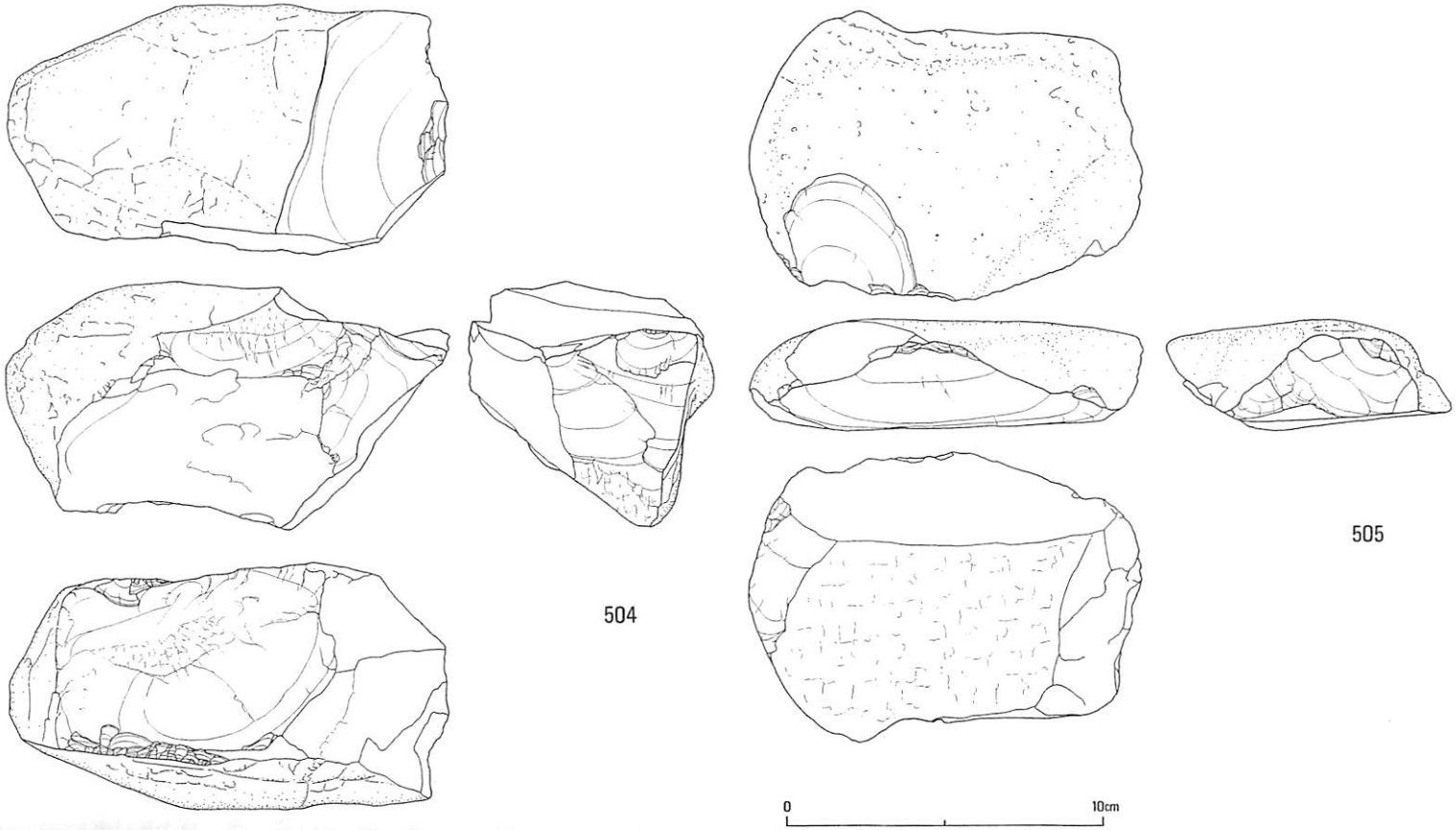
第１層　ローム質茶褐色土層(表土)。20cm。

第２層　褐色粘土層。丹生泥層上部相当。50～70cm。

第３層　黄褐色粘土層。Ⅳトレンチ Ⅰ区のみに設けられた地層観察用ピットで厚さ２ｍ以上。




第179図　９－Ｂ地点Ⅰトレンチ西壁土層断面図




第180図　9－B地点石器実測図

### 4．遺構・遺物の出土状況

第4次調査では，Ⅰトレンチ西北隅の第2層褐色粘土層中から山形刃式割器として報告された1例が，第5次調査では，Ⅵトレンチ表土層下部から，多辺式割器とされた1例が検出された。第5次調査では第2層中における石器の検出に重点がおかれたが，成果はなかった。なお，Ⅴトレンチ2区からⅥトレンチ2区にかけて，第2層褐色粘土層を30cm程掘り下げたところ，一辺が1.3mのほぼ正方形を呈する土坑が発見された[3]。壁面は赤色を呈し，底面に木炭層が認められ，覆土中に土師器1片が出土した。

一方，第4次調査で山形刃式割器を発見したことは「in situ に準ずる状態で発見するという著しい成果を得たのである[4]」と評価され，丹生遺跡群中の重要な地点である。

### 5．石　　器

A)石　　核(第180図)

No.504　山形刃式割器と報告された1例である。角柱状の亜角礫を用い，薄く広い一撃を加えて打面を設け，そこから木口に相当する部分で縦長剥片を打ち剥がしている。割器か石核かの判断は難しいが，打面の設定の仕方やそこから行われた剥片剥離作業からみて，石核との判断に傾く。なお，打面と反対側の下端には一撃による大きな剥離面があり，大きな剥片が取れていることが知られているが，この面の風化度は周囲の自然面より新鮮であるが，剥片剥離作業より進んでいるので，転石として河原にあった時に生じた裂痕ではないかと思われる。後期岩宿時代の石核と見るに支障ないであろう。

No.505　多辺式割器と報告された例である。これは，円礫が節理面から分割されたものを素材としている。この分割面を切って，自然面側から剥ぎ取られた翼状の剥離面が観察される。自然面側には，大形の剥離面が一面残されている。これによって，自礫面の描く正面観は山形を呈する。

この加撃は打面調整を捉えることも可能である。結局，円礫の形状を最大限に生かした，翼状剥片用石核と見ることができよう。本例については，すでに綿貫俊一氏による言及がある[5]。

（鈴　木）

註

1) 『丹生4次概報』(昭和41年)。
2) 『丹生綜括篇』(昭和40年)。
3) 註2)，第90図。
4) 同上。
5) 綿貫俊一「東九州における瀬戸内系人類遺物」(「旧石器考古学」25所収，京都，昭和57年)。

## 第21節　第9地区C地点

### 1．発掘の経過

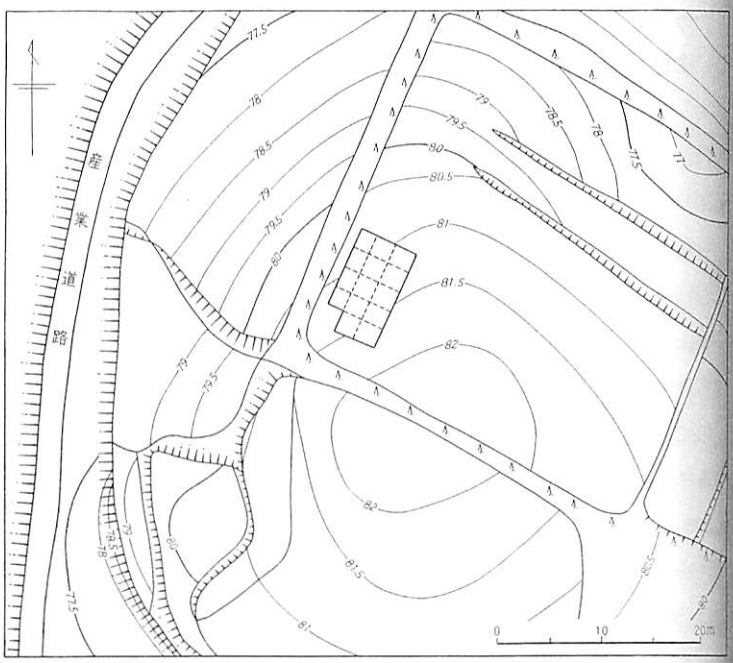
9－C地点は，昭和40年10月13日～11月2日に行われた第4次発掘調査[1]および，昭和41年9月27日～10月12日に行われた第5次発掘調査[2]において，小林班が調査している。昭和40年3月9日，中村俊一氏によって農家の北方約100mの地に掘られた電柱の埋立穴の排土において，分厚い剥片および

石核数個など中期旧石器時代を下らないと予想された石器が採取された事により重要性が認められ調査されるに至った。

## ２．位置・地形・トレンチ

第９地区は，地籍上大字丹生字清水迫，字日暮の北半部にあたる地域である。Ⅸ－Ｃ地点は，第４次調査トレンチは字日暮に属し，第１地区Ｃ地点に存する貯蔵槽の北約100ｍの麦畑を中心にしている。設定されたトレンチは，２×８ｍの試掘トレンチである。位置などの詳細は，不明である。

第５次調査では，調査目標をミンデル・リス間氷期に相当する小原台砂礫層及び丹生泥層中における石器の有無と定めたため，表土直下にこれらの層が出現すると予想された標高80ｍの丘陵部の麦畑に，２×10ｍのトレンチを設けた。その後，２×10ｍ，1.5×８ｍと順次トレンチを拡張した。地区割りは，２×10トレンチ２本が，１区画２×２ｍ，1.5×８トレンチが，1.5×２ｍである。トレンチ名・区名は詳細が不明である(第181図)。



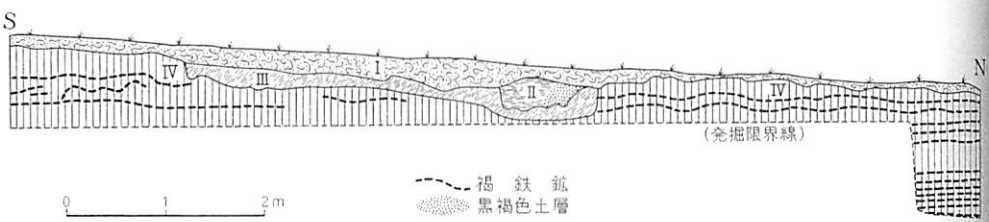

第181図　９－Ｃ地点地形・トレンチ配置図

## ３．土　　層

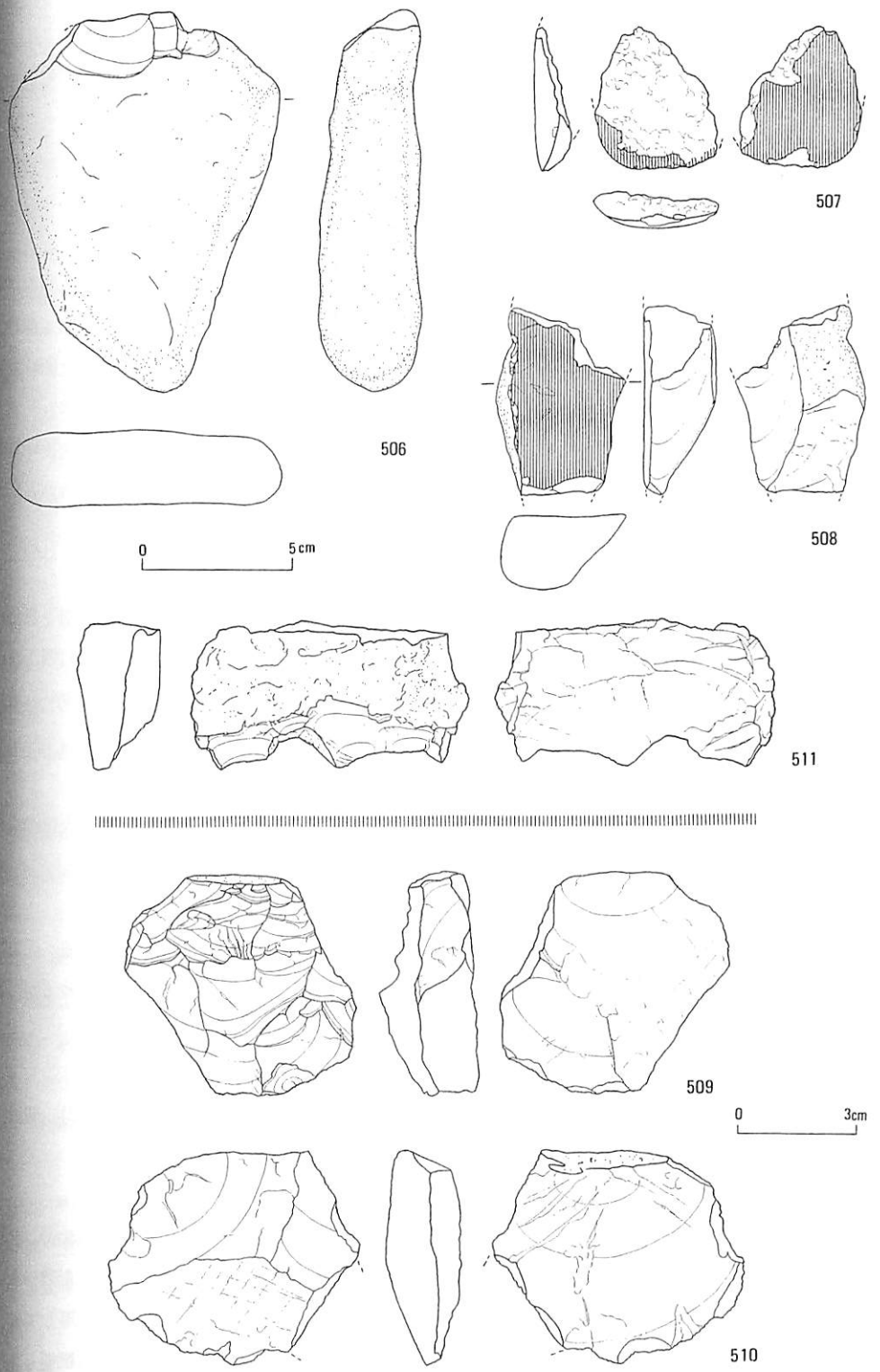
９－Ｃ地点の土層は，以下の４層に分けることができる(第182図)。

第１層　黒褐色土層(表土層)。

第２層　暗黒褐色土層(局部的に混入している)。




第182図　９－Ｃ地点Ａトレンチ西壁土層断面図




第183図　9－C地点石器実測図

第３層　茶褐色粘土層。丹生泥層が高所より流出して堆積し，これが風化したもの。

第４層　灰白色粘土層。丹生泥層。多量の褐鉄鉱を含む。

以上の結果から，当初の目標であった小原台砂礫層は見あたらず，流失の後に第３層が堆積したと考えられる。

### ４．遺物の出土状況

第４次調査は，表土がブルドーザーによる攪乱，その下は粘土層で，遺物の出土見込がなく，調査は早々と打ち切られた。したがってここでは報告対象外とする。

第５次調査では，総数63点の石器が出土した。縄文と考えられる土器片も共に出土している。第２層中からも石器は数点出土しており，その中には縄文早期と思われるサヌカイト製の石鏃も混じった状態で発見された。第３層以下の粘土層にも何点かの石器が含まれており，中には縄文的特徴を持つものも含まれている。これは，第１・２層がもとの岩宿時代の包含層流失後再堆積された層であるため攪拌を受ける事となり，出土遺物の層位的秩序は失われたと考えられる。分布状況を見て行くと，遺物が１ケ所に集中しているといった状態が見られない。また出土量も少ない事から，この地点は生活の痕跡の薄い場所と言えるだろう。

### ５．石　　器

９－Ｃ地点からは，総数69点の石器が出土している。そのうち５点は，縄文時代の石器と思われるため報告は除外した。残り64点が岩宿時代の可能性がある遺物である。その内訳は，打器１点，石斧１点，砥石１点，剥片７点，石核１点，その他53点である。その他とは，所在不明資料，最終的に石器と認められなかった大小の粗粒の礫片などである。

Ａ)打　　器(第183図)

形状は三角形を呈し，厚みのある扁平な礫を素材にした打器である(No.506)。下端中央付近に裏側から表面方向へ，鋭角の刃部加工が行われている。重量は550ｇである。

Ｂ)磨製石斧(第183図)

刃部の断片である(No.507)。片刃の石斧で，両面とも非常に丁寧な磨きがなされている。刃部は稜が鋭くはっきりしており，刃縁はほぼ直線である。刃縁の中央部付近には潰れが見られるが，これは使用時に生じた損傷であろう。

Ｃ)砥　　石(第183図)

砥面は，全体が平均的に平坦で滑らかな平砥石である。かなり擦り減っている(No.508)。側面，裏面の一部に自然面を残す。

Ｄ)剥　　片(第183図)

７点出土している。１例目は，長幅比のほぼ等しい五角形の厚手の幅広剥片である(No.509)。自然面と剥離面から成る山形の大きい打面を留めている背面側は，概ね打面付近より求心的に剥離が入っている。２例目も１例目と同様で厚手幅広の剥片である(No.510)。打面は，自然面を利用しており大きい。背面側は，下部に見られる節理面と求心的な剥離２枚により成っている。共に類似した技法により得られたやや大型の剥片である。残る５点の剥片は，表皮剥片などの不定形なものである。

E)石　　核(第183図)

円礫を節理面で分割し，それによって生じた盤状の剥片を素材にしている(No.511)。上部は欠損している。剥片剥離は，表面から裏面方向へ3回程度行われ，横長の貝殻状剥片が取られている。

なお所在不明の中には，第5次調査において出土した石器の約40点が含まれているが，結局現物を確認するに至らなかった。これらに関しては，旧報告書[3]を参照されたい。

以上のように当地点における資料は限られているけれども，少なくとも石核と剥片から見て2種類の剥片剥離技法の存在は明らかである。

(田鶴谷)

註
1) 『丹生4次概報』(昭和41年)。
2) 『丹生綜括編)』(昭和43年)。
3) 同上，第94，95図参照。

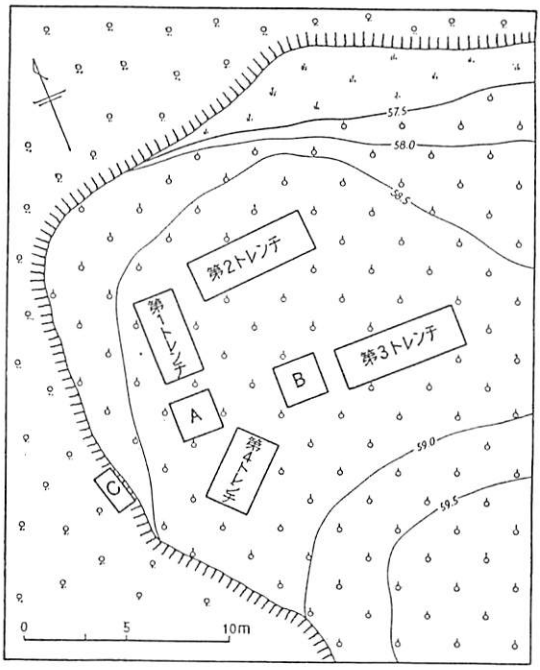
## 第22節　第10地区A地点

### 1．発掘の経過

10－A地点は，昭和39年10月の第3次調査[1]，昭和40年10・11月の第4次調査[2]において，ともに早川班によって発掘された。この地は当時蜜柑畑であったが，昭和39年12月，中村俊一氏によって，畑の脇の切り通しの崖面礫層中から“斜刃割器”が抜き取られた(図版Ⅱ下段)。この発見を重視した調査委員会は，早速ここに調査区を設けたのであった。

### 2．位置・地形・トレンチ

本地点は，南北に連なる標高70m程の小丘列から東に伸びる，緩やかな傾斜面(標高60～70m)の東北端の蜜柑畑に位置する。標高58m。この先は谷となり溜池が設けられている。地籍上は大字丹生字惣本に属する。トレンチは，石器の出土場所に近接して，第1～第4トレンチまでを設定し，延べ40m²を発掘した(第184図)。



第184図　10－A地点地形・トレンチ配置図

### 3．土　　層

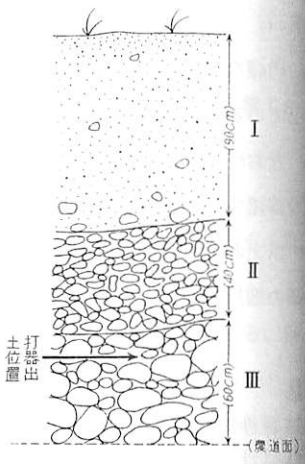
トレンチ内では見るべき遺物の発見がなかったので，上記の石器を抜き取った崖面の観察所見を記す。土層は以下のとおりである(第185図)。

第1層　軟質茶褐色ローム。わずかに砂礫を含む。90cm。

第３層　淡褐色礫層。第２層より大きい結晶片岩，石英，凝灰岩，フォルンフェルス等から成る風化の著しい礫層である。60cm以上。志村砂礫層相当。“斜刃割器”出土層。

4．遺物の出土状況

発掘では，問題の地層から石器を得ることはできなかったが，中村氏が抜き取った石器は地表下140cm，すなわち第３層の上部においてであった。礫層はバンとした砂礫層で新しい時代の石器が崖面にはまり込んだ可能性は殆ど考えられないという地質班の判断が与えられている。出土状態に疑問をさしはさむ余地のないものである。



第185図　10－Ａ地点
打器採集崖面実測図

5．石　　器

発掘による成果はなかった。唯一の資料は崖面採集の例だけである(図版Ⅷ下段)。概報の記するところによれば，やや扁平な円礫の一側縁に数回の打撃を与え，急角度の斜刃を作り出した安山岩製斜刃割器であり，長さ12.7cm，刃部の剝離面，基部の礫面とも風化が顕著であり，稜線が鈍くなっているという。

我々は再報告にあたり，本資料の再検討の機会を得ることができなかったので，既刊の報文に付け加えるべき何ものもない。

（鈴　木）

註
1)『丹生３次概報』(昭和40年)。
2)『丹生４次概報』(昭和41年)。

## 第23節　第11地区Ｂ地点

1．発掘の経過

11－Ｂ地点は昭和39年10月４日～10月22日に行われた第３次発掘調査[1]において藤原班が，昭和40年10月13日～11月２日に行われた第４次発掘調査[2]において小林班が調査した。この地点は，かつて中村俊一氏によって，黒耀石製の細石刃が発見されていたことから調査されるに至った。

2．位置・地形・トレンチ

第11地区は大字丹川字原山に所在し，その西側を南北に走る丘陵の東麓が緩傾斜して形成する平地であり，もとは草競馬が行われた土地である。Ｂ地点は字原山東部の舌状丘陵の中央部に位置し，11－Ａ地点より北東へ直線距離にして200mの標高60m前後の台地上にある。第３次調査では，農道の路面にほぼ東西方向の２×1.5mのトレンチを設定した。第４次調査では，１m四方の試掘坑を３ヶ所設けた。その後２×８mのトレンチ(１本はＬ状)を２本設定した。

3．土　　層

第３次調査のトレンチは，３層に区別される。

第1層　表土。地表～10cm。

第2層　茶褐色土層。10cm～40cm。

第3層　黄褐色粘質土層。40cm～(110cm)。

第4次調査試掘溝の土層は，三ヶ所ともだいたい共通している。

第1層　耕土。

第2層　硬質黄褐色土層。小量であるが小石を含む。

第3層　硬質暗黄褐色土層。褐鉄鉱を含む。

第4層　黄褐色砂質土層。結晶岩片を含む。

## 4．遺物の出土状況

遺物は，無文土器多数，尖頭器・石鏃・黒耀石の剝片多数，微細な剝片が出土した。しかし，黒耀石はすべて姫島産とみなされる灰色不透明な種類であるため，今回は考察の対象にしない。岩宿時代の遺物と認められるものはわずかに数点である。

層位的検討は，現在のところ不可能であり，結局典型的な岩宿時代の石器が周辺に相当散布していたにもかかわらず，包含層の所在は確認できなかった。

## 5．石　　器

11－B地点からは，総数115点の石器が出土した。その内15点が岩宿時代のものと考えられる。その内訳は，楔形石器1点，UF2点，剝片12点である。

A)楔形石器(第186図)

平面形は台形で，縦断面はレンズ状を呈する(No.512)。左側縁にある自然面を打面にして剝がされた，やや縦長の剝片を素材にする。表(背面)側は，素材の剝離面をほぼそのまま留めている。楔形石器に伴う剝離は，上端下端共に中央よりやや右に若干見られる。裏(腹面)側は，上下両端から，楔形石器に特徴的なスライスしたような剝離痕が全体的に見られる。

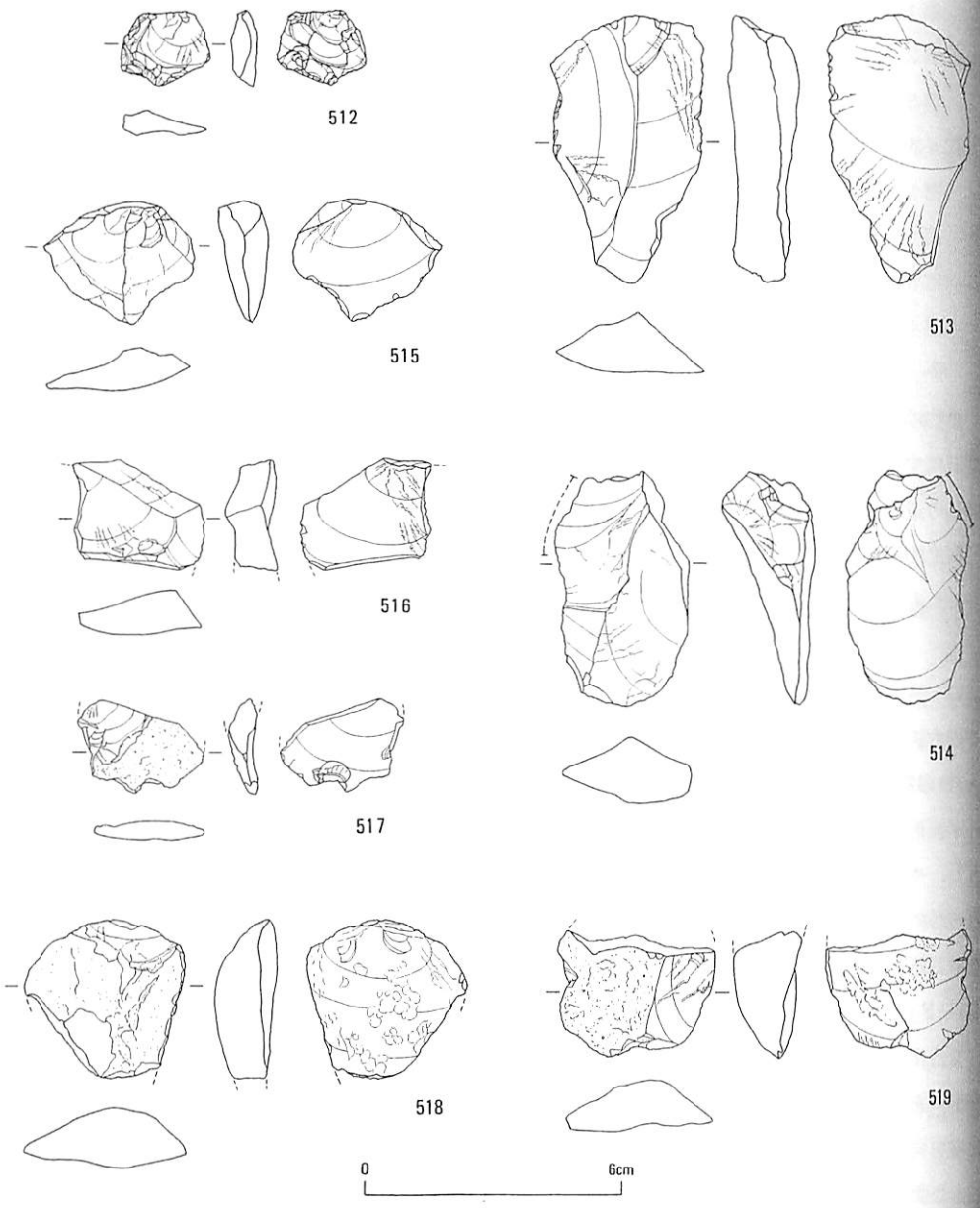
B)UF(第186図)

2点出土している。1例目は全体に厚みがある縦長剝片である(No.513)。打面は平坦で大きく三角形である。背面は中央の稜を境にして3面から成る。剝離方向は右面が長軸にほぼ平行で，左面は横方向から入っている。左面は山形を呈し，左側縁からの水平方向の剝離が見られる事から，右面を底面とする横剝ぎの石核であったものが，後に縦に剝離されたとも考えられる。使用痕は，右側縁全体に見られる。2例目も三角形で大きな打面を持ち，打瘤部の突出した厚い縦長剝片である(No.514)。背面右側の剝離方向はほぼ水平方向より入っており，左側剝離方向は，長軸に平行している。細かく連続的な使用痕が，左側縁上部に見られる。

C)剝　　片(第186図)

12点出土している。長幅比の等しい剝片が2例ある。1例目は，山形の広い打面を持つ剝片である(No.515)。打瘤部が突出している。背面の剝離は，ほぼ打面付近から下端へ向けて行われている。2例目は，幅広い打面と突出した打瘤を持つ厚手幅広の剝片である(No.516)。

背面に大きく表皮を残す表皮剝片が5点出土している。その内打面を有するものが1例あり(No.




第186図　11－Ｂ地点石器実測図

518)，残りは破片である(No.517・519)。これらの他に不定形剝片が５点ある。

（田鶴谷）

註

1)　『丹生３次概報』(昭和40年)。

2)　『丹生４次概報』(昭和41年)。

## 第24節　第12地区Ａ地点

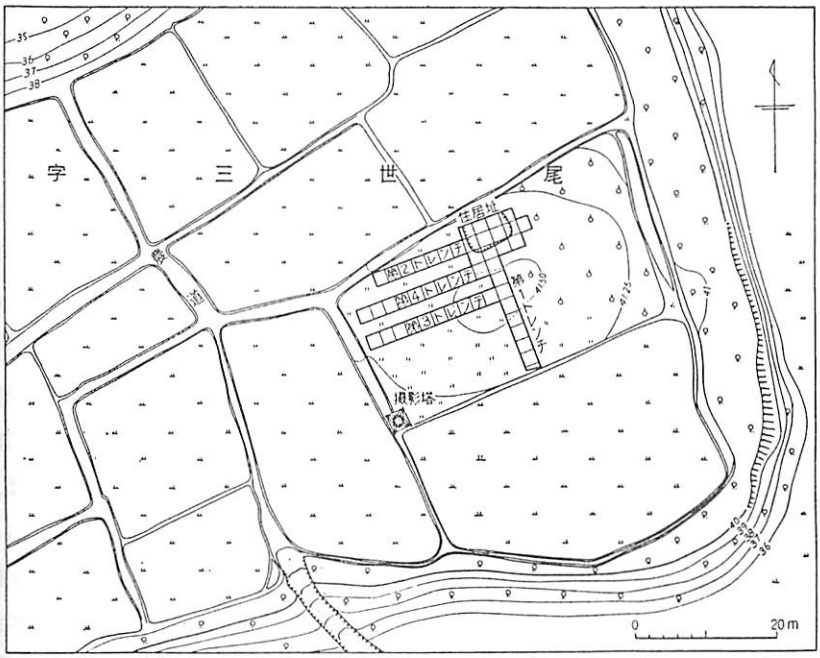
### 1．発掘の経過

12－Ａ地点は，第３次概報において＜三世尾遺跡＞と仮称されていた地点[1]で，中村俊一氏によってサヌカイト・黒耀石製の石器が発見された。第４次発掘調査(昭和40年10月13日～11月２日)において藤原班が担当し調査された[2]。

### 2．位置・地形・トレンチ

12－Ａ地点は地籍上，大字丹川字三世尾に属す。野間部落の東北方にあたる東の沖積地に突出した舌状台地に存在し，幅約100m，標高約40mの舌端部に位置する。台地の西北方は，比較的緩い傾斜をし，また東北及び東南は，かなりの急傾斜をもつ眺めのよい地形である(第187図)。

トレンチは合計４本設定された。第１トレンチは，ほぼ南北方向に２×23.5m。北から２ｍ毎にａ区～ｌ区とした。ただしｌ区のみ1.5mである。第２トレンチは，第１トレンチに直交し，第１トレンチｂ区の東に16m西に６ｍの位置に設けられた。第１トレンチｂ区より，東から西へ２ｍ毎にａ～ｈ区，また第１トレンチｂ区より西から東へ２ｍ毎にｉ～ｋ区とした。第３トレンチは第１トレンチｆ区に直交し西へ20mのトレンチである。東から２ｍ毎にａ～ｊ区とした。第４トレンチは第１トレンチに直交し，ｄ区より西へ20mのトレンチである。地区割りは，東からａ～ｊ区である。その後住居跡らしい遺構が検出されたため第１トレンチと第２トレンチの周辺部を拡張した(第189図)。




第187図　12－Ａ地点地形・トレンチ配置図

## 3．土　層

12－A地点の層位は，層の厚薄があるが，ほぼ共通で5層に分かれる(第188図)。

第1層　表土(耕作土)。有機物を含む15～20cmの黒色耕土層。

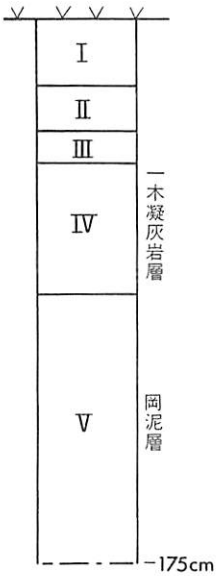
第2層　少量のクサレ礫が混入する粘質黒褐色土層。10～15cm。

第3層　緊緻な茶褐色土層。10cm。

第4層　小礫が混入する黄褐色土層。約35cm～40cm。凝灰岩層と見られる。

第5層　中礫の結晶片岩を多量に含む黄色土層。厚さは数mに及ぶ。岡泥層とみられる。

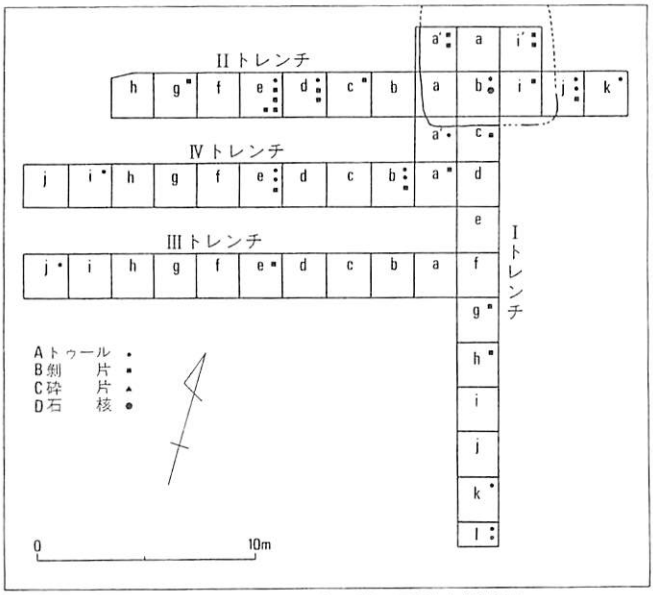
地質班日高稔氏によって，第4層は一木凝灰岩層，第5層は岡泥層と判断された。これは城原層にあたる。




第188図　12－A地点第1トレンチ1区試掘溝柱状摸式図

## 4．遺構・遺物の出土状況

遺物は，第1～3層中において出土した。各層とも出土遺物はほぼ共通しており，破片・剝片・石核・石鏃・押型文土器片・土師器片・現代の陶器片などが混在している。ただし，第3層へ移行すると石器類は漸次減少し，土師器片の出土が増加する傾向にある。なお，第1トレンチ直交部において，土師器を伴う大和(古墳)時代の住居址が発見された。この遺構は第3層に壁を掘り込み，生活面を第4層上部に設けたと考えられる。遺構中の覆土は第2層にあたり，土師器の破片や細片が多量に採取された。第3層の土師器片の増加とは直接関連は認められない。第4・5層には，遺物は包含されていない。12－A地点で発見された岩宿時代の石器は，本来の包含層の再堆積や後代の攪乱された層に存在していたと考えられる。平面分布は，岩宿時代に限って考えれば，第1・2トレンチ直交部付近の微高地に集中部分が見られる。しかし，出土遺物全体を併せ考えると，トレンチ付近一帯に散在した状態で存在していたと思われる。




第189図　12－A地点石器平面分布概念図

## 5．石　器

12—A地点からは，総数932点の石器が出土した。その内縄文的要素を持つ遺物や，性格を読み取ることが困難な破片などは観察対象外とする。岩宿時代

の所産と考えられる遺物は57点である。この内訳は，ナイフ形石器2点，三稜尖頭器1点，削器1点，加工痕ある剝片2点，使用痕ある剝片17点，剝片32点，石核2点である(第10表)。

A)ナイフ形石器(第190図)

No.520は，縦長剝片を素材にしていると考えられる。素材の縁辺を利用した刃部は，緩く湾曲している。先端部は尖っている。右側縁全体と左側縁下半分にブランティング加工が施された二側縁加工ナイフである。右側縁のブランティングは，腹面側から背面側に向けて腹面に対しほぼ90°の角度で行われている。左側縁は，打面を完全に除去する形で斜めにブランティング加工されている。剝離方向は，背面側から腹面側に向けてほぼ90°の角度で施されている。腹面側にはバルバスカーが残る。刃部全体に細かい使用痕が見られる。No.521は，厚い打面を留め，バルバスカーが顕著に残る厚手の縦長剝片を素材

第10表　第12地区A地点出土石器一覧表

| 遺物番号 | 類別 | 出土層 | 発掘区 | レベル(cm) | 石材 | 挿図No. |
|---|---|---|---|---|---|---|
| XⅡA－44 | D —— | —— | Ⅰ－b | －38 | 珪 | 539 |
| 46 | A Kn | —— | Ⅰ－b | －34 | 流 | 520 |
| 68 | A UF | 表土 | Ⅰ－e | —— | 流 | |
| 96 | A RF | 表土 | Ⅰ－e | －10～20 | 珪 | 525 |
| 99 | A UF | 表土 | Ⅱ－d | 0～－15 | 流 | |
| 110 | B —— | —— | Ⅰ－h | －17～30 | 流 | 536 |
| 183 | B —— | —— | Ⅰ－g | －10～20 | 流 | |
| 212 | A UF | —— | Ⅰ－k | －30まで | 流 | |
| 216 | A UF | —— | Ⅰ－t | －20～30 | 流 | 530 |
| 254 | B —— | —— | Ⅱ－c | －20～30 | 流 | |
| 265 | B —— | —— | Ⅱ－t | ～－7 | 流 | |
| 271 | B —— | —— | Ⅱ－d | ～－15 | 流 | |
| 275 | B —— | —— | Ⅱ－d | ～－15 | 流 | |
| 281 | B —— | —— | Ⅱ－e | ～－10 | 流 | |
| 283 | B —— | —— | Ⅱ－e | ～－10 | 流 | |
| 302 | B —— | —— | Ⅱ－e | －15 | 安 | |
| 303 | B —— | —— | Ⅱ－e | －15 | 流 | |
| 312 | A RF | —— | Ⅱ－b<br>Ⅱ－g | －25<br>－10 | 流 | 524 |
| 315 | B —— | —— | Ⅱ－b<br>Ⅱ－g | －25<br>－10 | 流 | |
| 342 | A UF | —— | Ⅳ－a′ | —— | 流 | |
| 345 | B —— | —— | Ⅰ－c | —— | 流 | 537 |
| 353 | A Sc | —— | Ⅲ－j | －17 | 流 | 523 |
| 359 | A UF | —— | 住居址南西部 | —— | 流 | 532 |
| 387 | A 三稜尖頭器 | —— | —— | —— | 流 | 522 |
| 388 | A UF | —— | —— | —— | 流 | 526 |
| 395 | A UF | —— | Ⅱ－j | －10 | 流 | 529 |
| 396 | A UF | —— | Ⅱ－j | －10 | 流 | |
| 414 | B —— | —— | Ⅱ－i | －20～－30 | 流 | |
| 429 | B —— | —— | Ⅱ－d | －37 | 安 | |
| 434 | B —— | —— | Ⅱ－e | －25 | 流 | |
| 439 | B —— | —— | Ⅱ－t～f | －20 | 流 | 538 |
| 485 | B —— | —— | Ⅱ－g | －25 | 流 | 534 |
| 487 | B —— | —— | Ⅱ－a′ | －15 | 流 | |
| 500 | B —— | —— | Ⅱ－i′ | －30 | 安 | |
| 502 | B —— | —— | Ⅱ－i′ | －30 | 流 | |
| 536 | B —— | —— | Ⅱ－j | －25 | 流 | |
| 596 | B —— | 耕土 | Ⅱ－a′ | —— | 安 | |
| 606 | A UF | —— | Ⅱ－k | －35 | 流 | |
| 619 | B —— | 耕土 | Ⅲ－e | —— | 流 | |
| 699 | B —— | —— | Ⅳ－e | －17 | 流 | |
| 700 | A UF | —— | Ⅳ－e | －17 | 流 | |
| 702 | A UF | —— | Ⅳ－e | －17 | 流 | |
| 740 | A UF | —— | Ⅳ－i | －23 | 流 | 533 |
| 768 | B —— | —— | Ⅳ－a | －25 | 流 | |
| 790 | A UF | —— | Ⅳ－b | －39 | 流 | 531 |
| 795 | B —— | —— | Ⅳ－b | －39 | 流 | |
| 800 | B —— | —— | Ⅳ－b | －39 | 流 | |
| 833 | B —— | —— | 住居址東南部9件 | —— | 流 | |
| 835 | B —— | —— | 住居址南西部9件 | —— | 流 | |
| 862 | B —— | —— | 住居址北西部2件 | —— | 流 | |
| 882 | A Kn | —— | 住居址南西部4件 | —— | 安 | 521 |
| 886 | B —— | —— | 〃 | —— | 流 | |
| 888 | B —— | —— | 〃 | —— | 流 | |
| 890 | D —— | —— | 〃 | —— | 流 | 540 |
| 891 | A UF | —— | 住居址北西部4件 | —— | 流 | 528 |
| 902 | A UF | —— | 〃 | —— | 流 | 527 |
| 905 | B —— | —— | 住居址外 | —— | 流 | 535 |

にしている。先端部は欠損している。基部左側縁にのみブランティング加工が見られる。加工は比較的丁寧に施されている。加工方向は腹面から背面に向けてである。加工が最小限にとどめられた基部加工ナイフである。両側縁に連続的な使用痕が見られる。

B)三稜尖頭器(第190図)

分厚い縦長剥片を素材にしている(No.522)。打面・バルバスカーが顕著に残り，上部は欠損している。断面は三角形を呈す。2次調整は3面すべてに施されているが，腹面側は横方向からの平坦な剥離が数ヶ所見られるのみで，素材面を大きく残す。背面は両側縁から中央へ向けて急傾斜の剥離が，全体的に施されている。背面基部には打面に接した細かい剥離が見られるが，これらは剥片剥離以前のものと考えられる。

C)削　　器(第190図)

薄い縦長剥片を素材にしている(No.523)。刃部を除く3縁辺は欠損しており全体像の把握は難しい。2次調整は，背面と腹面の両面から連続的に加工されている。

D)加工痕ある剥片(第190図)

No.524は，自然面を打面にした縦長剥片を素材にしている。背面下部には節理面が見られる。2次加工は左側縁下半部に見られる。No.525は自然面を打面にして得られた縦長剥片である。上端には，背面・腹面交互に2次加工が加えられている。左側縁全体には，細かく連続的な使用痕が見られる。

E)使用痕ある剥片(第190・191図)

合計17点出土している。剥片の形態により3種類(a～c)に区分した。

aは縦長剥片を素材にしている。No.526は，当地点の中においては大型の石刃状剥片を利用する。使用痕は両側縁の下半分に見られる。No.527は小型で木葉形を呈する縦長剥片である。打面は細く小さい。左側縁全体に細かく連続的な使用痕がみられる。No.528は背面が原礫面から成る剥片を使用している。打面は礫面をスライスするように形成されている。上端部は幅が広く，下端部に行くにつれて狭くなっており，形状は逆三角形である。使用痕は裏面右側縁全体に連続的に見られる。

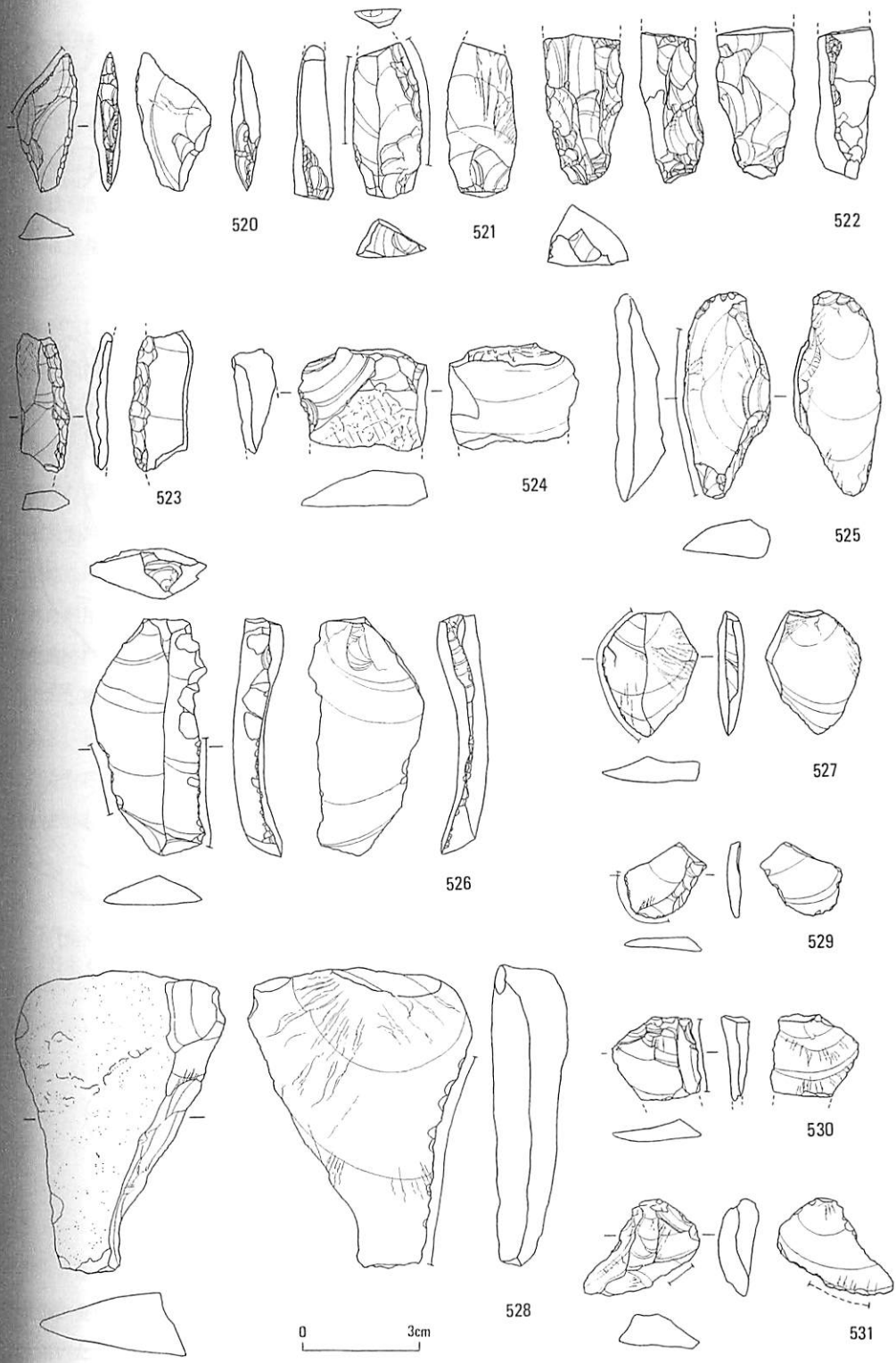
bは円盤状ないしこれと類似の石核から剥離された剥片を素材にする。No.532は打面が広く厚い剥片である。形状は五角形で，背面は求心的な剥離から成り，亀の甲羅状である。使用痕は，下縁部全体と左側縁下半分に見られる。No.533は打面部が潰れている。バルバスカーが明確に入っておりステップしている。背面の剥離は，求心的に行われている。使用痕は左側縁に断続的に見られる。No.531は打面が非常に小さい剥片である。背面は求心的な剥離から成る。下縁部全体に使用痕が見られる。

cは規格性を欠く不定形な剥片を素材にしている（No.529・530)。使用痕のある剥片の多くは，これにあたる。

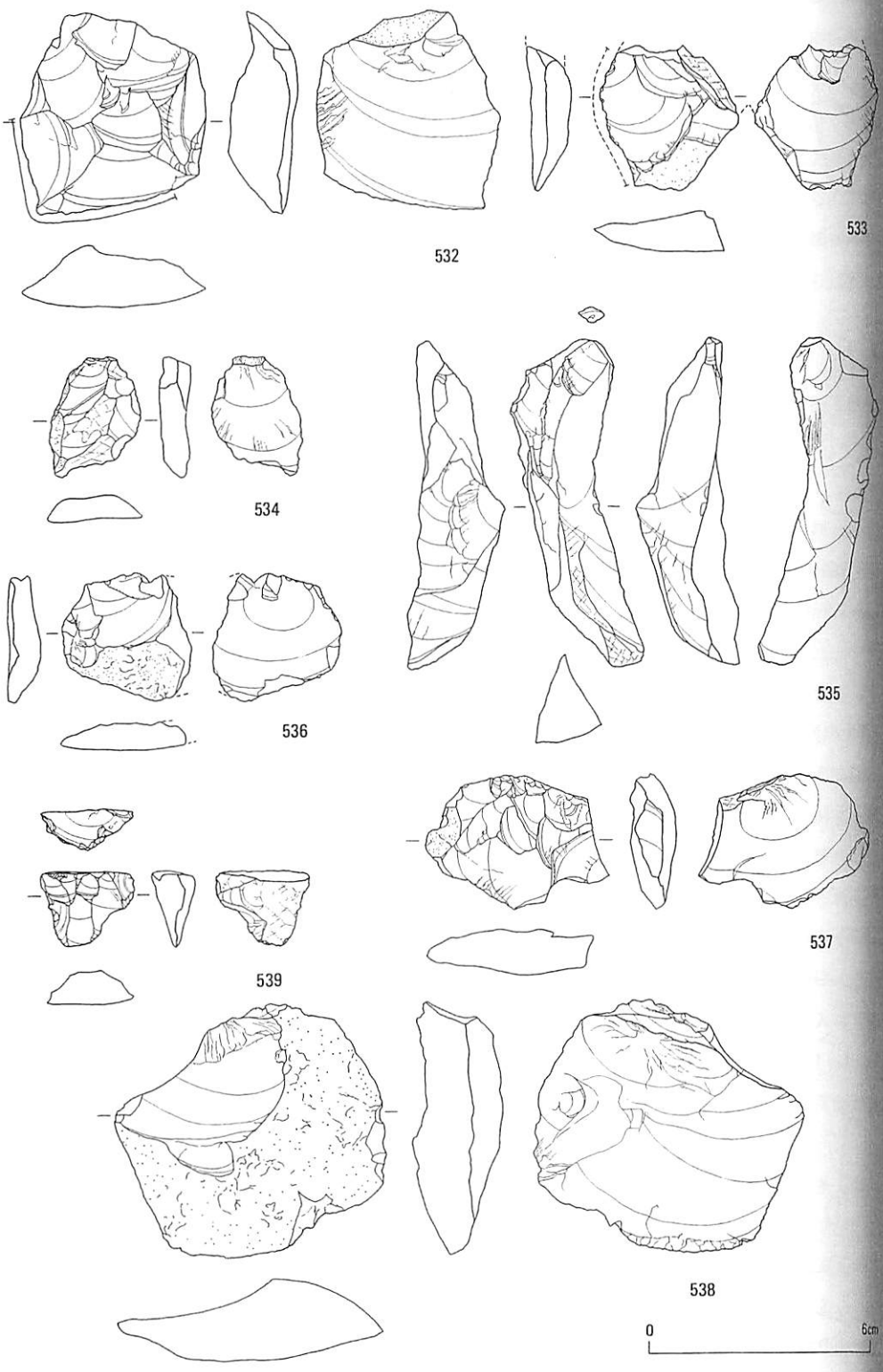
F)剥　　片(第191図)

合計32点出土した。上述の使用痕ある剥片と同様に，剥片の形態により区分して記載する。

aは縦長剥片である。No.535は三日月状の厚みのある剥片で，打面は小さい。断面は三角形である。背面の剥離はすべて上端から下端方向である。No.534は小型で木の葉状の剥片。打面は細く小




第190図　12－A地点石器実測図　1)




第191図　12－Ａ地点石器実測図　2)

さい。

bは円盤状ないしこれに類似した石核より剝離されたと考えられ，丹生遺跡で特徴的に見られる剝片である。No.537は背面の剝離が打面付近は細かく右に振れるにつれて大まかである。剝離方向は打面部付近が上端から下端方向で，それ以外は右方向から入っている。No.536は背面下半分に礫面が残存している。

cは背面がほとんど礫面から成る大型の剝片である。打面は複数の面から成る(No.538)。

dは規格化されていない不定形な剝片である。27点はこれにあたる。図は割愛する。

G)石　　核(第191・192図)

No.540は大型で厚みのある剝片を素材にしている。形状は三角形である。腹面右側は欠損している。背面は上・右・下の3方向からの剝離が見られ，これは腹面側において剝離作業を行うために設定した打面と思われる。上下両端から主として周辺より数枚のハート形の剝片が取られている。

No.539は，小型の石核で石材はチャートである。背面側は節理面から成る。単剝離打面で打面縁辺部に打面細調整が若干加えられている。作業面全体に頭部調整が見られ細かく潰れている。小型の縦長剝片が得られたようである。

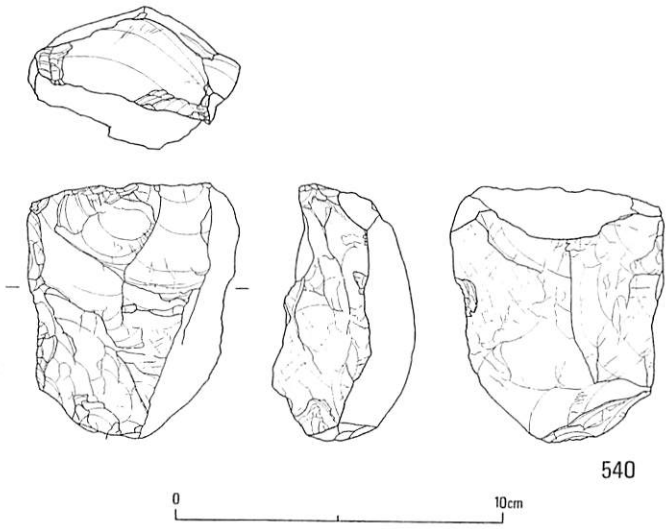
当地点の大型石核は，円盤状石核に類似する技法によって剝片を得ていると考えられる。また得られた剝片は，逆三角形状の丹生遺跡において特徴的な剝片である事から，主たる剝片であるＵＦｂ，剝片ｃなどはこの大型石核と，よく対応関係を成すものと考えられる。

(田鶴谷)

註

1) 『丹生3次概報』(昭和40年)。

2) 『丹生4次概報』(昭和41年)。




第192図　12－Ａ地点石器実測図　3)

## 第25節　第13地区Ａ地点

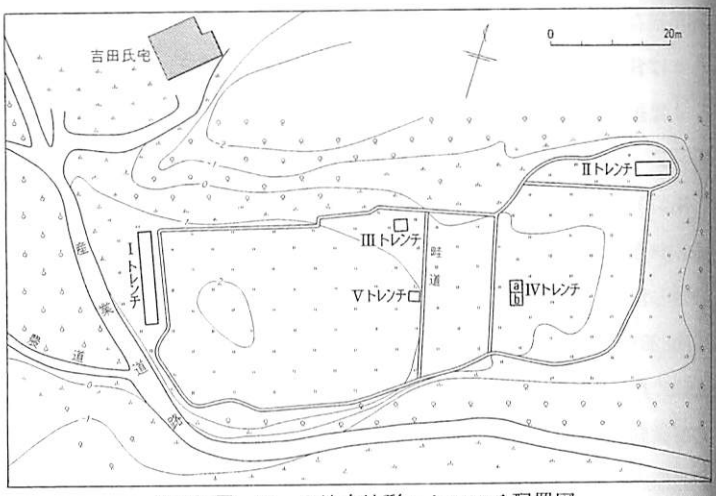
### 1．発掘の経過

13－Ａ地点は，中村俊一氏がこの付近で剝片石器2個(うち一つがNo.542)を発見しており，これが発掘調査の機縁となった[1]。この舌状台地の畑の開墾は，大部分ブルドーザーによったが，一部は鍬を用いたとのことであり，その点，遺物包含層はある程度残存するものと予想された。発掘は昭和40年10月13日から11月2日までの間の第4次調査で堅田班が行っている。

## 2．位置・地形・トレンチ

13－Ａ地点は，大字丹川字池ノ久保に存する標高82mの小丘から東に伸びた台地であって，字井手尻に属している(第193図)。

発掘調査は，５本のトレンチを設けて行われた。先ず台地の西端部にＩトレンチを設けて開始された(２ｍ×15mのトレンチを北側から２ｍ毎に区切って，Ia～Ihとした)。さらに，Ｉトレンチの東約90m，台地の縁辺部にⅡトレンチを設定した(東西に約６ｍ，幅約２ｍ)。次いで地主の安部政雄氏が石核(No.543)を表採された地点，すなわちＩトレンチとⅡトレンチを結ぶほぼ中間部にあたる位置にⅢトレンチを設定した(２ｍ×２ｍ)。その後，全員で台地全面にわたって表採を試みたところ，台地の中央北寄りの小高くなった鞍部で，安山岩と黒耀石の剝片を採取することが出来たので，この地点を中心としてⅣトレンチを設定した。南北の方向に４ｍ×２ｍの規模で設定し，北からⅣa，ⅣbⅣ区と名付けた。次いでⅣトレンチの西側約20mの位置にⅤトレンチ(約1.5m×1.5ｍ)を設定した。

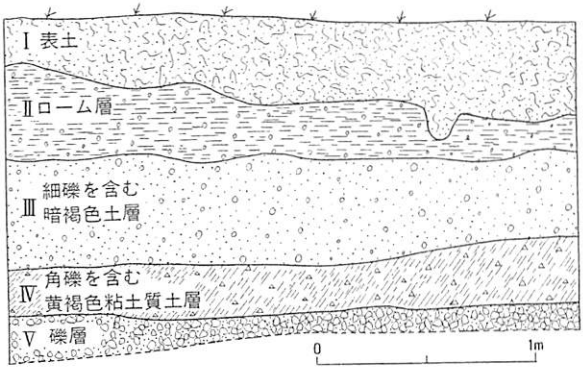



第193図　13－Ａ地点地形・トレンチ配置図

## 3．土　　層

13－Ａ地点の層位は，以下の５層に区分される(第194図)。

第１層　表土。第１・２両層はもともと同質のものであったが，上部は有機物の混入によって異質なものとなったと推定される。これは，発掘の結果判明したがブルドーザーによる開墾のため，台地には全域にわたってその影響をこうむっているからである。




第194図　13－Ａ地点第１トレンチ土層断面図

第２層　暗色を帯びた黄褐色ローム層。縄文土器片と弥生土器片とが混在することでも知られるように再堆積された層。

第３層　暗褐色を帯びた埴質粘土層。縄文土器片と黒耀石片とが検出されたこの層は，原堆積のものであろう。

第４層　黄褐色の風化した石英塊を含

む角礫埴質土。無遺物層であった。

第5層　礫層。鶴嘴をもってしても掘下げ困難な岩盤状の層。

4．遺物の出土状況

層位的な出土状態をトレンチ毎に記述する。

Ⅰトレンチ　第1層(表土)，第2層(黄褐色ローム層)，第3層(暗褐色土層)に遺物の出土は限られており，第4層以下には検出されなかった。遺物は，Ⅰc区の第2層から黒耀石の剝片と撚糸文の施された縄文土器片が，またⅠg区の第3層からは黒耀石製の石鏃の破片と無文土器片が出土したに過ぎなかった。

Ⅱトレンチ　トレンチ付近はブルドーザーによって完全に削平され，姫島産の黒耀石の剝片が地表に散布するに過ぎなかった。

Ⅲトレンチ　ここでは，第1層中(表土)に黒耀石の剝片が含まれていたのみで，第2層以下遺物は全く検出されなかった。

Ⅳトレンチ　遺物包含層は，第1層(表土)，第2層(明るい黄褐色層)，第3層(暗褐色層)からなっていたが，特に第2層と第3層の接する面に一番多くみられた。遺物としては，姫島産黒耀石・真黒の黒耀石・安山岩等を材料とした剝片，姫島産黒耀石製の掻器，無文土器，山形押型文土器(早水台式)を検出した。

Ⅴトレンチ　ここでは包含層は攪乱削平されており，約60cmで礫層に達した。遺物は，表土から姫島産黒耀石の剝片2片が得られたのみであった。

平面分布については，出土量があまりに乏しく言及できない。岩宿時代の石器として認められるもの3点のうち，その出土位置が明確なものはⅣaトレンチから出土した1点(No.541)に過ぎない。残る2点は，いずれも当地点内表採品である。

5．石　　器

13－A地点からは47点の石器が出土した。しかし，うち41点は姫島産の黒耀石製の石器である。残りは，岩宿時代の石器と認められるもの6点である。その内訳はUF2点，石核1点，敲打痕のある礫片3点である。このうち3点についてとり上げる。

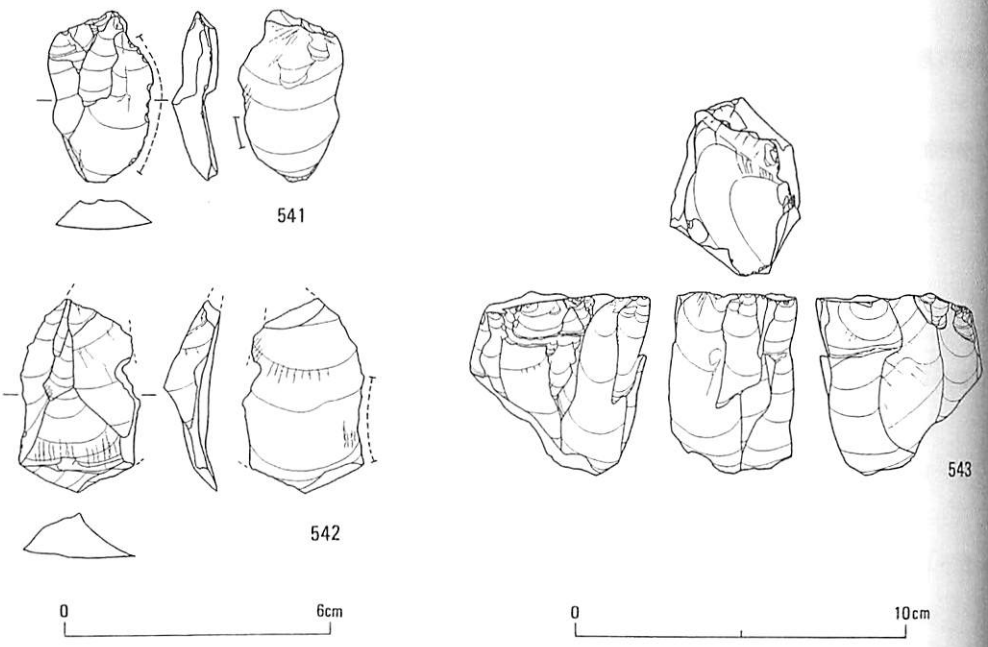
A)使用痕ある剝片(第195図)

幅広の打面を持った縦長剝片である。打面は2面の剝離面から成る複剝離面打面である。打面角は腹面側へかなり傾斜している。背面の剝離は，全て垂直方向の加撃によっており，頭部調整痕も認められる。石材は流紋岩である(No.541)。

打面部を失った縦長剝片である。背面に腹面と同じ剝離方向の連続した剝離が施されている。No.541に類似した性格の剝片であろう。石材は流紋岩である(No.542)。

B)石　　核(第195図)

角柱状の残核である。打面は素材の分割面を利用した平坦打面であり，菱形を呈している。剝片剝離作業は打面に対しほぼ垂直に加撃し菱形の打面の4辺(全周)で行っている。当地点出土のUFと同様の，幅広の打面を有する縦長剝片が連続的に取られたであろう。なお，下底部には石核体部




第195図　13－Ａ地点石器実測図

を水平に断ち切るような大きな剝離が，垂直方向の剝片剝離作業に先立ってなされている。石核の体形を整える調整剝離であろうか(No.543)。流紋岩製。　（後　藤）

註

1）『丹生４次概報』(昭和41年)。

## 第26節　第14地区Ａ地点

### １．発掘の経過

14－Ａ地点は，昭和41年９・10月の第５次調査ならびに昭和42年８月の第６次調査においてそれぞれ富木班・三上班よって発掘された[1]。ここは太田亘氏によって打器類が採集されており，丹生遺跡調査の目的に適う地点として，発掘地に選定された。

### ２．位置・地形・トレンチ

産神の池に連なる谷を挟んで第１地区の南にあり，ほぼ標高70mの等高線に縁どられた東北方に舌状に伸びる丘陵の頂部(標高約76m)に位置する。トレンチはこの頂部の未開墾地に設けられた。８×４ｍのトレンチ４本(第１～第４)とこの間を結ぶ幅２ｍの小トレンチからなる。第６次調査では，この南西方に10×２ｍのトレンチ２本(Ａ・Ｂ)を設けた(第196図)。

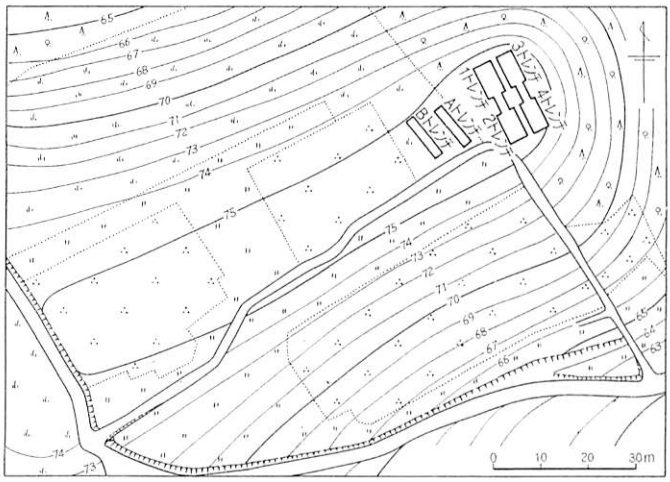
### ３．土層・遺物の出土状況

第１層　暗褐色土。約25cm。

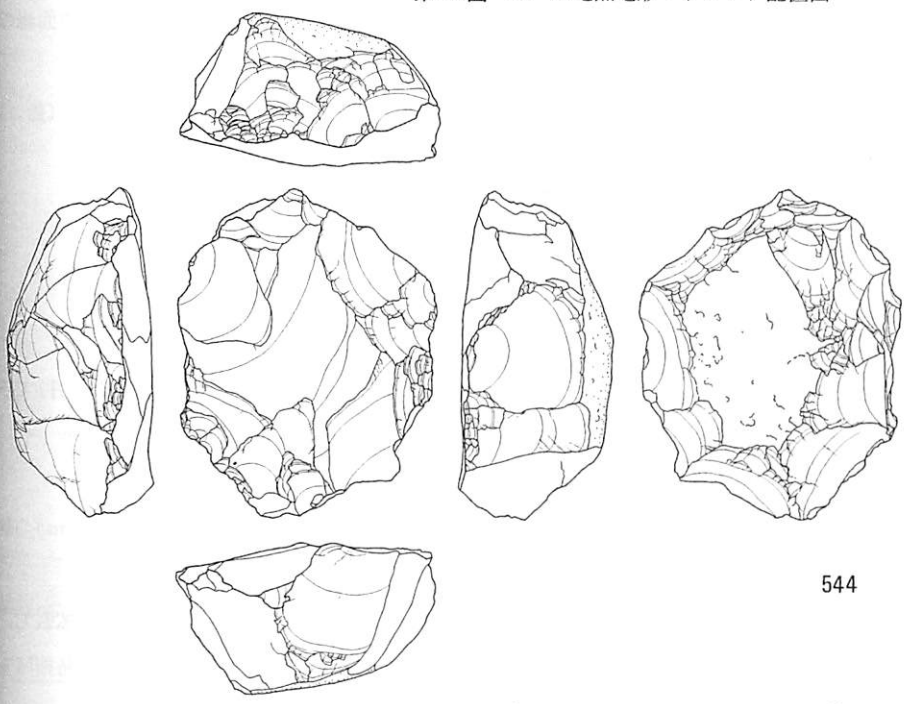
第２層　オレンジローム層。15～20cm。Ａトレンチでは局所的に点在。

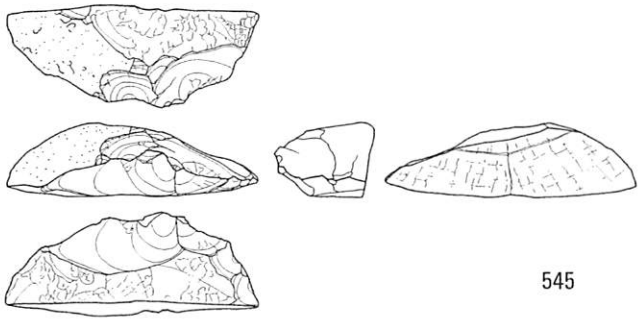
第3層　灰白色シルト層。半クサリの円礫とシルト・砂を混じえた2次堆積層で，上面は凹凸が激しく，堆積後浸食を受けたものと考えられている。約25～80㎝。

第4層　細砂層。細かな結晶片岩を多く含む黄褐色砂質土層。約50㎝。




第196図　14－A地点地形・トレンチ配置図




第197図　14－A地点石器実測図

第5層　クサリ礫層。志村砂礫層相当。

石器は，第3層灰白色シルト層上面において3点発見された。

### 4．石　器

A)石　核(第197図)

No.544　円礫を半截した分厚い剝片を素材とし，主剝離面上と背面側で剝離作業を繰り返した亀甲状の石核である。分割面側を打面とし，この面から垂直方向の打撃を加える作業を主とし，打面が幅広く先が細い縦長剝片が取られる。上面(打面)側の剝離は，打面調整の意味合いを否定しきれないが，主たる剝片剝離作業面の作業よりも後になされた剝離面も認められることから，この面からの作業もある程度目的的な剝片が取られたと考えられる。この際には，山形で幅広く厚い打面を有し，逆三角形幅広の縦長剝片ないし，横長剝片が主として取られたであろう。

No.545　円礫から打ち剝がされた厚手の剝片を利用し，礫面側と主剝離面側の双方に2面ずつ剝離が加えられた石核であろう。後部は節理面から欠損している。礫面側の剝離と主剝離面側のそれは交互になされ，稜がチョッピングトゥール状にトゥイストしている。

(鈴　木)

註

1)『丹生綜括篇』(昭和43年)。

## 第27節　第14地区C地点

### 1．発掘の経緯

14－C地点は第5次調査（昭和41年10月)で三森班はかが，第6次調査(昭和42年8月)で三上班が調査を行っている[1)]。

### 2．位置・地形・トレンチ

14－C地点は大字丹生字長迫に所在し，B地点とは小谷をはさんだ対岸(南西方約70m)の緩斜面に位置する(第198図)。

第5次調査では，当初長軸を南北に向け2×6mのトレンチを設け，必要に応じて拡張し，東からⅠ・Ⅱ…Ⅳトレンチと呼び，トレンチを北から2mごとに区分してa・b・cとし，発掘区を拡張する際はこれに準じて座標式に区画を命名した(第198図)。

第6次調査では，三森班トレンチの西北方の西北斜面に2×8m，2×10mの2本のトレンチを設定した。

### 3．土　層

C地点のトレンチにおける層位の状況は，ほぼ全域に亙り同一様相を示している(第199図)。

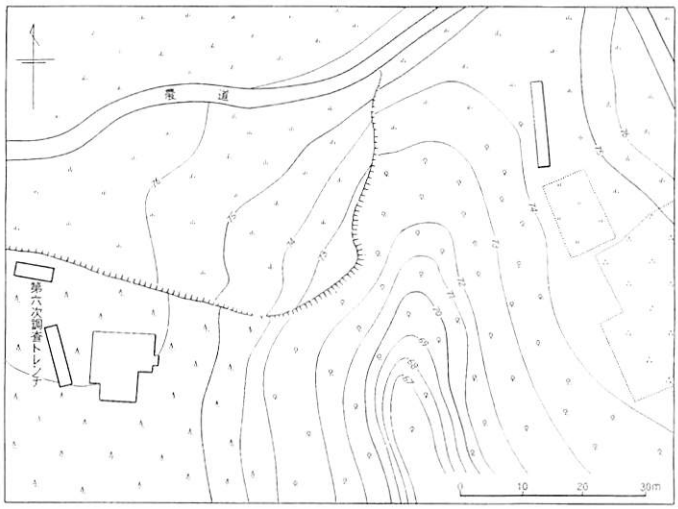
第　1　層　表土層。数cmから15cmの黒褐色腐植土である。この層は西北斜面のトレンチでは一部削平されている。

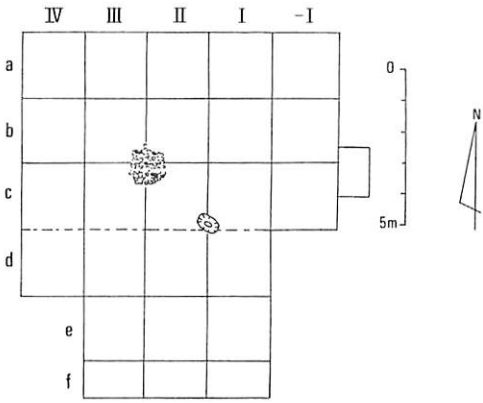
第2・3層　第1層の下は厚さ20cmから40cmの赤褐色ローム層である(断面図では暗褐色土層)。この層の下半部に粘質を帯びた部分が処々にあり，弥生土器が概ね上半から，縄文

土器，石器，剝片は下半から出土するのでこれを上下に分層し，それぞれ第2層，第3層とした。

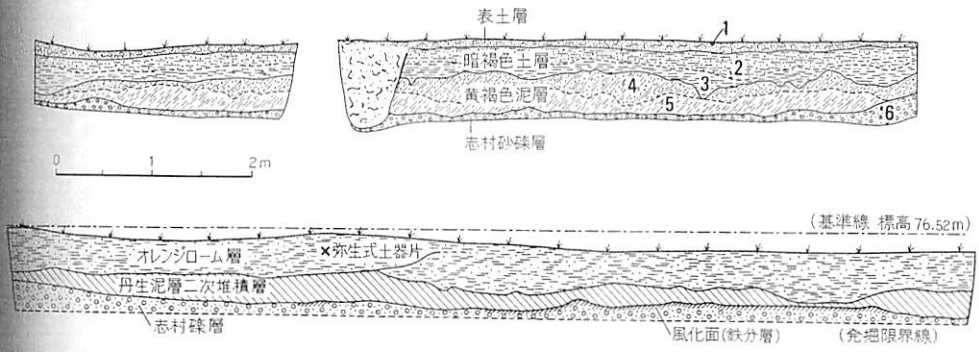
第4・5層　第3層の下はシルト質の層で(断面図では黄褐色泥層)，色調の点から上下に分層し第4層，第5層とした。この2つの層は地質学的に全く同じもので，かつて地表として露出した際に風化・変色したもので，その成立はリス氷期もしくはリス・ヴュルム間氷期前半の堆積に求められる。

第　6　層　クサリ礫層(断面図の志村礫層)である。




第198図　14－C地点地形・トレンチ配置図(上)および区画名区分図(下)　1点叉線は第199図上段土層断面図位置




第199図　14－C地点Cトレンチ(上)，第6次調査トレンチ土層断面図(下)

## 4．遺構・遺物の出土状況

### 1)遺　構

第5次調査のⅡb－c，Ⅲb－cトレンチから，扁平な円礫を打ち割った割石を小山状に積みあげ直径1.2mから1.3m，中心部の高さ25cmの集石遺構が検出された[2)]。上部の割石を除去すると，径20cm

から30cmの扁平円礫５個とやや小形の円礫からなる配石が現れ，この円礫上に密着して縄文土器片が３個出土した。

集石遺構は第４層上面に形成されたもので，第４層上部から第６層上部を若干掘り込んだピットと何らかの関係があるかもしれないが，詳細は明らかでない。

配石上の縄文土器は縄文早期のものと見られ，この集石遺構もその時期のものであろう。

２）遺　　物

土器は縄文土器が第３層から，弥生土器が第２層から出土している。前者は無文の小破片で，胎土中にごく少量の長石を含み色調は茶褐色を呈している。口縁部や尖底から推定して早期のものと思われる。後者は多量に発見され，いずれも中期初頭ないし前半に属するものである。

石器は108点出土している。その大半は第３層からの出土であり，層位的にみれば縄文土器と共伴していたことになるが，報告でも「本来シルト層の上部に包含されていた掻削器・石核・剥片等が長年月の間に洗い出されて縄文時代早期には地表面に露呈し，新しい時期の遺物と混って以後の地層に包含された[3]」可能性が指摘され，また石器の特徴から岩宿時代のものと思われるものが多いことから縄文土器に伴うものでないものと

第11表　第14地区Ｃ地点出土石器一覧表

| 遺物番号 | 類別 | 発掘区 | 出土層 | 調査年次 | 石材 | 挿図No. |
|---|---|---|---|---|---|---|
| XⅣC－1 | D —— | —— | —— | 6次 | 流 | 609 |
| 2 | B —— | Ⅰ－a | —— | 6次 | 流 | 576 |
| 4 | B —— | Ⅰ－a | —— | 6次 | 流 | 591 |
| 5 | A UF | Ⅰ－a | —— | 6次 | 流 | 568 |
| 6 | A UF | Ⅰ－a | —— | 6次 | 流 | 557 |
| 7 | D —— | Ⅰ－a | —— | 6次 | 流 | 617 |
| 8 | A UF | Ⅰ－b | —— | 6次 | 流 | 552 |
| 9 | B —— | Ⅰ－b | —— | 6次 | 流 | 585 |
| 11 | A UF | Ⅰ－b | —— | 6次 | 流 | 563 |
| 12 | B —— | Ⅰ－b | —— | 6次 | 安 | —— |
| 13 | B —— | Ⅰ－b | —— | 6次 | 流 | 597 |
| 14 | D —— | Ⅰ－b | —— | 6次 | 流 | 606 |
| 16 | D —— | Ⅰ－b | —— | 6次 | 流 | —— |
| 17 | D —— | Ⅰ－b | —— | 6次 | 流 | 616 |
| 18 | B —— | Ⅰ－c | —— | 6次 | 流 | 574 |
| 19 | B —— | Ⅰ－c | —— | 6次 | 流 | —— |
| 20 | B —— | Ⅰ－c•d | —— | 6次 | 流 | 573 |
| 21 | B —— | Ⅰ－c | —— | 6次 | 流 | 602 |
| 22 | B —— | Ⅰ－c | —— | 5次 | 流 | 571 |
| 23 | B —— | Ⅰ－c | —— | 5次 | 流 | 603 |
| 24 | A UF | Ⅰ－c | —— | 5次 | 流 | 564 |
| 25 | B —— | Ⅰ－c | —— | 5次 | 砂 | —— |
| 26 | D —— | Ⅰ－c | —— | 5次 | 珪 | 612 |
| 27 | B —— | Ⅰ－c | —— | 5次 | 珪 | 598 |
| 28 | D —— | Ⅰ－c | —— | 5次 | 安 | 607 |
| 29 | D —— | Ⅰ－c | —— | 5次 | 流 | —— |
| 31 | A UF | Ⅰ－c | —— | 5次 | 流 | 559 |
| 32 | B —— | Ⅰ－d | —— | 6次 | 流 | 599 |
| 33 | B —— | Ⅰ－d | —— | 5次 | 流 | 600 |
| 35 | D —— | Ⅰ－e | —— | 6次 | 流 | 615 |
| 37 | B —— | Ⅱ－a | —— | 6次 | 流 | 592 |
| 38 | B —— | Ⅱ－a | —— | 6次 | 流 | 581 |
| 39 | A UF | Ⅱ－a | —— | 6次 | 流 | 551 |
| 40 | B —— | Ⅱ－a | 2 | 6次 | 流 | —— |
| 41 | B —— | Ⅱ－a | 2 | 6次 | 流 | —— |
| 42 | B —— | Ⅱ－a | 2 | 6次 | 安 | —— |
| 43 | B —— | Ⅱ－a | 2 | 6次 | 流 | —— |
| 44 | B —— | Ⅱ－a | 2 | 6次 | 流 | —— |
| 45 | D —— | Ⅱ－a | —— | 6次 | 流 | 613 |
| 46 | A UF | Ⅱ－b | —— | 6次 | 流 | 550 |
| 49 | A UF | Ⅱ－b | —— | 6次 | 流 | 572 |
| 50 | A UF | Ⅱ－b | —— | 6次 | 流 | 583 |
| 51 | A UF | Ⅱ－b | —— | 6次 | 流 | 548 |
| 52 | B —— | Ⅱ－b | —— | 6次 | 流 | 601 |
| 53 | B —— | Ⅱ－b | 2 | —— | 安 | —— |
| 54 | B —— | Ⅱ－b | —— | 5次 | 流 | 587 |
| 55 | B —— | Ⅱ－b | —— | 5次 | 流 | 580 |
| 56 | D —— | Ⅱ－c | —— | 5次 | 流 | 614 |

| 遺物番号 | 類別 | 発掘区 | 出土層 | 調査年次 | 石材 | 挿図No. |
|---|---|---|---|---|---|---|
| XVC－57 | B ―― | Ⅱ－c | ―― | 5次 | 流 | 593 |
| 58 | A UF | Ⅱ－f | ―― | 5次 | 流 | 555 |
| 59 | A UF | ―― | ―― | 6次 | 流 | 567 |
| 60 | A UF | Ⅲ－a | ―― | 5次 | 流 | 569 |
| 61 | A UF | Ⅲ－a | ―― | 5次 | 流 | 556 |
| 63 | A RF | Ⅲ－b | ―― | 5次 | 流 | 546 |
| 64 | D ―― | Ⅲ－b | ―― | 5次 | 砂 | 611 |
| 65 | A UF | Ⅲ－b | ―― | 5次 | 流 | 560 |
| 66 | B ―― | Ⅲ－b | ―― | 5次 | 流 | 590 |
| 67 | B ―― | Ⅲ－b | ―― | 5次 | 流 | ―― |
| 68 | B ―― | Ⅲ－c | ―― | 5次 | 砂 | ―― |
| 69 | B ―― | Ⅲ－c | ―― | 5次 | 流 | ―― |
| 70 | D ―― | Ⅲ－c | ―― | 5次 | 流 | 604 |
| 71 | A UF | Ⅲ－d | ―― | 5次 | 流 | ―― |
| 72 | B ―― | Ⅲ－d | ―― | 5次 | 流 | ―― |
| 73 | B ―― | Ⅲ－d | ―― | 5次 | 流 | ―― |
| 74 | A UF | Ⅲ－d | ―― | 5次 | 流 | 554 |
| 75 | B ―― | Ⅲ－e | ―― | 5次 | 流 | ―― |
| 76 | B ―― | Ⅲ－e | ―― | 5次 | 流 | 575 |
| 77 | A UF | Ⅲ－e | ―― | 5次 | 流 | 561 |
| 78 | B ―― | Ⅲ－e | ―― | 5次 | 流 | ―― |
| 79 | B ―― | Ⅲ－e | ―― | 5次 | 流 | ―― |
| 80 | B ―― | Ⅳ－a? | ―― | 5次 | 流 | 595 |
| 81 | A UF | Ⅳ－a | ―― | 5次 | 流 | 565 |
| 82 | B ―― | Ⅳ－a | ―― | 5次 | 流 | 584 |
| 83 | D ―― | Ⅳ－a | ―― | 5次 | 流 | 608 |
| 84 | B ―― | Ⅳ－a | ―― | 5次 | 流 | ―― |
| 85 | B ―― | Ⅳ－a | ―― | 5次 | 流 | 577 |
| 86 | B ―― | Ⅳ－b | ―― | 5次 | 流 | 579 |
| 87 | A UF | Ⅳ－b | ―― | 5次 | 流 | 553 |
| 88 | A UF | Ⅳ－b | ―― | 5次 | 流 | ―― |
| 89 | A UF | Ⅳ－b | ―― | 5次 | 流 | 570 |
| 90 | B ―― | Ⅳ－b | ―― | 5次 | 流 | 578 |
| 91 | B ―― | Ⅳ－b | ―― | 5次 | 流 | 566 |
| 92 | B ―― | Ⅳ－b | ―― | 5次 | 流 | 586 |
| 93 | B ―― | Ⅳ－c | ―― | 5次 | 流 | 589 |
| 94 | A RF | Ⅳ－c | ―― | 5次 | 砂 | 547 |
| 95 | B ―― | Ⅳ－d | ―― | 5次 | 玉 | 588 |
| 96 | D ―― | Ⅳ－d | ―― | 5次 | 流 | 605 |
| 97 | A UF | Ⅳ－d | ―― | 5次 | 流 | 549 |
| 98 | D ―― | Ⅳ－d | ―― | 5次 | 安 | 610 |
| 99 | B ―― | Ⅳ－e | ―― | 5次 | 流 | 596 |
| 100 | A UF | ピット内 | ―― | 5次 | 流 | 558 |
| 101 | B ―― | ―― | ―― | 5次 | 流 | 594 |
| 102 | A UF | ―― | ―― | 5次 | 流 | 562 |
| 104 | B ―― | ―― | 2 | 5次 | 流 | ―― |
| 107 | B ―― | ―― | 1 | 5次 | 流 | 582 |
| 108 | B ―― | ―― | ―― | 5次 | 流 | ―― |

した。

なお，108点のうち4点は自然礫で，8点は縄文時代のものと思われるため，96点を分析の対象とした(第11表)。これらはトレンチのほぼ全面から出土している。

## 5．石　器

96点の内訳は，RF2点，UF23点，斧状石器1点，石核15点，剥片55点である。

A)RF(第200図)

RFは2点出土している(No.546・547)。No.546は横長剥片を素材とし，打面部に背面側から急角度の加工を加えたものである。加工は縁辺の2/3に及び打面は除去されているが，ポジティヴバルブのふくらみは残っている。加工部位は鋸歯状を呈する。末端部は折れている。

No.547は扁平な円礫を素材とし，節理面に加工が認められるものである。加工は比較的大きな剥離により行われており粗い印象を受ける。

B)UF(第200～204図)

剥片を使用した際の痕跡としては微細な剥離痕・つぶれ・磨痕(光沢を含む)などが挙げられよう。しかし，つぶれについては剥離の際にも生じうるものであり，すべて使用によるものとはいいきれない。磨痕を有するものは1点認められたが，これは特定の器種として認識できるものであるため別に

記述を行う。ここでは剝片に連続的(No.549～556・562・565・566・568)あるいは部分的(No.548・557～561・563・564・567・569・570)に微細な剝離痕が認められるものをＵＦとして扱った。

ＵＦのなかにはNo.548のように整った縦長剝片もあるが，大部分は不定形なもので，規格的な剝片のみを使用に供してはいない。また，これらは自然面を留めるものが多く，剝片の大きさも石核の残核から復元できるものより大きいことから，礫から石核を形づくるまでの間に生じた剝片などを積極的に使用していたものと思われる。使用痕が認められるのは鋭い縁辺であり，自然面を留めていたりシャープでない部分にはほとんど認められない。したがって使用痕については用いられた剝片がどの部位に鋭い縁辺を残していたかという偶然的な要因に左右されるため，それが認められる部位に規則性を見い出すことはできない。

Ｃ)斧状石器(第204図)

No.570は背面の稜線の部分を中心に磨痕が認められる資料である。打面は自然面で磨痕の方向は明確でない。丹生遺跡における斧状石器は片側に自然面を残しその裏側を剝離により調整するものであり，調整を加えた面に磨痕が認められることがあり，本資料も斧状石器の刃部を形成していたものと理解できる。使用石材は流紋岩であるが，丹生遺跡の斧状石器が粗粒な石材を主体に利用しているなかで細粒な石材を用いている例もあり，石材の面からも器種認定に矛盾は生じない。

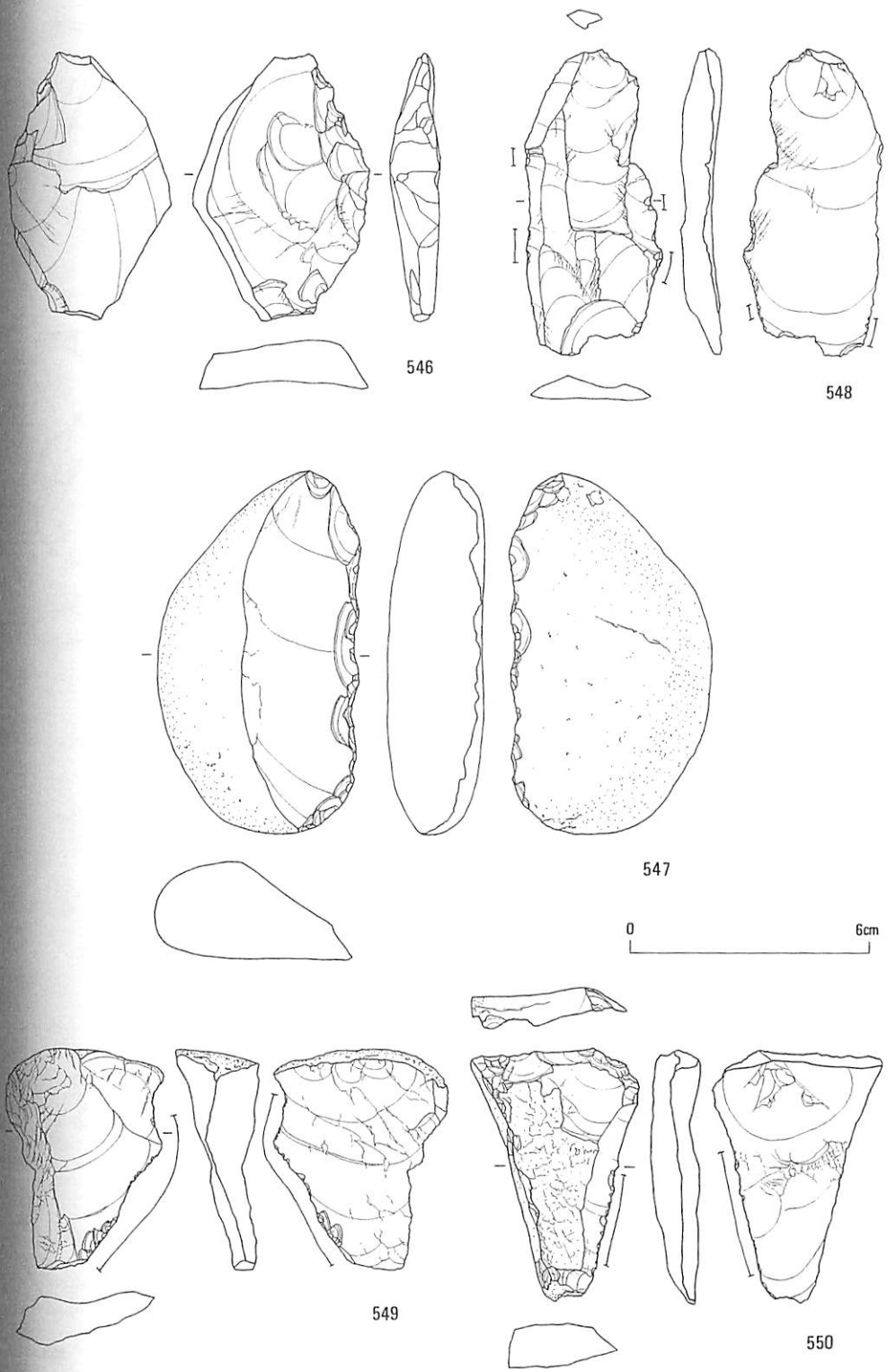
なお本資料の打面部にはつぶれ等が認められないことから，使用による欠損により生じたものというよりは刃部再生剝片である可能性が高いと思われる。

Ｄ)剝　　片(第204図～第208図)

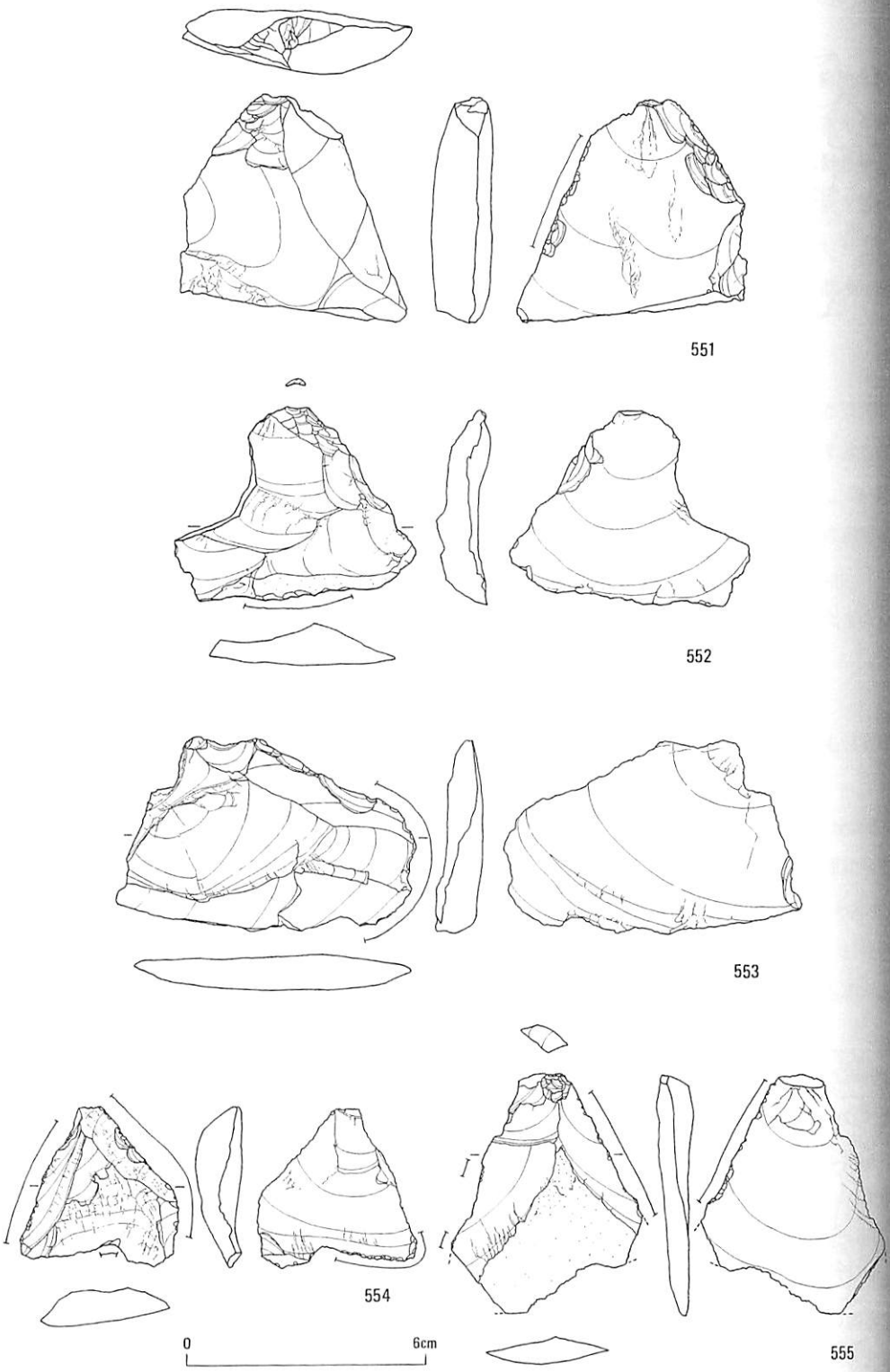
剝片の分析にあたっては，ＵＦが素材剝片の形状をほとんど変えていないことからＵＦも含めて行いたい。

剝片の形状をみると縦長のもの（No.548～550・571～573・575)，末端の著しく拡がるもの(No.552・554・555・577・578)のほかは長幅比１：１のものや寸づまりなものが多数を占める。打面は残るものが多く，単剝離面打面が若干多いが，自然面打面，複剝離面打面がほぼ同じ割合で認められる。打面の残り方は剝片の最大幅となるか，それに近いくらい大きく残すものが特徴的である。打面を残さないものは剝離の際にはじけたと思われるものが多いが，No.567のように折れているものもあり，意図的な折断とすれば興味深い資料である。

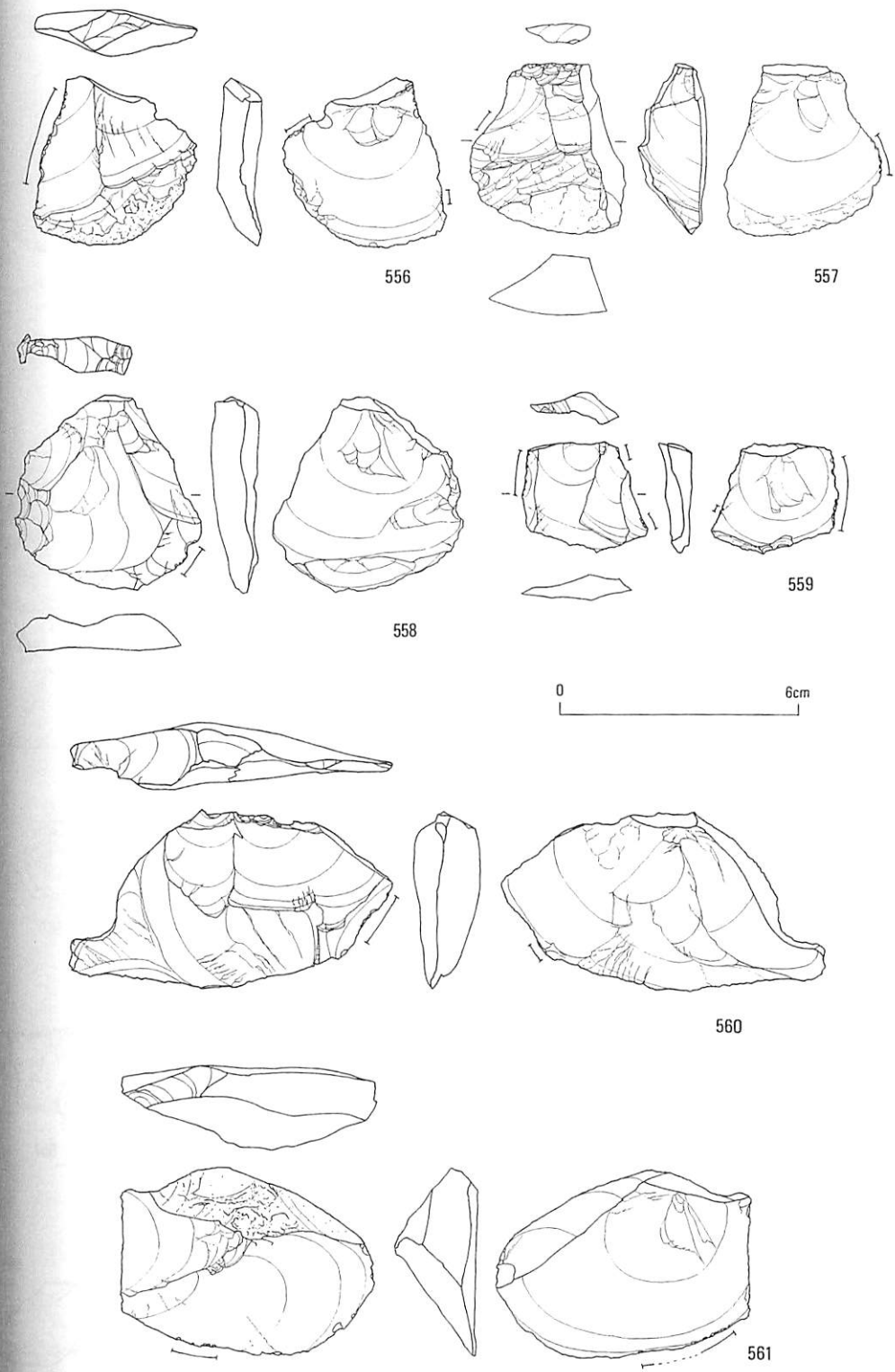
背面構成は表皮剝片をはじめ，自然面を留めるものが多く，打面部に自然面を残すものとあわせると本地点出土剝片の約半数を占め，剝片剝離の比較的初期のものを多く含んでいるものと思われる。またNo.560・561・579のように背面にポジティヴな面が認められる資料も存在する。本地点には剝片素材の石核の主剝離面側から剝片剝離を行うものがあり，このような剝片の存在もうなずけるが，上記の石核は小形の貝殻状の剝片を目的剝片としており，大きさ，形状の点で整合性がない。このようなやや大きめで背面にポジティヴな面を留める剝片は，出土点数が３点と少ないのが問題となるが，大形の剝片を石核に用いた際の調整剝片と理解したい。背面を構成する剝離面の剝離方向は主剝離面と同一か，上からの斜交あるいは多方向からの剝離を示すものが主体となる。これらは次に述べる石核の特徴と矛盾するものではない。



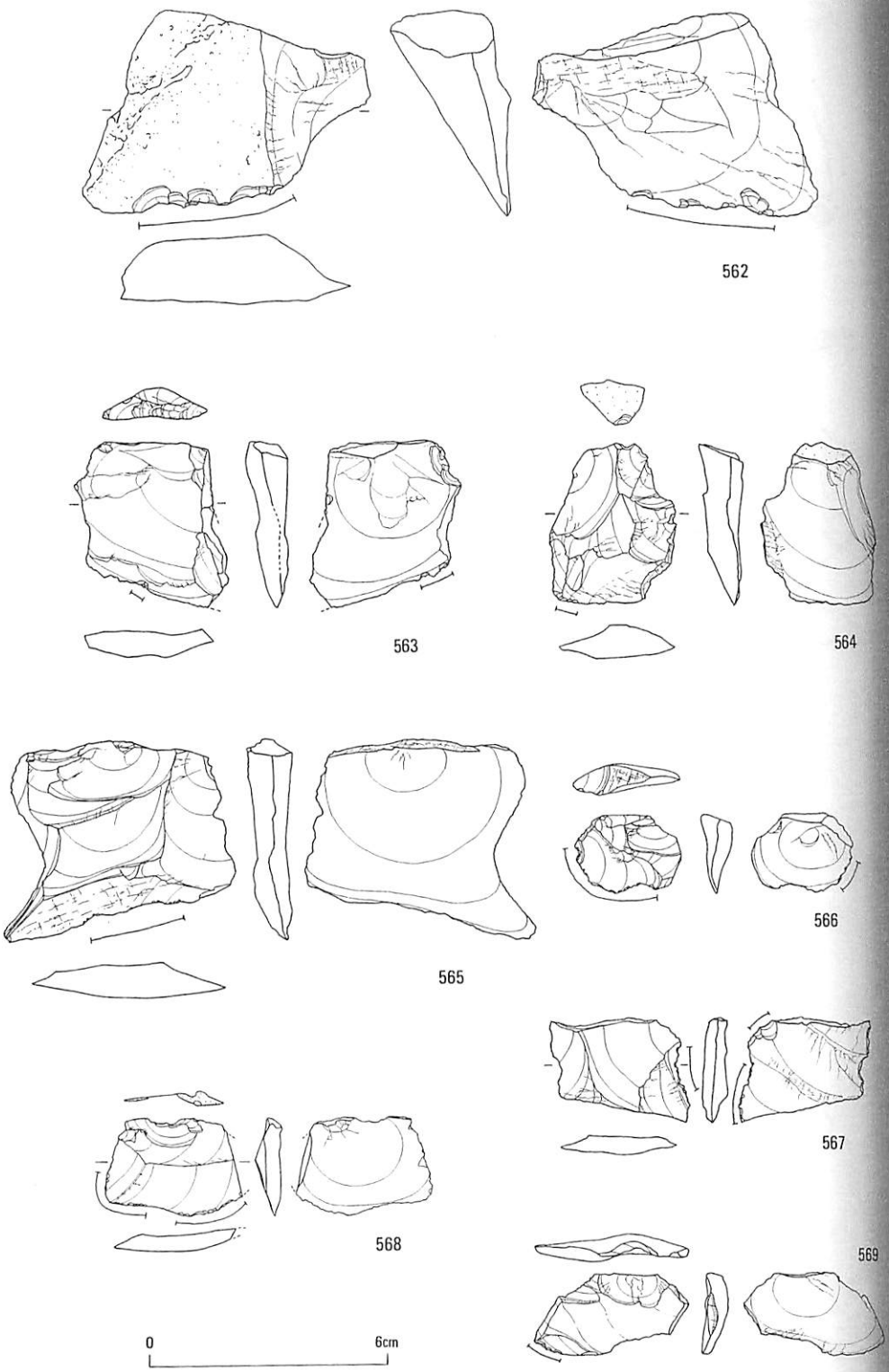

第200図　14－C地点石器実測図　1)



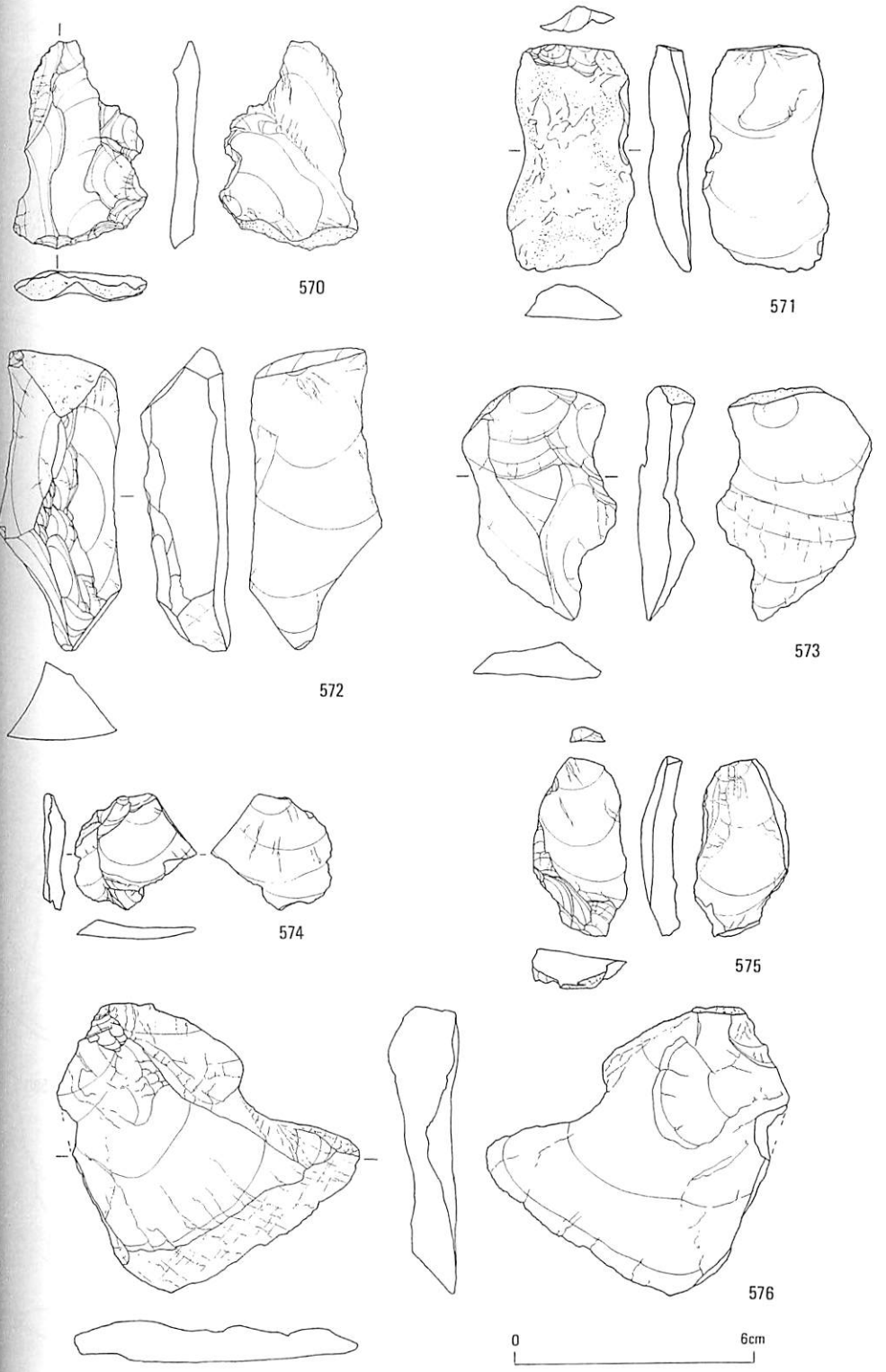

第201図　14－Ｃ地点石器実測図　2)



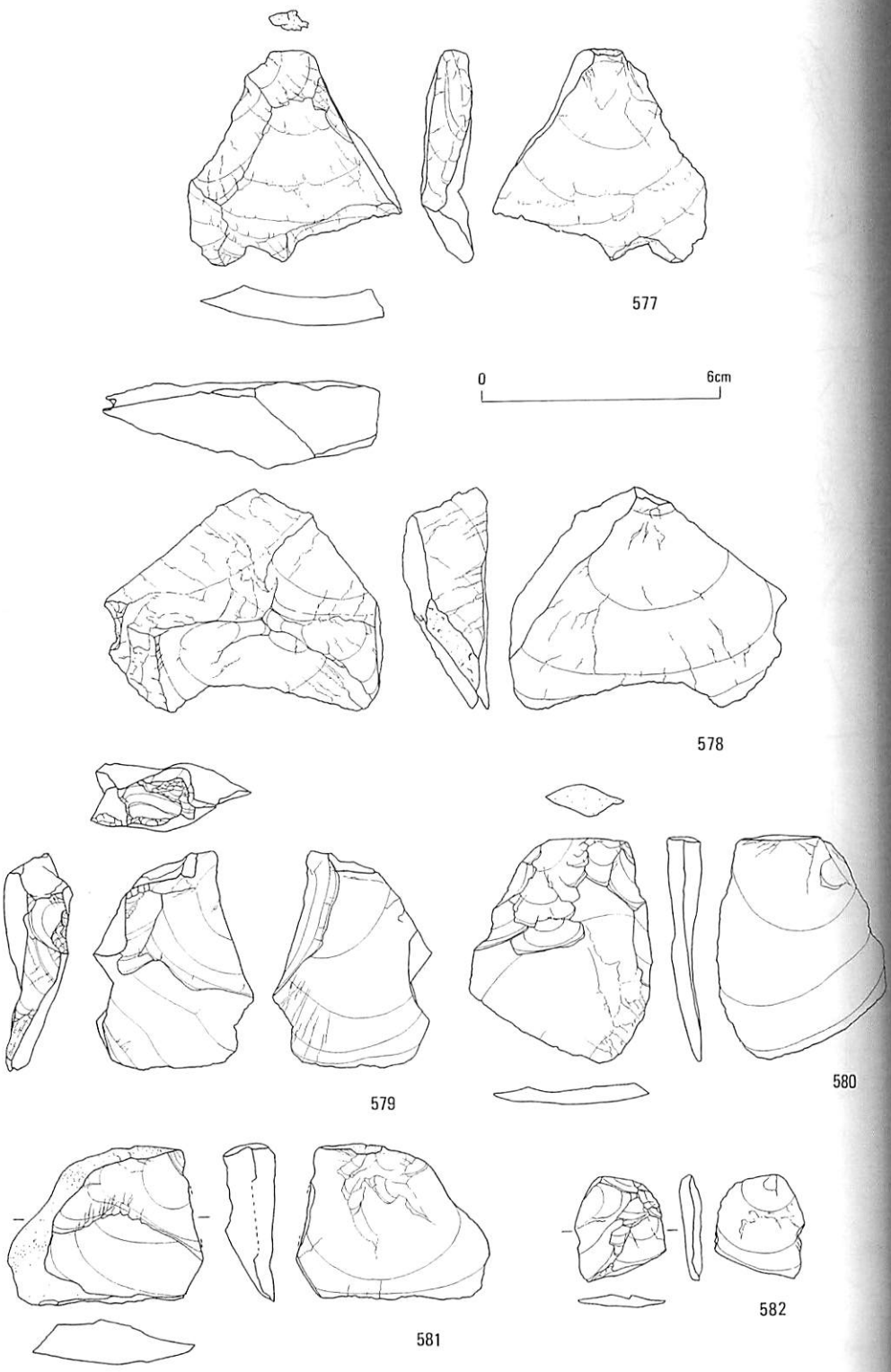

第202図　14－C地点石器実測図　3)



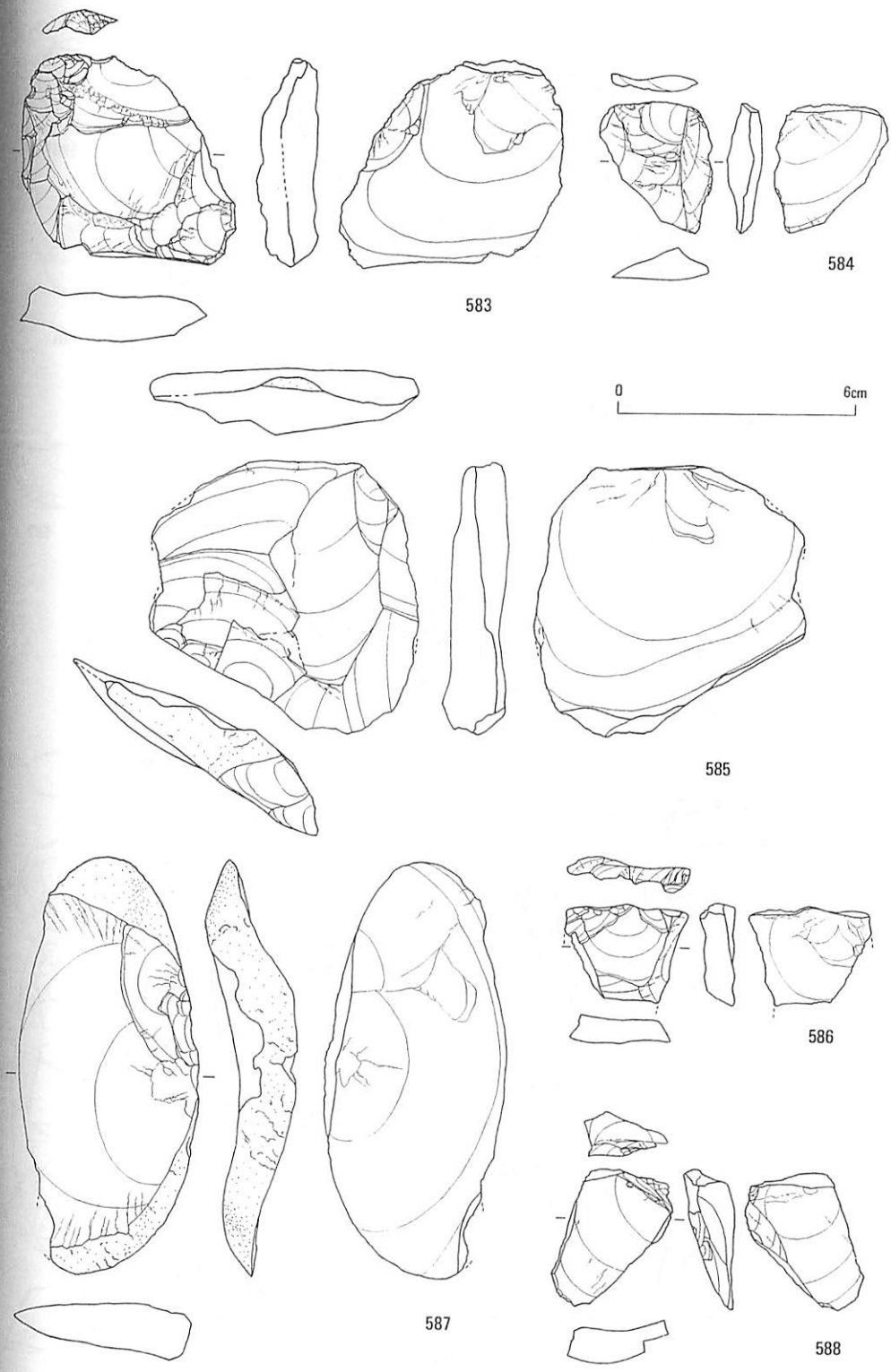

第203図　14－Ｃ地点石器実測図　4）



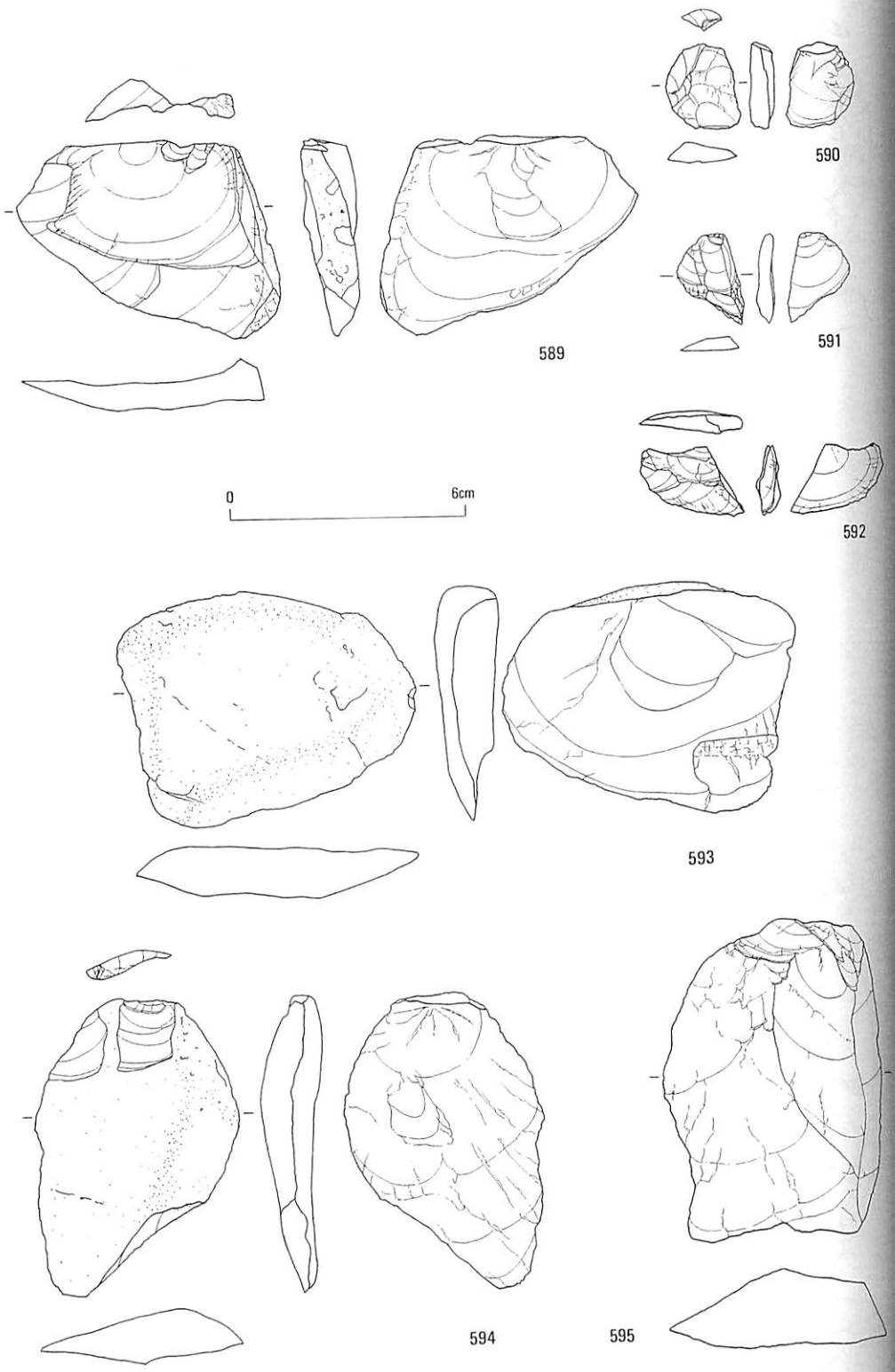

第204図　14－C地点石器実測図　5)



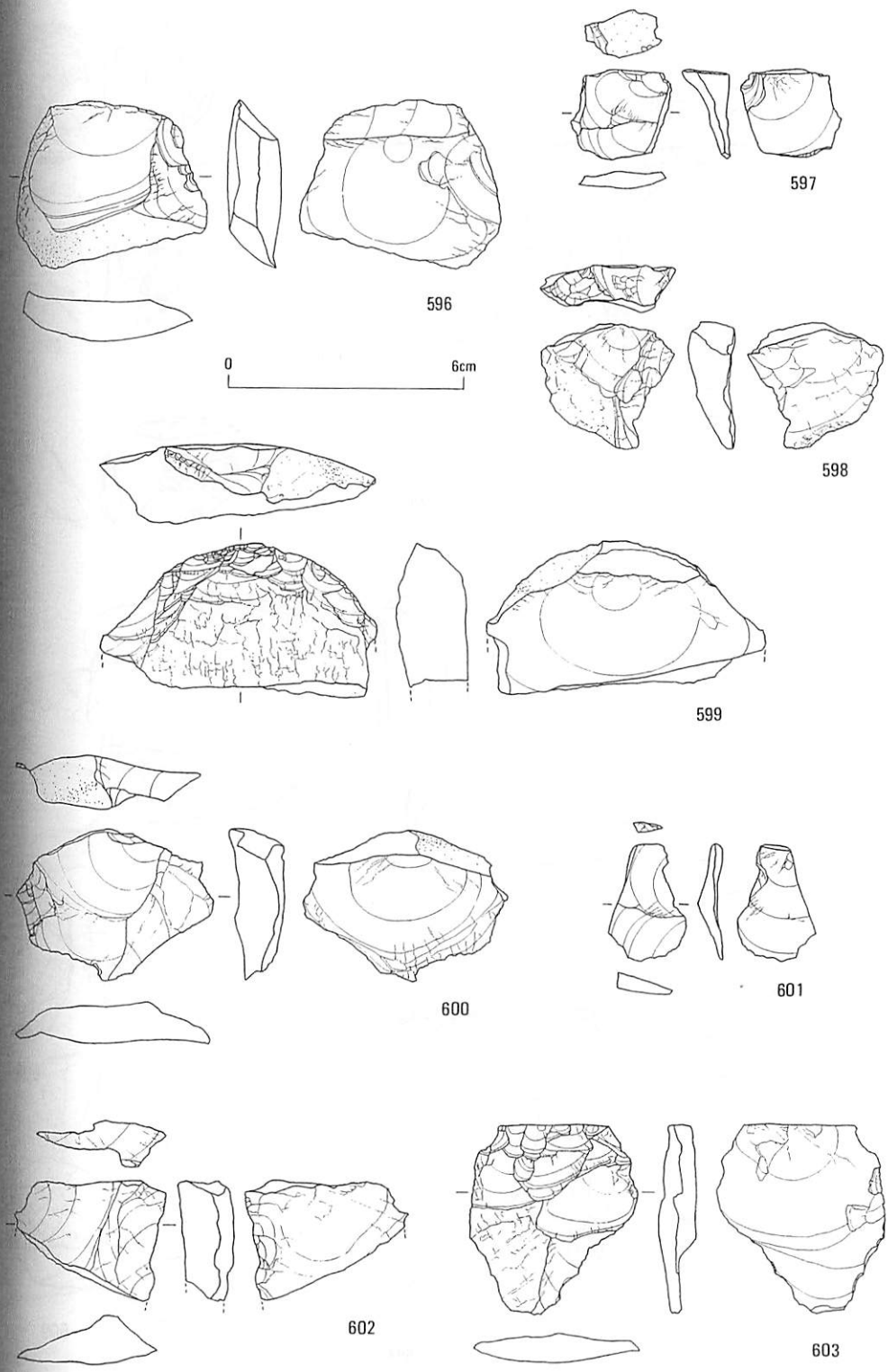

第205図　14－Ｃ地点石器実測図　6)



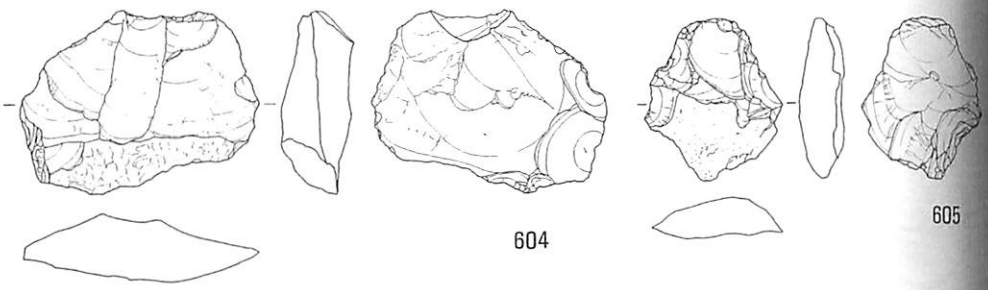

第206図　14－C地点石器実測図　7）

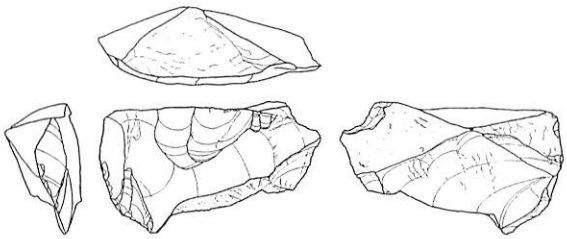


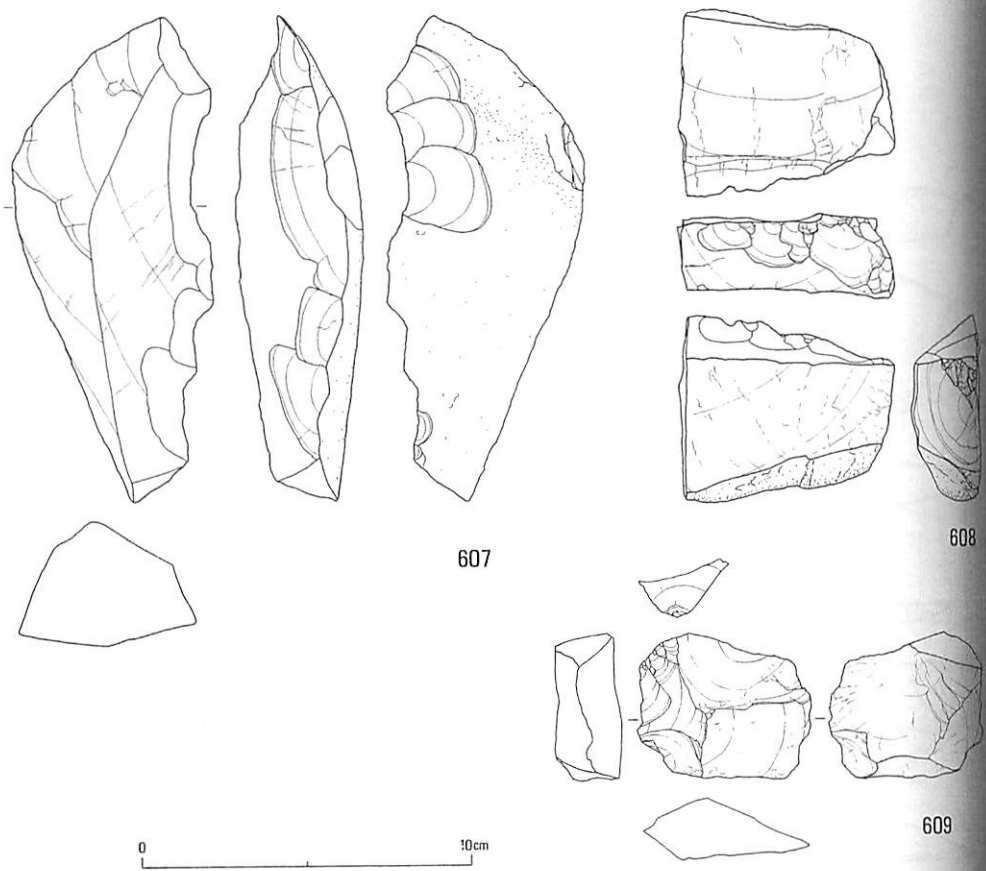

第207図　14－Ｃ地点石器実測図　8）



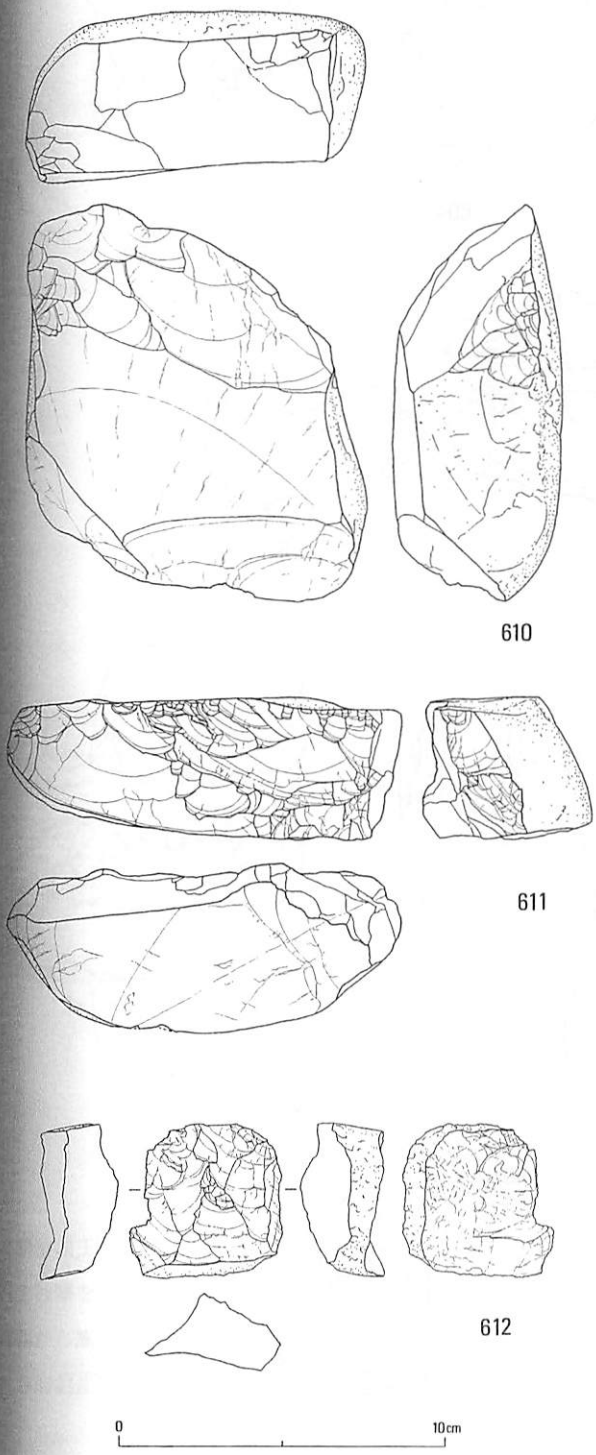

第208図　14－C地点石器実測図　9）




第209図　14－Ｃ地点石器実測図　10）



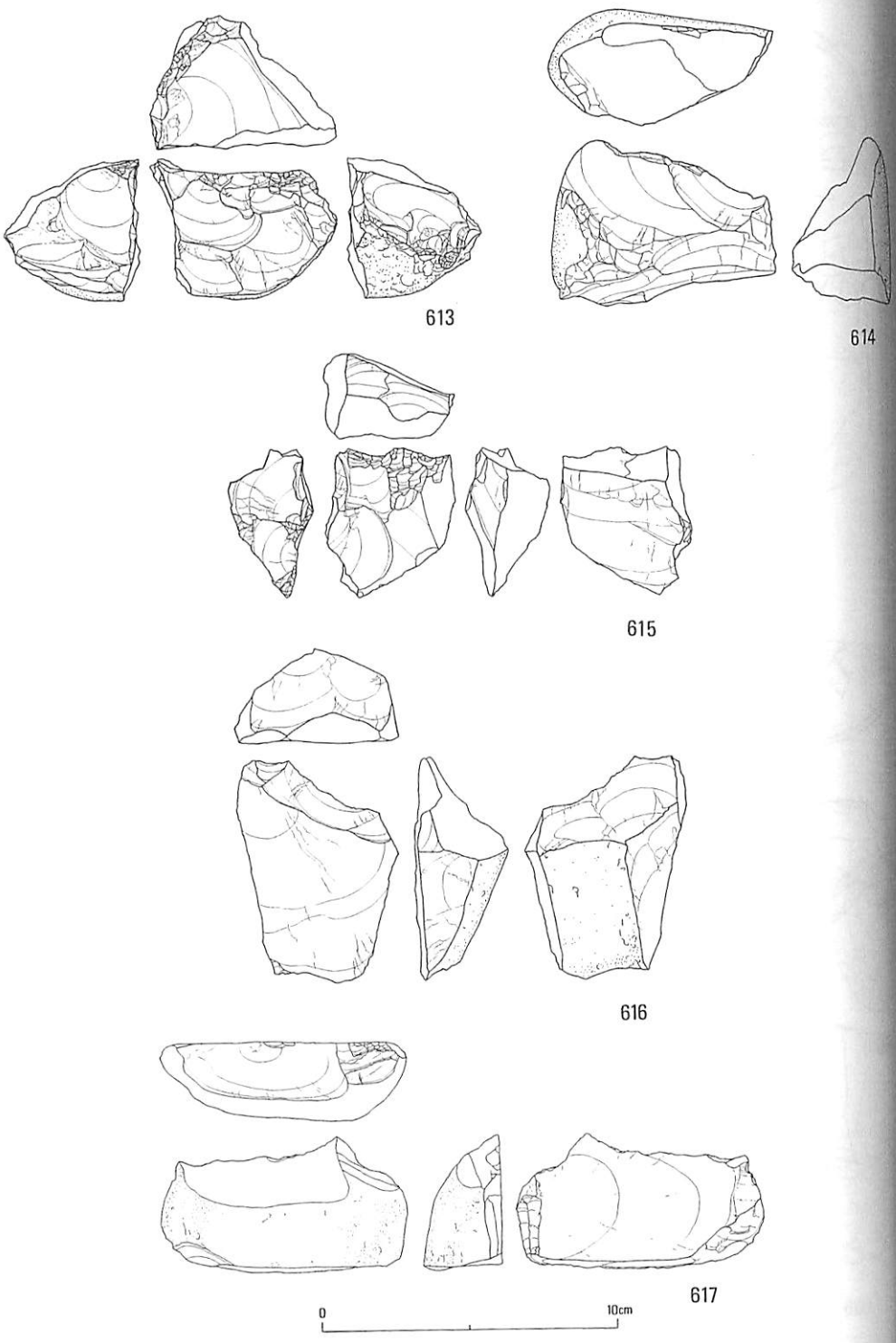

第210図　14－C地点石器実測図　11)

E)石　　核(第209図～211図)

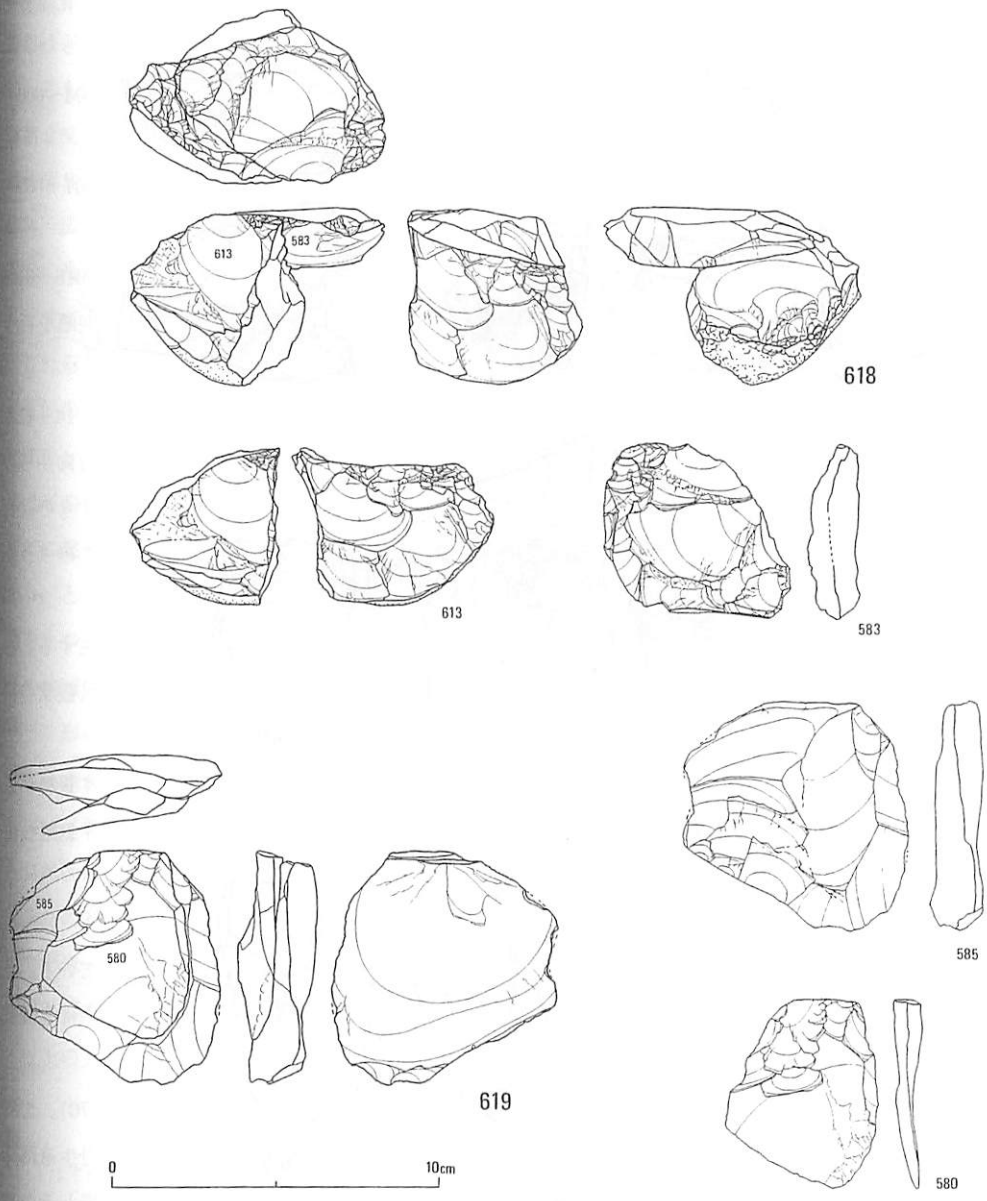
石核は15点出土している。石核の素材としては剥片素材のもの(No.604～606・609・615～617)，分割礫素材のもの(No.607・608・610～612)，礫素材のもの(No.613・614)がある。剥片素材のものは，規格的な剥片を連続的に剥離しそれを石核素材に用いるといった意図は認められず，厚めの剥片を任意に選択しているにすぎないと思われる。分割礫素材のものについても同様のことがいえよう。

打面と作業面との関係をみると，それぞれが固定的なものが多い。これらは1)剥片素材で背面を打面とし，主剥離面を作業面とするもの(No.604・606・616)，2)剥片素材で主剥離面を打面とし，背面を作業面とするもの(No.609・617)，3)分割礫素材で自然面を打面とし，分割面を作業面とするもの(No.610・611)に分類することができる。No.612は分割礫素材であるが，背面に相当する面を作業面としており，2)に類するものと考えることができる。No.608も打面と作業面が固定的なものである。打面と作業面が固定的でないものも一定量あり，1)それぞれを交互に入れ替えるもの(No.605・607)，2)それぞれを頻繁に転移するもの(No.613～615)に分けられる。

剥片剥離に伴う打面や作業面の調整についてはNo.613・615に細か




第211図　14－Ｃ地点石器実測図　12）




第212図　14－C地点石器実測図　13)

な調整加工が認められるが，大部分のものは調整を介さずに剥片剥離を行っている。ただNo.616は稜上加撃を行っており注意される。本例は形態上翼状剥片石核に似るが，打面を形成する剥離が背面側から施されており，それとは異なるものであろう。

目的剥片はおおむね小形で，形状は横長あるいは長幅比１：１前後のものである。

### 6．剥片剥離技法

14－C地点からは15点の石核が出土している。これらのうち剥片剥離技法が言及できるものを，目的剥離の形状を基に分類すると次のようになる。

Ⅰ類：幅広の縦長剝片，寸づまりな剝片あるいは貝殻状の剝片を生産するもの。次の三つに細分できる。

1）剝片素材の石核を用い主剝離面，背面あるいは両面で剝片剝離を行うもの(No.604～606・609)

2）分割礫素材で，分割面あるいは分割面と自然面の両方で剝片剝離を行うもの(No.607・608・610・611)

3）礫または剝片を素材とし，打面と作業面を転移しながら剝片剝離を行うもの(No.613～615)

Ⅱ類：横長剝片を生産するもの。剝片素材の石核を用い，主剝離面または背面で剝片剝離を行う(No.616・617)。

次に14－Ｃ地点出土の剝片はこれらの石核と合致するものであるかどうかを検討する。14－Ｃ地点の剝片の背面の剝離方向をみると，主剝離面の方向と同一か上からの斜交あるいは多方向からのものが圧倒的に多い。また自然面を残すものが多く，さらに背面にポジティヴな面を残すものはわずかに認められるにすぎず，ほとんどのものがネガティヴな面で背面を構成している。このような剝片は上記の石核のうちⅠ－２)類あるいはⅠ－３)類から得られたものと思われる。

また剝片を素材とし，主剝離面側を中心に剝片剝離を行うⅠ－１)類石核も一定量存在することから，14－Ｃ地点においてはⅠ類，すなわち幅広の縦長剝片，寸づまりな剝片あるいは貝殻状の剝片を剝離する技法が主要な技術基盤であったと思われる。

なお当該地区からは両設打面の石核から連続的に縦長剝片の生産が行われたことを示す資料がある(No.548)。これに関するものは１点のみであり，14－Ｃ地点の石器群がこのような剝片剝離技法を本来的に保持していたかは検討を要するところである。

## 7．まとめ

14－Ｃ地点出土の石器群は定形的なトゥールを含まずＲＦ・ＵＦが組成の中心となっている。また層位的出土状況からの当該石器群の編年的位置付けは困難であり，剝片剝離技法を中心に位置付けを行わざるを得ない。

このような中で手がかりを与えてくれるものとして，斧状石器の破片に注目した(No.570)。これは自然面を打面とするもので，背面は複数の剝離面からなりそこに磨痕が認められる。丹生遺跡においては１－Ｂ地点で斧状石器が多量に出土している。これらの特徴は片側に自然面を残しその裏側を剝離により調整しているもので，調整している側に磨痕が認められるものが多い。14－Ｃ地点における磨痕をもつ剝片は打面(自然面)と背面(調整面)との角度からも，もともと斧状石器の刃部を形成していたものと推定できる。

西日本において岩宿時代で斧状石器を組成にもつ石器群は熊本県曲野遺跡第１文化層[4]，佐賀県馬部甚蔵山遺跡５－ｂユニット[5]，枝去木山中遺跡Ⅰ期石器群[6]，広島県西ガガラ遺跡第１地点１～２ブロック[7]，鴻の巣遺跡出土石器群[8]，岡山県野原遺跡群早風Ａ地点第Ⅰ期石器群[9]，戸谷遺跡第１地点第Ⅹ層出土石器群[10]，小林河原遺跡出土石器群[11]，兵庫県七日市遺跡第Ⅱ文化層[12]，板井・寺ケ谷遺跡下位文化層[13]が挙げられ，これらはＡＴ降灰以前のものと理解されている。このことから14－Ｃ地点の石

器群もＡＴ降灰以前の所産である可能性が高い。それではＡＴ降灰以前における西日本の石器群の様相はどのようなものであろうか。さきに挙げた斧状石器を共伴する石器群以外でＡＴ下位とされているものとして長崎県百花台遺跡第Ⅶ層出土石器群[14]，大分県駒方Ｃ遺跡下部石器群[15]，駒方古屋遺跡第２文化層[16]，百枝遺跡Ｃ地区第Ⅲ文化層[17]，岩戸遺跡第２～３文化層[18]，同Ｅ～Ｋ文化[19]，熊本県下城遺跡第２文化層[20]，狸谷遺跡Ｉ石器文化[21]，石飛分校遺跡第４文化層[22]，鹿児島県上場遺跡第６層出土石器群[23]，広島県冠遺跡群Ｄ地点第Ⅱ文化層[24]，地宗寺遺跡第Ⅵ層出土石器群[25]，下本谷遺跡第Ⅳ層出土石器群[26]，島根県横道遺跡第Ｖ層出土石器群[27]，新槇原遺跡第7層出土石器[28]，堀田上遺跡出土石器群[29]，古曽志清水遺跡出土石器群[30]，岡山県恩原遺跡Ｒ文化層[31]がある。

これらのなかで最古期に位置付けられるものとして曲野遺跡第１文化層が挙げられる。これはＡＴ下位の黒色帯のさらに下位から出土しており，石核は打面転移を繰り返すものや求心状剥離あるいはチョッピング・トゥール状の交互剥離により目的剥片を生産している。石器組成は台形様石器・切出形のナイフ形石器，局部磨製石斧をもつものである。その後の様相としては，ＡＴ降灰の時期までに縦長剥片を生産する技法が現れ，ナイフ形石器も一側縁加工，二側縁加工など多様なものとなり，とくに縦長剥片の打面を残した一側縁加工のナイフ形石器が特徴的に存在する。また両設打面をもつ石核から整った縦長剥片が生産され二側縁加工のナイフ形石器が発達する。これらはすべての地域で同じような変遷をたどったものではなく，縦長剥片剥離技法と結びついた二側縁加工のナイフ形石器は東九州で特に発達をとげ，また中国山地での出土例から台形様石器は河瀬正利・藤野次史氏[32]が指摘するように，その存続期間にある程度の幅が想定できる。

14－Ｃ地点出土の石器群の主要な剥片剥離技法は打面を転移しながら，あるいは分割礫の分割面と自然面から剥片を生産するもので，西日本のＡＴ下位の石器群との共通性を指摘できる。また剥片素材の石核の主剥離面側から貝殻状の剥片を生産する技法は，北陸地方の立野ケ原石器群[33]や東北地方の米ヶ森型台形石器を伴う石器群[34]にみられるものであり，近年山陰地方日本海側においても台形様石器を伴ってこの種の石核が出土している[35]。

以上のことから14－Ｃ地点出土石器群はＡＴ降灰以前の後期岩宿時代前半に遡るものと思われる。

（湯　村）

註

1) 『丹生綜括編』(昭和43年)。
2) 註１)，第106•107図。
3) 註１)，に同じ。
4) a)江本直『曲野遺跡Ⅱ—一般国道３号松橋バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査報告(第Ⅲ次調査報告)—』(熊本，昭和59年)；b)浦田信智『曲野遺跡Ⅲ　一般国道３号松橋バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査報告(第Ⅳ次調査報告)』(熊本，昭和60年)。
5) 田島龍太『馬部甚蔵山遺跡—県営農業基盤整備事業に伴う文化財調査報告—』(唐津，昭和63年)。
6) 田島龍太『枝去木山中遺跡—枝去木幹線水路建設に伴う文化財調査報告』(唐津，平成２年)。
7) 河瀬政利・藤野次史『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅵ(東広島，昭和63年)。
8) 河瀬政利・藤野次史『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅶ(東広島，平成元年)。
9) 平井勝『野原遺跡群早風Ａ地点』(岡山，昭和54年)。
10) 鎌木義昌・小林博昭「戸谷遺跡」(「岡山県史」考古資料所収，岡山，昭和61年)。

11）第７回中国四国旧石器文化談話会（平成２年）において，岡山理科大学白石純氏により口頭発表がなされている。
12）久保弘幸・藤田淳『七日市遺跡（I）（旧石器時代遺跡の調査）』（神戸，平成２年）。
13）山口卓也・久保弘幸・藤田淳「丹波地方西部における旧石器時代集落―春日・七日市遺跡と板井・寺ヶ谷遺跡―」（『第四紀研究』第27巻第４号所収，東京，平成元年）。
14）田川肇・副島和明『百花台遺跡』（長崎，昭和60年）。
15）坂本嘉弘・吉留秀敏・牧尾義則「駒方Ｃ遺跡の調査」（「大原野の先史遺跡　大分県大野郡大野町所在遺跡群発掘調査報告書」所収，大分，昭和59年）。
16）a）橘昌信『駒方古屋遺跡発掘調査報告書』（別府，昭和60年）；b）橘昌信『駒方古屋遺跡―第２次・第３次発掘調査報告書―』（別府，昭和62年）。
17）清水宗昭・栗田勝弘『百枝遺跡Ｃ地区（昭和59年度）大分県三重町百枝遺跡発掘調査報告書』（大分県三重町，昭和60年）。
18）芹沢長介『大分県大野郡清川村岩戸旧石器時代遺跡出土資料　岩戸』（仙台，昭和53年）。
19）坂田邦洋『大分県岩戸遺跡―大分県清川村岩戸における後期旧石器文化の研究―』（別府，昭和55年）。
20）緒方勉『下城遺跡Ⅱ―国道212号改良工事に伴う文化財調査―』（熊本，昭和55年）。
21）木崎康弘『狸谷遺跡九州縦貫自動車道（八代～人吉）建設に伴う埋蔵文化財調査』（熊本，昭和62年）。
22）池水寛治「熊本県水俣市石飛分校遺跡」（「考古学ジャーナル」第21号所収，東京，昭和43年）。
23）池水寛治「鹿児島県上場遺跡発見の住居址」（「鹿児島考古」第９号所収，鹿児島，昭和49年）。
24）妹尾周三『冠遺跡群Ｄ地点の調査』（広島，平成元年）。
25）三枝健二『地宗寺遺跡発掘調査報告―国道261号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査―』（広島，昭和57年）。
26）櫨井勝『下本谷遺跡第４次発掘調査概報』（広島，昭和58年）。
27）河瀬正利『横道遺跡―詳細分布調査報告―』（島根県瑞穂町，昭和58年）。
28）松本岩雄『新槇原遺跡発掘調査報告書』（島根県匹見町，昭和62年）。
29）角田徳幸『主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―堀田上・今佐屋上・米屋山遺跡の調査―』（松江，平成３年）。
30）丹羽野裕「島根県における旧石器時代研究の現状と課題―宍道湖周辺地域を中心に―」（『島根考古学会誌』第８集所収，松江，平成３年）。
31）稲田孝司「日本海南西沿岸地域の旧石器文化」（『第四紀研究』第29巻第３号所収，東京，平成２年）。
32）河瀬正利・藤野次史「まとめ」（『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅶ所収，東広島，平成元年）。
33）麻柄一志「いわゆる立野ケ原型ナイフ形石器の基礎的整理」（『旧石器考古学』33所収，京都，昭和61年）。
34）藤原妃敏「米ケ森技法と石刃技法」（『考古学ジャーナル』第309号所収，東京，平成元年）。
35）註30）前掲論文。

## 第28節　その他の資料

### １．資料構成

ここでは，重要な資料を出土しながらも，資料数が極端に少ない地点を一括する。ここには，第１地区Ｅ地点を，第１地区Ｊ地点，第２地区Ａ地点，第４地区Ｃ地点，第10地区Ｂ地点を含む（第213図）。この他に(財)古代学協会所蔵の太田亘氏の採集品（太田コレクション，第214～223図），および再実測・再検討はできなかったが，丹生論争との係わりという点で特に大型石器のみを主要な文献[1]から実測図の得られるものに限って再録しておく（第224～231図）。

## 2．調査概要

1－E地点は，昭和38年10月の第2次調査(三上班)によって調査され，56m²が発掘された。弥生時代の住居址[2]を検出することはできたが，岩宿時代に関しては見るべき成果がなかった。図示した2点はいずれも表採品である(No.620・621)。

1－J地点は，昭和42年8月の第6次調査(三上班)において調査された。図示した石核(No.622)はAトレンチ西南隅，丹生泥層直上の灰黄褐色粘土層(丹生泥層2次堆積層)上面より4cm下位で発見された[3]。他にBトレンチ表土層中出土の剝片1点が知られている。2－A地点は，正式な調査がなされていない。いずれも表採品である(No.623・624)。

4－C地点は，昭和39年10月の第3次調査(藤原班)で調査され，52m²が発掘されたが，岩宿時代の遺物は出土しなかった[4]。図示した資料は表採である(No.625)。

10－B地点は，昭和40年10・11月の第4次調査(小林班)によって発掘された。2×8mのトレンチ2本をL字型に設けた。弥生式土器多数が出土したが，石器に見るべきものはなかった。図示した資料は石核と理解しておく(No.626)。表採品である。

次に大型石器の一覧図(第214～231図)に収録された石器の出土地点の概要を記しておく。このうち，これまでの個別の地点についての記載で触れられなかった。1－A，1－F，2－B，6－A，7－B，7－C，8－C，8－E，9－Eの各地点の調査概要を簡単に記しておく。1－F地点は，昭和38年10月の第2次調査(早川班)によって調査され，3本のトレンチが開けられた。しかしながら，石器の発見はなかった[5]。

2－B 地点は，昭和37年10月の第1次調査(安井班)によって調査され，5本のトレンチが設けられた。第1トレンチ第2層(丹生泥層の再堆積)から，直径1.5mほどの不整円形の範囲に約100個の礫からなる“石群”が確認された。そして，この中に“山形刃割器”と剝片石器が確認されたという[6]。しかしながら，報文中の写真以外に詳細を知りえないというのが実情である。なお，第1層中には石鏃や縄文土器片が含まれていた。

6－A地点は，昭和38年10月の第2次調査の際に，地質班がトレンチを設けた以外に考古学的調査は実施されていない[7]。地点は不明だが，6地区出土とされている多数の大型石器が採取されている。

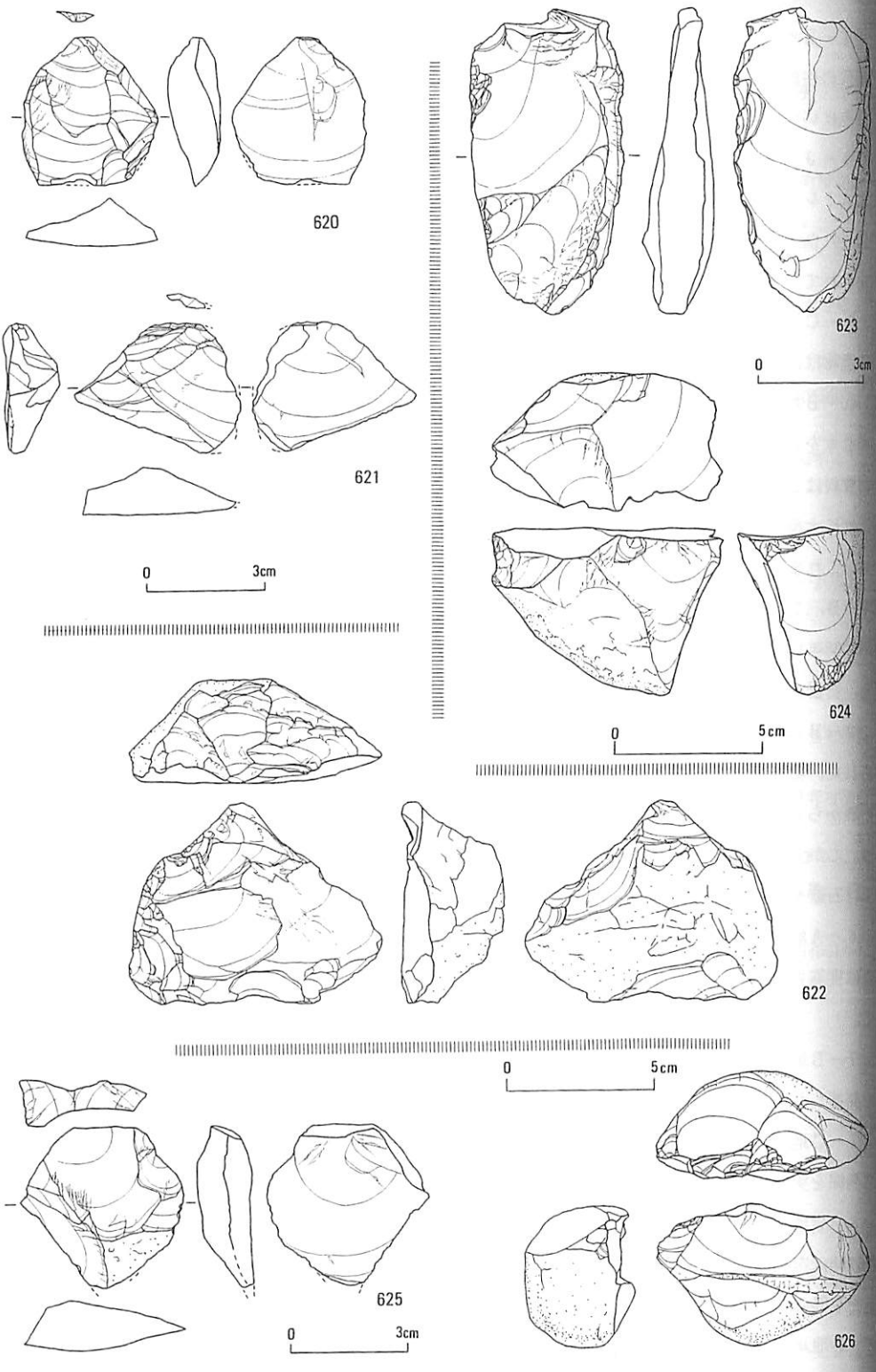
7－B地点は，昭和37年10月に実施された第1次調査(小林班)で，3本のトレンチを設け，36m²を発掘したが成果はなかった[8]。

7－C地点は，昭和38年10月の第2次調査(小林班)で調査された。2×10mのトレンチを設定して発掘を実施したが，成果はなかった[9]。

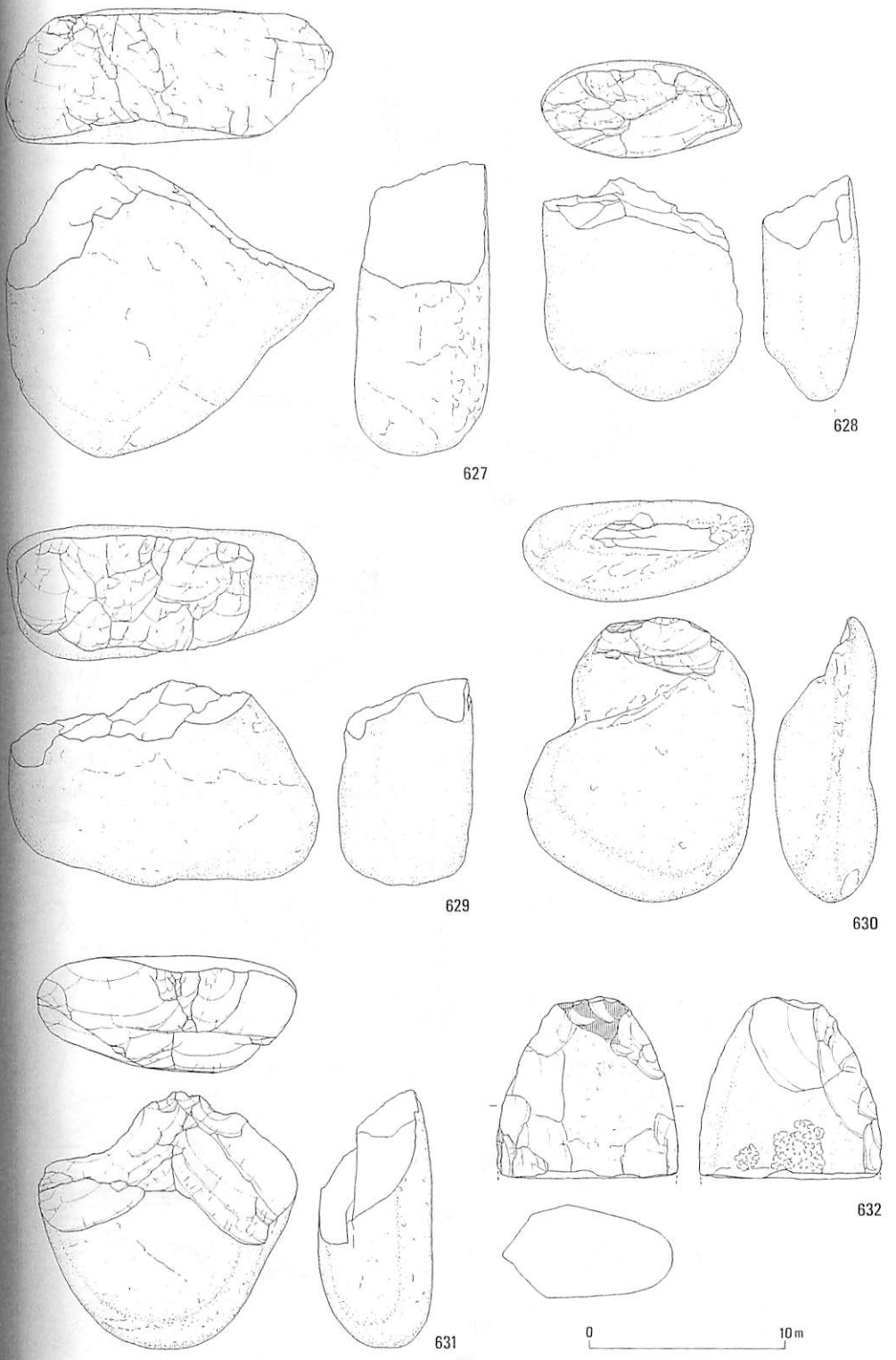
8－C地点は，昭和40年10・11月の第4次調査(小林班)で発掘が実施された。3本のトレンチを設け88m²を掘り拡げた。石鏃・弥生式土器などが出土したが，所期の目的に添うような出土状況も遺物も得られなかった[10]。

8－E地点は，発掘調査は実施されていない。9－E地点も同様である。

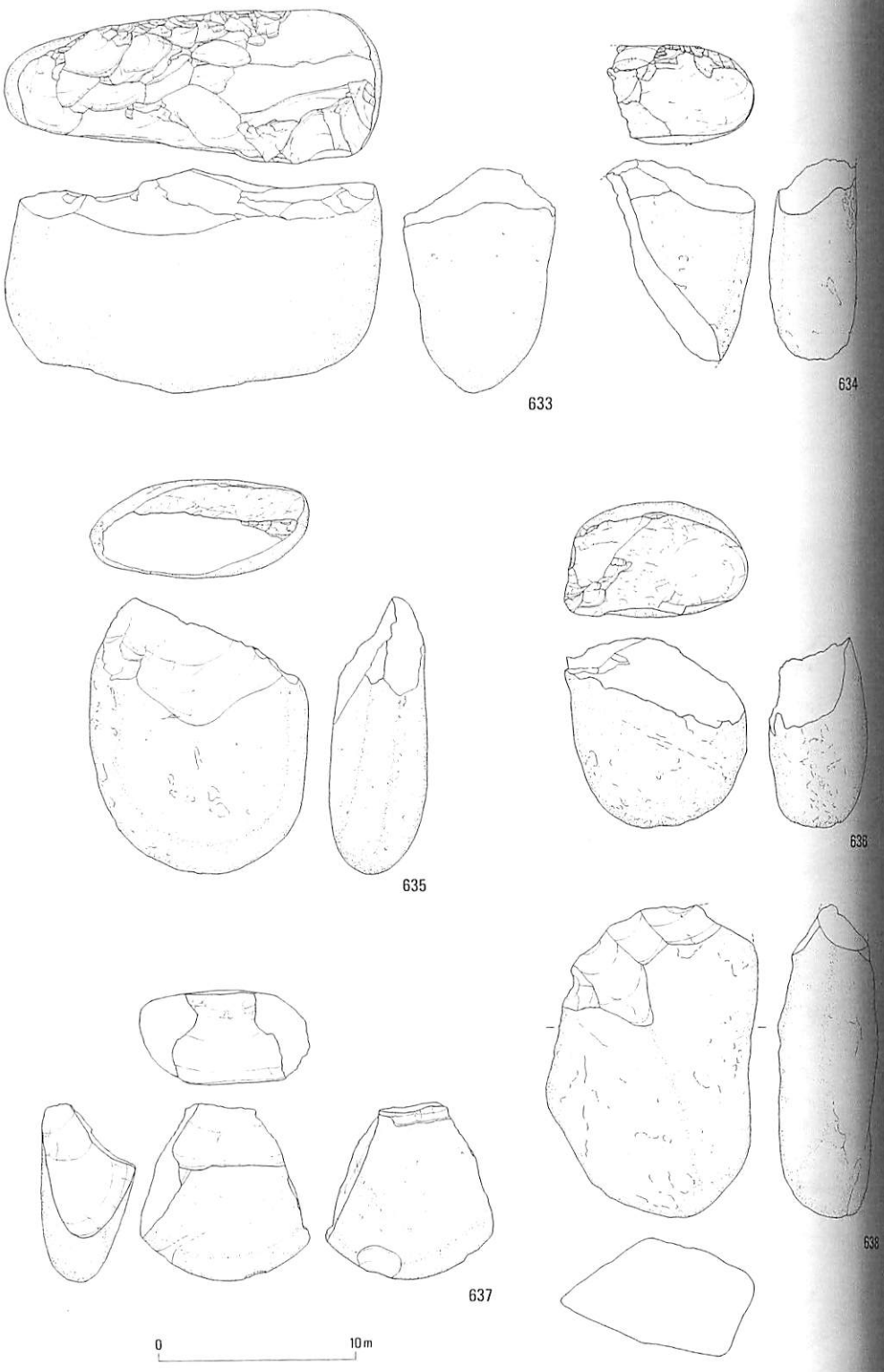
(鈴　木)



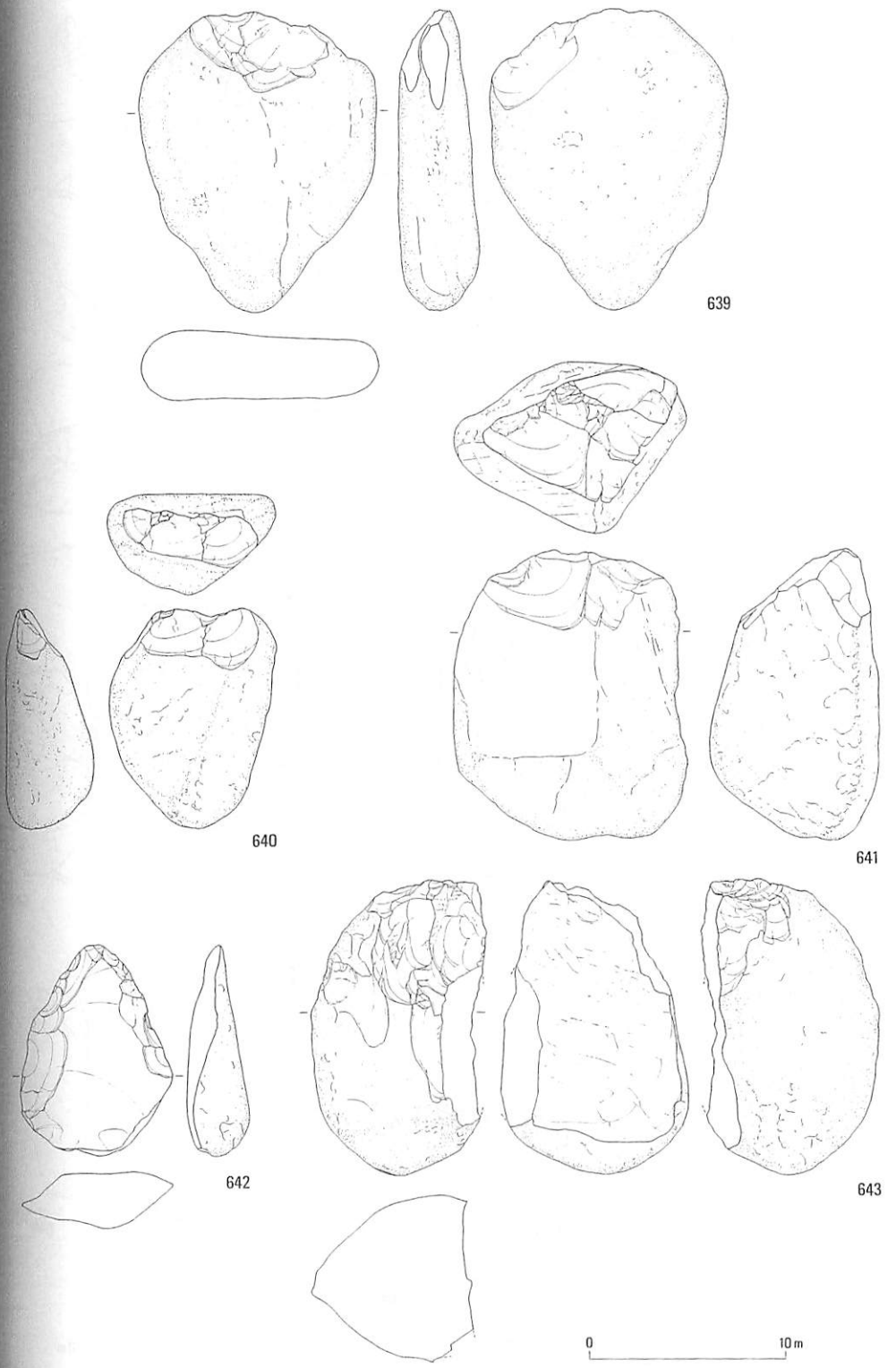

第213図　1－E，1－J，2－A，4－C，10－B地点石器実測図



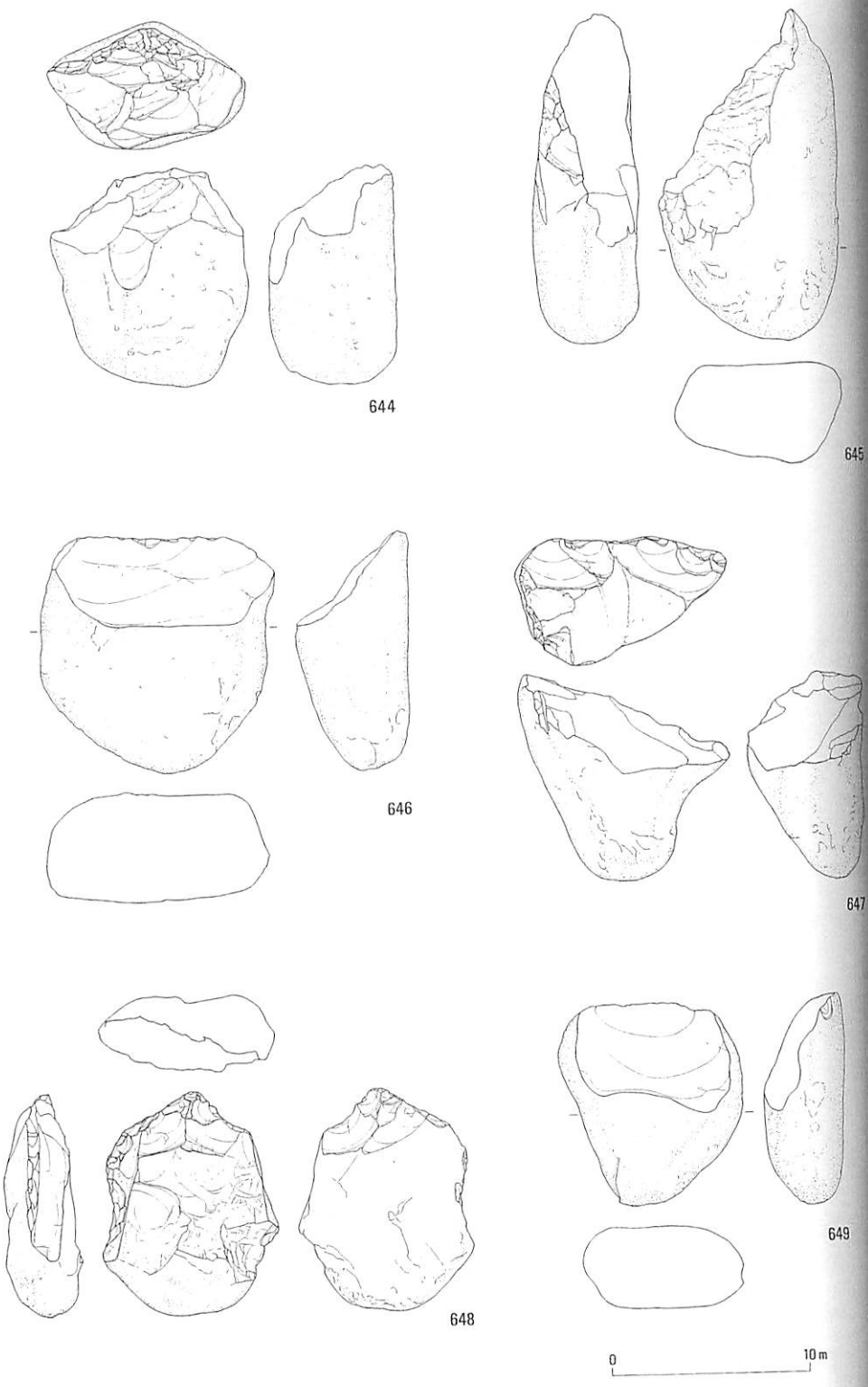

第214図　表採資料実測図（太田コレクション）　1）
1－A（No.627・628），1－C地点（No.629～632）



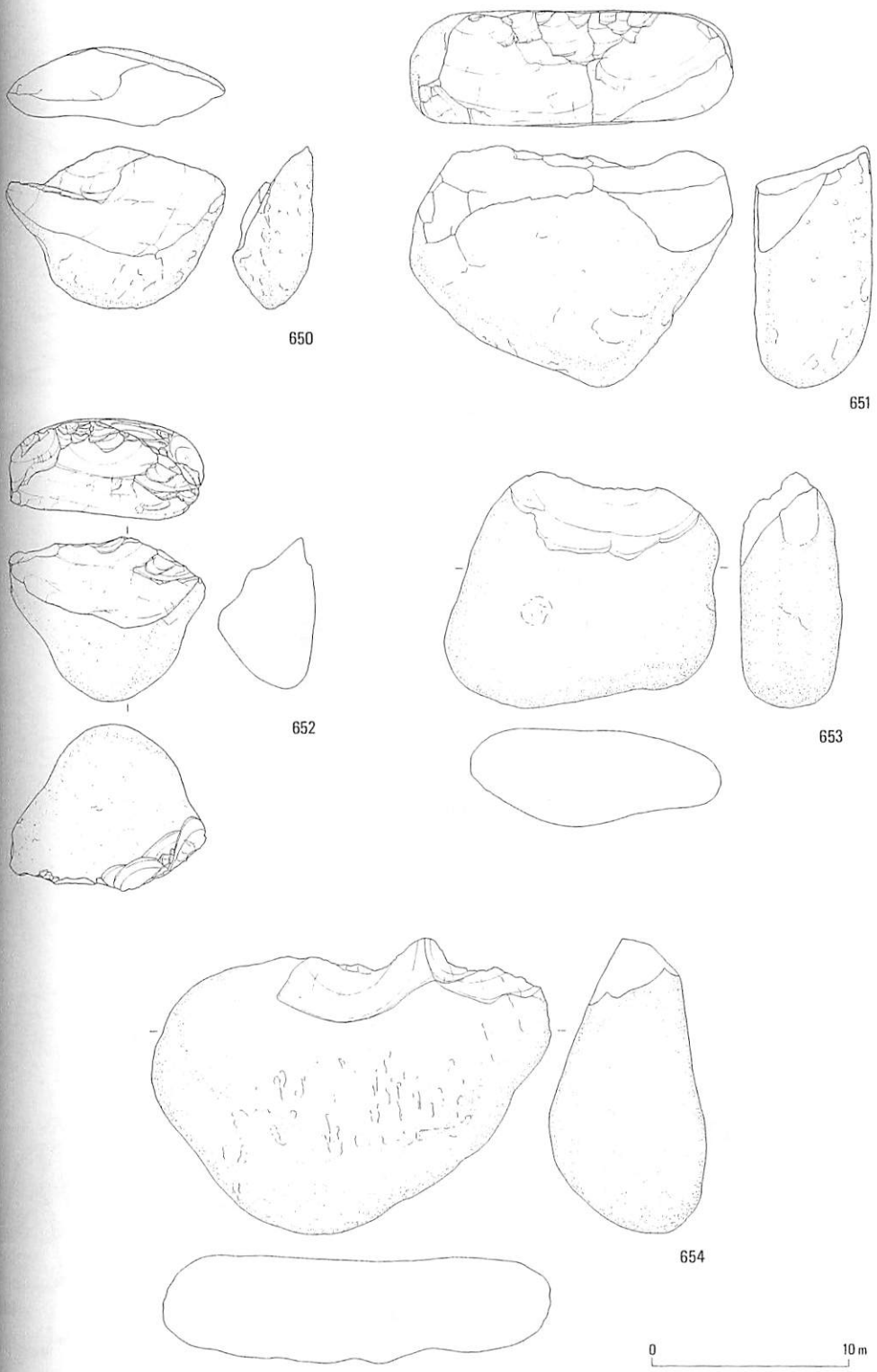

第215図　表採資料実測図（太田コレクション）　2）
第１地区(No.633)，２－Ｂ地点(No.634～638)



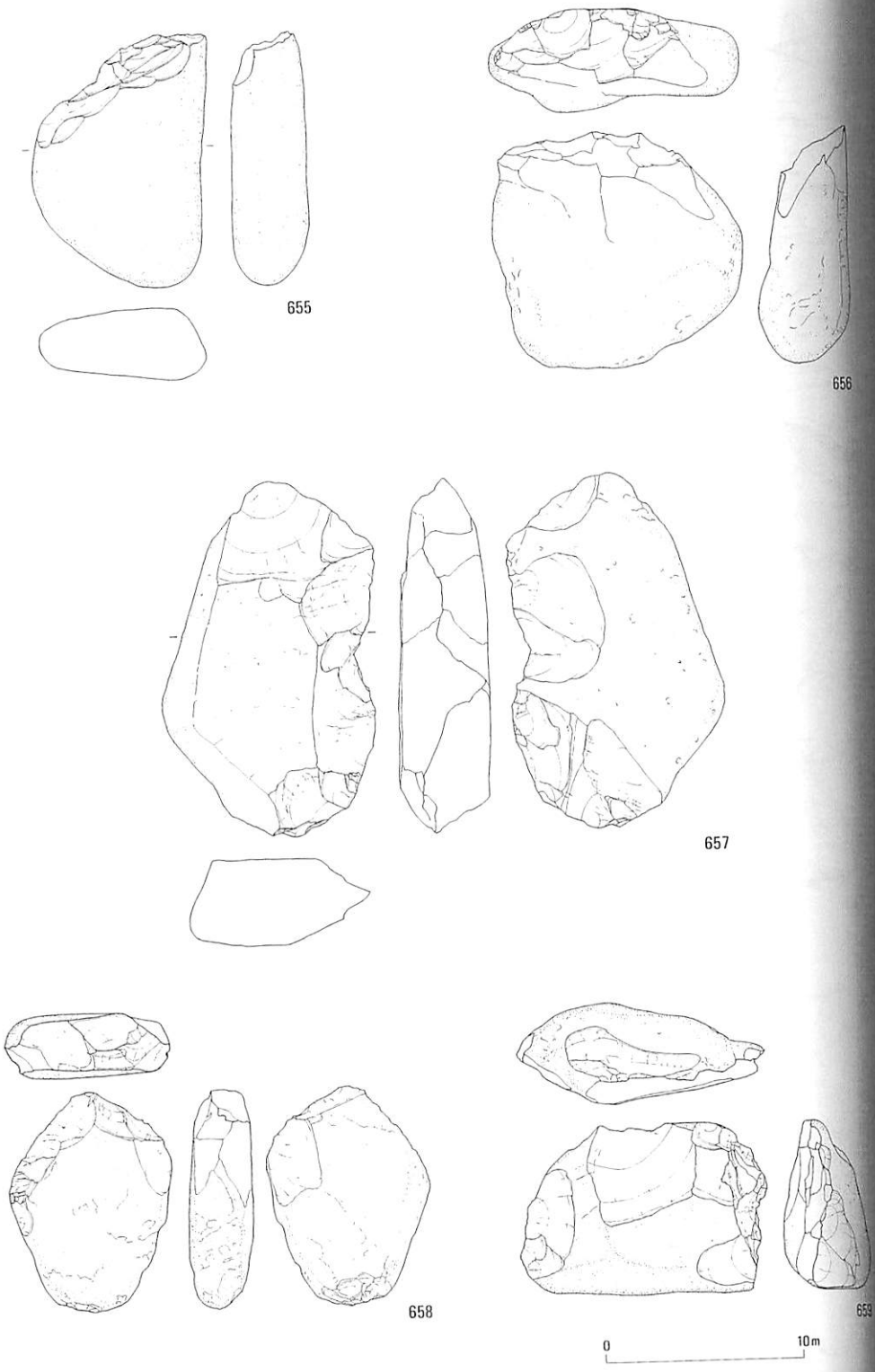

第216図　表採資料実測図（太田コレクション）　3）
2－B（No.639～641），2－F地点（No.642），第2地区（No.643）



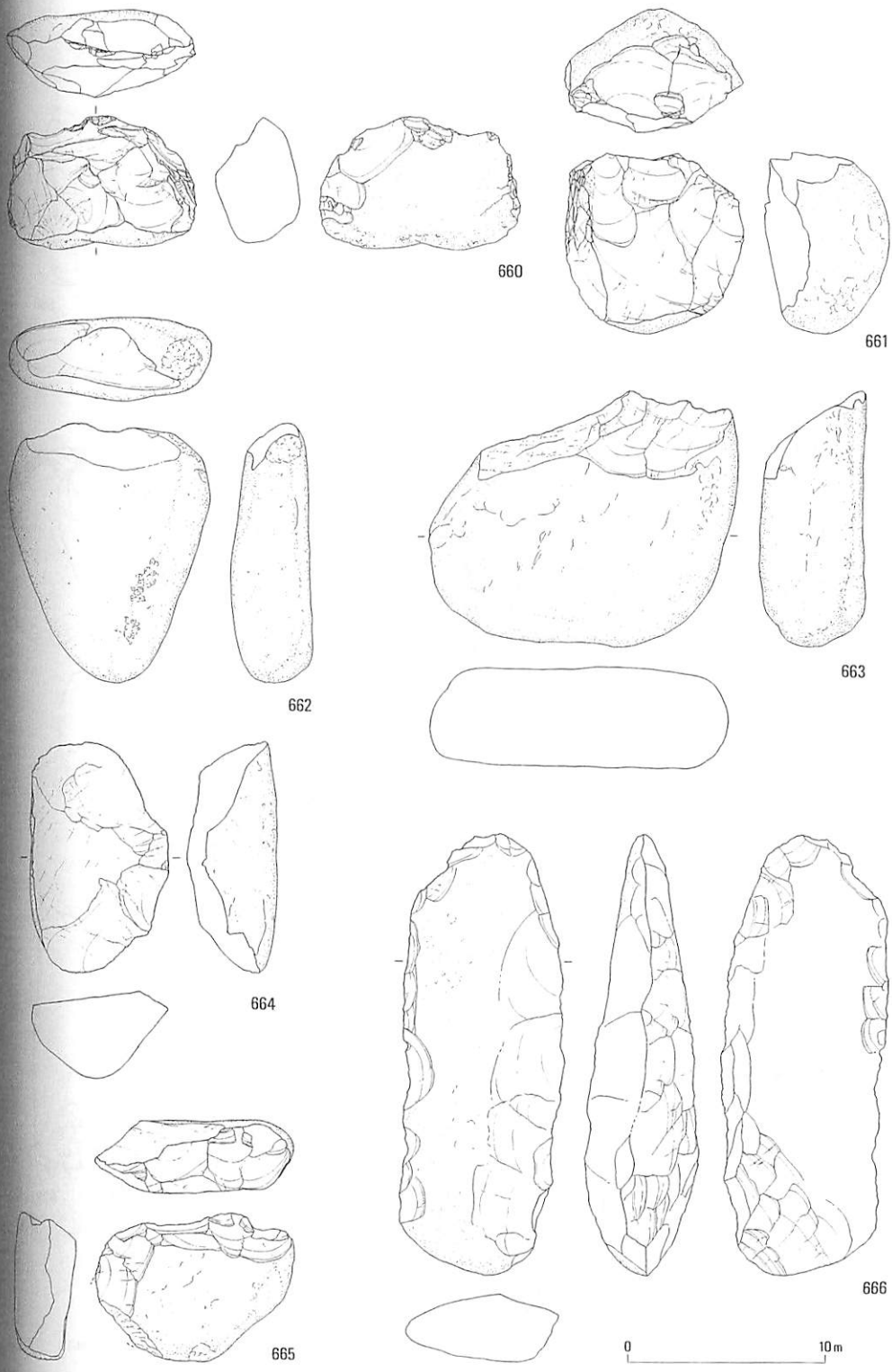

第217図　表採資料実測図（太田コレクション）　4）
第２地区



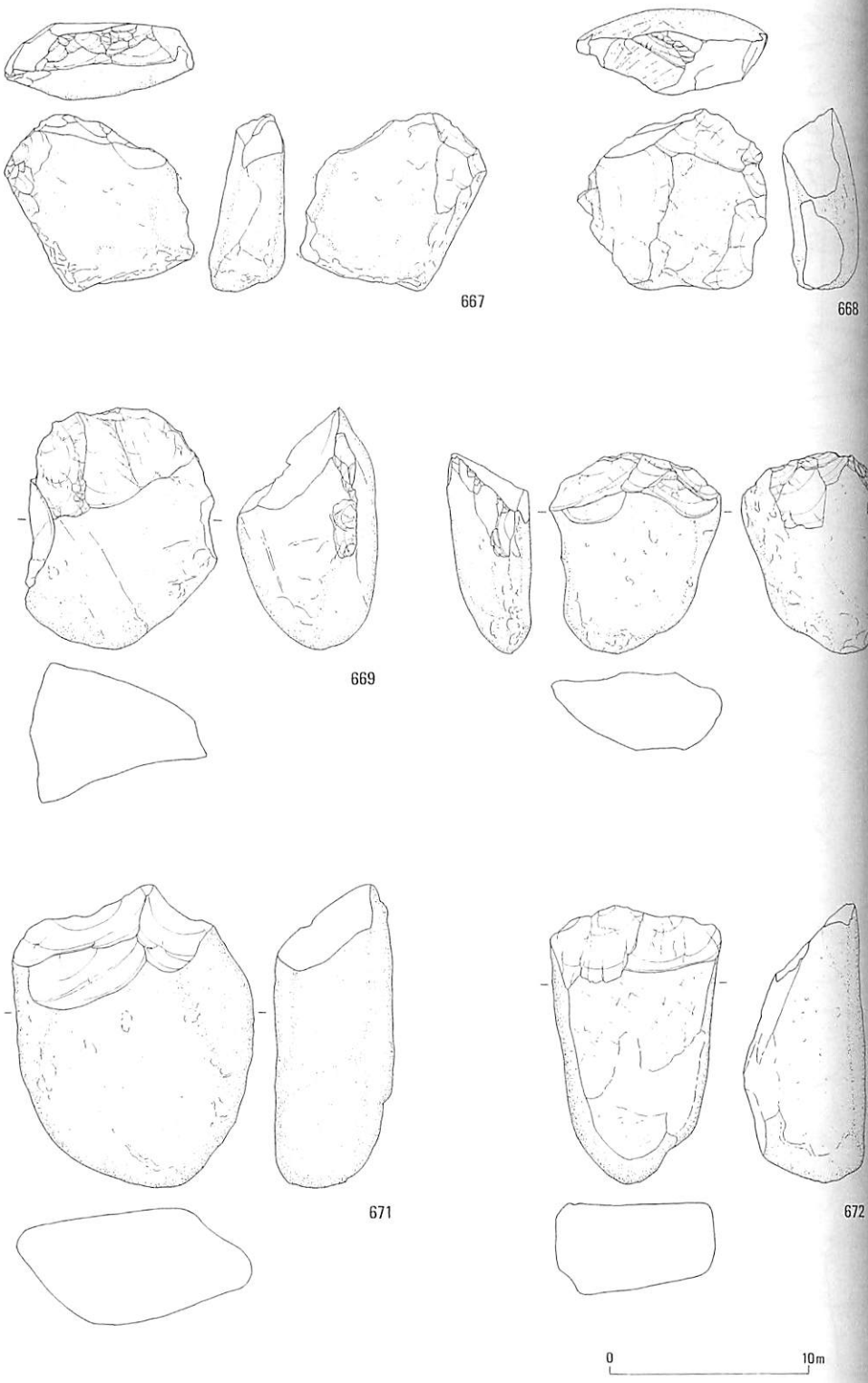

第218図　表採資料実測図（太田コレクション）　5）
第２地区(No.650)，４－Ａ(No.651)，４－Ｂ地点(No.652)，第４地区(No.653・654)



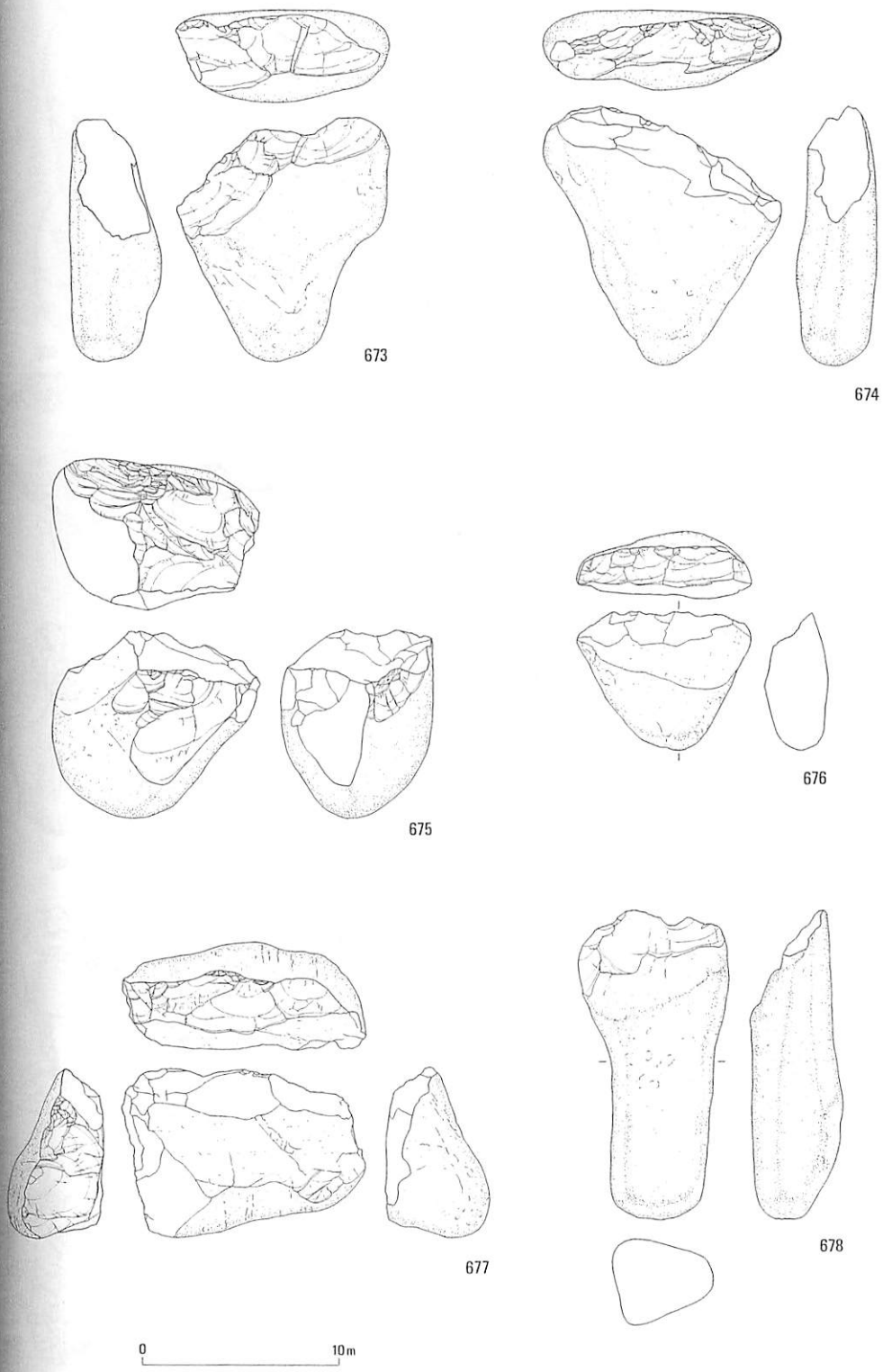

第219図　表採資料実測図（太田コレクション）　6）
第４地区(No.655)，６－Ａ地点(No.656・657)，第６地区(No.658)，７－Ｂ地点(No.659)



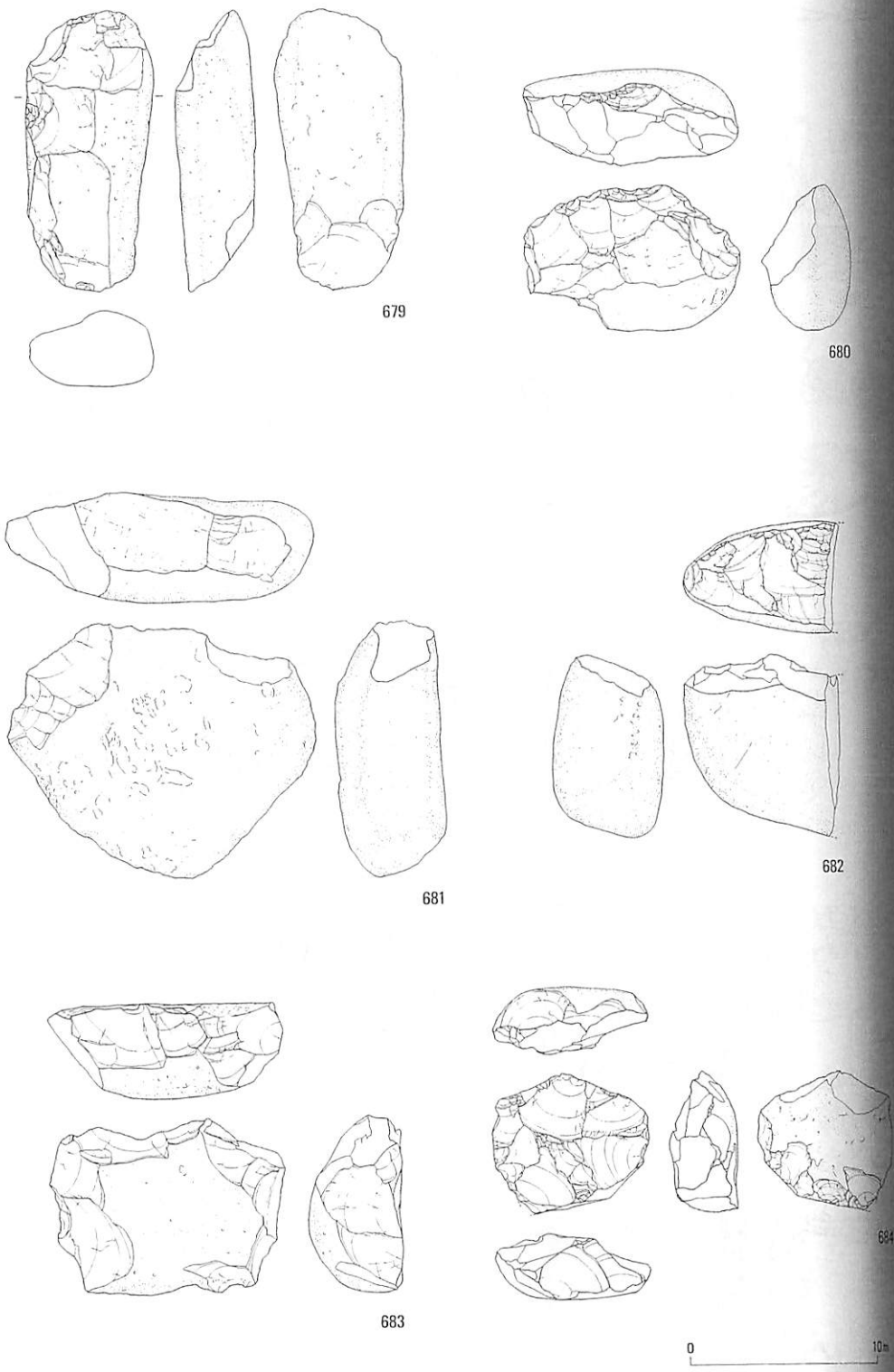

**第220図**　表採資料実測図（太田コレクション）　7）
第８地区（No.660・661），９－Ｂ地点（No.663），第９地区（No.662・664～666）



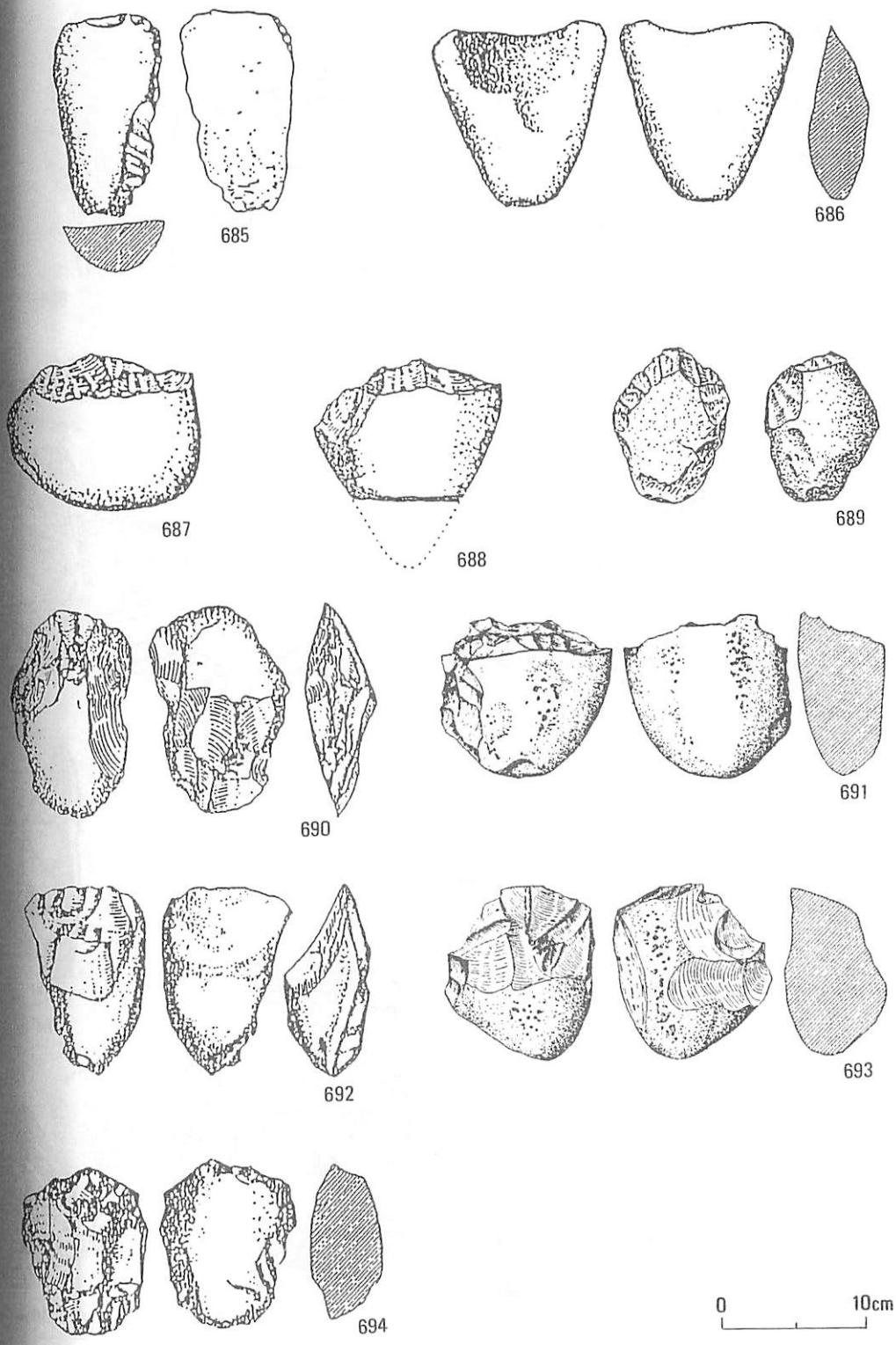

第221図　表採資料実測図（太田コレクション）　8）
14－A地点(No.667)，14－B地点(No.668～672)



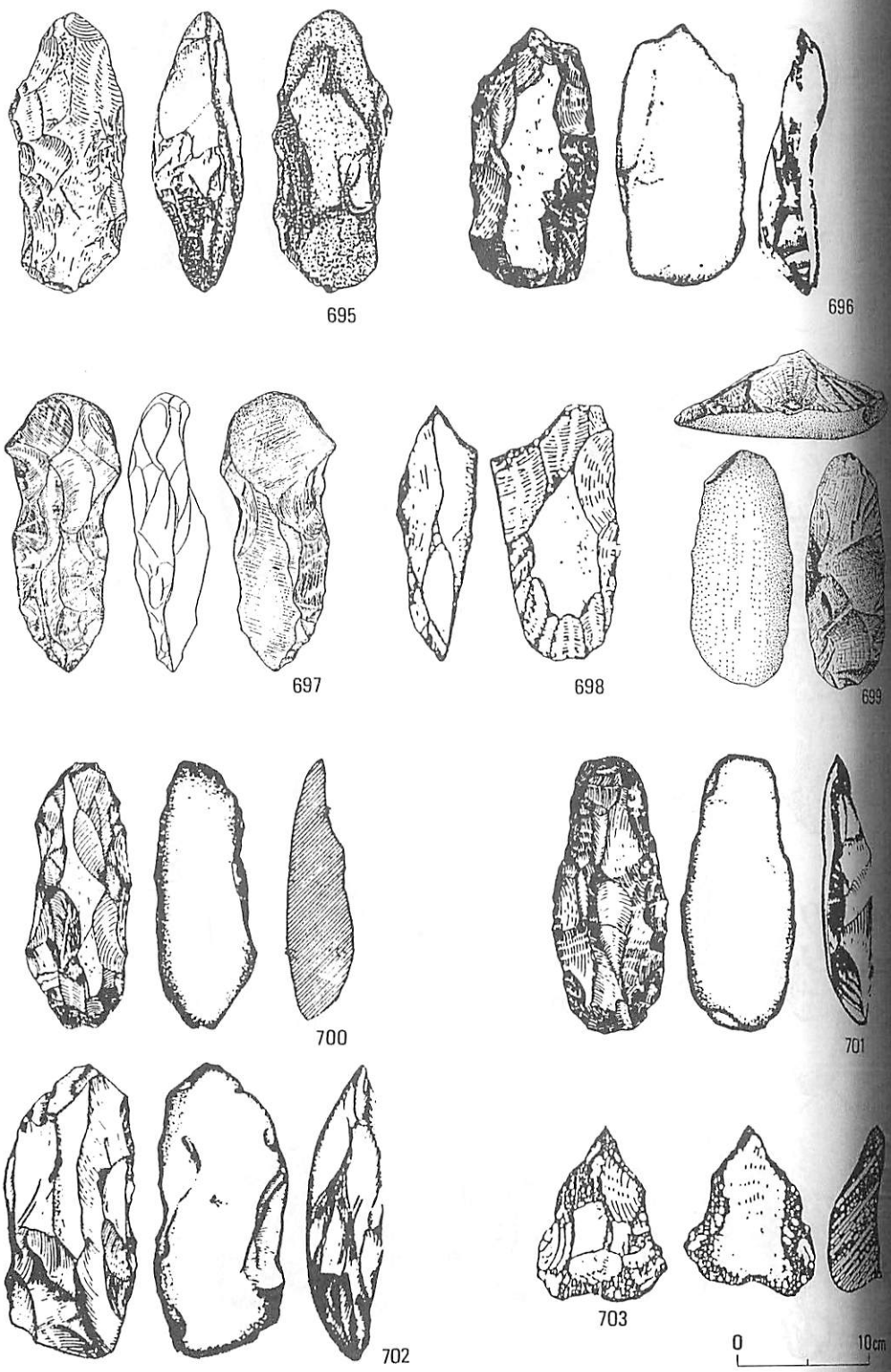

第222図　表採資料実測図（太田コレクション）　9）
14－Ｂ地点(No.673～676)，第14地区(No.677)，地区不詳(No.678)



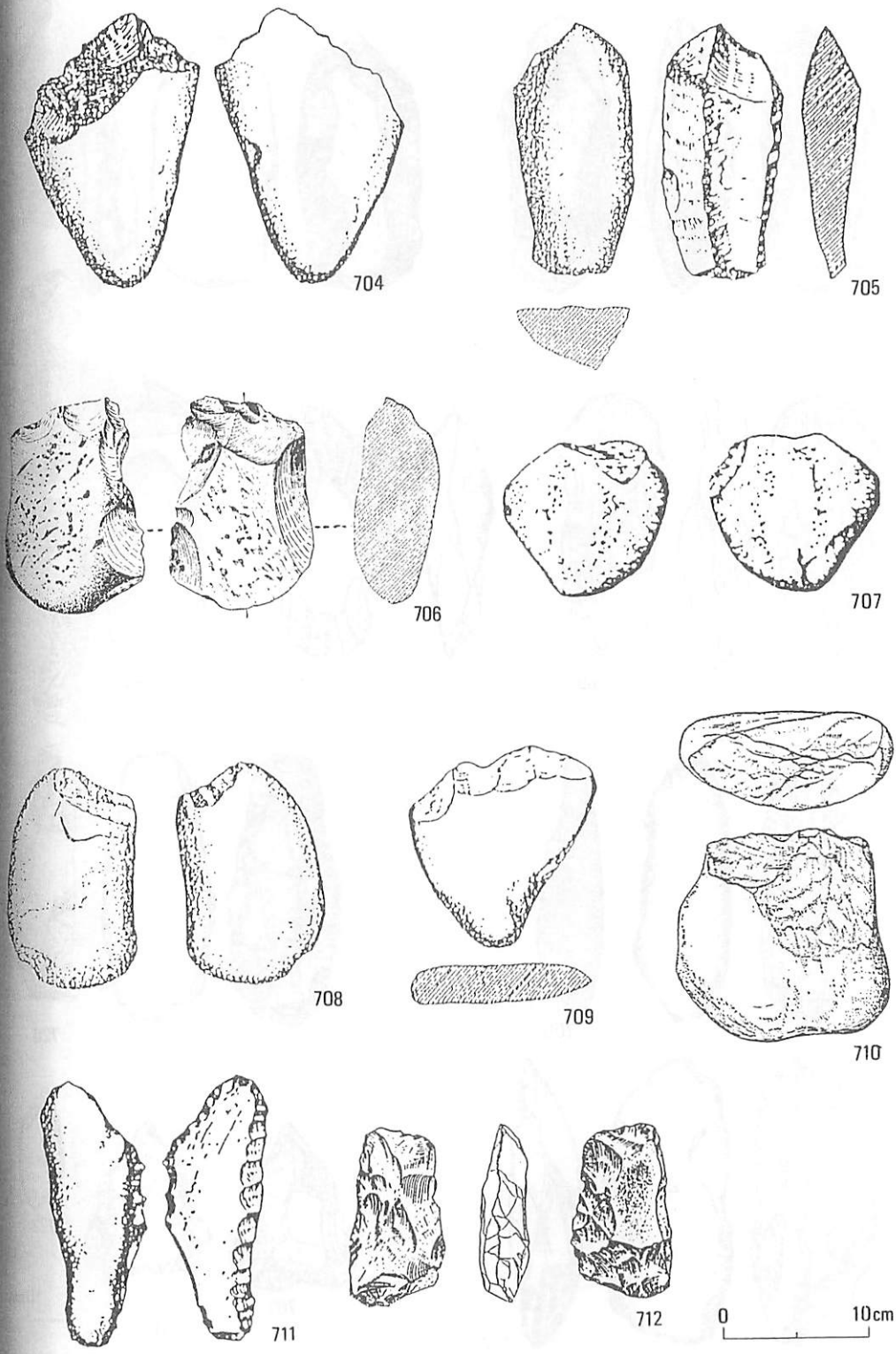

第223図　表採資料実測図（太田コレクション）　10）
地区不詳



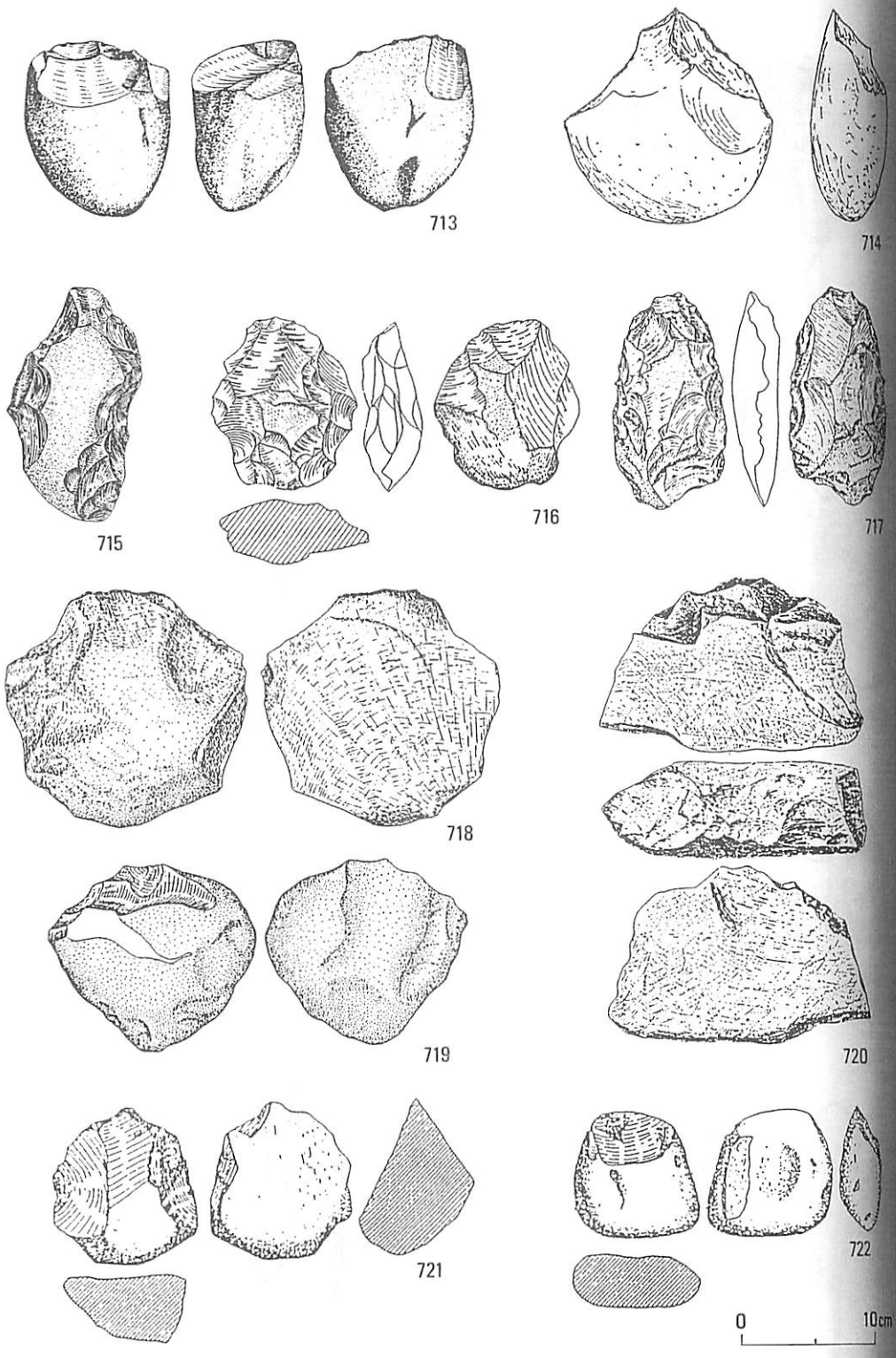

第224図　表採資料実測図　1）
1－A地点



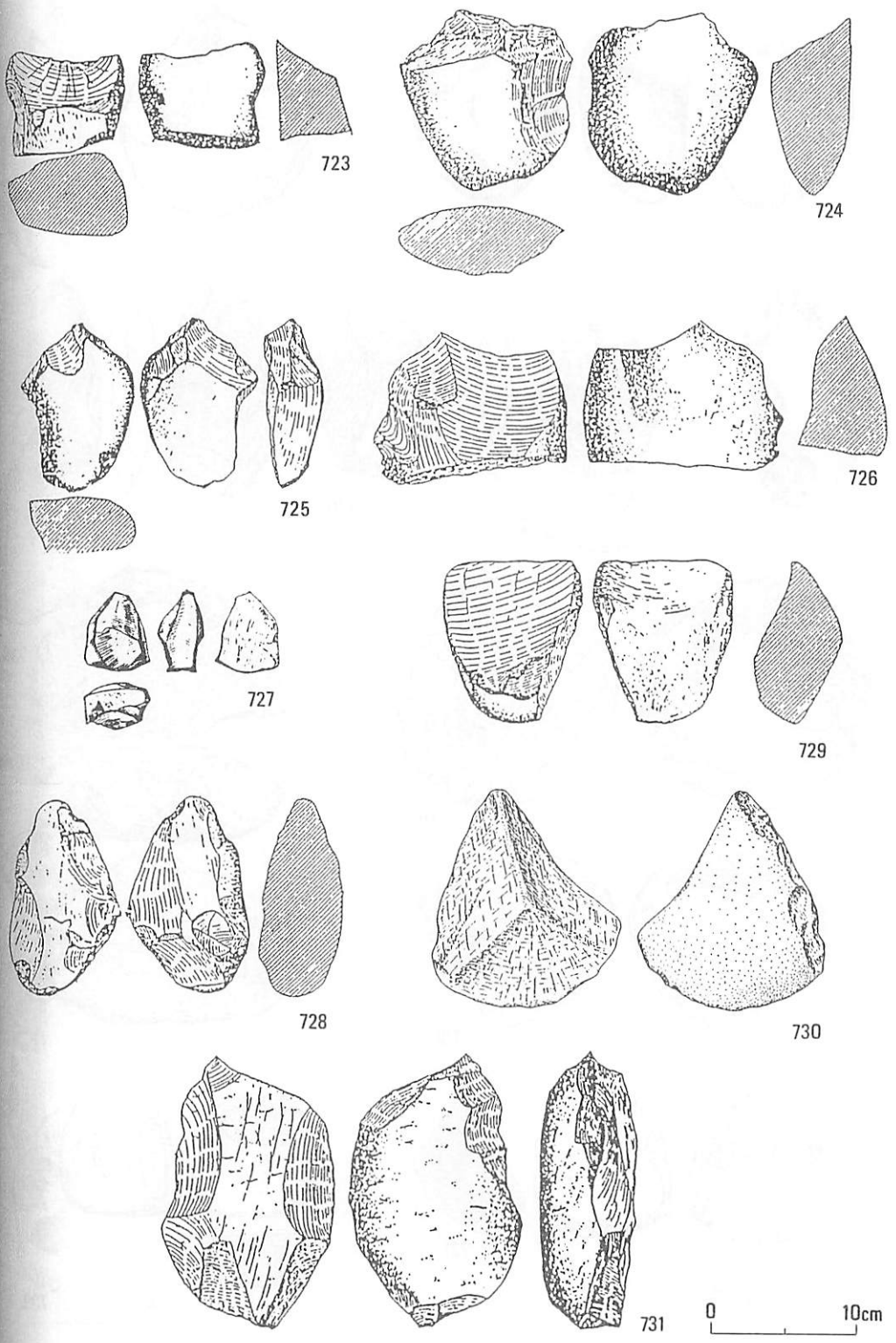

第225図　表採資料実測図　2)
1－B(No.695～699)，1－D(No.700・701)，1－E地点(No.702・703)



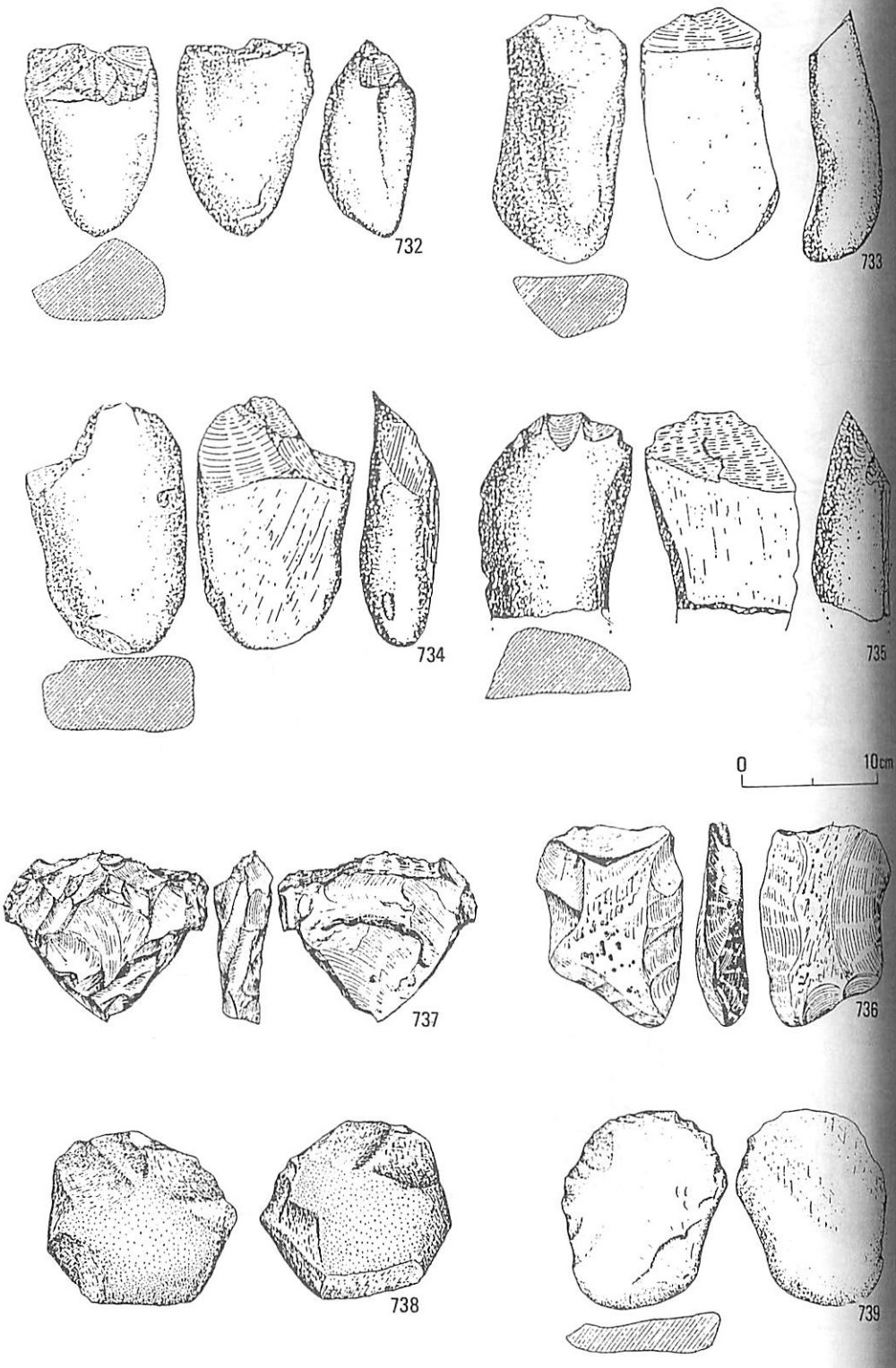

第226図　表採資料実測図　3)
1－F (No.704)，2－A (No.705～711)，2－B地点(No.712)



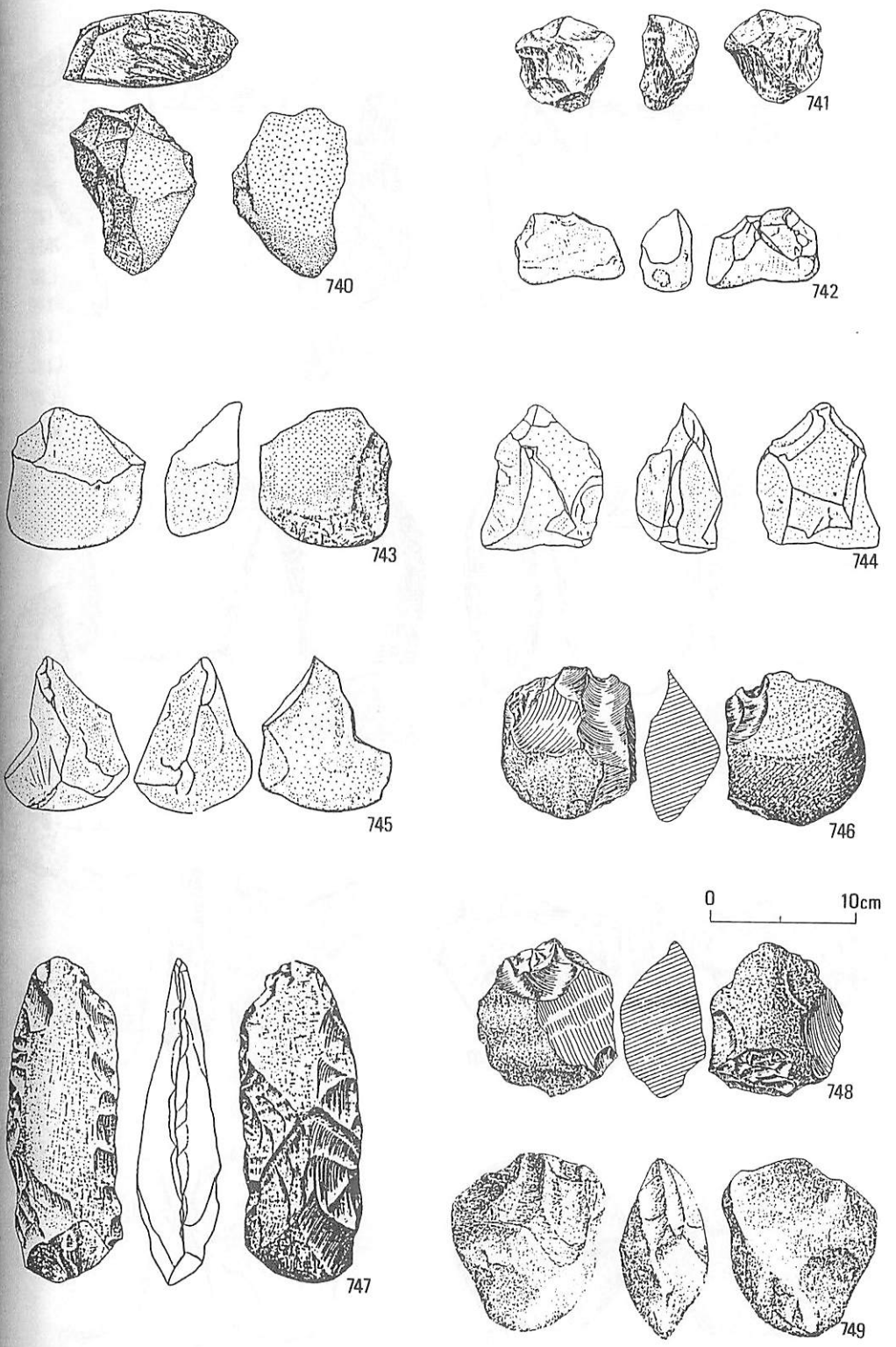

第227図　表採資料実測図　4)
2－E(No.713)，2－F(No.714)，4－B(No.715)，4－C(No.716・717)，4－D(No.718)
6－A(No.719・720)，6－B地点(No.721)，第6地区(No.722)



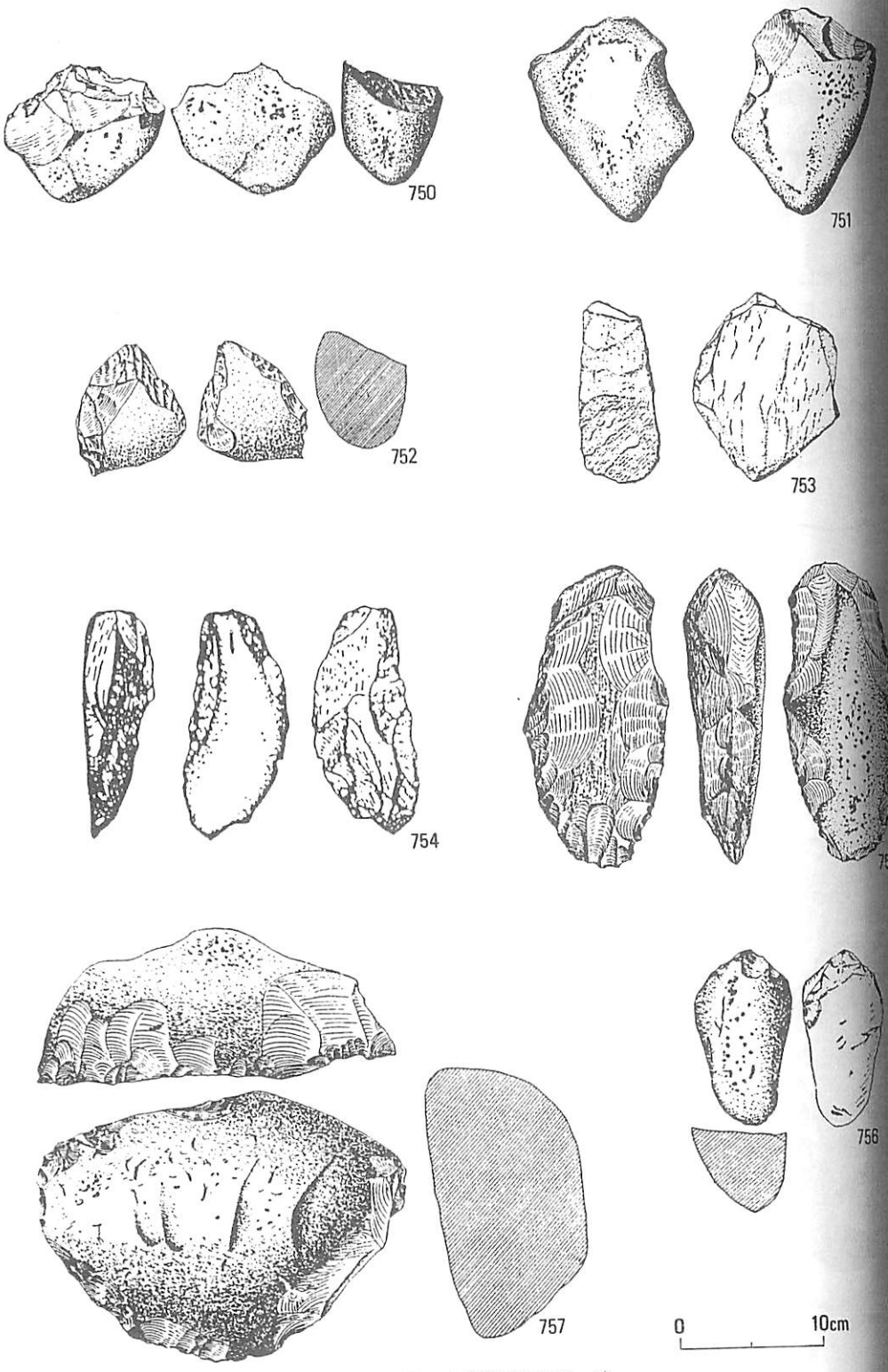

第228図　表採資料実測図　5）
第６地区




第229図　表採資料実測図　6)
第6地区(No.732～737)，7－B(No.738)，8－C地点(No.739)




第230図　表採資料実測図　7）
8－E（No.740），9－B（No.741），9－C（No.742～744），9－E（No.747）
10－A地点（No.749），第9地区（No.746～748）




第231図　表採資料実測図　8）
地区不詳

註

1) a)『丹生１・２次概報』(昭和39年)；b)『丹生３次概報』(昭和40年)；c)『丹生４次概報』(昭和41年)；d)『丹生綜括篇』(昭和43年)；e)角田文衛「大分県丹生遺跡－予察概報－」(『古代文化』第８巻第４号所収，京都，昭和37年)；f)富木隆・中村俊一「旧石器前期の文化」(『大分市の文化財』第３集所収，大分，昭和37年)；g)佐藤達夫・小林達雄・阪口豊「大分県丹生出土の前期旧石器(予報)」(『考古学雑誌』第47巻第４号所収，東京，昭和37年)；h)山内清男編『日本原始美術』Ⅰ，東京，講談社，昭和39年)。
2) 註1ａ，第14図。
3) 註1ｄ。
4) 同上。
5) 註1ａに同じ。
6) 註1ａ，図版14・15。
7) 註1ａに同じ。
8) 同上。
9) 同上。
10) 註1ｃに同じ。

# Ⅲ章　丹生遺跡群と岩宿文化

－綜括に代えて－

## 第１節　斧状石器の位置付けをめぐって

１.九州地方における比較

九州で比較対象とすべきに，１)細石刃文化・草創期関連，２)ＡＴ下位石器群関連の三つがある(第232～234図)。それぞれに特徴を述べ比較する。なお，ここで検討対象とするような石斧群については，横田義章氏による先駆的な研究がある。[1)]

1)A)　大分県市之久保[2)](No.758)，同松山[3)](No.759)，福岡県門田[4)](No.760・761)，門田谷地区[5)]から計６点の刃(局)部磨製石斧の出土が報じられている。いずれも細石刃・細石核に関連する。大分県下の例は船野型細石核を指標とする石器群に共伴する。土器は未検出である。門田では土器は発見されておらず，門田谷地区例(No.760)は爪形文土器との共伴が考えられている。

さて，この内５点はいずれも細身で平直または弧状を呈する刃部を有し，中央に稜線を有し，整形加工は丁寧で表裏全面に及び，加工度が高く形態的にも整った規格性の高い例品である。２例に刃部研磨がはっきり認められる。門田の例(No.761)は全体的な形状の点でも，加工度の点でも，他の諸例とはいささか相違する。刃部は両面とも磨かれている。

B)　鹿児島県下には，隆線文土器群あるいは石鏃と共伴し，草創期に帰属することが確かな例がいくつかある。既発表分に加栗山[6)](No.762)，東黒土田[7)](No.763)，伊敷[8)](No.764)の例があり，未発表分に掃除山，榎崎Ｂ(土器・石鏃はなく細石核のみ)がある。未発表分の図を示しえないが，加栗山例と東黒土田の例がそれを代表すると言ってよい。加栗山は打剝整形の後研磨が広範囲でしっかりなされている。東黒土田例は刃部がスプーン状に明瞭に凹んでおり，一層研磨加工が進んでいる。これらは研磨加工がはっきり多用され，それに先立つ打剝・および敲打加工が顕著であり，最終形態は偏平片刃・凹状丸ノミ・蛤刃の３者があり，岩宿時代的か縄文的かと言う表現が可能であるとすれば，ほとんど縄文的な趣を有している。加工度が高く，形態に斉一性があり，敲打という新技術も多用されており，なおかつ形態分化が進んでいるという点が特徴的で印象深い。福岡・大分例と比較すると地域性を表しているとでも表現したいような強い独自性を示し，対照的である。

2)　ＡＴ下位に属するものは，佐賀県枝去木中山[9)](No.765)，同甚蔵山[10)](No.766)，大分県百枝Ｂ，熊本県曲野[11)](No.767・768)，鹿児島県大島町土浜ヤーヤ[12)](No.769)から計６例が知られている。全体に共通する特徴はまず扁平であること，小片で判定が微妙な百枝例を別にして，全例研磨痕を有すること，礫面を残すものが６例中３例あり，自然面を残さないものも調整加工は周縁部に限られる傾向が強いことなどである。裏面側に自然面を留め置き，加工は最小限にとどまっており，したがって形状に斉一性が低いという共通性も指摘できる。

土浜ヤーヤの例は同一個体の破片数点から成るが，全面研磨で製作されており，側面の研磨がシャープであって定角式をなしている。定角式に研ぎ出す手法は，時間的位置づけが正しければ，飛び抜けて古い例であろう。土浜ヤーヤは奄美大島に所在する。トカラ海峡を越えている事実は興味深く，重大な意義を宿している。しかしながら火山ガラス（ＡＴ）の検出を伴うとはいえ，その時間的位置付けに関しては慎重論も多く，今後の究明が待たれる。

以上の概略的記載によって，おのずと丹生との関係は明らかになる。門田出土の１例を除けば，１）Ａ・Ｂともにそこに丹生との類縁性を認めるのは難しい。２）に対しても形態上の全般的な相似関係を求めるのは難しいが，斧状石器第Ⅳ類と曲野・技去木中山例の間に類似性を求めることは可能である。そして，自然面を刃部裏面に留め，加工度が一般に低い点は相互に共通する。したがって，丹生と１）・２）との対比関係からすれば，あまり積極的とは言えないが，ＡＴ下位に属する石斧群により近いと言うべきであろう。

２．本州以東との対比

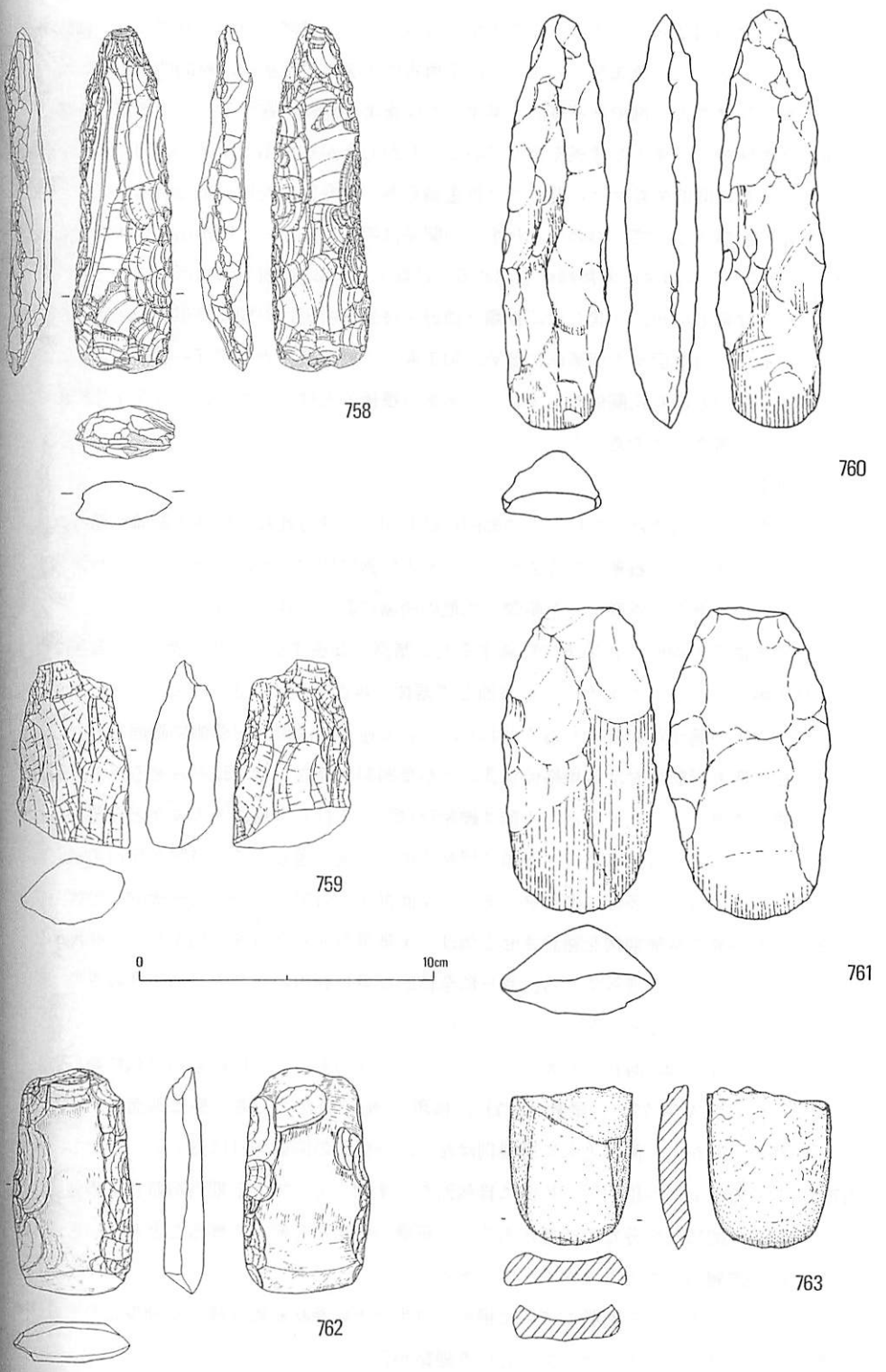
逐一図示のうえでの対比はしないが，結論的には九州における比較と同様の結論に至る。草創期の例は，神子柴系・丸ノミ石斧と総称されるが，その特徴は門田谷地区例などがよく特徴を示している。立川ローム下部の石斧群は，長崎潤一氏他の所論[13]に詳しく述べられているように，草創期石斧群と対比的であると同時にＡＴ下位に属する九州諸例と共通する。その特徴は，「石斧は礫素材と剝片素材で製作され，しかも両者とも共通して器体に礫面を残すことの多い点は注目される」という，白石浩之氏の適切な約言[14]にもあるとおり，一言で述べれば裏面刃部側に礫面を残し全体に扁平であり，加工度と形態における規格性が低い点が草創期と際立った対比をみせる点である。

こうした観点で丹生と対比すると，Ⅰ類は礫斧（打器状）でむしろ夏島[15]・大丸[16]などの関東撚糸文期の例に類似しているとも言える点で，Ⅲ類は甲高で中央に稜が通る点で，Ⅵ類が額田大宮[17]例を想起させる点で，丹生に対して多分に違和感がある。反面Ⅳ類は岩宿時代の最も一般的な形状の一つであり，Ⅲ類中の甲高で草創期例を連想させる例は，千葉県草刈六之台[18]等の例を介在させれば，岩宿時代的特徴の一つとしても理解できる。さらに全体的な素材利用のあり方，加工度の点では後期岩宿時代の例と全く違うところがないと言ってよい。

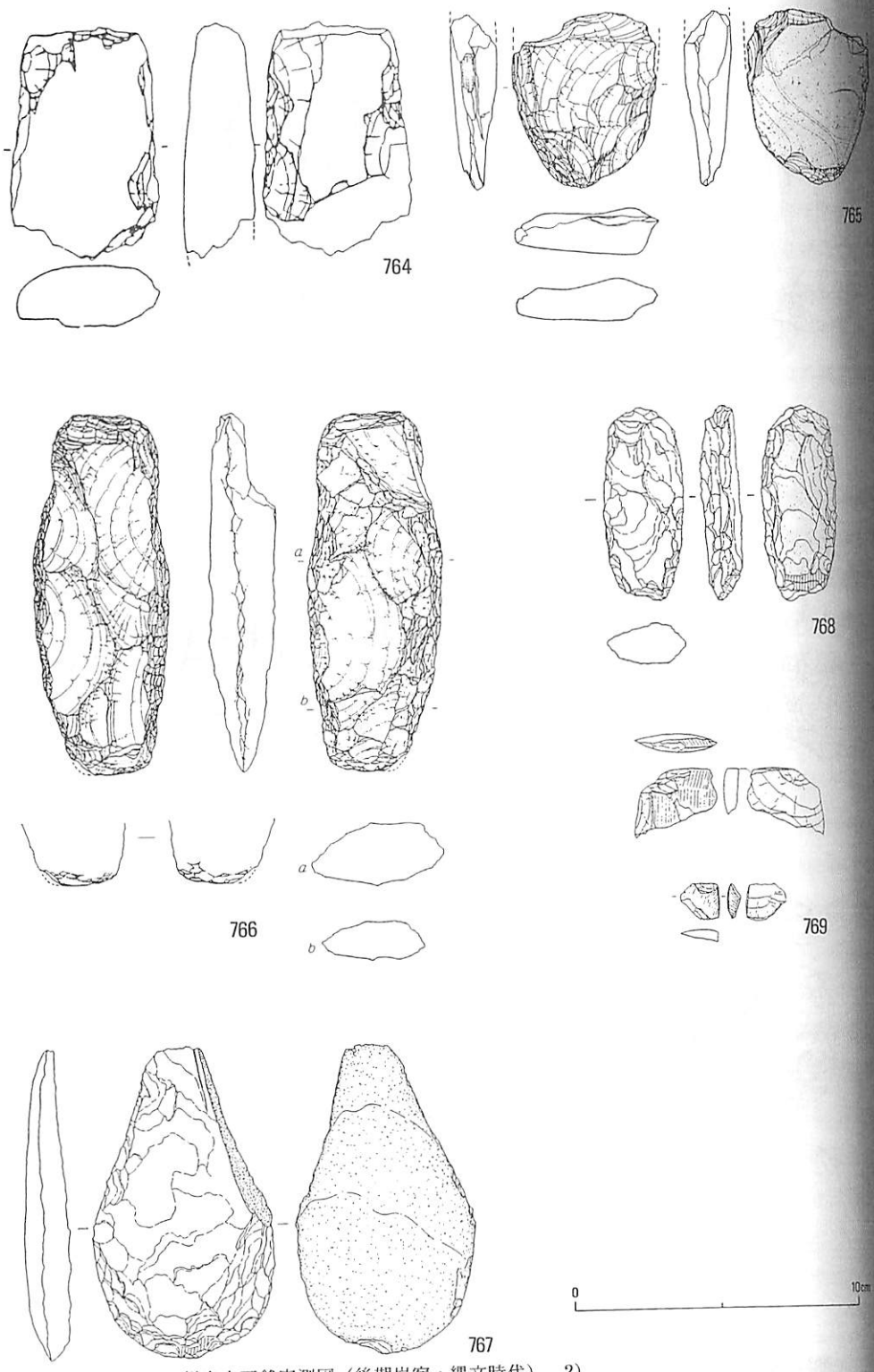
なお，前期岩宿（旧石器）時代の石斧はハンドアックス状のものと，後期岩宿時代に類似するものとの二様ある。安沢Ａ（No.770），屋敷（No.771），権現山（No.775）など[19]前者の例は両面加工で上端が尖り加工度が高い。しかし，両者ともに磨製例はなく，丹生との関係づけは難しい。ただし，座散乱木（No.772・773）の平面形が楕円形で片面に自然面を残す例をもって，前期岩宿時代との連続性を求めることは型式学的には十分な可能性があるし，研磨の応用が今後古く溯ることがないとは言えない以上，今後の課題の一つとしておくべきであろう。

以上によって，日本全土を腑瞰してみた場合，丹生出土の斧状石器は縄文草創期よりも後期岩宿時代前葉に帰属時期を求めるべきであるという帰結が得られる。

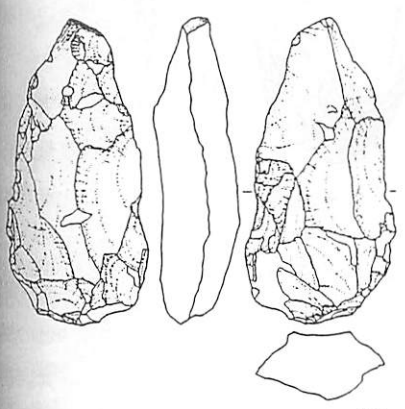
この判断には，草創期の指標遺物（神子柴型・〔局部磨製〕石斧・有茎尖頭器）の西日本における分布状態という背景も重要である。有茎尖頭器の九州における発見例は非常に稀かほとんどない。石

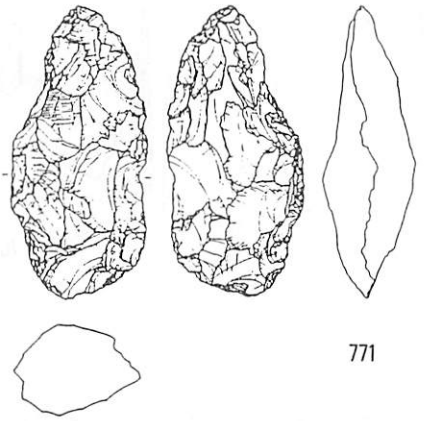


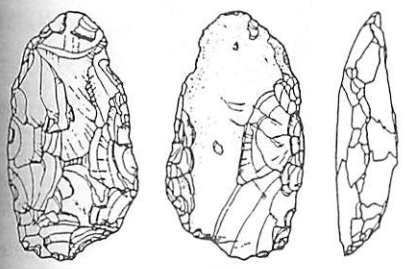

第232図　九州出土石斧実測図（後期岩宿・縄文時代）　1）
市之久保（No.758）・松山（No.759）・門田（No.760・761）・加栗山（No.762）・東黒土田（No.763）

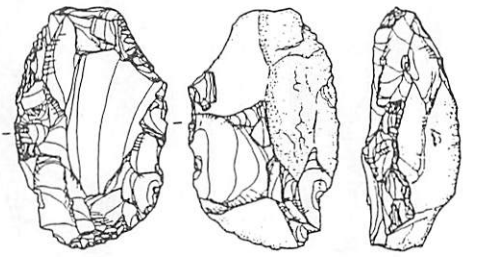


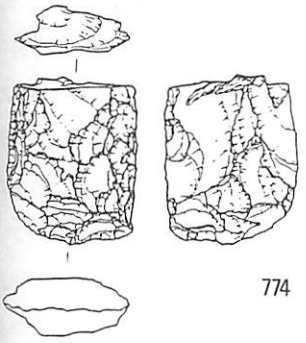

第233図　九州出土石斧実測図（後期岩宿・縄文時代）　2）
伊敷（No.764）・枝去木中山（No.765）・甚蔵山（No.766）・曲野（No.767・768）・土浜ヤーヤ（No.769）

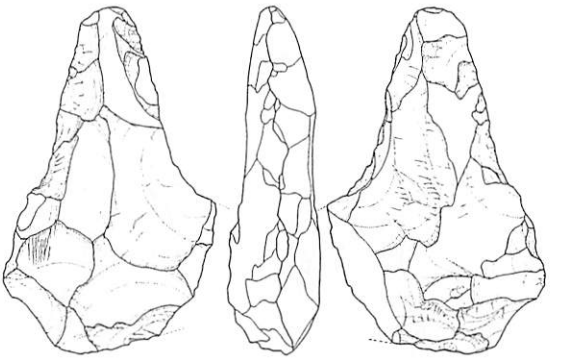


第234図　本州出土石斧実測図（前期岩宿時代）
安沢（No.770）・屋敷（No.771）・座散乱木（No.772・773）・北前（No.774）・権現山（No.775）

斧の場合，松山や市之久保で細石器に伴う例(小型)が知られるようになったが，今のところ例は非常に少ない。丹生に特殊な性格(デポ・製作址)があったとしても，これだけ多量な存在を周辺の既知の発見状況からは説明しにくい。

これに対し，立川ローム下部の石斧であれば，関東ほどでないにしても中国・九州まで確実に分布を辿りうるし，その絶対数は少ないとは言え，同時期の西日本の遺跡数に対する石斧発見数からみた相対的な出現率は，草創期より相当に高い。この点は，丹生における斧状石器の出現状況を説明しやすくしている。

ただし，先に述べたように，製作技術(素材獲得と2次加工)，形態の両面で，考古学的に全く相同関係を見出し得たわけではなく，多少の違和感を残している。このことは，前期岩宿時代との関係も，磨製技術の初現の問題とも連動して，その余地を少しでも残しておくべきであろう(共同研究篇橘論文参照)。一方，縄文前期以降～弥生時代との対比には当初から目を向けていなかったので，ここに可能性が潜んでいないとも言えない。しかし，この点については橘昌信・下条信行両氏から，その可能性はまずありえないという示唆を得ていることを付言しておきたい。

多少気懸りなのは，縄文早期との対比である。九州では古くから早水台などの礫器の問題が議論されているが，草創期・岩宿時代の狭間にあって，本書では比較検討作業が不足しがちであったことは否めない。しかし，これについては共同研究員の重要なテーマでもあり，第2部共同研究篇橘論文中で検討がなされている。また押型文に伴う石器研究に経験豊富な諸氏(片岡肇・大竹恵子・綿貫俊一・木崎康弘)からも御教示を得たが，時折素材利用と形態の点で類品を見出すことはあるが，押型文期の石器群で丹生1－B地点北区のような斧状石器を一定量安定的に保有する特徴的な石器組成を示す例は知られていないというのが共通した見解であった。

以上のように曲折に富んだ推論であったが，所属時期の問題に関する議論が，ここにおいて初めて可能になったのであり，またその結論は全く的外れなものではないと信ずる。多方面からの検討が可能になった今，これを機会に大方の御批判を仰ぎたい。

(鈴　木)

註

1)　横田義章「いわゆる神子柴型石斧の資料」(1)(2)(「九州歴史資料館研究論集」7・15所収，太宰府，昭和56年，平成2年)。
2)　栗田勝弘『市ノ久保遺跡』(大分県犬飼町，昭和63年)。
3)　橘昌信編『松山遺跡』(別府，平成2年)。
4)　木下修『門田遺跡』(『日本の旧石器遺跡』(3)所収，東京，昭和51年)。
5)　木下修・井上裕弘他『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告　第11集』(福岡，昭和53年)。
6)　牛ノ浜修・宮田栄二・青崎和憲他『加栗山遺跡・神ノ木山遺跡』(鹿児島，昭和56年)
7)　瀬戸口望「東黒土田遺跡発掘調査報告」(「鹿児島考古」第15号所収，鹿児島，昭和56年)。
8)　長野真一・中村耕治「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」(鹿児島，昭和58年)。
9)　田島龍太『枝去木山中遺跡』(唐津，平成2年)。
10)　田島龍太『馬部甚蔵山遺跡』(唐津，昭和63年)。
11)　浦田信智・平岡勝昭・江本直『曲野Ⅲ』(熊本，昭和60年)。
12)　旭慶男・牛ノ浜修『土浜ヤーヤ遺跡』(鹿児島，昭和63年)。

13) a)長崎潤一「後期旧石器時代前半期の石斧」(「先史考古学研究」第3号所収，東京，平成2年)；b)ODA, S. and C. T. KEALLY, *Edge-ground Stone Tools from the Japanese Preceramic Culture*(「物質文化」22所収，東京，昭和48年)；c)小田静夫「日本最古の磨製石斧」(『どるめん』11所収，東京，昭和51年)；d)砂田佳弘「石斧について」(『神奈川考古』第15号所収，横浜，昭和58年)；e)麻柄一志「局部磨製石斧を伴う石器群について」(『旧石器考古学』31所収，京都，昭和60年)；f)村松和男「先土器時代の局部磨製石斧について」(『群馬の考古学創立十周年記念論集』所収，高崎，昭和63年)；g)北陸旧石器文化研究会編『旧石器時代の石斧(斧状石器)をめぐって』(富山県入善町，平成元年)。
14) 白石浩之「旧石器時代の石斧－関東地方を中心として－」(「考古学雑誌」第75巻第3号所収，東京，平成2年)。
15) 杉原荘介・芹沢長介『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』(東京，昭和32年)。
16) 芹沢長介「神奈川県大丸遺跡の研究」(「駿台史学」第7号所収，東京，昭和32年)。
17) 川崎純徳・渡辺明・星山芳樹『額田大宮遺跡』(茨城県那珂町，昭和53年)。
18) 田村隆・橋本勝雄『房総考古学ライブラリー1　先土器時代』(千葉，昭和59年)。
19) a)註11)；b)相沢忠洋・関矢晃『赤城山麓の旧石器』(東京，昭和63年)。

## 第2節　斧状石器の製作技法と類型の性格

### 1．はじめに

丹生遺跡においてその形態および出土量が非常に特徴的な斧状石器について，素材形態と加工部位の観点から分類し，類型を抽出することでその製作技法を明らかにしたい。また，類型における属性検討を行う中で類型の性格について言及したい。

### 2．用語について

ここでいう斧状石器とは，典型的には長楕円の礫を素材とし，片面に礫面を残す片面加工の打製品を指す。刃部が明瞭に作出されていることから，完成品として捉えられよう。ただし，資料全てはこのように単純に一括して把握できるものではなく，例えば両面に加工が及ぶもの，刃部を研磨したものなども若干含まれる。また，未製品と完成品との識別基準は難しいが，未製品と思われるものが含まれており，細部では多くの相違点が存在している。しかながら，資料の大部分が前述の表現の範疇内であることから，原則的にという意味でこのように捉えておくことにする。

### 3．対象資料

A）出土地点

ここで検討対象としたものは，第1地区B地点北区・東南区，第1地区A地点，第1地区D地点，出土地点不明のもので，丹生遺跡出土の全斧状石器を対象としている。なお，その大部分は第1地区B地点北区出土のもので占められる。

B）対象点数

ここでは，総数68点を分析対象とする。これは，分析する資料の選定にあたって，欠損品・未製品および風化が著しく進み観察困難なもの，これに加えて裂片・剥片を省いた数である。

### 4．斧状石器の分類

以下に，素材形態・加工部位についてその特徴を把握し両者の要素を加味した上で，それから導

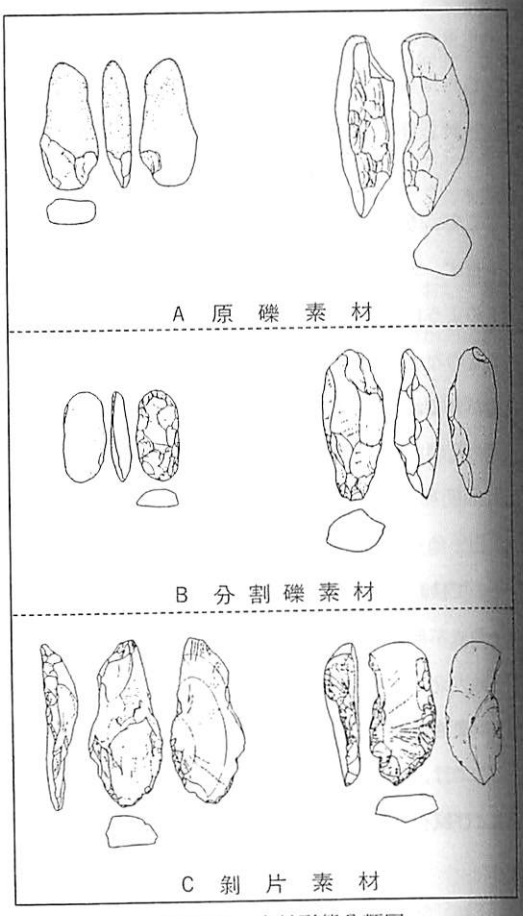
きだされる類型を設定してみたい。ここで，まず素材形態と加工部位に着目するのは，素材が一目見て複数にグルーピングできる状況にあったことと，斧状石器における加工部位の状況が部分加工から面加工まで多岐に亘っており，整理する必要があったことによる。このような中で，素材形態と加工部位においては強い関連性が認められる状況にもあったことから，まずこの二つの観点をもって分類し，資料の検討の基礎としたい。

A)．素材の特徴(第235図)

斧状石器の素材として礫が用いられることは，先に述べた。礫自体は円礫と考えられ，その大きさ・形態にはかなりのバリエーションをもつようである。すなわち，長楕円の扁平礫そのままを用いるもの・長楕円で分厚い礫をそのまま用いるものなど，礫そのものを用いるもの(以下，原礫素材と呼称)が見られる一方，厚みのある礫を一旦分割し，素材として供給されたものを用いたものがある(以下，分割礫素材と呼称)。このように斧状石器の素材は，A.原礫素材とB.分割礫素材の二つに大きく分けられる。分割礫素材については，原礫の縁辺部(側面稜部分)を意識的に使用したと考えられるものと，中央部(平坦部分)を用いるものの2種類に大きく分けられ，さらに分割礫素材の中には，より薄めのもの，すなわちC.剝片素材として新たに扱うべき必要のあるものが存在している。ただ，その区別は困難なため，ここでは一括しておきたい。

原礫素材の大きさは，A.最大長11.2cm～22.4cm，B.最大幅4.8cm～14.4cm，C.最大厚2.4cm～9.6cmで各々のもつピークは，およそA.12cm～15cm・16cm～18cm，B.7cm～9cm，C.5cmに求められる。

分割礫素材の場合,A.最大長4.0cm～22.4cm,B.最大幅3.2cm～10.4cm,C.最大厚0.8cm～9.6cmで各々のもつピークはおよそA.16cm～19cm，B.7cm～9cm，C.5cmに求められる。計測値から原礫素材と分割礫素材とを比較すると，その最大長において，原礫素材にやや長めのものが多いということを指摘できる。ここでは欠損部などを考慮せず計測しているため，正確な数値とはなっていないが，素材別における斧状石器の大きさについては，極端な違いは求められない。



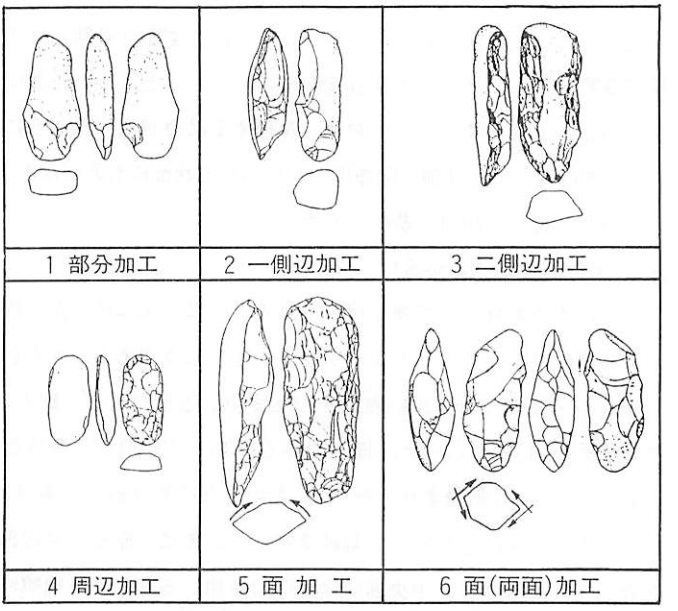
第235図　素材形態分類図

B)．加工部位の特徴(第236図)

ここでは2次加工の部位について検討し，

分類をしておきたい。

まず，斧状石器を2面体で構成されるものと認識すると，片面加工のものと両面加工のものとに大別できる。さらに片面加工のものは，部分加工・一側辺加工・二側辺加工・周辺加工・面的加工に分けられる。すなわち両面加工を含め，以下に示すように6つの加工部位群に区分できる。




第236図　加工形態分類図

1．部分加工……長軸の先端部に加工が施されるもので，原則的にこれが刃部となる。一端加工のものを主体にし，両端加工のものなども見られる。

2．一側辺加工…長軸の一側辺を断ち切る如く加工を施すもので，端部の刃部に繋がる。刃部の加工部位とは剥離方向およびその剥離角度から区別できる。

3．二側辺加工…長軸に平行する二側辺を断ち割る如く加工を施すもので，端部の刃部に繋がる。一側辺のものと同様，刃部加工とは剥離方向および剥離角度より区別できる。なお，両側辺の加工が繋がるものが含まれ，平面的には，「面的加工」になるものがある。この場合，断面形は台形状および三角形状となる。

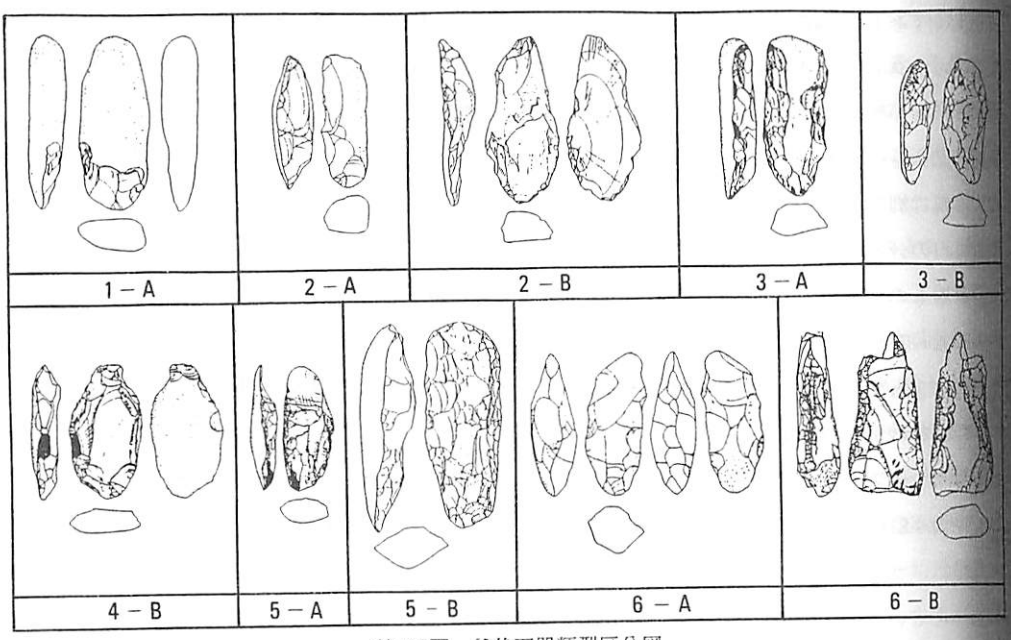
4．周辺加工……素材周辺に巡るように加工が施されるもので，側辺を断ち切るような加工とは剥離角度の浅さ・非連続性という面から区別できる。

5．面的加工……原則的に片面全面に水平的な剥離が施されるものであるが，実際には礫面を残しているものが多い。

6．面的加工（両面）……両面に剥離をもつものであるが，礫面を残すものが大半で，完全な両面加工の意図を読み取るには消極的にならざるを得ない。この加工は面部分では水平的な剥離であるが，側辺に厚みをもつものについては，剥離角度は厚くなっている。

C)．素材形態と加工部位から構成される類型(第12表・第237図)

ここで，素材と加工部位との関係を整理してみると，10類型が存在することになる。以下，各類型の特徴を見ていくことにする(第238～241図参照)。類型名については，加工部位と素材形態の分類をもって構成されており，例えば，1－A類は原礫素材に部分加工を施しているものである。斧状石器の属性については研磨・ダメージ痕をもつものはここで記載することとし，石質については，




第237図　斧状石器類型区分図

第12表　素材類型区分表

| | | 加工部位 | A 原礫素材 | B 分割礫素材 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 片面 | 1 | 部　分 | 10 | — | 10 |
| | 2 | 一側辺 | 9 | 3 | 12 |
| | 3 | 二側辺 | 7 | 18 | 25 |
| | 4 | 周　辺 | — | 6 | 6 |
| | 5 | 面 | 4 | 5 | 9 |
| 両面 | 6 | 両　面 | 3 | 3 | 6 |
| | | 計 | 33 | 35 | 68点 |

第16表および324頁類型区分と石質との関係の項を参照されたい。

1－A類(第238図)

長楕円の扁平原礫を素材とし，一端に刃部を作出するものである。礫面は裏面と表面の大部分に残る。加工の範囲から，刃部先端より1/4程度の加工のもの(No.770～772)，1/2程度にまで及ぶもの(No.773)，端部に加え側辺にまで及ぶもの(No.774～778)，また両端に刃部が作出されるもの(No.779)がある。刃部はいずれも大きく整然とした剥離で，かつ水平的な剥離角度をもって施されている。研磨・ダメージ痕をもつもの(No.777)，ダメージ痕のみをもつもの(No.773)を含んでおり，これらからも当石器群を代表する完成された一群と言え，類型としても非常にまとまっている。

2－A類(第238図)

長楕円の分厚い原礫素材の一側辺に裏面からの加工が施され，一端に刃部が作出されるものである。1－A類(No.776・777など)との違いは，側辺を断ち割る如く，急斜度な加工を施すことにある(No.780～788)。1－A類と比較して，より厚みをもつこと以外に概して小型なもので構成される。刃部も1－A類ほど整然とした剥離では構成されない。研磨・ダメージ痕を持つものは，当類型にはない。

2－B類(第238図)

長楕円の分割礫を素材とし，一側辺全てにわたって裏面からの加工が施され一端に刃部を作出するものである。前出類型の加工状況に比べ，より細かな剥離によっている。側辺加工の剥離角度か

らは急斜度なもの(No.790)と，平坦なものとに二分できる(No.789)。素材形態から剝片素材と考えられるものを含んでいる(No.791)。一類型としてのまとまり方について斧状石器の横断面形が，三角形～台形状の範疇で捉えられることはあるが，1－A類ほど強い結びつきをみることはできない。研磨・ダメージ痕をもつものはない。

3－A類(第239図)

長楕円の分厚い原礫を素材とし，二側辺の全長の大部分に裏面からの加工が施され一端に刃部を作出するものである。基部側は未加工で礫面を残すものが多いことも特徴の一つとしてあげられよう(No.792～798)。刃部は丁寧な剝離で整然としており，尖刃が目立っている。斧状石器の横断面形は，丸みをもつ台形状となる共通性がある。ダメージ痕をもつもの(No.798)を含む。

3－B類(第239・240図)

長楕円で厚みをもつ分割礫の二側辺に裏面からの加工が施され，一端に刃部を作出するものである(No.799～816)。側辺部に自然面が若干残るものもあるが，3－A類ほど，その範囲・点数は顕著ではない。また，剝片素材とでも呼ぶべき薄手のものが1点ある(No.808)。刃部形態は尖刃が非常に目立っている。刃部の作出においても緻密で丁寧な作りである。そして斧状石器の横断面形は台形状のもののほか三角形状となるものが顕著である。研磨痕をもつもの(No.802・803)，ダメージ痕をもつもの(No.806・810・814)を含む。

4－B類(第240図)

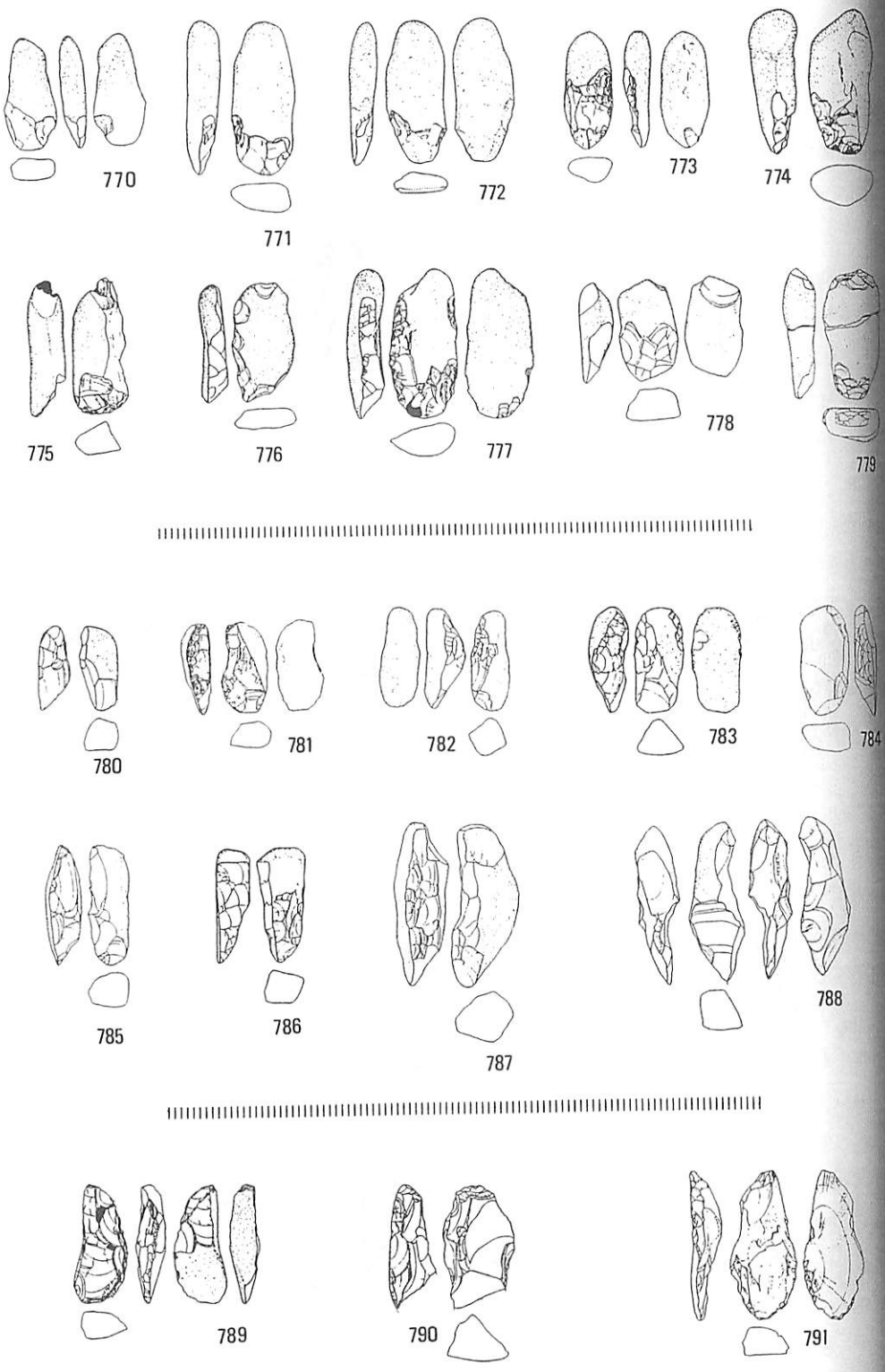
他の類型と比較して，やや長めの楕円形分割礫を素材とし，その周辺に加工が施されるものである。刃部は例えば1－A類ほど顕著ではない(No.817～822)。3類二側辺加工との違いは，浅い打角に求められ，その区別は容易である。なお，素材については，半截剝片とも呼ぶべき薄手のものがある(No.817)。そして斧状石器の横断面形は台形状と言うよりは，レンズ状に近い。ダメージ痕をもつもの(No.821)を含む。

5－A類(第240図)

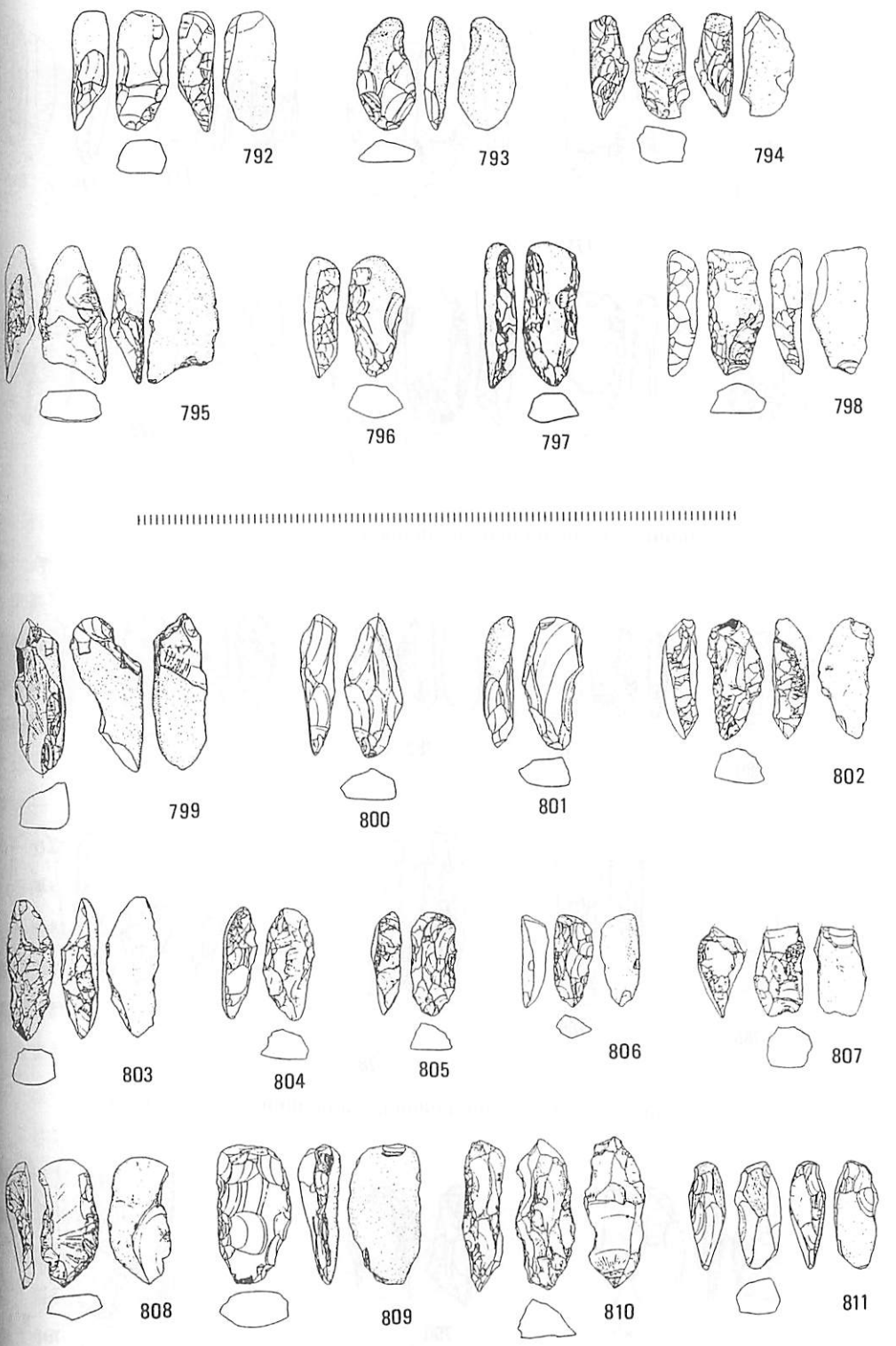
長楕円の原礫を素材とし，片面に面的加工を施すものであるが礫面を若干残すものが主体である(No.823～826)。斧状石器の横断面形は厚みをもつレンズ状となるものと，隅丸の台形状になるものがある。よって後者については，その側辺における加工は深い打角をもって施されることになる。研磨痕をもつもの(No.824，1－D地点出土)，ダメージ痕をもつもの(No.825)を含む。

5－B類(第240図)

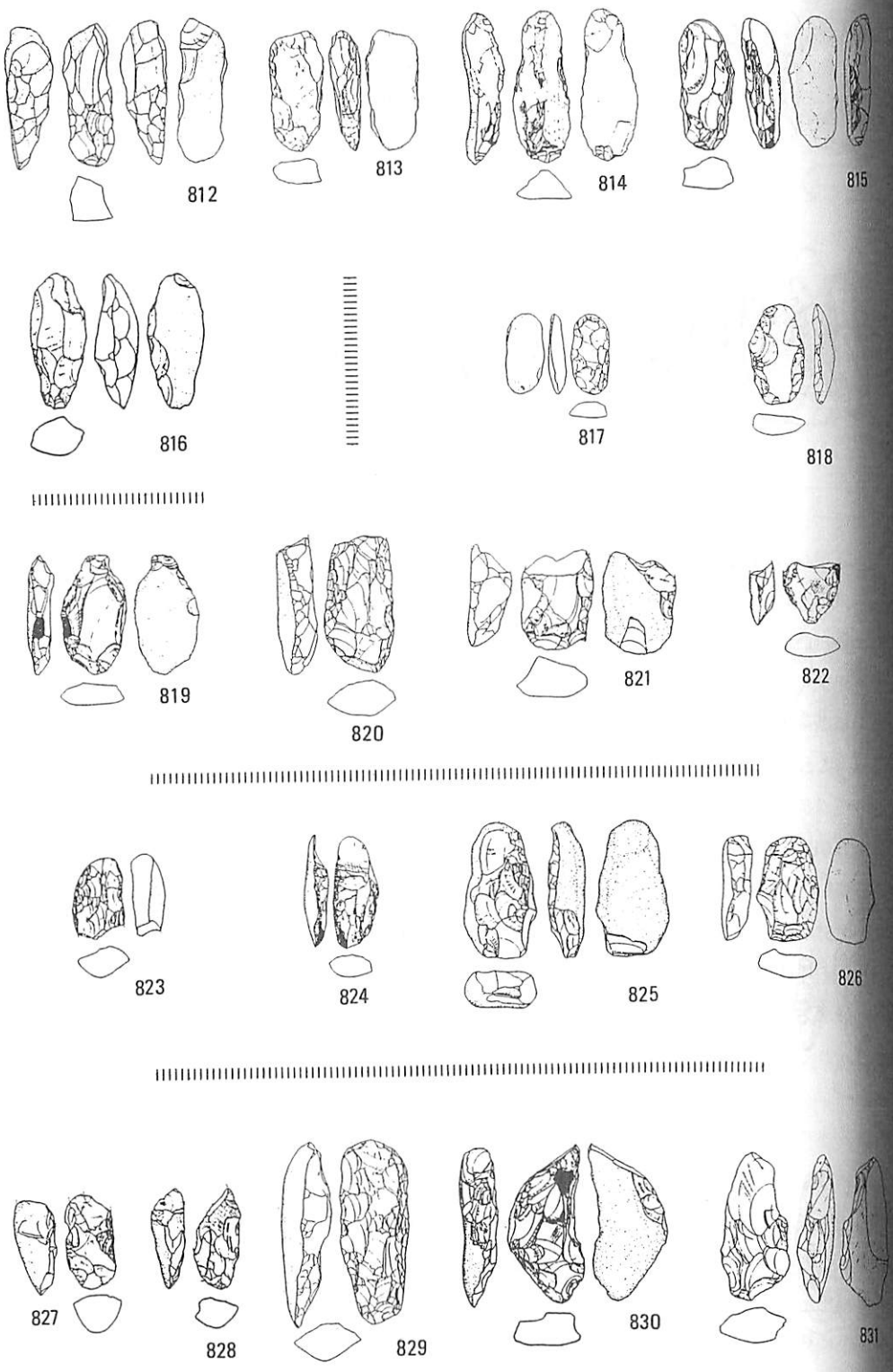
主として長楕円の分割礫を素材にし片面に面的加工を施すものである。剝片素材とでも呼ぶべき薄手のもの1点を含む(No.831)。裏面のカーブ等から素材供給の部位として，原石の側辺部を用いた結果，突出した裏面となるもの(No.827・828)と，これに対して中央の平坦部を用いるもの(No.829・830)があり，したがってこれらの横断面形は，レンズ状のものと極端に裏面が突出した形となるものに分けられる。5－A類の一部同様，側辺の加工においては，深い打角をもって施されたものを含んでいる。面加工は整然とした緻密な剝離面で構成されるもの(No.829)，そうでないものなど現実には多様性に富んでいる。研磨・ダメージ痕をもつものは当類にはない。



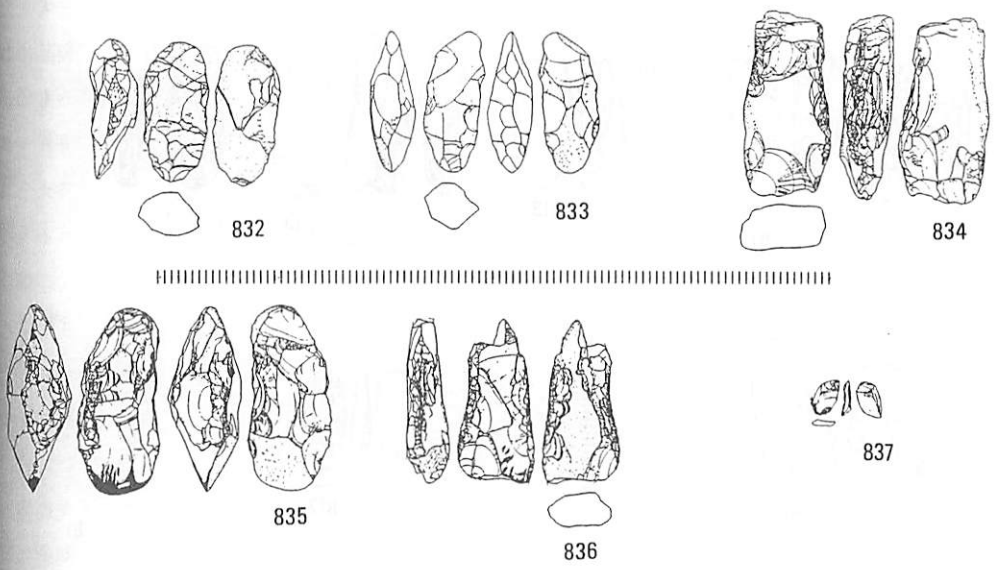

第238図　斧状石器類型別集成図　1)




第239図　斧状石器類型別集成図　2)




第240図　斧状石器類型別集成図　3)




第241図　斧状石器類別集成図　4)

6－A類(第241図)

表裏両面に面的加工を施すものである。概して，5類ほど加工面は顕著でなく，むしろ原礫面の占める割合が多い。両面加工品製作時の途上とも捉えられそうな様相を呈している。素材形状から棒状原礫のもの(No.832・833)と，板状原礫のもの(No.834，1－A地点出土)とに分かれる。斧状石器の横断面形も素材の変形度が少ないため，円形・方形の様相を呈している。これらの素材については，これまで多く見られたような長楕円の範疇では捉えにくく，いわば特殊な部類に入る。研磨・ダメージ痕をもつものはない。

6－B類(第241図)

分厚い分割礫を素材とし，両面に加工を施すものである。6－A類同様，加工面はさほど広くない。素材から，棒状のもの(No.835)と板状のもの(No.836)とに分かれ，素材に関しても6－A類同様，他類型の原礫素材と比較して，特殊な部類に入るものであろう。いずれも研磨痕をもっている。なお，研磨された刃部のみのもの(No.837)も当類に含んでおいたが，その形態が，斧状石器群の範疇に含まれるかどうかは疑問である。

## 5．斧状石器の製作技法

これまで各類型について，そのバリエーションを含めて記述してきた。ここでは斧状石器の製作技法について，素材・加工形態の観点から見ていくことにするが，その前に，素材の供給・分割方法について，4．斧状石器の分類　A)．素材の特徴(314頁)を補足する形で述べておくことにしたい。

斧状石器の素材については，原礫および分割したものがあることは先に述べた。原礫素材の場合は，扁平もしくは厚みをもつ長楕円形のものを用いている。分割礫素材の場合はその厚さから，おおまかに分厚いものと薄めのものとに分けられる。後者には数は少ないものの，剥片素材のものが含まれる。

分割礫素材の供給法は，斧状石器の大きさなどから，人頭大程の円礫を数分割するものと考えられ，その方法は半割～1/4程度の割合大きな分割に因るものであろう。これらのことは，製品において平坦な裏面をもつものが顕著である一方，原石のカーブ面(側面稜部分)を裏面に供するものが散見されること，および平坦な裏面に対して斜めに入る素材面をもつ斧状石器の存在から推測できることである。素材面をもつものについては，原石を斜めにスライスする形での剝取法と考えられる。そして，分割礫素材のものとして認識している中にあっても，一つの原礫から製作されるものが含まれる可能性も考えておかなければなるまい。ただ，斧状石器群において接合資料がなく，個々がほとんど完成品という状況にあっては，よく分からないのが実情であり，積極的に評価することは避けざるを得ない。

ここで斧状石器製作における素材の獲得から製品完成までのプロセスは，素材獲得→2次加工→細部(刃部が主となる)加工→製品の完成として大きく捉えられる。まず，素材の獲得については，原礫素材33点，分割礫素材35点でほぼ半数ずつで構成されている。2次加工については，先に述べたように部分加工から面的加工までの六つのパターンに分けられた。素材と2次加工との関連は，部分加工を施すものは原礫素材に，周辺加工のものは分割礫素材のみにて見られることを指摘できる。他の加工部位のものは両者を含んでいるが，中でも一側辺加工のものは原礫素材に，二側辺加工を施すものは分割礫素材に顕著であることが分かった。すなわち，部分加工は原礫素材に対して施されるものであって，一側辺・二側辺加工が施される原礫素材の場合には，厚手のものについて顕著であるという傾向をもつのだが，これらが何に規定され，またどのような影響を受けた結果の傾向であるのか，一括りの製作技法では理解し難い。例えば，二側辺加工のものが分割礫素材に多くあることは，大きく断ち割った素材への整形加工という面からは，必然的とも捉え得るものである。このように，ある程度定形化された素材が用意されている場合，製品完成までの整形度は少なく済むものであり，対して整形加工を多く必要とするものは，素材においての定形度が低いことを物語っている。分割礫素材供給法を複数存在と考えたが，これらを明確に抽出できないことにも因って，加工部位との関連を直接導きだすことはできない。素材と加工部位との関連においての製作技法は，扁平な原礫素材においては，原則として部分加工を施すという一つの有機的関係が読み取れる。他の素材・加工部位については，複数の製作技法が介在している可能性はあるにせよ，その方法を明確にすることはできなかった。素材形態に対する加工部位の多様性から，素材形において細部では，バリエーションに富むことを示唆するものでもあって，その結果製作技法はやや複雑な様相を呈していると考えられる。定形化された素材のもとにおいてのみ加工技術もまとまりあるものとして一括できるということであろう。

## 6．各類型における属性

ここでは，斧状石器群に見られる研磨痕・使用痕の有無・刃部形態・石質の諸属性について各類型との係わりの中で詳しく見ていくことにしたい。

### A)．類型区分と研磨の有無(第13表)

先に，本遺跡における特徴的な斧状石器群を打製品と原則的に捉えたが，研磨を伴うものについ

第13表　類型別・研磨痕表

| | | 加工部位 | A 原礫素材 | B 分割礫素材 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 片面 | 1 | 部　分 | 1 | — | 1 |
| | 2 | 一側辺 | — | — | — |
| | 3 | 二側辺 | — | 2 | 2 |
| | 4 | 周　辺 | — | — | — |
| | 5 | 面 | 1 | — | 1 |
| 両面 | 6 | 両　面 | — | 3 | 3 |
| | | 計 | 2 | 5 | 7点 |

第14表　類型別・ダメージ痕表

| | | 加工部位 | A 原礫素材 | B 分割礫素材 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 片面 | 1 | 部　分 | 2 | — | 2 |
| | 2 | 一側辺 | — | — | — |
| | 3 | 二側辺 | 1 | 3 | 4 |
| | 4 | 周　辺 | — | 1 | 1 |
| | 5 | 面 | 1 | — | 1 |
| 両面 | 6 | 両　面 | — | — | — |
| | | 計 | 4 | 4 | 8点 |

第15表　類型別・刃部形態分類表

| | | | A 原礫素材 | | B 分割礫素材 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 刃部形態 | 円・直 | 尖 | 円・直 | 尖 | 計 |
| 片面 | 1 | 部　分 | 8 | 2 | — | — | 10 |
| | 2 | 一側辺 | 5 | 4 | 1 | 2 | 12 |
| | 3 | 二側辺 | 4 | 3 | 7 | 11 | 25 |
| | 4 | 周　辺 | — | — | 5 | 1 | 6 |
| | 5 | 面 | 4 | — | 4 | 1 | 9 |
| 両面 | 6 | 両　面 | 3 | — | 3 | — | 6 |
| | | 計 | 24 | 9 | 20 | 15 | 68点 |

て見ていきたい。

研磨の痕跡が確認できる斧状石器は現在7点ある。風化が著しく観察困難なものが多いことを考慮すれば，その点数はさらに増える可能性が高かろう。研磨範囲は現形において刃部のほんの一部に残っている程度であり，両面に残るものは見られない。刃部のみを研磨する局部磨製品が特徴的であると言える。これを各類型別に見ると1－A類1点，3－B類2点，5－A類1点，6－B類3点となっている。

B）．類型区分とダメージ痕の有無(第14表)

斧状石器の裏面には，使用時に生じたと考えられるダメージ(使用)痕を有するものが8点ある。これらはいずれも刃部の先端部に1cm程度の幅で，非常に薄く長軸に平行して認められるもので，垂直的な打撃の痕跡が推測できるものである。類型別では，1－A類2点，3－A類1点，3－B類3点，4－B類1点，5－A類1点となっている。

C）．類型区分と刃部形態(第15表・第242図)

刃部形態という属性についてここで敢えて取り扱うのは，平面上，三角形状に鋭く尖るものが顕著に見られ，果たして石斧機能を想定する斧状石器として扱えるのかどうかという根本的な問題に係わってくるためである。

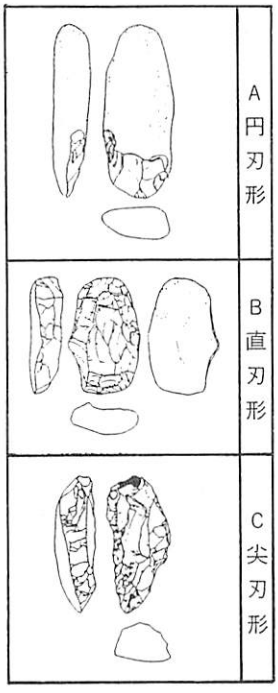
まず，刃部の平面形においては円刃・直刃・尖刃のものが見られ，その他の特徴も含めて，刃部形態として以下のA～Cが設定できる。

A．円刃形…平面形は弧状をなすもので，横断面形は水平～緩やかな凸状となる。

B．直刃形…平面形はほぼ直線的で，横断面形は水平～緩やかな凸状となる。

C．尖刃形…平面形は鋭角に尖るもので，横断面形はそのほぼ中央部で最大厚となり，三角形～台形状となる。

A～Cいずれの形態においてもその縦断面形は，先端に向かって緩やかに傾斜していくものがその大半を占めるが，鋭く傾斜するものなどバリエーションがある。また，現実的には，これら三形態を厳密に分類することは難しいことに加えて，明らかな直刃をもつものは数点あるのみであり，相対的にみると円・直刃形(A・B)と尖刃形(C)に大別できそうである。したがって，分析についてもこの2大別によって行うことがより良いと考えられる。分析総数68点に対するA・B：Cの割合は，44：24で圧倒的に円・直刃をもつものが多い。尖刃形に対する各類型の割合を見ると，2－A類でやや顕著であるが，3－B類において突出した値を示しており，注目される。これを類型別




第242図　刃部形態分類図

第16表　類型別・石質分類表

| | | | A 原礫素材 | | B 分割礫素材 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 石　質 | a(軟質) | b(硬質) | a | b | 計 |
| 片面 | 1 | 部　分 | 9 | 1 | — | — | 10 |
| | 2 | 一側辺 | 7 | 2 | 2 | 1 | 12 |
| | 3 | 二側辺 | 5 | 2 | 11 | 7 | 25 |
| | 4 | 周　辺 | — | — | 5 | 1 | 6 |
| | 5 | 面 | 3 | 1 | 3 | 2 | 9 |
| 両面 | 6 | 両　面 | 2 | 1 | — | 3 | 6 |
| | | 計 | 26 | 7 | 21 | 14 | 68点 |

に見ると，大部分は，円・直，尖刃形のもの全てから構成されており，その割合は円・直刃形のものが多く占めていた。そして，5・6類の面加工のものについては，その割合が14：1と尖刃形のものは1点のみであり，また3－B類におけるその割合は完全に逆転している。

D)．類型区分と石質との関係(第16表)

斧状石器に用いられる石質は，流紋岩・凝灰岩で風化の激しいのものと，流紋岩でほとんど風化のない硬質のものとに2大別できる。両者はさらに細分可能であるが，この二つの枠を大きくはみ出すものは見られない。ただし，風化のため明確に区別し難いものがある。

a類：流紋岩・凝灰岩は，灰黄色を呈するものが主体を占めている。風化が著しいことも手伝ってか，非常に軟質である。

b類：流紋岩のうち，黄白色・茶褐色・黒褐色等の色調を見せるもので，黒褐色のものが主体を占める。全体的に風化をほとんど受けておらず，石質だけに因るものであろうか，非常に硬質である。

このうち，斧状石器群の石質別の割合は，a：b＝47：21である。また，各類型毎の石質別の割合は，1－A類＝9：1，2－A類＝7：2，2－B類＝2：1，3－A類＝5：2，3－B類＝11：7，4－B類＝5：1，5－A類＝3：1，5－B類＝3：2，6－A類＝2：1，6－B類＝0：3となっている。すなわち，石質別に見る斧状石器群の内容は，a軟質石材がより顕著であり，6－B類のみb硬質石材で占められるものの，これを除いて各類型においてはa＞bという割合で両者を含んでいる。

7．類型の性格

以上見てきた属性分析のデーターを基に，その他の要素を加味しながら類型の性格について考察していくことにしたい。

まず，研磨・ダメージ痕をもつものについて一括して見ることとする。研磨・ダメージ痕をもつということは，これらが完成されたものであって，製品としての機能を果たしたことを裏付けるものである。これらが存在する類型は，1－A・3－B・5－A類が両者の痕跡をもち，研磨のみをもつ類型は6－B類，また，ダメージ痕のみをもつ類型は3－A・4－B類であった。そして，2類A・Bの二類型だけには，研磨・ダメージ痕をもつ石器を含んでおらず，明らかに完成品とは断言し得ない。しかし，2－A類は，1－A類と比較する場合，より加工が進んだ一群として捉えられることと，刃部の明瞭な作出がなされていることからも否定する材料にはならず，むしろ肯定できるものであろう。2－B類は3点で構成されるが，加工形態の面から2－A類ほどの統一性はな

い。ちなみにこの内2点は東南区出土のものである。端部には細かな剝離を見るものの，これは他類型における刃部と比して貧弱な印象を受ける。特に東南区出土のもの(第238図№789・791)については刃部作出に伴う剝離というよりは，素材の細部調整との印象が深く，斧状石器としては偏った資料と言える。以上，2－B類においては，やや疑問を残すものの，各類型は完成された製品でもって構成されることが分かったと思う。

刃部形態については，円・直刃形に加え，尖刃形のものが特徴的であった。これを素材別に点数で見ると，原礫素材の場合は，24：9，分割礫素材の場合，20：15であり，分割礫素材における尖刃形の割合が高い。さらに加工部位における6つの形態別とのかかわりあいで捉えてみると，3類(二側辺加工)のみ尖刃形が円・直刃形のものを，分割礫素材の場合に限って，上回っている。また，5・6類の面加工のものは，総数15点のうち，尖刃形が1点のみで特徴的である。前述の分析結果と合わせて考えるとき，各類型によって数値の偏りが見られるものの，刃部形態を直接左右する要因として，素材形態・加工部位は考えにくい。特に加工部位については，刃部作出の段階が，二次加工を終えて後あるいは，二次加工と同時平行しているものかがはっきりと認識でき難いことにも拠っており，3類(二側辺加工)における尖刃形の突出した数値についても，円・直刃形の多さは，構成数に因るもので実態との多少のズレが考えられる。そして他に加工部位における刃部形態にも明らかな相関関係が読み取れないことから，加工の部位あるいは，素材といったもののみの関連で認識できるものではなく，刃部形態は素材から製品の完成に至る一連の中で諸々の影響を受けた結果であると考えておきたい。

石質については石質別類型の特徴は類型構成数のばらつきを考慮しても，1－A・3－A類における軟質石材，および3－B類における硬質石材の多使用が特徴的であった。

ここで，石質という属性をとりあげて再度触れておきたい。

軟質な石質aを用いる場合，部分加工の薄手の石斧が顕著に製作されている(1－A類)こと，また硬質の石質bを用いるとき，鋭角な刃部をもつ，背の高い製品が顕著(3－B類)である事実を重要視する必要がある。石質と製品との関係は全てイコールの関係で把握することはできないが，おおまかにではあるにせよ，石質と製品との相関関係がここに読み取れる。すなわち，考え方としては石質によって，製作される斧状石器がおのずと決定されてしまう可能性を考えなければならない。もちろん，石質のみに影響されるものではないだろうし，素材等によって，いわば変更せざるを得なくなったものも多く含まれていよう。さらにより詳しく見れば素材として供給される，石質における原材の形(例えば，軟質の石材は，分割し得る程の大きさをもつものと，もともと一つの扁平な原材も存在していたといった)によっても，最終的に意図する製品完成までの二次加工・調整加工といった製作技法に大きな影響を与えるものと考えられる。

これまで見てきたように，研磨およびダメージ痕の有無・刃部形態・石質という諸属性と類型間において明らかな有機的結合は見出だせなかった。すなわち各類型は，個々独立して存在するものではなく，少なくとも別個の機能差を表すものではないと考えられる。

このような中で，特定の類型における特徴的に見られる属性について，上記4属性同士の関連は

見出だせないだろうか。

まず，研磨またはダメージ痕の属性をもつものの観点から見ていきたい。

当痕跡をもつものは15点あるが，その両者をもつものは2点あるのみであること，そして刃部形態別における研磨・ダメージ痕の占有数は，円・直刃形は9点，尖刃形は6点であり，ちなみに両者痕跡別の刃部形態への偏りはないこと，さらに石質別との関連においても，a軟質石材：b硬質石材＝4：11という割合で，両痕跡別の石質別への偏りは見られない。

石質と刃部形態との関係についてはどうであろうか。先に述べたように石質a：bの割合は，47：21で軟石質が圧倒的に多く，刃部形態については44：24という割合で円・直刃形が尖刃形を上回っていた。両者の関係は，例えば1－A類では構成数10点で，9点の軟石質のうち，8点を円・直刃をもつものが占め，また，3－B類においては，18点の構成数で，11点の軟石質の内，7点が円・直刃形である。逆に，残り7点の硬石質は尖刃形で占めらている。

以上のことから，研磨を有するもののほとんどが硬石質にて見られること，また，a軟質の石質には，円・直刃形が多く，b硬石質には尖刃形のものが多いと言った，関係が読み取れる。

このように，類型間を越えて属性同志の有機的関係が認められることは，斧状石器の性格を類型に帰属させて考えることはできないことを示唆するものである。

これまで，丹生遺跡群出土の斧状石器を素材形態と加工部位によって類型を設定し考察を進めて来たが，この類型区分における諸属性分析からは，各々を強く独立させ得るデーターを引き出すことはできなかった。分類し得た10類型は，全く別個の性格をあらわす斧状石器区分として存在するものではなく，むしろ同質のものであることを示すものと理解できる。すなわち，斧状石器における素材の獲得から整形加工に至る中で，石質およびその原材形などに影響を受けた，製作過程の違いから生じる形態のバリエーションを捉えたものである。

（木　村）

## 第3節　原位置出土資料の再検討

丹生遺跡の石器群とりわけ前期岩宿(旧石器)時代に属するとされた一群にかかわって，丹生論争の因って来たるところは，それらの帰属年代を決するに十分な層位的裏付けが得られなかったことにあった。しかしながら調査者は，少量ながら原位置から出土した資料を何人も無視してはならないと主張している[1]。それらの地点・資料は次下の如くである。

1)　第1地区B地点北区[2]：丹生泥層直上多孔質灰黄褐色粘層；打器(3点)

2)　第3地区B地点[3]：丹生泥層上部付近礫層(茶褐色礫層)；削器(1点)，茶褐色礫層の上(表土直下)の褐色礫層；稜角式彫器(1点)

3)　第9地区B地点[4]：丹生泥層上部；山形刃割器(1点)

4)　第10地区A地点[5]：志村礫層中部；斜刃割器(1点)(図版Ⅱ下段，Ⅶ下段)

地質学的評価は別にして，石器を考古学的に検討しておこう。

1) 1－B地点北区出土の3点は，斧状石器Ⅰ・Ⅲ類各1点と分類を保留した1点(Ⅶ類または石核)である(第6図No.2，第22図No.34，第37図No.66)。これらの帰属年代の考古学的検討は，Ⅱ章第3節で詳しく検討したとおりである。

包含層の形成過程・年代については「……この辺りが陸化して丹生面が形成され，あまり侵食を受けぬうちに志村砂礫層や丹生泥層を供給源とし，多量のロームを混じえて二次堆積したものと考えられるに至った。因みに陸化しない場所ではこの時期に小原台砂礫層が堆積した[6]」とあることを念のため付け加えておく(第2表)。

2) 3－B地点の削器[7]は遺憾ながら，自然礫と断ぜざるを得ない。またチャート製で稜角式彫器とあるものは，今日言うところのピエス・エスキーユである(第107図No.249)。薄い刃部にも転磨の跡は見受けられない。この1点をもって年代を論ずることは難しいと言わざるを得ない。

3) 9－B地点の山形刃割器(第174図No.504)は良質流紋岩で，一方の大きな剥離を打面，他方の複数の剥離面は剥片剥離作業面とみて，縦長剥片剥離用の石核と見るべきであろう。後期岩宿時代の所産であろう。

4) 10－A地点の斜刃割器(打器)は資料を実見する機会に恵まれなかったので実測図と，図版から判断するかぎり人工品の可能があること以上の言及はできない。

このように原位置出土とされる資料群中，石器の側から積極的に前期岩宿(旧石器)時代文化層の存在を示すものはない。さらに検討を要する例としては，現物確認の済んでいない，10－A地点出土品と，それ自身では今のところ年代決定の難しいピエス・エスキーユが残されている。

(鈴　木)

註

1) a)角田文衞・三上貞二「いわゆる“丹生批判”の問題点」(「考古学ジャーナル」第11号所収，東京，昭和42年)；b)角田文衞「賀川論文に対する論評」(「第4紀研究」第10巻第4号所収，東京，昭和46年)。
2) 『丹生綜括篇』(京都，昭和43年)。
3) 『丹生1・2次概報』(京都，昭和39年)。
4) a)『丹生4次概報』(京都，昭和41年)；b)『丹生綜括篇』(京都，昭和43年)。
5) a)『丹生3次概報』(京都，昭和40年)；b)註4a。
6) 註2)に同じ。
7) 註2)，第21図；註3)，第29図。

## 第4節　丹生遺跡群と岩宿文化

Ⅱ章で報告した地点は25ケ所であった。これらの中には少数資料の事実報告にとどまるもの，従来の議論の経過という観点から再報告の必要を認めたにすぎないもの，資料中に時期判定の材料を欠くものなども含んでいる。以下これらの地点を除いて，できるかぎり各地点の主たる所属時期を示し，丹生遺跡群の特徴と意義に触れておきたい。この際，時期の表示は橘編年案に基づき，大分県下・九州地域内・日本列島内の相対関係を窺いうるように配慮し，これによって岩宿時代における丹生遺跡群の位置を明らかにしておきたい(第17表)。なお，縄文時代関係についてはあえて触れ

ない。

1－A地点　岩戸6上[1]の剝片剝離技法を想起させる石刃（Ⅳ期）と1－B地点北区の斧状石器と同範疇に属する石器（Ⅰ期）を指標とする2群の資料がある。

1－B地点北区　Ⅱ章第3節で詳述したように，斧状石器，打・割器／石核に代表される後期岩宿時代前葉（Ⅰ期），ナイフ形石器を指標とする岩宿時代後葉の2時期の資料群から成る。ナイフ形石器の編年的位置は表採の翼状剝片石核との関係が問題になるが，共伴の可能性とナイフ形石器の特徴や素材が小型で薄いことなどの点から，ナイフ形石器が先行する場合の二つの可能性を考慮しⅡ～Ⅲ期としておく。

第17表　九州における岩宿（旧石器）時代の編年（橋昌信氏作成）

| 文化 | 時期 | 西九州 | 東・中九州 | 南九州 |
|---|---|---|---|---|
| ナイフ形石器文化 | Ⅰ期 | | 上下田下層 | |
| | | 馬部甚蔵山<br>枝去木中山<br>牟田の原Ⅰ<br>崎瀬4 | 岩戸Ⅱ・Ⅲ<br>岩戸K～G<br>曲野 | 上場6下 |
| | Ⅱ期 | 堤西牟田Ⅰ<br>百花台4<br>百花台Ⅳb・Ⅶ<br>船塚Ⅶ | B　B<br>駒方古屋<br>百枝CⅢ<br>狸谷Ⅰ<br>下城2 | 上場6<br>石飛6 |
| | Ⅲ期 | 百花台Ⅵ<br>船塚Ⅶ<br>牟田の原Ⅱ<br>堤西牟田Ⅱ・Ⅲ<br>西輪久道 | A　T<br>片田<br>岩戸Ⅰ・D・6下<br>百枝CⅡ<br>狸谷Ⅱ<br>赤木Ⅰ | 堂地西<br>上場4<br>石飛4<br>小牧ⅢA |
| | Ⅳ期 | 中山<br>柿崎<br>磯道<br>百花台Ⅲ | 岩戸6上・B<br>片島道下<br>製糸工場前<br>下城1<br>今峠<br>大坪五馬 | |
| 細石刃文化 | Ⅴ期 | 原<br>野岳<br>福井Ⅳ<br>泉福寺11<br>門田<br>福井Ⅱ・Ⅲ<br>泉福寺10～5 | 赤木Ⅱ<br>松山<br>上下田<br>平草 | 船野<br>成岡<br>加栗山<br>加治屋園 |

ナイフ形石器
台形石器
剝片尖頭器
三稜尖頭器
細石刃・細石核

1－D地点東南区　1－B地点北区の斧状石器の出土から，これと同期の所産と見ておく（Ⅰ期）。この区域まで北区の範囲自体が拡がっていた可能性を考慮しておくべきであろう。

1－D地点　刃部に明瞭な研磨痕を留める斧状石器があり，後期岩宿時代前葉（第Ⅰ期）の石器群の存在が考えられる。

2－F地点　剝片・石核の特徴，扁平磨製石斧の存在，まとまった打・割器／石核の存在から，後期岩宿時代でもより古い様相を窺うことができると言う長崎潤一氏の指摘がすでにある。[2] ただし，この器体全面に磨きのかけられた扁平磨製石斧を立川ローム下部相当層併行と評価をすれば，1－B地点北区の斧状石器の特徴と相いれない特徴を示しており，また縄文時代後半期に類例を見出すことも可能であり、石斧の時代評価は難しい。全体的にみて，ⅠとⅢ期の両方の可能性を考慮しておきたい。

2－H地点　黒耀石製細石核が指標遺物として存在する。細石刃文化（第Ⅴ期）の所産である。その他の石器群は，石核と剝片の特徴からとりあえず岩戸6下相当（第Ⅲ期）と理解しておく。

2－I地点　翼状剝片石核が指標になる。本資料については，既に綿貫俊一氏の論評がある。[3] 岩

戸6下相当(第Ⅲ期)と見ておく。

4－A地点　正背両面で縦長剝片を取り打面再生の痕跡を留める縦長剝片石核と瀬戸内技法を示す例がある。前者を岩戸6上(Ⅳ期)，後者を岩戸6下[4](Ⅲ期)に対比しておく。

4－B地点　ナイフ形石器や石核・打面再生剝片がある。その特徴は岩戸6上文化層(Ⅳ期)との対比を可能にしている。

7－A地点　剝片素材で表裏両面で幅広ないし横長剝片を連続的に取る石核がある。これは岩戸6下および百枝2[5]，岩戸D文化層[6]等に類例があり，それとの対比が妥当であろう(Ⅲ期)。さらに縦長剝片石核は岩戸6上との類似性が高く(Ⅳ期)，2時期の石器群からなっていると見ることができる。

7－D地点　まとまった細石核関連資料と打・割器/石核の存在がまず特徴的である。この他には定型的な石器として彫器がまず目につく。剝片ではあるが，上下両端から石刃を剝離する定型的な剝片剝離技法を推測させる作業面剝片や整った石刃，7－A，8－B地点の岩戸6上対比の剝片剝離技法との関連を予測させる打面再生剝片などもある。前者の例は駒方古屋[7]例など岩戸6層以前に対比される可能性がある。打・割器/石核は，第2部橋論文によれば，様々な可能性を考えることができるが，特定の時期に特徴的な出現を予測することはできず，とりわけ細石刃文化(Ⅴ期)の石器組成の中で普遍的で主要な位置を占めることはないとされており，時間的帰属は保留しておきたい。結局，細石刃石器群を主体とし，岩戸6層以前の一群(Ⅱ期)，岩戸6上相当期(Ⅳ期)の資料も混在すると理解しておく。

8－A地点　国府型ナイフ形石器の他に，典型的とは言えないかもしれないが，瀬戸内技法を示す個体がいくつかある。とりあえず岩戸6下文化層との対応が予想される(Ⅲ期)。また，剝片素材で主剝離面側に作業面があり，小型の横長剝片を取る例が一部にあり，技術的にも年代的にももう少し幅の広い解釈を要求されるかもしれない。

8－B地点　円礫を縦に分割した厚手の剝片の木口面から石刃状の剝片を取る一群がまとまって存在する。当然のことながら背面に明瞭なポジ面を留める石刃状剝片もある。調整打面を設けてファシットを設けた彫器の存在も注意される。ナイフ形石器等を欠くが，岩戸6上文化層との並行関係が予想される(Ⅳ期)。

9－B地点　節理面を底面とし，その他にほとんど調整を加えないが，瀬戸内技法の基本を踏襲していると考えられる石核がある。本資料も既に綿貫俊一氏による評価がある[8]。岩戸6下対比(Ⅲ期)ということになろう。

12－A地点　三稜尖頭器・ナイフ形石器が存在する。その型式的な特徴は岩戸6下文化層(Ⅲ期)との対比を可能にする。

14－A地点　瀬戸内技法類似の石核，岩戸1文化層出土の石核[9]に酷似する亀甲状の石核があり，岩戸6下並行期(Ⅲ期)の存在が予測される。

14－C地点　資料点数はまとまっているわりに，全体の剝片剝離作業ははっきりしないが，横剝ぎ剝片が主体であり，また，剝片素材でそのポジ面側から小型横長剝片を取る石核などを含む点か

らみて，後期岩宿時代前葉（Ⅰ期）の剝片剝離技法の存在を想定すべきであろうか。1点ではあるが，うっすらとした研磨痕を留める斧状石器の刃部破片が存在することも，こうした考え方を補強するものであろう。なお，1点だけではあるが，両端打面の石核から取られた典型的な石刃がある。Ⅱ期の存在も予想すべきであろうか。

この他に，各地点の出土の資料単独では明確な時期比定が難しいが，背面の剝離面は求心的ないし多方向から及び，大きな打面を有し，全体にオーバルな形状の幅広縦長剝片やこれと対応する円盤状または多面体石核を有する例が，1－E，1－J，2－E，2－H，4－C，4－D，9－C，11－B地点にある。AT下位の剝片剝離技術の一般特性に通じる要素を窺うこともできるが，ひとまず岩戸6下層相当期（Ⅲ期）を予測しておきたい。

以上が報告地点のうちで，ある程度その所属時期の推定が可能な地点である。これから丹生台地の遺跡群の時期別構成と成立過程が明らかとなる。いまのところ最古の段階は1－B地点北区，1－B地点東南区，1－A，1－D，14－C地点など（Ⅰ期）であり，ついで痕跡的ではあるが岩戸6下文化層に先行する可能性のある7－D，14－C地点の時期（Ⅱ期）を経て，12－A地点などの岩戸6下文化層（Ⅲ期），7－A，8－B地点などの岩戸6上文化層（Ⅳ期）に至り，2－H，7－D地点の後期岩宿文化末葉の細石刃文化（Ⅴ期）に達し，縄文時代に移行する。橘編年案に従えば，Ⅰ期（ナイフ形石器文化）～Ⅴ期（細石刃文化）までの後期の全段階が捉えられ，このうちⅢ期の存在が顕著であるということになる（第18表）。

第18表　丹生遺跡群の時期別構成

| 地区・地点 | 所属時期（後期岩宿時代） | | | | | 調　査 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ | Ⅳ | Ⅴ | |
| 1－A | ○ | | | ○ | | 5次 |
| B北 | ○ | ? | ○ | | | 5次 |
| B東南 | ○ | | | | | 1・5次 |
| D | ○ | | | | | 1・5次 |
| E | ? | | ○ | | | 2次 |
| J | | | ○ | | | 6次 |
| 2－B | ? | | | | | 1次 |
| E | | | ○ | | | 1次 |
| F | ? | | ? | | | 2次 |
| H | | | ○ | | ○ | 4次 |
| I | | | ○ | | | 4次 |
| 4－A | | | ○ | ○ | | 3次 |
| B | | | | ○ | | 3次 |
| C | ? | | ○ | | | 3次 |
| D | | | ○ | | | 4次 |
| 7－A | | | ○ | ○ | | 1次 |
| D | | ○ | | ○ | ○ | 3・4次 |
| 8－A | ? | | ○ | | | 2次 |
| B | | ? | | ○ | | 3次 |
| 9－B | | | ○ | | | 4・5次 |
| C | | | ○ | | | 4・5次 |
| E | ? | | | | | 表採 |
| 11－B | | | ○ | | | 3・4次 |
| 12－A | | | ○ | | | 4次 |
| 13－A | | | | ? | | 4次 |
| 14－A | | | ○ | | | 5・6次 |
| －C | ○ | ○ | | | | 5次 |

丹生遺跡群の構成の概要はこのようであるが，当遺跡群の理解にとって留意点として補足しておくべきいくつかについて以下に記しておきたい。

A）斧状石器

斧状石器は1－B地点北区，同東南区，1－A，1－D地点について再報告を果たすことができた。この外に実地検討はできなかったが，既報告の各種のレポート[10]から判断すると地点不明資料を含め少なくとも類例は10点以上あり，その出土地点は上記の他に1－E，2－B，4－C，9－E地点などを追加することができる。4－C地点出土の例は鰈形石器と報告されたものである。この点の判断は別にして，丹生遺跡群の石器群を性格づける1－B地点北区出土の斧状石器群は他に多くの地点から出土例があることが知られた。このよう

な意味から，これらが丹生遺跡群全体を第１に特徴づける重要な要素であり，斧状石器の本書での位置づけと評価の当否の問題も含めて，これらに対し今後も注意を払いつづける必要がある。

B)打・割器/石核

打・割器/石核類は丹生石器群中もっとも注目されたものである。この一群が量的にもっともまとまって検出されたのは，１－Ｂ地点北区であったが，ここで検出された15点のうち打・割器に分類されたものはわずか３点であって，量的には予想外に少ないという結果になった。また，その年代観については，斧状石器と共伴関係を想定したうえで，後期岩宿時代前葉を溯るものではなく，丹生論争初期に一部で考えられた前期旧石器時代説を補強する新しい分析結果は得られなかった。

しかし，打・割器/石核類のうち，明らかに打・割器と見るに有利な諸例に加えて，打・割器の可能性をいささかなりとも残す大型石器の出土地点は，他に１－Ｂ地点東南区，同西区，２－Ｅ，２－Ｆ，４－Ａ，７－Ｄ，８－Ａ，８－Ｂ，９－Ｃ地点などにある。この他に既報告中[11]および太田コレクション表採品から，１－Ａ，１－Ｃ，１－Ｆ，２－Ａ，２－Ｂ，４－Ｂ，６－Ａ，７－Ｂ，９－Ｂ，10－Ａ，14－Ａ，14－Ｂ地点などを追加することができ，少なくとも80点以上の資料を抽出することができる。１－Ｂ地点北区の例を後期岩宿時代前葉と理解したが，第２部橘論文にもあるとおり九州の岩宿時代における消長は未だ十分に明らかになっておらず，そして縄文時代例も多分に含まれている可能性を捨て切れないように，問題含みの資料群である。しかし，斧状石器同様これらの石器群は，もう一つの丹生遺跡を代表する石器であって，今後も新たな目でひきつづき検討が求められるであろう。

C)横長剝片石核

横長剝片を意図的に打ち剝していく技法のうち，瀬戸内技法や国府型ナイフ形石器に関連する１－Ｂ地点北区，２－Ｉ，４－Ａ，８－Ａ，９－Ｂ地点については，丹生遺跡群中にその存在が安定した位置を占めている事実をまず確認しておきたい。この他の横打技法のうち，中型の横長剝片を素材とし，そのポジ面側から小型横長剝片を連続的に剝ぎとる特徴的な技法がある。これらは２－Ｆ，７－Ａ，８－Ａ，14－Ｃ地点などで確認されている。これらの評価として，瀬戸内技法に共存する横打技法とみるか，あるいは瀬戸内技法のバリエーションとしてみれば問題はないが，米ケ森技法[12]などに関係し，白岩藪ノ上[13]・野原早風Ａ地点遺跡[14]などに連なる石核との関連性を想起し，ＡＴ下位のあるいは関東地方立川ロームⅨ・Ｘ層～Ⅶ層あたりとの関連を想定しうるとすれば[15]，これらの存在にも格別の注意を払う必要がある。斧状石器，打・割器／石核との共存が１－Ｂ地点北区で想定され，それが問題の丹生論争とも直接かかわり，今回の分析では，時期的評価としては後期岩宿時代前葉というところに納まったが，そうだとするとこれらの剝片剝離技法との関連を今後も意識的に追及せねばならない。そのような意味で，本例も丹生遺跡群中格別の意義を有するものであるとしなければならないであろう。

D)縦長剝片石核

１－Ａ，７－Ａ，８－Ｂ地点などでは，厚く分割した分割礫を素材としその木口面から定型的な石刃を剝ぐ，岩戸６上に対比される技法の存在が知られた。７－Ａ，８－Ｂ地点はその好例である。

地点数としては少ないが丹生遺跡群中の特徴的な一群として注目される。

E)彫　　器

7－D，8－B両地点で明確な彫器が検出された。九州における彫器の存在は近年注目されるところとなり，小畑弘氏の総括的な研究がある[16]。この時点では，西北九州に特徴的な一群を除けば，彫刀面作出のために明確な打面設定を行う例は，大分県下ではほとんど知られていなかった。近年，熊本県下でもＡＴ下位から，彫刀面作出のための打面調整を伴った定型的な彫器が検出されるようになったが[17]，7－D，8－B地点の彫器の存在は，少数例であるとはいえ好資料が得られたと評価すべきであろう。

（鈴　木）

註

1) 清水宗昭・高橋信武・柳田敏雄『岩戸遺跡』(大分県清川村，昭和61年)。
2) 長崎潤一「後期旧石器時代前半期の石斧」(『先史考古学研究』第3号所収，東京，平成2年)。
3) 綿貫俊一「東九州における瀬戸内系人類遺物」(「旧石器考古学」25所収，京都，昭和57年)。
4) 註1)に同じ。
5) 栗田勝弘・須田良平・清水宗昭『百枝遺跡C地区』(大分県三重町，昭和60年)。
6) 坂田邦洋『大分県岩戸遺跡』(別府，昭和55年)。
7) a)橘昌信『駒方古屋遺跡発掘調査報告書』(別府，昭和60年)；b)橘昌信『駒方古屋遺跡第2次・第3次発掘調査報告書』(別府，昭和62年)。
8) 註3)に同じ。
9) 芹沢長介・柳田敏雄『岩戸』(仙台，昭和53年)。
10) a)『丹生綜括篇』(昭和43年)；b)富木隆・中村俊一「旧石器前期の文化—付，丹生台地の文化」(「大分市の文化財」第3集所収，大分，昭和37年)；c)佐藤達夫・小林達雄・坂口豊「大分県丹生出土の前期旧石器(予報)」(「考古学雑誌」第47巻第4号所収，昭和37年)；d)角田文衛「大分県丹生遺跡—予察概報—」(「古代文化」第8巻第4号所収，京都，昭和37年)。
11) 註10)に同じ。
12) a)藤原妃敏・富樫泰時・村岡百合子他『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』(秋田県協和町，昭和52年)；b)藤原妃敏「米ヶ森技法と石刃技法」(「考古学ジャーナル」第309号所収，東京，平成元年)。
13) 岸本雅敏・松島吉信『富山県立山町白岩藪ノ上遺跡調査概要(2)』(富山県立山町，昭和57年)。
14) 平井勝『野原遺跡群早風A地点』(岡山，昭和54年)。
15) 松藤和人「西日本におけるＡＴ下位の石器群」(「国立歴史民俗博物館研究報告」第13集所収，佐倉，昭和62年)。
16) 小畑弘「九州における彫器の研究」(「九州考古学」60号所収，福岡，昭和61年)。
17) 木崎康弘「肥後における先土器時代研究の現状と課題」(『交流の考古学』所収，平成3年)。

# Summary

## I

The Nyu sites are located in Ōita City, Ōita Prefecture, northeast Kyūshū. They are situated at about latitude N33° and longitude E131°. The Ōno river runs to the west side of the sites into Beppu Bay. There is a deltaic plateau called "Nyu" near the mouth of the Ōno river. The west side of the plateau is five kilometers long and its north side is four kilometers long.

On the plateau, many sites and stone tools were found. In around 1960, a discussion arose about whether those stone tools which included choppers, chopping-tools, and proto-bifaces could possibly belonged to the Lower Paleolithic Age in Eurasia. In order to make this point clear, The Japan Institute of Paleological Studies (The Paleological Association of Japan, Inc., Kyōto) began to research in 48 localities divided in 14 sections. The researches were conducted six times from 1962 to 1967. The results were published in four reports listed below:

1) The Research Committee of the Paleolithic Culture of Japan: *Nyu Sites——Preliminary Report on the Excavations of the Primeval Sites on the Nyu Plateau, Ōita Prefecture, on the East Coast of Kyūshū* (The Paleological Association of Japan, Inc., Ōsaka, Kyōto, 1964, in Japanese)

2) The Research Committee of the Paleolithic Culture of Japan: *Nyu Sites——Preliminary Report on the Excavations of the Primeval Sites on the Nyu Plateau, Ōita Prefecture, on the East Coast of Kyūshū, the Third Season* (The Paleological Association of Japan, Inc., Ōsaka, Kyōto, 1965, in Japanese)

3) The Research Committee of the Paleolithic Culture of Japan: *Nyu Sites——Preliminary Report on the Excavations of the Primeval Sites on the Nyu Plateau, Ōita Prefecture, on the East Coast of Kyūshū, the Fourth Season* (The Paleological Association of Japan, Inc., Ōsaka, Kyōto, 1966, in Japanese)

4) La Commission de recherches de la culture paléolithique du Japon: *Les stations de Nyu——Les fouilles des stations primordiales sur le plateau de Nyu dans la préfecture d'Ōita, sur la côte est de Kyūshū* (Association paléologique du Japon, Kyōto, 1968, in Japanese with French summary)

## II

The existence of a Japanese Pleistocene culture was confirmed at the Iwajuku site, in central Japan, for the first time in 1949. Until then, the Ōmori (or Jōmon) Age (equivalent to the Neolithic Age) was considered to be both a few thousands years old at the most and the

oldest in Japanese history. The Nyu sites became one of the main points of concern among Japanese archaeologists ten years later when the Iwajuku site and many other sites of the same period were found everywhere in Japan. At that time, it became a generally accepted opinion that these sites belonged to the age equivalent to the Upper Paleolithic Age in Eurasia. As the Upper Paleolithic culture became evident, some researchers began to have a strong desire for finding the Lower or Middle Paleolithic culture. This has been the background of the researches conducted at the Nyu sites from 1962.

The excavators summarized their six researches in four reports listed above as follows:

1) Most deposits of the 48 localities researched in were found to be in bad conditions because some stone tools were mixed up with those of the Ōmori Age or later (including the Neolithic Age, the Bronze Age, and the Iron Age). Therefore, it was impossible to determine the exact age they stratigraphically belonged to.

2) However, some stone tools were excavated *in situ* at the following four localities: 1-B, 3-B, 9-B, and 10-A (cf. Chapter 2, Sections 3, 12, 20 and 22; Chapter 3, Section 3). Following a stratigraphical point of view, these stone tools consisted mainly of choppers, chopping-tools, and proto-bifaces belonging to the Middle-Riss Inter-Glacial Period.

3) Setting the Lower Paleolithic Age as the first stage, the six cultural stages were established up to the Upper Paleolithic Age. These cultural stages were determined based upon an overall judgement of typology and a comparative study of terraces.

## Ⅲ

The excavations' results and analyses of the Nyu sites were introduced abroad as well.[1] Then, counterarguments were brought forth against them mostly from Japanese researchers. Following are the two points at issue:

1) There were very few stone tools found *in situ* from certain layers. Moreover, they included unretouched pebbles so that data themselves were not reliable. Also, the layers consisted of secondary deposits not primary.

2) From a typological point of view, it is possible to conclude that these stone tools found *in situ* belong to the Ōmori Age or later. A partially polished axe-shaped tool testify to this. Researchers have been arguing about the Nyu sites, however, a conclusion have not yet been reached. (this is referred to as the "Nyu Issue")

## Ⅳ

The purpose of this report is to make clear those points which have been argued. Following are the three steps undertaken to reexamine the stone tools of the Nyu sites:

1) The previous four reports were written preliminarily and they introduced mainly heavy-duty tools. Besides, the stone tools were not analyzed thoroughly and objectively. Thus, the first step here is to make a final report .

2) In the final report, we mainly reexamine the stone industry of locality 1–B North which was reported in the preliminary report to belong to the Lower Paleolithic Age in Eurasia. In addition, we archaeologically reexamine all stone tools which were reported to have been excavated *in situ.*

3) We adopted a study group method to reconsider the Japanese primeval culture from a Northeast Asian point of view. Accordingly, six researchers from six different fields of studies which were (Russian, Chinese, Korean, Kyūshū, Honshū, and methodology), joined the project. Then, we proceeded to analyze the data objectively reconsidering the old analyses with their limited data and limited point of views. (cf. Part 2; a translation is attached to each section)

This time, we have been researching from an archaeological point of view. Geological reexamination needs a certain amount of field study, however, from the actual results of the past researches it is difficult to rediscover the localities where the stone tools were excavated *in situ.*

## V

There are five groups of stone tools in locality 1–B:

A) Heavy-duty tools consist of axe-shaped tools[2], and five of them are partially polished specimens (Fig.7to37).

B) Heavy-duty tools consist of choppers, chopping-tools and cores (Fig. 52to59).

C) Flake tools consist of flakes including a backed-blade (Fig. 60to69).

D) Flake tools mainly consist of small chert flake tools (Fig. 70and71).

E) Flake tools consist of andesite and obsidian flakes including an arrowhead.

The index tool of group C is a backed-blade and mainly consist of flakes. Their technical features prove that group C belongs to the middle stage of the Upper Iwajuku Age[3]. Judging from the chronological tendency in choosing a material, group D belongs to the earlier Ōmori Age. Group E also belongs to the Ōmori Age since it contains arrowheads. Therefore, there are several groups of stone tools of different chronological stages. Among the stone tools of the Nyu sites, those related to the "Nyu Issue" are in found group A and group B. Here, we shall examine them one by one.

Stone tools of group A are divided into 8 sub-groups from their material features and secondary retouches (Fig. 74). Their materials vary from rounded pebbles to large flakes. At

the point of processing method, some stone tools are retouched partially at the edges, and some are retouched carefully on both sides. Are there any different kinds of stone tools in these 8 sub-groups, or is it only one kind with morphological differences? Besides the variations of their materials and the secondary retouches, we point out the following features common to all stone tools:

1) Although there are some morphological differences, a common intention to sharpen working edges is seen in all sub-groups.

2) There are some polished ones among the axe-shaped tools. However, it is commonly seen in different kinds of stone tools rather than in one kind only.

3) Other than polished traces, the same kind of damages from use are found in all sub-groups.

From these points, we consider that the stone tools of the 8 sub-groups are essentially the same kind. They were divided into 8 sub-groups because of their differences in materials, processes, damages, or resharpings. Thus, we conclude that they are axe-shaped tools partially polished at the edges although they were considered choppers or proto-bifaces when they were first discovered.

Group B belongs to the stone industry which includes choppers and chopping-tools. As a whole, they were also considered the chopper/chopping-tool industry at the time of their first discovery. It was one of the reasons why the Nyu sites were considered remarkable. However, after analyses, we found that most of the stone tools of group B were cores and there were very few choppers or chopping-tools. Besides the question how we distinguish choppers and chopping-tools from cores, it is at least clear that group B is not the chopper/chopping tool industry.

## VI

Now, we shall discuss the appropriate age of groups A and B. There are two possible ages in which axes-shaped tools including edge polished ones of group A may belong to: the Incipient Ōmori Age, and the early stage of the Upper Iwajuku Age. Therefore, stone tools with polishing technique first appeared 30,000 years ago. They disappeared for a long time, then reappeared in the Incipient Ōmori Age to remain afterwards. Both axe-shaped tools of the Upper Iwajuku Age and axes of the Incipient Ōmori Age are partially polished at the edges, but they are definitely different. While stone tools of the Iwajuku Age were mainly retouched on one side, bifacial specimens found in the Ōmori Age were advance in shaping. Thus, we conclude that the axe-shaped tools of group A belong to the early stage of the Upper Iwajuku Age.

Secondly, we shall also examine the appropriate age of the heavy-duty tools of group B. In Japan, it is widely known that heavy-duty tools are often excavated along with axe-shaped

tools of group A from the early stage of the Upper Iwajuku Age. This also applies to the micro-blade industry of the final stage of the Upper Iwajuku Age. Thus, heavy-duty tools of group B belong to either of them. It is most rational to conclude that they belong to the Upper Iwajuku Age as well as group A, since no micro-blade industry was discovered in locality 1-B.

## Ⅶ

During the preliminary researches, excavators claimed that stone tools of four localities went back to the Middle-Riss Inter-Glacial Age. Following is a list of the localities, with their respective geological stratum and excavated specimens:

1) Locality 1-B North: yellowish brown clay just above the Nyu mud stratum; 3 choppers.

2) Locality 3-B: the gravel stratum of the upper portion of the Nyu mud: a heavy-duty scraper.

Locality 3-B: the brown gravel stratum; an angle graver.

3) Locality 4-B: the upper portion of Nyu mud; a chopping-tool.

4) Locality 10-A: the Shimura gravel stratum just below the Nyu mud; a chopper.

We shall summarize the archaeological reexamination results as follows: (for a geological description, see the preliminary synthetic report published in 1968)

1) Three specimens from locality 1-B North are respectively axe-shaped tools (type 1 and 3), and the other is unclassified yet (type 7 or core). The archaeological age of these stone tools are as mentioned above.

2) Unfortunately, we have to admit that the heavy-duty scraper in 3-B is nothing but a natural object. Also, the chert angle graver is what is called a "Pièce d' Esquilles" (Fig. 113-№249), and there is no evidence of rolling in the thin edge. After all, dating from a single specimen is difficult.

3) The chopping-tool in locality 9-B is a fine grained rhyolite; and a large flake scar on one side is a platform and a scar on the other side is flaking faces, thus the chopping-tool is a longitudinal flake core which belongs to the Upper Iwajuku Age.

4) We did not have the chance to examine the chopper in 10-A. Judging from the photograph and the figure, it is an artifact.

Accordingly, nothing among the stone tools excavated *in situ* positively proved the existence of cultural layers of the Lower Iwajuku (Paleolithic) Age. Two examples still to be examined are the specimens of 10-A: one has not yet been confirmed because of the owner's death, and the other is a Pièce d' Esquille which is impossible to date from itself alone(3－B).

## Ⅶ

In spite of a heated discussions over the "Nyu Issue" and an ensuing long silence, the reexamination results carried out after more than 30 years are not sensational. What we have learned from those results might be a complete freedom from the old-fashioned dogma of Movius who considered the Lower Paleolithic culture in Northeast Asia to be a chopper/chopping-tool culture. Researchers who devoted themselves to solving the "Nyu Issue" were pioneers in the study of the Iwajuku Age. For them, study methods and theories of Europe and America were respectable and inviolable, and the "Nyu Issue" has been a product of such academic trends in the past. Today, the studies on the Iwajuku Age in Japan are progressing steadily, and are now tracing the transition of industries back from 200,000 to 300,000 years B.C. The time has come for the archaeologists in Northeast Asia to draw their own pictures of the Paleolithic Age.

Finally, here is an overall evaluation of the other localities which were not directly related to the "Nyu Issue". All of them belong to the Upper Iwajuku Age. The Upper Iwajuku Age of Kyūshū is divided into five phases: the incipient stage of the Upper Iwajuku Age (first phase), the early stage of the Upper Iwajuku Age (second phase), the middle stage of the Upper Iwajuku Age (third phase), the late stage of the Upper Iwajuku Age (fourth phase), and the Final Iwajuku Age (fifth phase). The first four phases are the backed-blade industry, while the fifth phase is the micro-blade industry.

A widely distributed volcanic ash called "Aira-Tanzawa (AT)" (c. 21,000 B.C.) which runs from Kyūshū through Honshū is well known in Japan as it is the key bed that divides the second phase from the third one. The index tools of each phase is as follows: an axe-shaped tool with a polished edge and a trapeze (first phase), a backed-blade and a trapeze (second phase), a backed-blade, a trapeze, a stemmed spearhead, and a trihedral spear (third phase), a backed-blade and a trapeze (fourth phase), and a micro-blade (fifth phase).

Thus, the stone tools in locality 1-B North which are at the heart of the "Nyu Issue" belong to the first phase as well as localities 1-D and 14-C. The number of localities which belongs to the third phase is the most among all the localities on the Nyu plateau. (see Table 18 for the age of each locality)

(Chuji Suzuki)

## NOTES

1) Leroi-Gourhan, André et al., *La Préhistoire* (Paris, 1968).
Ikawa-Smith, Fumiko (ed.), *Early Paleolithic in South and East Asia* (Chicago, 1978).

AIKENS, C. and T. HIGUCHI, *Prehistory of Japan* (New York, 1982).
ДЕРЕВЯНКО, А. П., *Палеолит Японии* (Новосибирск, 1984).

2) Here we call axe-like stone tools of the Iwajuku Age "axe-shaped tools" even though those of the Ōmori Age are called "axes". This is because the latter proved to be used to cut trees while the former have not been yet examined.

3) We consider that the "Iwajuku Age" is most appropriate to describe the age equivalent to the Paleolithic Age in Eurasia. Also, terms like "Paleolithic Age", and "Pre-Ceramic Age" are frequently used for the Paleolithic Age in Eurasia. Ōmori (Jōmon) Age is used for the period following the Iwajuku Age. Today, the term "Neolithic Age" is hardly used.

# 第２部　共同研究篇

# Ⅳ章　東北アジアの始原文化と丹生石器群

## －いわゆる礫器をめぐって－

### A）共同研究の主旨

鈴　木　忠　司
京都文化博物館

第1部発掘報告篇では，既刊4冊の概報や論文で報告された丹生遺跡群の位置づけに関する主張に再検討を加え，同時に先の報告書が概報にとどまっていたという性格に由来して不足していた事実記載を補足した。

第2部共同研究篇においては，発掘報告篇の事実記載とこれに基づく再評価に対して，それぞれの立場で批判検討することを目的とする。この場合の第1の作業は，丹生遺跡群中とりわけユーラシアの前期旧石器文化に相当するとされた1－B地点北区を代表とする石器群(既刊概報中に“打器文化”“握斧文化”段階とされたもの)に対して，日本の現状および東北アジア各地の実状に照らして再評価を加えることである。このために，地域と課題に応じて，以下のような分担と研究の枠組みを設けた。

○シベリアの旧石器と「礫器伝統」について：木村英明(札幌大学)

○中国旧石器時代の礫器：佐川正敏(奈良国立文化財研究所)

○中国華南地方の初期人類の残した礫器文化：黄慰文(中国科学院古脊椎動物古人類研究所)

○朝鮮半島の旧石器文化と丹生石器群：鈴木忠司(京都文化博物館)

○九州における旧石器時代・縄文時代早期の礫器と斧状石器：橘昌信(別府大学)

○日本列島における片刃礫器と丹生1－B地点北区第2群石器の位置付け：織笠昭(東海大学)

○石器研究の目的と方法—丹生遺跡群1－B地点の斧状石器の分析を例として—：竹岡俊樹(日本女子大学)

この場合，各分担者が共通の課題として意識すべき点は，少なくとも以下の諸点である。

1．　1－B地点北区に代表される丹生遺跡群のインダストリーに対比すべき石器群を東北アジア諸地域に見出すことができるかどうか。

2．　上記の問題に係わる評価とは別に，それぞれの地域の石器群の変遷を跡づけるなかで，打・割器，握槌などの大型石器，所謂礫器関連資料の消長を明らかにし，結果的に打・割器などの大型石器の存在のあり方とその意義の一端を明らかにする。

3．　1－B地点北区のインダストリーは，一部に刃部磨製の斧状石器(石斧)を含むが，磨製石器の出現の現状についても跡づけを行う。

4．　モービウス以来，東アジアの前期旧石器文化に対して“チョッパー・チョッピングトゥール

文化”という認識が広まり，それは丹生論争や日本の所謂前期旧石器文化探求の初期の視点にも大きな影響を与えたが，このような理解が実情に即したものなのか，あるいは新たな認識の枠組を必要としているのかが問われる必要がある。

たとえば，共同研究者の一員でもある佐川正敏氏が重ねて紹介しているように[1]，周口店第1地点のチョッパーなどは全資料中の1％，トゥール中の5.4％にすぎず，むしろスクレイパーなどの小型の石器が主体を占めているのが実情であり，チョッパーなどが中国原人の石器群の特徴を反映しているとは言えないという裴文中氏らの中国側学者の新しい認識がある[2]。東アジアの前期旧石器文化の単純な一般化に対する批判は李鮮馥氏らによってもなされている[3]。また，東アジアにおけるチョッパー・チョッピングトゥールの存在の意義を土俗考古学的な見地から再検討することによって，新しく展望することができるのではないかという渡辺仁氏の提言もある[4]。

5．　このことは，事実認識や解釈の問題であると同時に，石器分析の方法論上の問題でもあり，打・割器，握斧などの大型石器に言及する際には，それが石核とどのように区分されるかという問題が必ずつきまとう。ここでは1－B地点北区の石器群を例にとりながらその方法あるいは石器分析法が論議されるが，それはこうした問題が各論者に共通したものとして意識されているからである。

共同研究は，以上のような枠組みと視点によって構成されるが，各論者は第1部発掘報告篇における報告者の判断ないし主張とは一線を画すかたちで議論を進める。この中には，第1部の結論に対する反対意見も生じるであろう。さらに，こうした解釈レベルの問題とは別に，用語についても様々な考え方があり，あえて統一を行っていない。各論者の自由な検討を促すためである。

この点は，ここでの報告や検討・論議が最終的なものではなく，今後とも国内外の将来の研究の展開に応じて検討し続けられる必要があるという意味で，さらにそのことは，今後の研究の進展に向けての新たな第一歩となりうるという意味で，本書刊行の意義をかえって積極的なものとするであろう。

なお，共同研究の枠組みの設定において遺憾な点は，“東南アジア”部門を種々の理由から設けることができなかったことである。この点に関しては，今後，東南アジアの視点から，日本のそして東北アジアの大型石器群の問題が学会内部で検討されることを期待しておきたい。この反面，中国に関しては，本国における第一線の研究者である，黄慰文氏の寄稿を仰ぐことができたことを幸とする。

註

1）a：佐川正敏「中国の前期・中期旧石器時代」(『東北大学埋蔵文化財年報』2所収，仙台，昭和62年)；b：佐川正敏「1985年の動向　中国」(「考古学ジャーナル」263所収，東京，昭和63年)。

2）a：裴文中・張森水『中国猿人石器研究』(北京，1985年)；b：戴爾俭「旧大陸的手斧與東方遠古文化伝統」(「人類学学報」第4巻第3期所収，北京，1985年)。

3）Yi, Seonbok and G.A.Clark, *Observations on the Lower Palaeolithic of Northeast Asia*(Curren

Anthropology, Vol.24, No.2, Chicago, 1983).

4) WATANABE, HITOSHI, *The Chopper-Chopping Tool Complex of East Asia : An Ethnoarchaeological-Ecological Reexamination*(*Journal of Anthropological Archaeology* 4, New York, 1985).

# A) The Purpose and Method of the Study Group on the Nyu Sites

CHUJI SUZUKI
*The Museum Kyoto*

The purpose of the study group on the Nyu sites is to criticize the results of both the preliminary and final reports (cf. Part I of this book) on the Nyu sites. The first step here is to reexamine the stone tools of locality 1-B North of the Nyu sites by referring to other sites in Japan and Northeast Asia. According to the preliminary reports, the dominant stone tools of locality 1-B North are choppers/chopping-tools which belong to the Lower Paleolithic Age. Here, seven researchers (different from the excavators who made the preliminary reports) reexamine the stone tools of the Nyu sites from their own research perspective.

Following are the main criteria each researcher has to consider:

1) To check if there is any stone industry in Northeast Asia comparable to the locality 1-B North of the Nyu sites.

2) To make clear the prosperity and decline of the heavy-duty tools like choppers/chopping-tools and hand axes by tracing the stone tools back to Northeast Asia and Japan.

3) To trace the oldest stage of the polished tools in relation to the edge-polished axe-shaped tools of locality 1-B North.

4) Since Movius, a widely accepted opinion has been that the Lower Paleolithic Culture in East Asia is the chopper/chopping-tool culture. To see whether it is based upon reliable data, or does it need to be reexamine in a new light.

5) To pay careful attention to methodology of the stone tools analysis besides the definition of the Lower Paleolithic Age of East Asia. To discuss the methods of analyses by reviewing the stone tools of locality 1-B North.

In this study group, there will be opposite opinions about the results of the preliminary reports. Discussions on the subject need to be continued as researches progress in both Japan and abroad. Finally, we believe that the publication of this book will encourage further researches.

## B）　シベリアの旧石器文化と「礫器伝統」について

木　村　英　明
札　幌　大　学

### 1　はじめに

シベリアの旧石器時代の研究は，1871年，土木作業員がイルクーツク市郊外のウシャコフカ川右岸において石器とマンモス・シカの歯牙製装飾品を採集したことに始まる。その重要性を理解したチェルスキーらが，ここ陸軍病院遺跡でシベリア最初の発掘を行った。以来100余年にわたる研究は，めざましい進展を見せている。今日においてすら人々の生活を容易に許さない極寒の地に，かつての予想をはるかに上回る遺跡の数が明らかにされつつある。もちろん研究が進んでいる地域は，オビ河の上流域にあたるアルタイ地域，エニセイ河中流域のクラスノヤルスク市を中心とした地域，イルクーツク市を中心としたアンガラ河流域，ザバイカル地方，そしてヤクーツク市を中心としたレナ河とその支流・アルダン川流域，そして極東地域というように，基本的には調査がしやすい都市部，その周辺，あるいは河川流域に限られており，シベリア旧石器文化の全貌が見えたとするには時期尚早と言えるかも知れない。しかし研究の現状は，旧石器文化発展の過程について，およそ正確に辿ることができるまでに至っている。

私見をまじえながらではあるが，まずもって，シベリアにおける旧石器文化変遷の概要を明らかにしておこう。

### 2　シベリア旧石器文化の変遷

シベリアにおける旧石器文化は，大きく7段階に分けて考えることができる(第19表)。第1期は，表面が強く風化した石英製の礫器を特徴とする段階である。続く第2期は，アシュール伝統のビファースを特徴とする段階，第3期は，ムステリアン伝統のルヴァロワ技法が発達した段階である。以上が，前期，および中期旧石器時代に対比されるものである。第4期は，後期旧石器時代への過渡的状況を示すルヴァロワ技法から石刃技法が出現する段階である。第5期は，石刃技法が発達・普及し，葉形尖頭器が出現する段階，第6期は，石刃が小型化する一方，道具の器種分化が著しく進み，特に尖頭器が発達する段階，第7期は，細石刃および楔形細石刃核が出現・普及し，植刃尖頭器など組合せ道具が発達する段階である。

#### a）　シベリアにおける歴史の定礎

第1期は，ヤクーツク市からレナ河上流を140kmほどさかのぼった左岸にあるディリング・ユリャフ遺跡に代表される。激しく風食を受けた石英製の円礫を素材としたチョッパーやスクレブロ，剝片製不定形石器を特色とする石器群である。発掘者のモチャーノフは，これらの年代を180～320万年前に位置づけた(Мочанов1988)。一方，アムール河とその支流・ゼヤ川流域のフィリモシュキ(第253図－4)，クマラⅠ(同図5・6)，ウスチ・トゥの各遺跡，そしてアルタイ地方のウラリンカ遺跡(同図1～3)発見のチョッパーやチョピング・トゥール，くちばし状の礫器がシベリア最古の石器

第19表　シベリアにおける旧石器文化の変遷

| 年代 | 第四世紀編年（シベリア） | | （ヨーロッパ・アルプス） | | シベリアの旧石器文化 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1.1万 | サルタンスキー氷期 | サルタン4 | ウルム氷期 | WⅣ | ◇北極地域への進出　ベレリョフ<br>デニソワ9層<br>カミンナヤ上層　ココレヴォ<br>ヴェルホレンスク山　オシュルコヴォ<br>アフォトンヴァ山　ジュクタイ　ウシュキ<br>ソスノヴイ・ボル<br>クラスヌイ・ヤル　クルラ |
| | | サルタン3 | | | |
| | | サルタン2 | | | |
| | | サルタン1 | | 主ウルム最盛期 WⅢ | ◆細石刃の出現と植刃器の発達<br>◇寒冷気候への適応　マリタ　ブレチ　ウスチ・コヴァー |
| 2.5 | カルギンスキー間氷期 | カルギン2 | | WⅡ | ◆石刃の小型化と葉形尖頭器の普及 |
| | | | | ゲトワイゲル間氷期 | マラヤ・スイヤ　ヴァルヴァリナ山　トルバガ<br>マカロヴォⅣ<br>◆石刃技法の発展と器種の分化　葉形尖頭器の出現<br>地理学協会洞窟 |
| | | カルギン1 | | WⅠ／WⅡ | カラ・ボム　アレンボフスキー記念<br>◇北方および東方への進出<br>◆ルバロワ技法から石刃技法の出現 |
| 5.5 | ズィリャンスキー氷期 | ズィリャンカ3 | | WⅠ | オクラドニコフ記念　クルタク　イゲチェイ<br>デニソワ下層　カミンナヤ下層 |
| | | ズィリャンカ2 | | | ウスチ・カラコル<br>◆ムスチエ伝統のシベリアステップへの進出 |
| | | ズィリャンカ1 | | | |
| 8 | カザンツェフスキー間氷期 | | リス／ウルム間氷期 | | モホヴォⅡ<br>◆アシュール伝統の東漸<br>↓<br>? |
| 12 | タゾフスキー氷期 | | リス氷期 | RⅢ | |
| | シルチンスキー間氷期（メソフ） | | | RⅡ | |
| | サマロフスキー氷期 | | | RⅠ | |
| 25 | トボリスキー間氷期 | | ミンデル／リス間氷期 | | （礫器伝統）<br>モホヴォⅠ　クマラⅡ<br>ウラリンカ？　ディリング・ユリャフ　フィリモシュキ？ |
| 40 | シャイタンスキー氷期 | | ミンデル氷期 | | ↓　? |

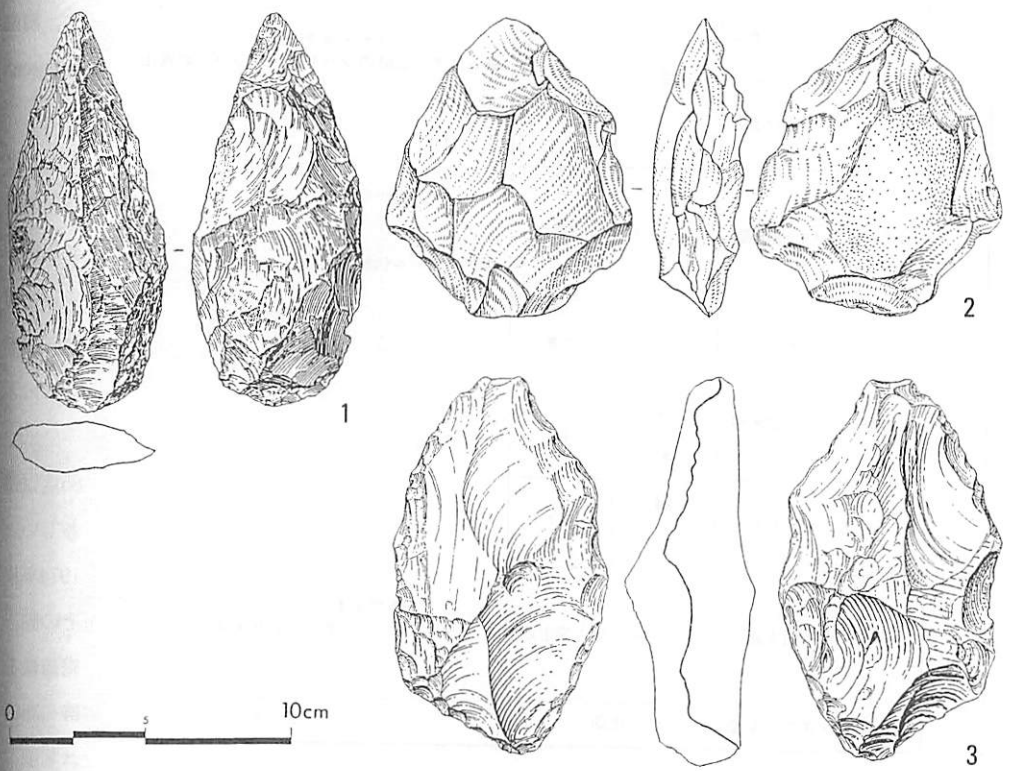
群である，とシベリア考古学の泰斗・オクラドニコフによって早くから主張されていたことはつとに有名である。

しかしこれらの年代については，未だ定説を見ていない。また果たして，それらのすべてが人工

品であるのかどうかという，基本的な問題についても疑問が出されているのが実状である。これについては，後に詳しく触れたい。

第2期は，西シベリア，ケメロヴォ州のクズバスの近くに位置するモホヴォⅡ遺跡から出土した石英製のビファース(第243図－1，ハンドアックス)によって特徴づけられる。デレヴャンコとマルキンらによると，アシュールと同系統のもので，地質学的年代もその古さを裏付けているという(Деревянко他1990)。またアスタホフのコレクションであるトゥーヴァ南方のモンゴル国境に近いトガルィクⅠ遺跡発見のフリント製両面加工石器(同図3)は，形態からすると盛期の典型的なハンドアックスであり，この時期のものである可能性が強い(Астахов1990)。この他アーモンド形や円盤形などの類似品がある。しかしながらいずれもが表採品であり，風食による表面の激しい摩滅もその古さを確定するまでには至らない。

第2期の石器群も，存在がようやく明らかにされ始めた段階で，第1期同様不明な点が多い。間違いなくアシュール伝統の東漸としてみなしうるのかどうか，具体的には中央アジアにおけるそれとのかかわりが注目される。




第243図　シベリアの「ハンドアックス」
1・モホヴォⅡ(Деревянко他1990より)，2・ボゴロツコェ(Окпадников1979より)，3・トガルィクⅠ(Астахов1990)

b）シベリアのムスティエ文化

第3期は，典型的ムステリアンの西からの流入である。ムステリアン尖頭器やルヴァロワ尖頭器(石刃)，同石核，スクレブロ，鋸歯縁石器，抉入石器などを伴う石器群が，アルタイ地域の洞穴を主体とする遺跡群でまとまって知られている。オビ河上流のアヌイ川右岸，比高28mに位置し入口を南西に向けたデニソワ洞穴(12～22層)，下流のソロネシュノエ地区シビリチーハ村の石灰岩地帯の南に開口するオクラドニコフ記念洞穴(2～7層)，デニソワ洞穴の南方およそ5㎞，南東に開口するカーミンナヤ洞穴(14層d文化層)，チャルィシュ川流域のチギレク村北西方3㎞，南東に開口するストラシュナーヤ洞穴(3層)，オングダイスキー地方のイエロ村北東2㎞のウルスル川右岸に位置するチュメチンⅠ遺跡，デニソワ洞穴の南西3㎞，カラコル川との合流点の段丘上にあるウスチ・カラコルⅠ遺跡(第4層)などである。

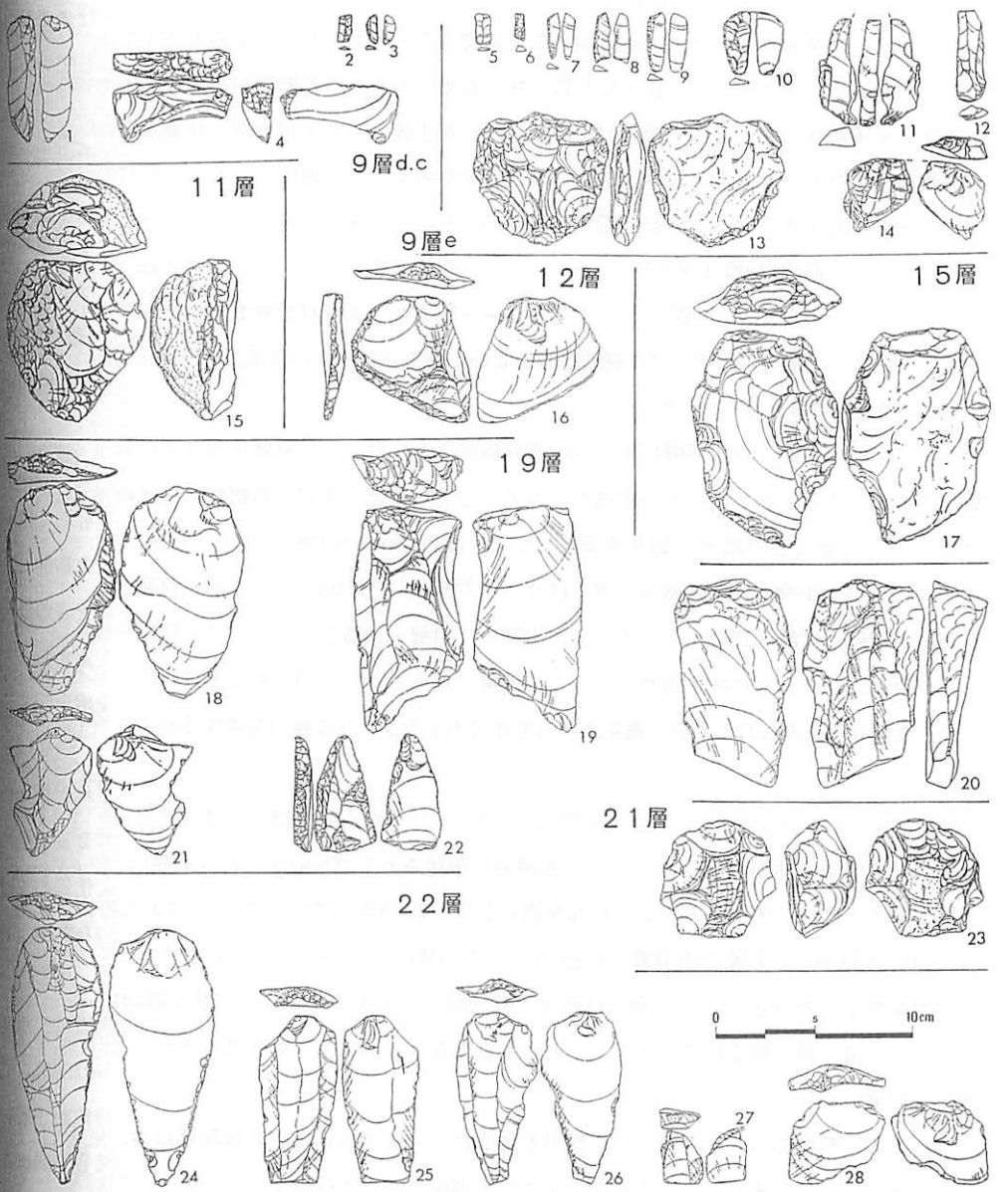
デレヴァンコらは，並行剝離技法や放射状剝離技法，ルヴァロワ剝離技法などの剝片剝離技術指数をはじめとするインデックスの相違や，ムステリアン指数と後期旧石器指数の比較などをもとに遺跡ごと，地層ごとの細分と編年を試みている(Деревянко他1985・1987・1990，Derev' yanko 1990，Шуньков1990，葛西1989)。例えばデニソワ遺跡(第244図)について，22層をムステリアン前期～中期に，21層～16層をムステリアン中期に，14層～12層をムステリアン後期～後期旧石器に対応させた。ルヴァロワ技法指数をみると，22層で最高となり，9.6を示している。しかし，層位ごと，遺跡ごとにみられる差が，編年上の有意差であるのか，今後検討を要する点である(Абрамова 1989)。

地質学的には，ズィリヤンスキー氷河期からカルギンスキー間氷期にかけてのもので，とりわけムステリアンの主体がズィリヤンスキー氷河期に編年される(Derev' yanko1990)。また放射性炭素による実年代は，オクラドニコフ記念洞窟の2層で33,000±520，3層で37,400±400，40,100±500と42,500±600，7層で50,000年以上(カナダでの測定)が示されている。また，次の第4期の開始の時期を示しそうなデニソワ洞穴11層が，37,235，ウスチ・カラコル3層が31,410±1,160である。以下の第4期，第5期の年代とも一応の整合性を示しており，第3期をそれらより古いものと考えて間違いない。

ところで，典型的ムステリアンの広がりの中心は，今までのところ北緯50度以南，東経85度以西の上記南シベリアにあるが，その範囲をエニセイ河中流域の北緯55度にまで拡大しているらしい。

アバカン市の北西50㎞の石灰岩の山塊中に，南に口を向けてドブグラスカ洞穴がある。1974年にアブラモワによって発見され，1975・78・79年に発掘調査が行われた(Абрамова1981)。その際，下層(5～7層)から主に玄武岩製のルヴァロワ尖頭器，同石核，円盤形石核，スクレブロ，鋸歯縁石器が発見されている。この他，クラスノヤルスク貯水湖左岸に洗い出されたクルタク遺跡群やカーメンヌィ・ロク遺跡においても「ルヴァロワ尖頭器」などが発見されている(Дроздов1990)。

注目すべきは，ムステリアン伝統が，アンガラ河流域，具体的にはイゲチェイ山，イゲチェイ湖(第259図－5～7)，イゲチェイ盆地，バルシュキナ(同図2～4)などにまで拡大する可能性があることである。断片的ではあるが，「ルヴァロワ尖頭器」や石核が検出されている(Медведев1975・




第244図　ゴルノアルタイ・デニソワ洞穴出土の石器

1•石刃，2～3•5～9•幾何学形細石器，4•打面再生剝片，10•11•14•27•彫器，12•掻器，13•15•17•「ルヴァロワ石核」，16•スクレブロ(「ムステリアン尖頭器」)，18•21•24～26•ルヴァロワ石刃(尖頭器)，19•20•ルヴァロワ剝片(石刃)，28•剝片

1982，Медведев他1990)。ただしこれらの資料の多くは，ブラーツクダムの貯水により岸から洗い出された資料である。その一部では，石刃石器群と混在している。むしろ次の第4期のものとして扱うべきものかも知れない。

第20表は，シベリアの旧石器時代の遺跡から発見された動物化石の一覧であるが，それによると，この時期の化石は，野馬，ロバ，次いで野牛，毛サイ，ヒツジが卓越する傾向にある。概して暖か

く乾燥したステップ的な動物群からは，寒冷気候下にありながらも，やや穏やかな地域が居住地として選ばれていたことが窺われる。またこの限り，マンモスやトナカイの本格的狩猟には未だ至っていなかったことが理解される。北限のドブグラスカ洞穴の分析結果も同様な傾向を示している。

c）シベリアへの本格的進出と石刃技法の確立

シベリア旧石器文化の第4期，中期～後期の過渡的な段階に，石刃技法が出現する。その当初にあっては，打面調整や周縁調整にルヴァロワ技法を色濃く残している。

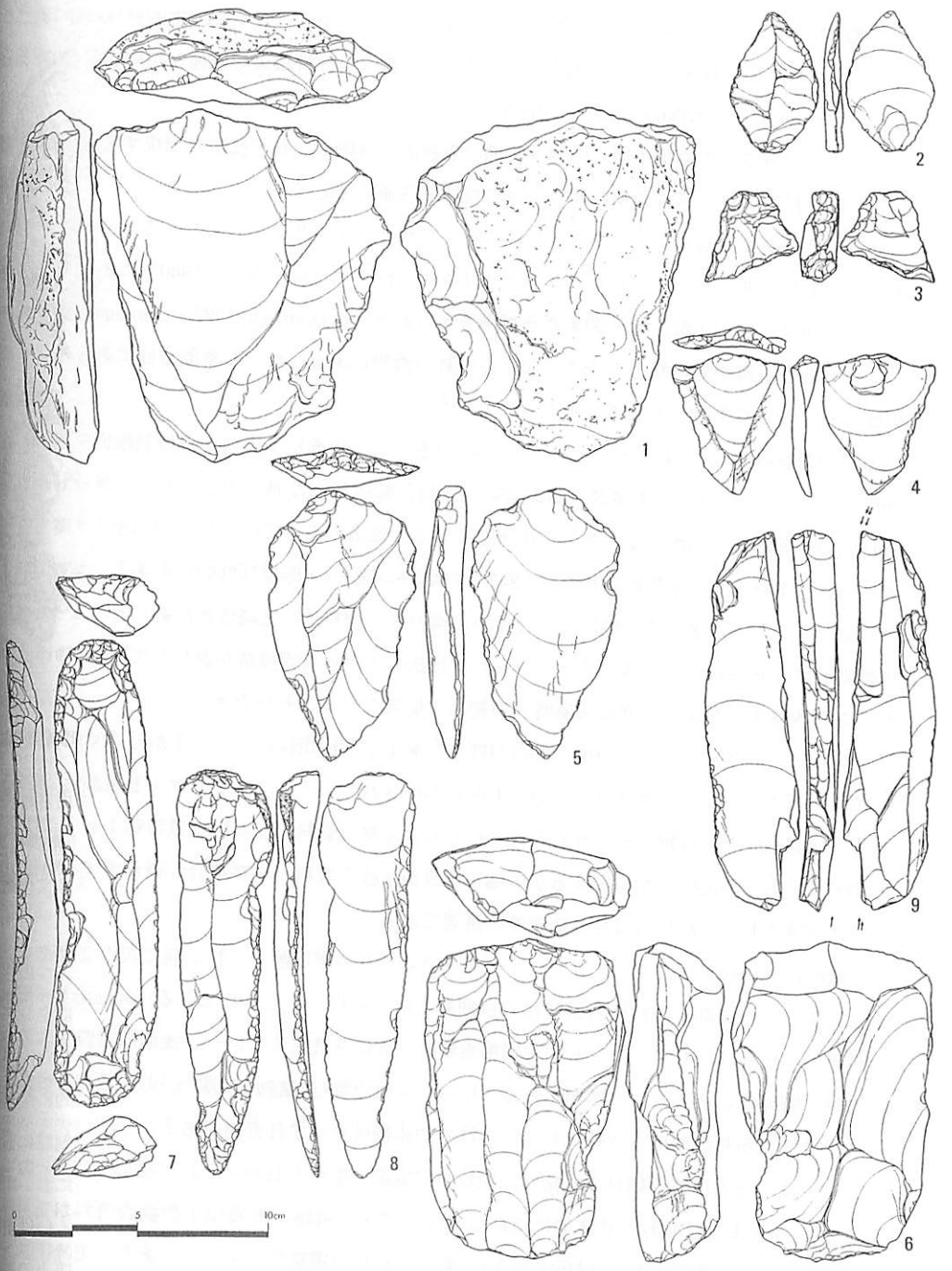
ゴルノアルタイ自治州，オングダイ地区のイェロ村とカエルリク村の間にあるカラ・ボム遺跡がとりわけ重要である。セミサルロ川がカエルリク川へ注ぐ河口部にある。1980年にオクラドニコフによって発見。1980・81，87～90年に発掘調査が行われ（Окладников1983・Деревянко他1990），フリント製の石器や剝片など1万点におよぶ大量の遺物が出土した。石器製造址であると同時に，炉址の発見により生活址としても考えられている。

山形の調整打面（シャポー・ド・ジャンダルム）をもち，表面に多方向からの剝離痕をとどめる平面形3角形のルヴァロワ「尖頭器」（第245図－4・5），幅広長大な同石刃とともに，単一もしくは両設打面の典型的な石刃が，まとまって出土している。後者にあっては，長さ20cmをこす本格的な石刃，それを素材とした定形的な掻器（同図7）や削器（同図8）・彫器（同図9）もある。調査者のひとりデレヴャンコは両者を別の時期とみなすが，両技法の調整法に連続性が認められることから，別の時期とする必要はないと考える。ルヴァロワ技法の中から石刃技法が誕生してくる様相を示すこれらの石器群を，およそ後期旧石器時代の初頭に位置させることができよう。

ちなみに，ルヴァロワ技法の中から石刃技法が誕生する様相は，シベリアから遠く離れた後方カルパチアのコロリェヴォ遺跡群においても明らかにされている。コロリェヴォⅡ遺跡第2文化層における7000点以上の遺物とそのうちの10％にもおよぶ接合資料，また同Ⅰ遺跡第1a文化層における5000点以上の全遺物と20％をはるかに越える豊かな接合資料，現在接合作業がすすめられつつある同遺跡第Ⅱb文化層の石器群が決定的に重要である。

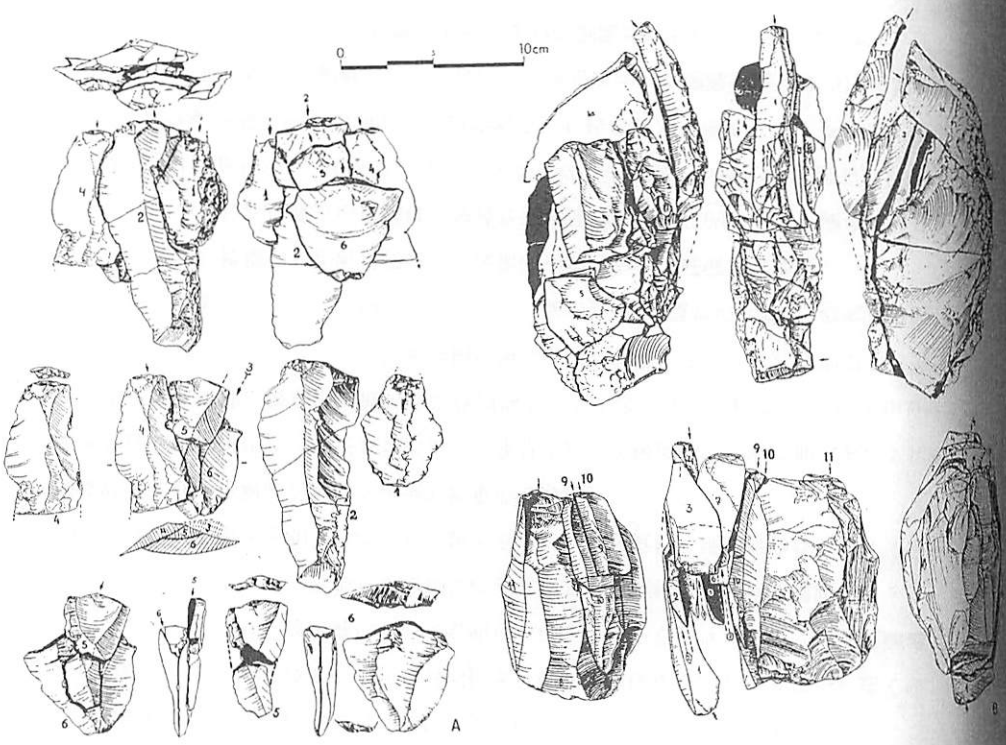
両遺跡は，1970年代にグラヂリンによって発見された多層遺跡で，特に前二者の文化層は，ウルムⅠの先ブレルプ期，後期旧石器時代の草創期という年代が与えられている（Гладилин1980）。また後者の文化層は，リス／ウルム間氷期相当層の上部に位置するという。後期旧石器時代が予想以上に早い時期に始まるとして話題を呼んでいる。安山岩製（全遺物の90数％）の大量の接合資料は，ムステリアンから後期旧石器時代初頭への技術的連続性を示す好資料である。

ウシクは，石刃技法の確立の端緒は，独特な完成品の生産を目的とした，極めて特殊化した技法にあるという（Usik1989）。具体的には，コロリェヴォⅠ遺跡2b層出土の接合資料から復原された「ルヴァロワ尖頭器技法」（第246図―A）である。石核の調整作業として，あらかじめ石核用ブランクの中央に平坦な幅広の剝離面が作られ，その後左側縁と右側縁に近い2カ所の調整打面から，下部中央で交差し，中央エッジを作るように2回の剝離が行われる。そして目的的な「ルヴァロワ尖頭器」が作り出される。同一石核から，1～3枚の「ルヴァロワ尖頭器」が作り出されており，各種の調整が繰り返される結果，石核は長さを減じている。意図した三角形の剝片を獲得するために，




**第245図**　ゴルノアルタイ・カラ・ボム遺跡出土の石器

1・ルヴァロワ石核，2・剝片尖頭器，3・小型スクレブロ，4・5・ルヴァロワ石刃(尖頭器)，6・石刃石核，7・掻器，8・削器，9・彫器




**第246図**　コロリェヴォⅠ遺跡2b層の「ルヴァロワ尖頭器技法」(A)と同Ⅱ遺跡2層の石刃技法(B)(Usik1989より)

「並行剝離」と「求心剝離」の結合がみられるが，前者に関連して剝される石刃もここでは使用されていない。しかしこうした調整技術の改良が，やがて石核表面上のクレステッド・エッジ(予備調整)を生み出し，並行剝離の発展と合まって石刃技法確立へと向かう。コロリェヴォⅡ遺跡第2文化層での資料がそのことを示している(同図B)。

手ごろな原礫から意図的に剝された分厚い剝片を素材とし，通常両端に調整が加えられ二つの打面(両設打面)が用意される。次に石刃の連続剝離を助けるもっとも重要な作業，縦長軸上にクレステッド・エッヂが形成される。ただし，しばしば打面形成の作業と逆転することがある。また，単設打面の例もある。そして，最初のクレステッド・ブレードが剝離され，以後石刃が連続的に生産される。ここでの石核の特徴は，扁平な形態が維持される点にある。ムステリアンの並行剝離においては，クレステッド・ブレードを欠くか，1枚あるかであるが，第2文化層の石刃技法においては，多くのクレステッド・ブレードが剝離されている。クレステッド・エッジの修正，あるいは更新による。石核変形中に，数回繰り返される。しかし，こうした相違にもかかわらず，石核上の後調整にみられる両者の技術基盤は，非常に近似したものであることが理解される。しかもここでは，求心(放射)状調整の「ルヴァロワ亀甲」技法，あるいは先の並行調整の「ルヴァロワ尖頭器」技法が共存し，また石刃剝離における打面の「面取り」技法(シャポー・ド・ジャンダルムを作り出す技法)が

高率でみられ，ムステリアン技法の遺存と見なされている。目的とする剝片(石器)の形態との関連でこれらの技術が使い分けられたように理解される。結果としてコロリェヴォⅡ遺跡第2文化層の石器群は，カラ・ボム遺跡同様にムステリアン風の道具と後期旧石器時代的な道具が混合する。そしてコロリェヴォⅠ遺跡第1a文化層の石器群において，本格的な連続，並行剝離が発展し，石刃技法の全盛期を迎えるが，多くの場合打面は単設で，コロリェヴォⅡ遺跡の石核の形状に見られた扁平な傾向は姿を消している。

シベリア・アルタイでの整理はコロリェヴォの資料ほどに進んでいないが，カラ・ボム遺跡でも同じような接合資料が増加しつつあり，結果が注目される。いずれにせよ，大きく隔たった地域での同じような進展は，石刃技法の出現が，一つの中心からの単純な伝播でないことを示している。カラ・ボム遺跡の二つの放射性年代，33,800±600(2層上部)と32,200±600(2層)は，コロリェヴォ遺跡群の地質学的年代とかなりかけ離れたものである。しかし，シベリアでの相互関係を考慮するといくらか若すぎるきらいはあるものの，おおむね妥当と思われる。なおカラ・ボム遺跡では，上記にあげた石器の他，各種のスクレブロ，掻器，角・単打・通常・多面体型の彫器，ノッチのある石刃，調整痕ある石刃が伴っている。

類似する石器群として，例えばウスチ・カラコルⅠ遺跡第3層やイルクーツク市郊外のアレンボフスキー記念遺跡の石器群をあげることができる。後者からは，三角形もしくは楕円形の剝片を剝すための円盤状石核と，大きな柱状の角礫の一面を作業面とした単設もしくは両設の打面をもつ石刃石核，それらから剝離された石刃・剝片が比較的まとまって発掘されている。大部分の石材が，頁岩製で，しかも石刃の占める割合がより高いことから，カラ・ボム遺跡よりやや後出のものであるかもしれない。

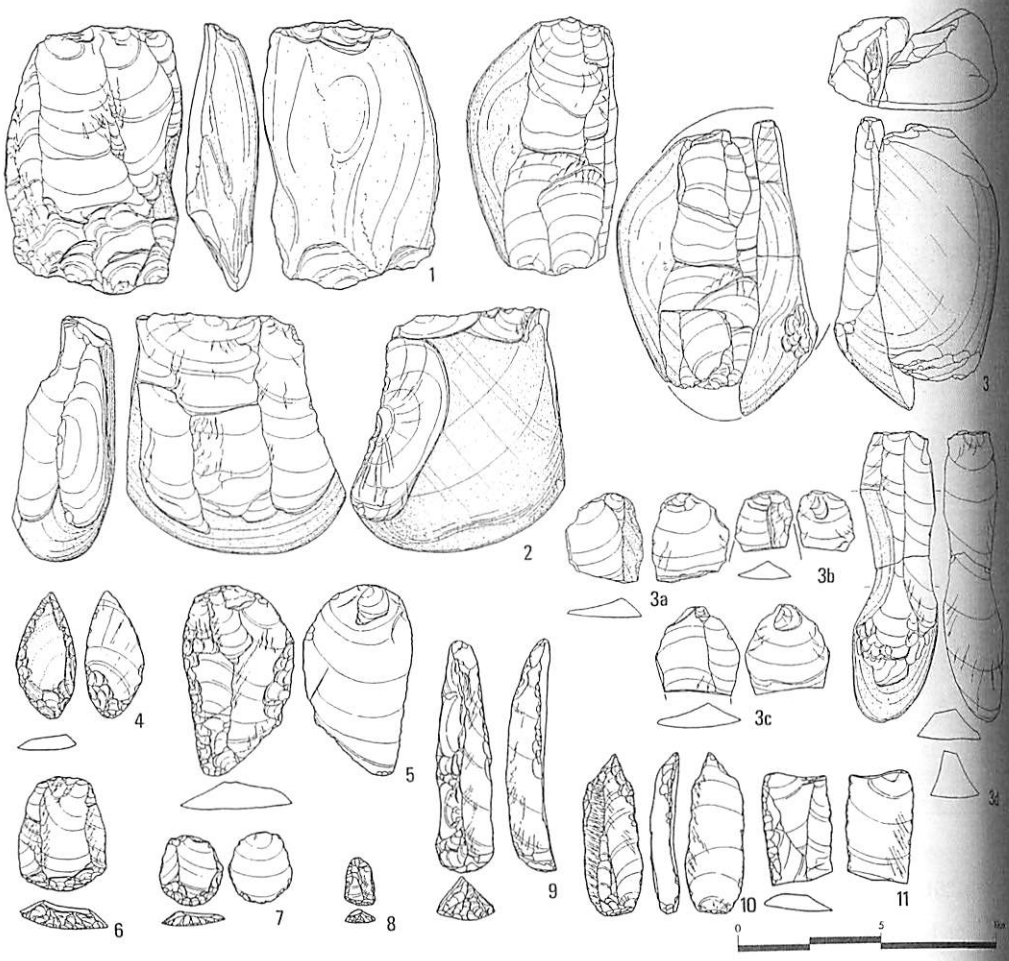
次に，マラヤ・スィヤ遺跡やマカロヴォⅣ遺跡，後方バイカル・トルバガ文化のヴァルヴァリナ山遺跡やトルバガ遺跡など，石刃技法が本格的に発達する第5期の段階が続く。前の段階のものに比較し，石核の素材・石刃が小型化する。しかし，器種の分化はより進んでいる。

マラヤ・スィヤ遺跡は，クラスノヤルスク州，ハカス自治州のコムムナールの北20kmに位置する。エニセイ河支流のベールィイュス川流域の斜面上(比高35m)に立地する。1974～76年にラリチェフによって発掘された。動物意匠を象った「呪術的遺物」が注目されている(Ларичев1978)が，人工的な遺物とは認めがたい。むしろこの時期を代表する500～600点程の石器や骨角器が充実している。また中央に炉をもち，壁際に小さなピットをもつ6軒の住居が発見されたという。

10～15cm前後のあまり大きくない円礫を素材とする石核の形状は，扁平，ないし柱状をなす。石刃技法は，単設，もしくは両設の調整打面から主に一面に集中して石刃を剝離する。しばしば裏面に石刃剝離が及ぶ場合，90度打点を転位させることがある。ごく稀に長さ15cmに達するものもあるが，石刃の多くは10cm，7cm，5cm前後に集中し，その幅は2～4cm前後に集中する。石刃製の石器を含めると，石刃は，全遺物の20%を占めている。なお，放射状調整によるルヴァロワ石核風のものもある。定形的な掻器や削器が多数あり，石錐，スクレブロ，礫器，磨り石，骨角器(尖頭器・掻器用ソケット・装身具など)が伴う。なお定形的な彫器は見られない。この時期に共通する傾向

である。34,500±450，33,060±300の年代が出されている。

マカロヴォⅣ遺跡は，カチュグ町の下流のマカロヴォ村郊外にあり，レナ河右岸から600m内陸の，比高36～38mの斜面上(段丘とされている)に立地する。アクショーノフによって1975～79年，1990年に発掘が行われた(Аксенов他1978，Медведев他1990)。石刃石核は，いずれも円礫を素材とする(第247図－1～3)。大きく形成された調整打面(単設が主)と石刃剝離面(扁平な一面に集中，稀に側縁に行われる例も)以外は，礫表が大きく残される。剝片剝離技法は，「礫器」製作技法と極めて近い関係にある。アクショーノフは，ルヴァロワ技法の特徴が色濃く残っているとし，5万年より新しくはならないと考えている。資料は風食を受けており，しかもツェイトリンの地質学的所見にも支えられている(Цейтлин1979)が，多くの石刃(同図3a～3d)，定形的な石刃製掻器(同図6～9)・石錐(同図10)・削器(同図5・11)，次の段階に関係する簡単な周縁調整で仕上げた尖頭器(同図4)などの組合せからすると，それほどに古く置くことは難しいと考える。この他に「礫器」




第247図　マカロヴォⅣ遺跡出土の石器群
1～3・石刃石核，3a～3d・石刃，4・尖頭器，5・11・削器，6～9・掻器，10・石錐

第20表　シベリアの主な遺跡から発見された動物の化石

| | | デニソワ洞穴 | オクラドニコフ記念洞穴 | カーミンナヤ洞穴 | ストラシュナーヤ洞穴 | ウスチ・カン洞穴 | カラ・ボム | チェルノアジョリエⅡ | シカエフカ | アチンスカヤ | アフォントヴァ山Ⅰ | アフォントヴァ山Ⅱ | アフォントヴァ山Ⅲ | ココレヴォⅠ | ココレヴォⅡ | ココレヴォⅢ | ビリューサ | ウスチ・コヴァー | クラスヌイ・ヤル | ソスノーヴィ・ボル | マリタ | ブレチ | ヴェルホレンスク山 | イルクーツク | バダイⅢ | リシハ | マカロヴォⅡ | マカロヴォⅣ | サンヌイ・ムイス | オシュルコヴォ | ジュクタイ洞穴 | イヒネⅠ | イヒネⅡ | ウスチ・ミリ | ベレリョフ | エジャンツイ | ヴェルフネ・トロイツカヤ | 地理学協会洞穴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 旧石器時代 | 後期 後 | | | | | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | | ● | ● | | | ● | ● | ● | ● | ● | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | |
| | 後期 中 | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | | | ● | ● | | | | | | | ● | | | | | | | | | |
| | 後期 前 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | ● |
| | 中期 後b | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 中期 後a | ● | ● | ● | ● | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| マンモス | | | | | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ◎ | ○ | | ◎ | | | ○ | | | ◎ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | | | ◎ | ○ | ○ | ○ | ◎ | ○ | ○ | ○ |
| ケサイ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | | | ○ | ○ | | ◎ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ |
| 北極ギツネ | | | | | ○ | | | | | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | | | | | ◎ | ○ | | ○ | | | | | | | ○ | | | | | | | |
| キツネ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | | ○ | | | | | | | ○ | | ○ | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | |
| トナカイ | | ○ | | | | | | | ○ | | ○ | ◎ | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | | ◎ | ◎ | ◎ | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | |
| ヘラジカ | | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | | | | | | | ○ | | | ○ | | ○ | | | ○ | | | | | | | ○ | ○ | | ○ | | | | | ○ |
| オオツノジカ | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | ○ | | | | | | | | | | | | |
| アカシカ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | | | | | | | | | ○ |
| ノロ(カスリヤ) | | ○ | | ○ | | | | | | | | | | ○ | | ○ | | | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| ジャコウシカ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| 野牛 | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | | | ○ | ○ | ○ | ◎ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ |
| ウシ | | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | | | ○ | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | |
| ジャコウウシ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| ヤク | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ウマ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ◎ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ◎ | | ○ | ○ | ◎ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ロバ | | | | | | ◎ | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| オオカミ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ◎ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | | | | | | | | | | ○ | | | | ○ | | | |
| 洞穴ライオン | | | | | | | | | | | | ○ | | | ○ | | | | | | ○ | | | ○ | ○ | | | | | | ○ | | | | ○ | | | ○ |
| ライオン | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| トラ | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ヒグマ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | | | | ○ | | | | | | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| アナグマ | | | | | ○ | ○ | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | ○ |
| クズリ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| ブチハイエナ | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| クロテン | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| オコジョ | | ○ | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ヒツジ | | | ○ | ○ | ○ | ◎ | ○ | | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | | | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | ○ |
| ガゼル | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | |
| サイガ | | | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ヤギ | | | ○ | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | |
| イノシシ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| ウサギ | | ○ | | ○ | ○ | ◎ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ◎ | | ○ | | | | | | | | | | | | ○ | | | ○ | | | | |
| ナキウサギ | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | |
| タルバカン | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| レミング | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | |
| ビーバー | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ハタリス | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | |
| ネズミ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | ○ | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | |
| 鳥類※ | | ○ | | ○ | | ◎ | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | | | | | | | | ○ | | | | | | | |
| 魚類※※ | | ○ | | ○ | | | | | | | | | | | ○ | | | | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | | | | ○ | | | | | | | |
| その他※※※ | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |

(第261図－1)の存在が目立っている。

以上の第4期，および第5期における石刃技法の出現と発達は，カルギンスキー間氷期と結びついている。

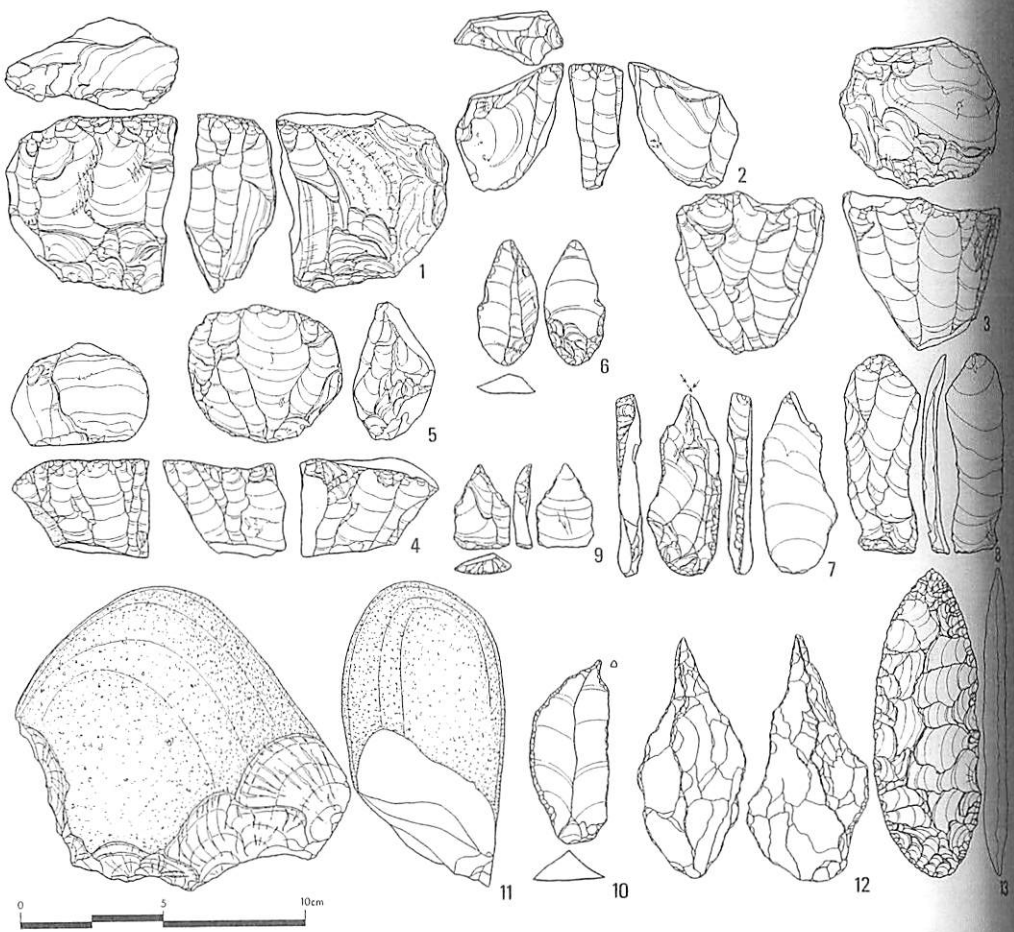
カルギンスキー間氷期は，最初，比較的低温で乾燥化していたらしい。後半になって温暖化し，

腐植土(埋没土)が発達し，森林も形成されるようになったと言われており(Медведев他1990)，人類の拡散しやすい状況がもたらされたことは，間違いない。北緯55度付近にまで生活圏を確実に，また安定的に拡大していたことが，遺跡の分布・数からも裏付けられる。

d）　厳寒への適応と石刃の小型化

これまでの発展の連続として，最後のサルタン氷期を迎える人類は，シベリアの酷寒への本格的な適応を果たす。その最初を飾るのが，マリタ遺跡に代表される第6期の段階である。およそ2万3千年前頃のことである。

マリタ遺跡は，イルクーツク市の北西およそ80㎞，アンガラ河支流のベラヤ川の左岸段丘上に立地する(比高16～20m)。1928年に発見，その後毎年のようにゲラシモフによって発掘調査が行われた(Герасимов1931・1935・1958・1961)。1.5万点の石器・剝片類・装身具や丸彫り像などの骨角牙製品と，3万点におよぶマンモス・毛サイ・トナカイ・北極ギツネなどの骨類，その他石灰岩の




第248図　マリタ遺跡(1～11)及びウスチ・コヴァー遺跡(12・13)出土の石器
1～5・石核，6・13・尖頭器，7・彫器＋掻器，8・掻器，9・掻器＋石錐，
10・石錐，11・チョッパー，12・ピック様石器(類三稜尖頭器)

板石・角礫など多数の遺物が検出されており，シベリアを代表する遺跡である。遺物の集中する様子から，通年利用の 8～10軒の住居が台地のヘリから内側へ，また東南地点から西北地点へ移動したことが復原推定されている(木村1991 b )。石器群は，石刃・小石刃，各種の石核(第248図1～5)，尖頭器(同図－6)，彫器(同図－7)，石錐(同図－9・10)，掻器(同図7～9)，削器，スクレプロ，ピック，ピエス・エスキーユ，叩き石，剝片用礫製石核，「礫器」(同図11)，その他装身具などであるが，器種分化と小型化の傾向が顕著となっている。石刃や縦長剝片に刃こぼれや細かな部分的側縁調整の残る例が多く，しかもそれらを素材としたドリルや掻器，彫器など，加工具の生産量(使用量)が際だって多い。直接的生産具の少ない傾向とは対照的である。また，小石刃のみならず，石核整形の段階で剝された小型不定形剝片の利用も目立っている。ところで，最終形態に見られる石核の形状は，円錐・半円錐が多い。しかし，安定的な打面が形成されるまでは，石刃核の整形と石刃剝離は，比較的自由に打面転位を繰り返しながら行われている。またルヴァロワ技法の伝統をうかがわせるタブレット形，あるいは円盤形の扁平な石核(同図５)，さらに楔形細石刃核の起源を思わせるトルツォーヴィ(いわゆる木口)タイプの石核(同図1・2)がみられており，マリタ遺跡の編年的位置をよく示している。

衆知のごとくここでは，婦人や水鳥をあしらった像，板状の彫刻品，ビーズ，マンモスの線刻画がある板状装身具，あるいはヘアーピンなど，マンモス牙製品が多数伴出している(Абрамова 1962)。

マリタ遺跡に対比できる遺跡は，従来，オクラドニコフの調査したブレチ遺跡に過ぎなかったが，エニセイ河中流域のアファナシェヴァ山遺跡，アチンスカヤ遺跡，アンガラ河流域のウスチ・コヴァー遺跡，レナ河上流域のアレクセイエフスク遺跡など，最近その数を増している。断片的な資料ながら，極東に広がる可能性も強い。

中では，ドロズドフによって調査されたウスチ・コヴァー遺跡が重要である(Дроздов他1979・1990，木村1991 a )。バイカル湖から流れでてエニセイ河に注ぐアンガラ河の中ほど，すなわち北流を続けたアンガラ河がやがて西流してまもなくの左岸にある。流域の遺跡群の中でもっとも北に位置しており，この時期に人類が北緯60度にまで達したことを示している。長さ5～6cmの石刃が多数出土しており，しかも石錐・掻器の占める割合も高い。マリタ遺跡において直接的な生産用具が少ない事実を指摘したが，いくらか不自然な石器組成もウスチ・コヴァー遺跡のそれが補完する。見事に整形された葉形尖頭器が多数発見されており(第248図－13)，この時期の遺跡から発見される動物化石の量・種類の豊かさが，狩猟具の発達と結び付いていることを証明している。やはり，マンモスをあしらった丸彫り像や装身具など，マンモス牙製品多数も発掘されている。

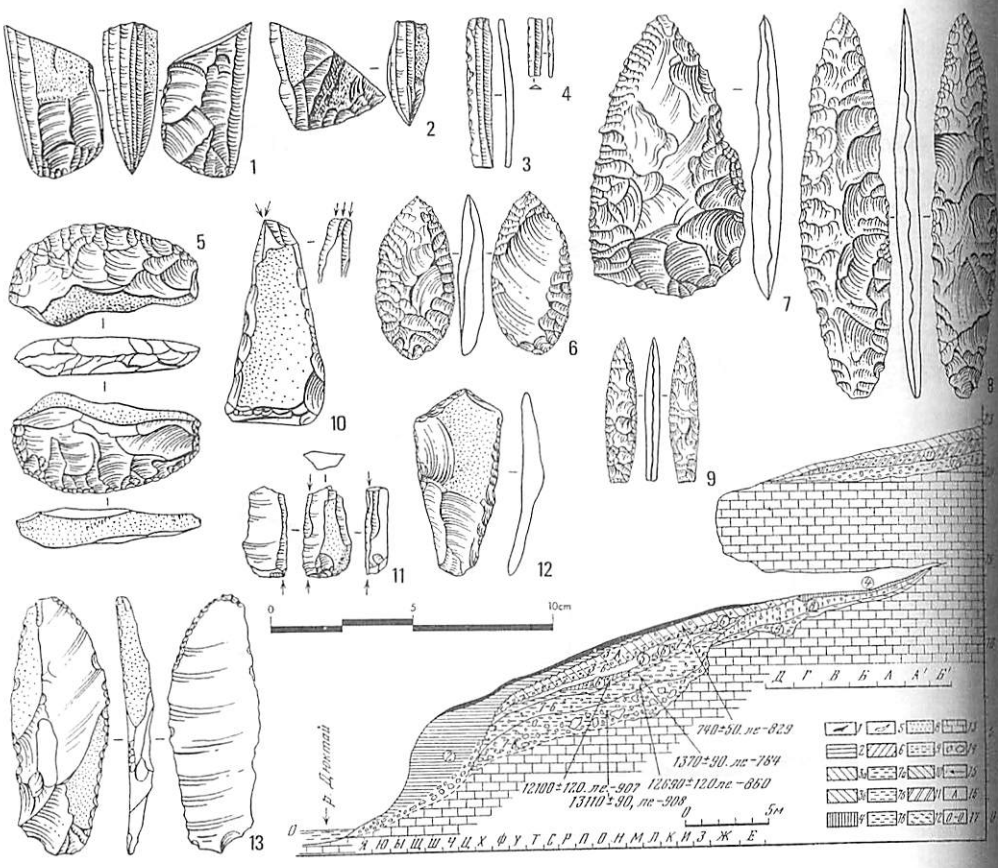
e )　細石刃文化の成立とシベリア全域への拡散

さてサルタン氷期の最寒冷期にあたる次の段階で，石刃の小型化の動向は，細石刃技術を確立せしめ，植刃尖頭器(組合せ道具)を考案させ，狩猟技術を飛躍的に増大させたとみられる。石器の小型化現象は，世界的な動向でもあるが，シベリアでは「楔形細石刃核」から細石刃を剝し取る技術が採用されている。それらを有する石器群が，北緯60度を越えて，シベリア全域に広がっており，し

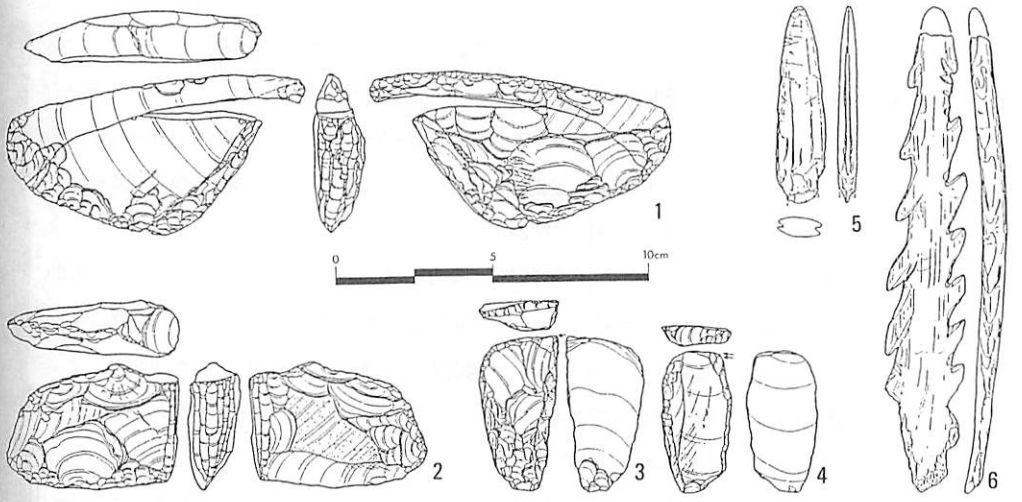
かも分布はこれまでになく濃密である。

例えば，エニセイ河流域のアフォントヴァ山遺跡群とココレヴォ遺跡群，マイニンスカヤ遺跡(第261図－5・6)，アンガラ河流域のクラスヌィ・ヤル遺跡(同図4)，ソスノーヴィ・ボル遺跡(第251図－1)，ヴェルホレンスク山遺跡(第250図，第261図－7～9)，バイカル湖北岸のクルラ遺跡(第251図－2～4)，レナ河上流のマカロヴォ遺跡群，ボリショイ・ヤーカリ遺跡(第251図－5)，ヤクーツク・アルダン河流域のジュクタイ洞穴(第249図)やウスチ・ミリ遺跡群，トゥムルール遺跡，エジャンツィ遺跡など「ジュクタイ文化」の遺跡群，後方バイカルのオシュルコヴォ遺跡(第252図)，ウスチ・キャフタ遺跡，イカラル遺跡，アムール河支流のゼヤ川流域のセレムジャ遺跡，バルカスナヤ遺跡，ウスチ・ウリマ遺跡などのセレムジャ遺跡群，沿海州のウスチノフカ3遺跡，カムチャッカのウシュキ遺跡などが，その好例である。ここでは，特に「細石刃文化」の始まり，および地域性にかかわる若干の問題に限り触れてみたい。

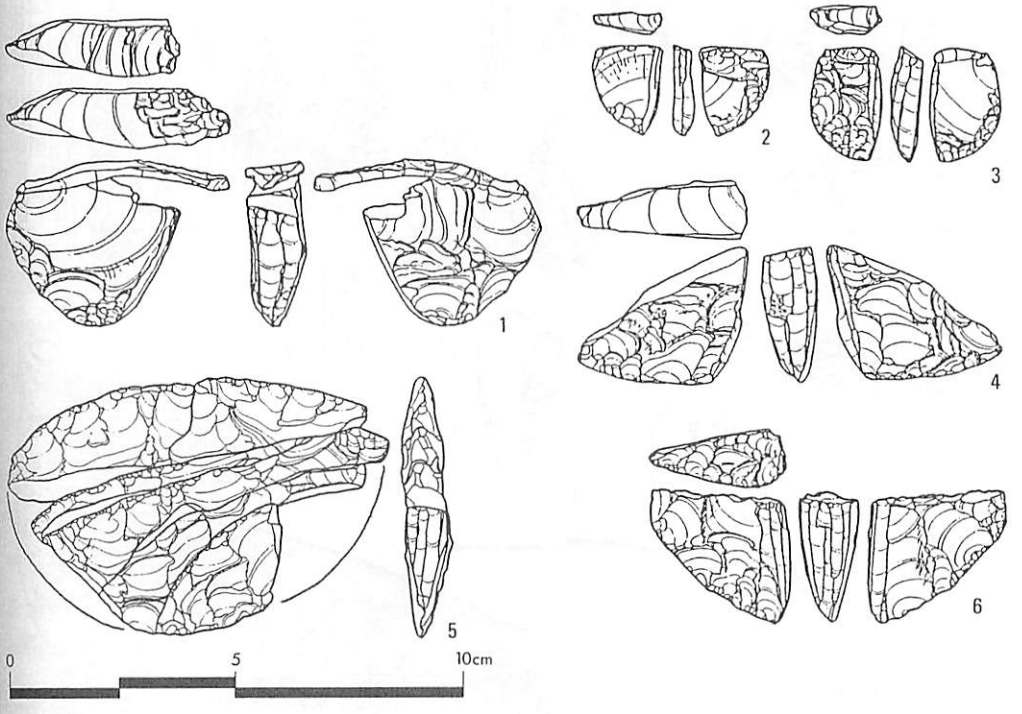
楔形細石刃核，及びその技術的伝統の起源について，モチャーノフは，レナ河およびその支流のアルダン河に展開した「ジュクタイ文化」にあり，3万5千年前にまでさかのぼると主張する(Мочанов 1977)。



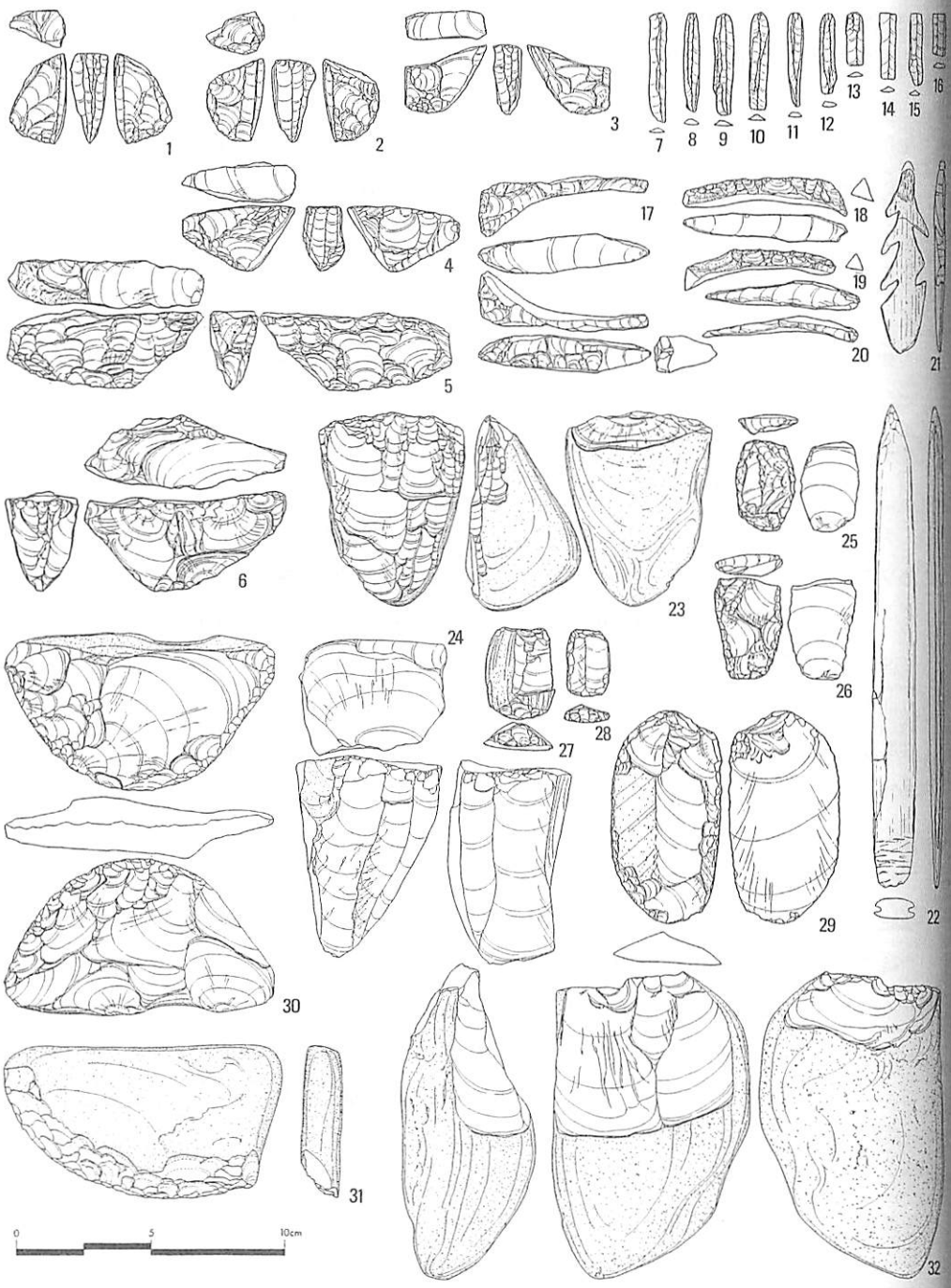

第249図　ジュクタイ洞穴出土の石器群と地層断面図(Мочанов1977より)
1・2・楔形細石刃核，3・4・細石刃，5・細石刃核ブランク，6～9・尖頭器，10・11・彫器，12・13・削器




第250図　ヴェルホレンスク山遺跡出土の石器と骨角器
1•2•石核，3•4•ヴェルホレンスク山型彫器，5•植刃尖頭器，6•ヴェルホレンスク山型銛頭




第251図　シベリアの楔形細石刃核
1•ソスノーヴィ・ボル遺跡，2〜4•クルラ遺跡，5•ボリショイ・ヤーカリ遺跡，6•ウスチ・カレンガ遺跡




第252図　オシュルコヴォ遺跡出土の石器と骨角器

1～6・細石刃核，7～16・細石刃，17～20・打面再生剝片，21・ヴェルホレンスク山型銛頭，22・植刃尖頭器，23・24・石刃石核，25・26・ヴェルホレンスク山型彫器，27～29・掻器，30・31・スクレブロ，32・チョッピング・トゥール(むしろ石刃石核)

「ジュクタイ文化」の標式遺跡・ジュクタイ洞穴は，レナ河支流・アルダン河の河口から上流1020㎞付近に注ぐジュクタイ川を，さらに112㎞さかのぼった右岸に位置する。フリント質石灰岩中にできた洞穴で，川面より12.5mの高さにある。1967～70，1980，1982に行われた調査で，洞窟内部と前庭部，あわせて317㎡が発掘された。遺物包含層は，７ａ～７ｃ層，８層（７ｃ層と同一時期の堆積物とされる），９層である。細石刃（第249図－3・4）とともに発見された石核の大部分（約50点）は，楔形細石刃核である（同図1・2）。これに，彫器（同図10・11），掻器，削器（同図12・13），スクレブロ，そして本石器群を特色づける両面加工の木葉形尖頭器（同図7～9）が伴う。それまでシベリアにおいては，尖頭器のまとまった出土例がなく，しかも細石刃との伴出例はごく稀で，モチャーノフは，「ジュクタイ文化」を提唱した。しかし先に触れたように，ウスチ・コヴァー遺跡で尖頭器が知られるようになり，類例の増加が期待されるとともに，起源・広がりについて再考が求められている（木村1991ａ・ｃ）。

７ａ層の放射性炭素法による年代が12,100±120，13,200±250，７ｂ層のそれが 13,070±90，14,000±100，12,690±120，７ｃ層が13,100±90である。

モチャーノフは，同じような石器の組合せを示す他の遺跡に与えられた放射性炭素年代，すなわちウスチ・ミリ遺跡５層が35,600±900，同遺跡４層中が30,000±500と33,333±500，35,400±600，トゥムルール遺跡のそれが35,400±200，イヒネⅡ遺跡が，31,200±500（第Ⅱ段丘の深さ120㎝）と30,200±300であることなどから，「ジュクタイ文化」の起源が３万５千年前に遡ると考えた。

北アジアへの細石刃伝統の拡散，新大陸や日本など，周辺への人類の移住の問題とからみ，大きな反響を与えた仮説ではあるが，これらの年代については，少なからず問題が残されている（Абрамова 1979ｃ）。

問題の第一は，エジャンツイ遺跡をはじめ，ほとんどの例が１点，あるいは数点の遺物をもって「ジュクタイ文化」と認定されていること。そもそもジュクタイ洞穴においてすら遺物は98点に過ぎない。第二は，木の遺物などによる年代が，正しく「ジュクタイ文化」の年代を示しているかどうか，凍結擾乱作用や氷楔の影響など堆積学的な研究が不十分であること。第三に，ジュクタイ洞穴に毛サイがないなどの違いはあるが，遺跡，地層の相違にもかかわらず，石器の組合せ，及びその技術的特徴，あるいは動物相が同じであること，すなわち，２万５千年の長期間に何んらの変化もないことである。示された年代を無条件に受け入れることは困難である。

「ジュクタイ文化」内の同じような遺物の「組合せ」は，それらが長期間に及ぶものではないことを示している。また先述したとおり，マリタ遺跡に代表されるマリタ文化が，シベリアで一定の段階を画し，しかもかなりの広がりをもつものと考えられることから，「ジュクタイ文化」を２万３千年前以前に置くことには無理があると考える。しかも仮に「ジュクタイ文化」をマリタ文化に後続するものとした場合，「楔形細石刃核」，およびその技術的伝統の出自についても解決の糸口が与えられることとなる。マリタ遺跡においては，石刃剝離が石核ブランクの側縁に及んだ石核や調整の粗い「楔形」・トルツォーヴィ（木口）形の石核，それも大きさだけをみると細石刃核とでも言えそうな石核が確認されている（木村1991ｃ）。石核総数 200点ほどに対し数点と，比率的には決して多いとは

言えないが，「楔形細石刃核」の初現的様相を示しているように理解される。ただしここでは，細石刃の生産を明確に目的としたものではない。

細石刃生産技術，具体的にはそれを剝ぐための粗雑な「楔形」様の石核から発達したシベリアの細石刃生産技術（楔形細石刃核）伝統は，サルタンスキー氷期に始まり，1万7～8千年前の最盛期を中心に発達したものと理解できよう。資料が比較的充実している沿バイカル地方を例にすると，初期にあっては，概して小型の細石刃・細石刃核をもつグループ（クラスヌィ・ヤル遺跡下層，ソスノーヴィ・ボル遺跡Ⅴ層，クルラ遺跡，サンヌィ・ムィス下層）があり，その後次第に大型化する傾向が見取られる。

これまでのところ類例がなく，その位置づけは難しいが，クルラ遺跡の細石刃・細石刃核（第251図－2・3）は，とりわけ小型である（Шмыгун他1978）。石刃もしくは石刃様剝片を素材とし簡単な両面周縁調整によって楔形に仕上げられた細石刃核の大きさは，長さ1.5cm～2cm，幅1.2cm～1.5cm，厚さ5mm前後に集中する。作業面には普通2～3本，稀に4本の細石刃剝離痕が残されている。しばしば打面を再生し，長い，一見「スキースポール」に似た削片が残されている。荒屋型彫器に似たトランスヴァース型の彫器や，小型掻器，アグが両側につくいわゆるヴェルホレンスク山型の鹿角製銛頭（第250図－6参照），植刃尖頭器，針などが伴う。マンモスの骨牙製の道具などが伴出し，しかも放射性炭素法による年代も24,000±5,700が出されており，発掘者のシュムィグンは適当な年代として評価・採用している。ただし，ヴェルホレンスク山遺跡の組合せと共通する要素が少なくなく，いくらか若い年代に置かれる可能性も排除できない。年代の当否はともかく，両面加工のブランクを利用し，スキースポールを剝取する過程を伴う長さ4～5cmの楔形細石刃核が，上層で増加する傾向にあり，細石刃の大型化の傾向は間違いなかろう。

クラスヌィ・ヤル遺跡下層の細石刃核は，主に片面加工で，なかには打面相当部分に自然面を残す素材を用い，適宜打面形成，調整（含む側方）を繰り返すタイプ，しかも幅の割には長さが短い楔形細石刃核である（Абрамова1978，Медведев1966）。素材，あるいは細石刃剝離面の選び方，調整の方法は，北海道の「峠下技法」を思わせる。大型スクレブロ，矢柄研磨器，掻器，石刃，彫器（角・通常・トランスヴァース型），礫器，駝鳥の卵殻製ビーズなどの伴出が知られている。

ところでデレヴャンコは，ヤクーツクの後期旧石器時代遺跡で発見される資料は，セレムジャ遺跡のものに共通しており，起源的につながりがあると考えている。そしてジュクタイ伝統がアルダンで出現するのは，セレムジャやゼヤ川からの人間の移動に結び付いたものである，と推察する（Деревянко1990）。そして，セレムジャ川の水系は，ヤクーツクのみならず，オホーツク海沿岸，そして日本へとつながることから，文化的な系統関係を考察する上で重要な位置を占めているとみなしている。充分に一致しているとは言い難いが，「湧別技法」や「ホロカ技法」，トランスヴァース型の彫器，尖頭器など，北海道の旧石器文化と比すべきものがあり，今後の課題として興味深い。

シベリアの細石刃文化を概観すると，トランスヴァース型の彫器，および「湧別技法」をもつ石器群と，それをもたない初期石器群（クラスヌィ・ヤル，サンヌィ・ムィスなど），もしくは西の石器群（アフォントヴァ・ココレヴォ文化）とに大別することができる。また前者についても，尖頭器を

もつ石器群(「ジュクタイ文化」，ゼヤ・セレムジャ川流域の石器群など)とヴェルホレンスク山型の鹿角製銛頭をもつ石器群(沿バイカルおよび後方バイカルの石器群)，半三日月形のスクレブロをもつ石器群(エニセイ，アンガラ河，後方バイカルの石器群)ともたない石器群とに細分できる。石器組成や石材の選択・利用法，製作技術などから，さらに細分可能である。詳述することはできないが，時代的変遷としてだけでは理解しえない，むしろ地域的特色として理解した方が良いと思われる様相が認められるのである。ちなみにこの意味について，楔形細石刃核に表象される大きなまとまりと，そのもとに見られるモザイク模様こそ，厳寒期，さらにその後の後氷期へと向かう激動の時代における，「北方モンゴロイド集団」の形成と分立のさまざまな様相を反映したものであろう，と予測したことがある(木村1991c)。

いずれにせよ，第6期から第7期にかけての人類のシベリア全域への拡散は，技術革新と装備がもたらしたものであり，その第7期の初期までにあっては，まちがいなくマンモス動物群と深く結びついていたことが理解される。これらの人びとを，しばしば“マンモスハンター”と呼んでいる。しかし第20表に示されているとおり，必ずしもマンモスのみを，あるいはマンモスを主として捕獲する専業集団が存在したということを意味してはいない。

なお細石刃核・細石刃の製作と使用は，マンモスや毛サイの絶滅後も継続する。北海道の「蘭越型」，および九州の「福井型(西海技法)」と結び付く楔形細石刃核の一群が，シベリア(第251図－6)・中国北部・蒙古に広く分布し，土器出現の事件と関わりながらやがて終末期を迎えるらしい。加えてその終末の様相は，地域によって一様ではなく，鉛筆・円錐形細石刃核が長期間存続する例がある。

沿海州においては，尖頭器(類有茎尖頭器を含む)と局部磨製石斧を組合せとするオシポフカ文化が，細石刃後を飾っている。ガーシャ遺跡で，土器と伴出したことはよく知られている(Окладников他1983)。放射性炭素法による年代が，12,960±120である。石器群においては，神子柴文化に関連があり，土器については，施文法や器形が北海道の縄文早期平底土器群の東釧路Ⅰ式土器によく似ている。近い将来，両者の関連性を論ずることができるようになるものと，期待している。

### 3　シベリアにおける「礫器伝統(文化)」

以上，シベリアの旧石器文化の変遷について，その概略を述べてきた。もちろん，多くの不明な点，未解決の問題を残しているのが実状である。なかでも最大の課題のひとつは，なお統一した見解が形成されているとは言い難い最古の文化，すなわち第1期に関する理解である。

シベリア最古の文化をめぐるこれまでの研究は，シベリアに人類の移住がいつ行われたかというそもそもの関心とともに，この地域(中央アジアを含めて)の文化的特殊性の解明に大きな注意が払われてきた。そして，旧石器文化研究の開拓期を除くと，より具体的には「礫器文化」の有無の問題とかかわりながら，しかも，モビウスの仮説と深く結びつきつつ，正しくはその影響を大きく受けながら進展してきたと言えよう。

モビウスによると，更新世における人類の居住域は，文化的に大きく二つの地帯，すなわち，ハンドアックスとルバロワ技法が支配的であったアフリカ，中東，西ヨーロッパと，チョッパー，チョッ

ピング・トゥール，礫石核とクラクトニアン剝片が普及していたより東方の北インド，東，および東南アジアとに分けられる，という(Movius1944・1949)。

1956年，オクラドニコフは，ソ連邦中央アジアにおいて，二つの文化領域が同時に存在することを記し，モビウスの仮説に呼応する初めての試みをなした。少なくともその一つは，東南アジアの礫器と類似する前期旧石器であると考えた(Окладников1956)。また1966年には，中央アジアの前期旧石器について触れ，ソ連邦中央アジアでハンドアックスがみつかるのは，その極西地域，トルクメンに限られており，より早い時期からチョッパーが発見される東方地域には認められない現象であることを指摘した。関連して，中央アジアに最初に住み着いた先史時代人は，ヨーロッパやアフリカ，近東のシェル・アシュール文化の人々ではなく，東アジアや東南アジアの先史時代人であるシナントロプスに極めて近いというのがもっともらしい，とも言及している。

オクラドニコフの研究に前後して，ラーノフは，前期旧石器時代の資料はもちろん，より新しい時代の資料をもあわせ検討し，見解を発表している。中央アジアの遺跡に二つのグループ(圏)の存在を確認し，第1のグループAは，中央アジア以西にある遺跡群に結び付き，第2のグループBは中央アジアの東に位置するもの(東アジアタイプ)に結びつくとし，長期間におよぶ二つのグループの並行発展を跡づけた(Ранов1965)。すなわち，第1のグループの遺跡群は，初期のハンドアックス，続くルヴァロワ・ムスティエタイプ文化に特徴づけられ，一方の第2のグループは礫器技法，そして「粗雑なチョッピング・トゥール」一式によって特色づけられる。

以上は，シベリア，中央アジアの考古学に関心を抱いたパイオニアたちのほんの一部に過ぎない

第21表　中部アジアの石器時代遺跡に関する編年試案（Ранов 1965, cmp.103）

| 中部アジアにおける第4紀層序編年 | A群：近東タイプの文化 | | | B群：東アジアタイプの文化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 考古学的年代 | | 遺　跡 | 考古学的年代 | | 遺　跡 |
| アム・ダリア コンプレックス（完新世$Q_4$） | 新石器時代<br>中石器時代 | | ドジャバス（Ⅳ）（ウズベキスタン）<br>ドジェイトゥン（トルクメニア）<br>ドジェベル，下層（トルクメニア） | 新石器時代<br>中石器時代～早期新石器時代 | | クイ・ブリェン，アク・タンギ(タジキスタン) |
| ゴロドノステップ 乾燥ステップ（ドシャンベ）コンプレックス（上部更新世$Q_3$） | 後期旧石器時代 | フェースⅤ～Ⅵ(？)<br>フェースⅢ～Ⅳ(？) | ホージィ・ゴール（キルギス）<br>カラ・カマル（アフガニスタン）<br>キズィル・カラ（タジキスタン）<br>クラスノヴォーツク～アシュハバート鉄道1039mの石器製作址 | 後期旧石器時代 | | サマルカンド遺跡（ウズベキスタン） |
| タシュケント（イリャク）コンプレックス（中部更新世$Q_2$） | 発展期，もしくは後期ムスティエ<br>早期ムスティエ（アシュール・ムスティエ） | | ホジャケント（ウズベキスタン）<br>ドジャール・クタン（タジキスタン）<br>テシュク・タシュ（ウズベキスタン）<br>カイラク・クムィ（タジキスタン） | ソアンタイプ文化 | カラ・スウ段階<br>カラ・ブラ段階<br>トカルィ段階 | カラ・スウ（カザフ）<br>カラ・ブラ（タジキスタン）<br>トカルィⅠ～Ⅲ(カザフ)，オン・アルチャ(キルギス) |
| ナナイ（クリャブ）コンプレックス（下部更新世$Q_1$） | シェル・アシュール | | ホージィ・ガイル（ウズベキスタン） | ソアンタイプ文化のボルィカスガン段階 | | ボルィカスガン，タニルカスガン（カザフ） |

が，いずれもがモビウス理論に導かれ，その歴史的性格を理解しようとしていたのである。しかしながら興味あるモビウスの仮説自体は，やがて具体的な事実を前に危機に直面する。

複雑な様相をおびながら進展する研究ではあるが，礫器のみによって構成される単純な「礫器文化」が実在しないらしいことは，すでに明らかである。剝片製石器の正当な評価は，時代的な流れである(鈴木1991)。また衆知のとおり，ヨーロッパ地域でのチョッパーの検出，逆に中国やヴェトナム，韓国などでのビファース(ハンドアックス)の検出が相次いで報告されている。もちろん，例えば東南アジアでの「ハンドアックス」が，典型的なものであるのか，非典型的なものであるのか，またそれぞれに直接的な系統関係があるのかないのかなど，充分な検討が重要であることは言うまでもない[1)]。

かつての未知(空白)の地域，シベリア，あるいは広く中央アジアを含む地域での研究の急速な進展をみるだけでも，モビウスの仮説の再検討，再構築が不可避的動向にあることは明らかである。同時に，その再編の方向をも示唆する貴重な資料が蓄積しつつある。

果たしてシベリアにおいて「礫器伝統(文化)」が存在するのか，否か，次に，第1期に位置づけされている石器群について具体的にみていきたい。

**フィリモシュキ遺跡**

遺跡は，フィリモシュキ村に位置し，アムール河中流に注ぐ支流・ゼヤ川の左岸段丘上にあり，比高20～23m，10～15mを数える。1961年に発見され，A.P.オクラドニコフによって調査された。地層は，上から表土の腐植土層，黄色砂質ローム薄層，灰色シルティ砂と砂質ローム厚層，礫層，ジュラ紀の基盤と続くが，遺物は礫層中からの出土である。地表下9～10mである。ノッチ状のチョッパー，くちばし状の先頭部をもつ礫器が含まれ(第253図—4)，その非常に原始的な様相から，オクラドニコフは，前期旧石器のものと考えた。いずれも緻密な石英で作られている。デレヴャンコは，アフリカ最古の礫器，あるいはハイデルベルグ人に共伴するノッチ状石器やくちばし状の礫器などと比較しつつ，その年代について，洪積世中葉－下部旧石器，先ムステリアンとする(Деревянко 1971・1973・1975)。洪積世中葉形成の砂質ロームの下，礫層出土とされるが，現在では再堆積したものと考えられており，また遺物についても，人工品であるかどうかの疑問が少なくない(Powers 1973)。

**ウスチ・トゥ遺跡**

遺跡は，ゼヤ川のスヴォボードヌィの上流300kmのウスチ・トゥ川の近く，カリシュニコヴァ・ゴルヌィ谷から5kmの河岸段丘上に所在する。同じような条件で3地点が知られている。シルト質の砂あるいは砂質ロームの下の礫層から，200点以上の粗雑な礫器(チョッピング・トゥール，くちばし状の尖頭部をもつ礫器，スクレブロ)などが見られたという。デレヴャンコによると，ゼヤ川上流の山岳氷河が融け始め，多量の砂やシルトが運ばれた上部洪積世の前のもので，フィリモシュキ同様中部洪積世のものであるという(Деревянко1971)。

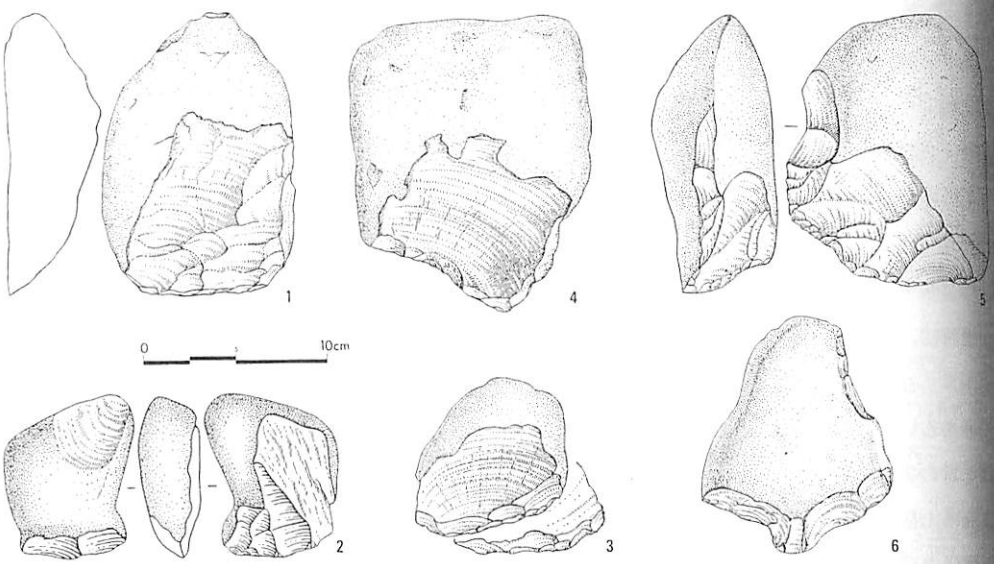
**クマラⅠ遺跡**

クマラ村から12kmの地点に所在する。地層は，上から表土(厚さ10～30cm)，黄色ローム層(150～

200cm)，粗い砂を含む円礫層と続くが，最下層の礫層より20点の石器が検出された。1968年のデレヴャンコの調査の結果，クマラⅠは，チョッパー(第253図－5)とチョピング・トゥール，尖頭器，あるいはくちばし状礫器(同図6)，粗製の剝片が剝がされた痕をもつ礫器で特色づけられることが判明したという。礫器は，フィリモシュキ出土のものに対比され，下部旧石器時代，すなわち中部洪積世の年代が与えられている(Деревянко1971)。アブラモワは，仮に他の遺跡の「礫器」が実際に極めて古いものだとすれば，クマラⅠ遺跡のものも，同様に古く位置づけられるとした(Абрамова 1989)。

ウラリンカ

1964年にA.P.オクラドニコフによって発見され，1969年に発掘調査された。遺跡は，ゴルノ・アルタイ自治州の州都，ゴルノ・アルタイ市の南東方郊外に所在し，マイマ川の支流，ウラリンカ川の左岸段丘上に立地する。アダメンコ(1983)によると，地層は，上より腐植土層(0～50cm)，淡灰色ないし黄灰色のレス様粘土(50～180cm)，腐植土を含む化石土壌(180～230cm)，褐色ないし赤褐色粘土(崖錐堆積物，2.3～6m)，石英岩など岩石片を含む褐色塊状粘土(6～10m)，砂利混じりの礫層と続く。遺物は，上・下2層に分かれて出土し，チョッパー(第253図－1・2)，チョピング・トゥール，スクレブロ(同図3)，石核，剝片などを含む下層の一群は，第5層中から検出されており，アダメンコは，上層の崖錐堆積物がアルタイ北部の全面に沿って広く広がるものであり，下部洪積世と中部洪積世の土壌交替期よりも古いとしたグロモフの考えに倣い，それと類似の様相を示す下部包含層の時期を洪積世前期のものとした。アルタイの地質学者，ラガジンは，ウラリンカの年代は，65万年前以前にさかのぼると考えている。また熱ルミネッセンス法によると，文化層の




第253図　シベリアの「前期旧石器」(Абрамова1989より)
1～3・ウラリンカ遺跡，4・フィリモシュキ遺跡，5・6・クマラ遺跡

下で150万年以上古いデータも出されており(Шлюков1983)，オクラドニコフは最古の居住民と考えた。デレヴャンコは，50万～ 70万年前と推定する一方で，研究者の間で人工品であるかどうかの疑問があることにも触れている(Derev' anko1990)。またアブラモワは，道具の概観が著しい古さを思わせるが，ウラリンカの年代問題は未解決のままであることを記している(Абрамова1989)。

以上は，従来「前期」旧石器としてあげられてきた代表的な石器群である。しかしながらすでに明らかなように，それらの多くが，果たして人工品とみなしうるのか，どうかという初歩的問題についてすら，共通の理解は得られていない。出土状況をはじめとした遺跡の様子が今ひとつ不明な点も問題の解決を難しくしている。仮にそれらが人工品とみなされた場合でも，与えられた年代は，あまりにも漠然としたものである。そこで重要なのが，今日何かと話題を提供しているディリング・ユリャフ遺跡出土の石器群とモチャーノフの「仮説」である。

ディリング・ユリャフ遺跡

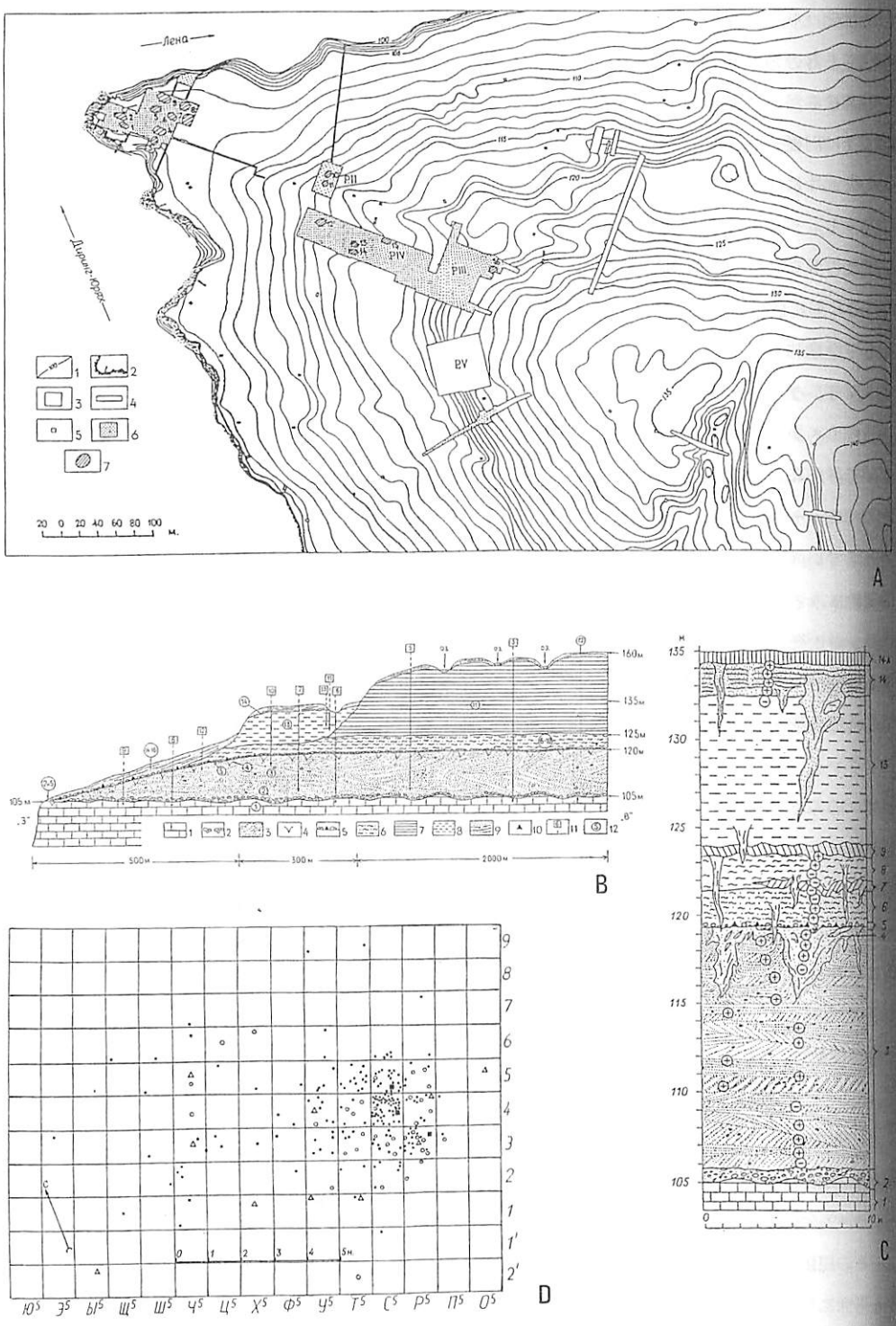
遺跡は，レナ河の左岸，ディリング・ユリャフ川との合流点付近に位置し(北緯61°12′，東経 128°28′)，比高125～135mの段丘上に立地する。1982年，科学アカデミーヤクーツク支部考古学研究所のモチャーノフらによって発見され，1983・84，1990年に発掘が行われた(Мочанов1988a～в)。これまでに，2,000m²という広大な面積が調査されている(第254図－A)。

遺跡にみられる地層は，およそ14層に細分され，下から第1層：カンブリア紀の基盤(上面での川面との比高105m)，第2層：基底の河床礫(0.5～1m)，第3層：鉄分に富む粗粒の煉瓦色に近い褐色砂(黄色，あるいは灰黄色，緑色っぽいところあり。140～165mの段丘堆積物の厚い所で20m，105～120m段丘のそれでは15m，薄い所で0.5m)，第4層：様々な粒径の灰黄色砂(化石氷楔－サンドヴェイ)，第5層(デリューヴィの礫混じりの砂利層。礫種はフリント質が65～70%，珪岩が20%弱，石英岩が10%弱。深い所で地表下40m，厚さ0.05～0.1m)，第6層：灰橙色をした様々な粒径の砂とシルト(厚さ1.5～2m)，第7層：シルト質ローム(0.35～0.45cm)，第8層：橙色のシルト(1～1.9m)，第9層：赤褐色のローム(上位の段丘堆積物では1.1m，125～135m段丘では薄く0.2～0.5m)，第10層：灰黄色の砂，第11層：シルト質ローム，第12層：層状の灰黄色の砂(第11～12層は，場所により失われている)，第13層：シルト質のローム(厚さ8.5m)，第14層～16層：125～135m段丘形成後の砂，腐植土(厚さ3.5m)である(同図B・C)。

遺物包含層は，第5層である。その上を覆う10～30mの堆積物は，「水成堆積物」とみなされている。

上記概報によると，遺物はまとまりをもって出土しているらしく，すでに16の遺物集中地点が確認され(同図D)，チョッパーやスクレブロ，剝片，礫などあわせて3,166点の遺物が発見されている。それらの99.5%が石英製，わずかに輝緑岩やフリント製のものがある。モチャーノフは，M.リーキー(1971・1976)とシャヴァィユオン(1976)によるアフリカ・オルドワンのコレクションに関する研究にならい，第22表のごとく分類している。

すなわちディリング・ユリャフの石器群は，大きく三つのグループに分けられる。Ⅰ群－道具，Ⅱ群－加工用具(台石・ハンマー)，Ⅲ群－一次剝離痕を残す原石・剝片，破片などである。それぞ




第254図　ディリング・ユリャフ遺跡の地形図と発掘区(A)，地層断面図(B・C)，及び第14遺物集中地点出土状況(D)(A～C・Мочанов1988a，D・Мочанов1988бより)

れのグループは，さらにいくつかのカテゴリーに細分される。例えばⅠ群の道具類は，三つのカテゴリー，具体的にはⅠａ－大円礫・円礫，[2] あるいはそれらの大型剝片によって作られた道具類，Ⅰｂ－破片や剝片から作られた道具類，Ⅰｃ－判別の難しい道具類に区分される。次に，道具の種類によるクラス分けが行われる。チョッパー，チョッピング，スクレブロなどである。そしてさらに，重量などから亜クラスに細分されている。チョッパーについてみると，普通タイプのチョッパー(0.5～2kg)，大型チョッパー(3.5～4.5kg)，小型チョッパー(0.1～0.2kg)という具合いである。なお表には，チョッパー，チョピングとスクレブロのみがあげられ，しかも定形的なものとして扱われているが，不定形なものも少なくない。実際には様々なものが含まれており，タイプ，ヴァリアント，亜ヴァリアント，さらに低次の単位にまで適宜分類されている。

ところで，礫や礫の破片を含めた遺物総数に対し，「道具」は，わずか12.5%に過ぎない。しかし，その圧倒的多数をチョッパー，チョッピング・トゥールが占めており(42.5%)，本石器群の大きな特徴とみなされている。

第22表　ディリュング・ユリャフ遺跡出土遺物（Мочанов1988б より）

| 石器の群・カテゴリー・クラス・種類 | 発掘全体 | | スポット14出土数 | |
|---|---|---|---|---|
| | 点　数 | 百分比 | 点　数 | 百分比 |
| Ⅰ道具 | 396 | 12.5 | 36 | 15.5 |
| Ⅱ加工具（台石・ハンマー） | 216 | 6.8 | 13 | 5.6 |
| Ⅲ第一次割石（礫など） | 2554 | 80.7 | 184 | 78.9 |
| 総　　計 | 3166 | 100% | 233 | 100% |
| Ⅰ道具 | | | | |
| Ⅰａ・大円礫・円礫，それらの割石製 | 170 | 42.9 | 22 | 61.2 |
| Ⅰｂ・剝片と破片製 | 175 | 44.2 | 12 | 33.3 |
| Ⅰｃ・疑わしいもの | 51 | 12.9 | 2 | 5.5 |
| 総　　計 | 396 | 100% | 36 | 100% |
| Ⅰａ | | | | |
| 普通タイプのチョッパー | 145 | 36.6 | 18 | 50.0 |
| エンドタイプ | 21 | | 2 | |
| エンド，長いタイプ | 15 | | 4 | |
| エンド，くちばし(ピック)タイプ | 11 | | 1 | |
| エンド，寸づまりタイプ | 26 | | 1 | |
| エンド，のみ状タイプ | 35 | | 4 | |
| サイド，のみ状タイプ | 9 | | | |
| サイドタイプ | 26 | | 4 | |
| 円盤状 | 2 | | 2 | |
| 大型チョッパー | 3 | 0.76 | 2 | 5.60 |
| 小型チョッパー | 12 | 3.03 | 1 | 2.80 |
| エンドタイプ | 4 | | | |
| エンド，くちばし(ピック)タイプ | 1 | | 1 | |
| エンド，寸づまりタイプ | 4 | | | |
| エンド，のみ状タイプ | 1 | | | |
| サイドタイプ | 2 | | | |
| チョピング　普通タイプ | 6 | 1.52 | | |
| エンドタイプ | 4 | | | |
| サイドタイプ | 2 | | | |
| 小型チョッピング | 4 | 1.01 | 1 | 2.80 |
| エンドタイプ | 1 | | | |
| エンド，寸づまりタイプ | 2 | | | |
| サイドタイプ | 1 | | | |
| 総　　計 | 170 | 42.9 | 22 | 61.2 |
| Ⅰｂ | | | | |
| 円盤（スクレブロタイプ） | 13 | 3.28 | | |
| スクレブロ | 64 | 16.2 | 1 | 2.8 |
| エンドタイプ | 30 | | | |
| サイドタイプ | 34 | | 1 | 2.8 |
| エンドにくちばし状突起をもつ道具 | 13 | 3.28 | | |
| サイドにくちばし状突起をもつ道具 | 5 | 1.28 | 1 | 2.8 |
| スクレブローナイフ（？）小さな背のある | 34 | 8.58 | | |
| 様々な道具？（掻器？・ナイフ？・尖頭器？・彫器？） | 46 | 11.6 | 10 | 27.8 |
| 総　　計 | 175 | 44.2 | 12 | 33.3 |
| Ⅰｃ | | | | |
| 大円礫，円礫それらの割石製 | 20 | 5.2 | | |
| 剝片と破片製のもの | 31 | 7.7 | 2 | 5.5 |
| 総　　計 | 51 | 12.9 | 2 | 5.5 |
| Ⅱ　加工具 | | | | |
| ハンマー（礫） | 58 | 28.2 | 7 | 53.8 |
| ハンマー（大円礫） | 102 | 49.5 | 3 | 23.1 |
| 台石（大円礫） | 46 | 22.3 | 3 | 23.1 |
| 総　　計 | 216 | 100% | 13 | 100% |
| Ⅲ　円礫や大円礫，第一次打割品 | | | | |
| 剝離痕を残す中位の礫（4～7 cm） | 181 | 7.1 | | |
| 剝離痕を残す大型礫（7～10cm） | 158 | 6.2 | | |
| 剝離痕を残す大円礫 | 187 | 7.3 | 3 | 1.6 |
| 剝離痕を残す礫片 | 280 | 10.9 | | |
| 剝離痕を残す大円礫片 | 294 | 11.5 | | |
| 大円礫片 | 58 | 2.3 | | |
| 大円礫の破片 | 9 | 0.4 | | |
| 破片 | 943 | 36.9 | 158 | 85.9 |
| 剝片 | 150 | 5.9 | 23 | 12.5 |
| 総　　計 | 2554 | 100% | 184 | 100% |

第255図－1～10は，円礫の長軸一端を片側からのみの打ち欠きで刃部を作り出した典型的なエンドチョッパーである。5・7は，刃部の再加工・調整が幾度も繰り返されたと見られている。第256図－1～3は，側縁に刃部が作り出されたサイドチョッパー，第255図－11～13は，両者が複合した多刃式(エンド・サイド)チョッパーである。また第255図－14～16は，くちばし状の先端を作出した「ピック」に近い礫器である。礫器に次いで特徴的な石器は，スクレブロである(第256図－4～9，道具総数の16.2%)。多くは，礫を輪切りするようにして剝離された大型・扁平な破片の一端，もしくは一側縁に刃部が作り出されている。うち8・9は，くちばし状の突起が作り出された例である。第256図－10～14は，使用の痕跡を残す剝片である。

Ⅱ群には，軽いハンマー(円礫)と重いハンマー(大円礫)，台石があり，Ⅲ群には，剝離痕のある円礫・大円礫，その破片と剝片などがある。

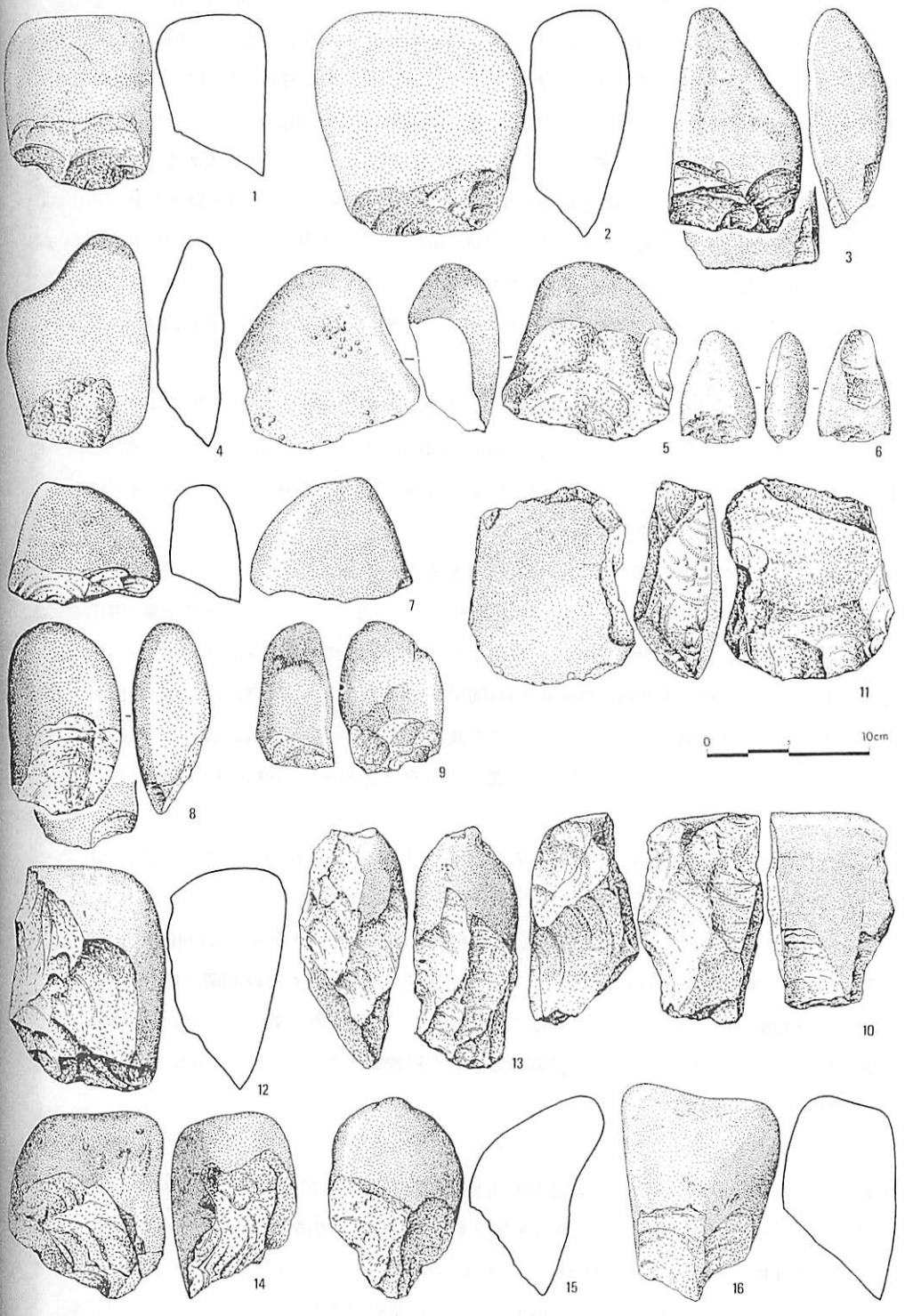
特に，出土状況が比較的詳しく報告されている第Ⅳ発掘区発見の第14地点(図12－Aの中央やや左)についてみると，同地点は，レナ河の水面より比高115.2～115.6mに立地し，遺物の広がりはおよそ12m²に及ぶ。とりわけ，大きさ42×31.5×30cmの円形の大円礫，すなわち台石のまわりおよそ9m²に大部分の遺物が集中したという。

ここでの出土遺物(第257図)は，合計233点を数える。普通タイプのチョッパー18点(同図3～5がエンド，1～2が多刃)，複数の刃部をもつ大形チョッパー2点，くちばし状に先端を尖らせた小型のチョッパー1点，小型のサイドチョピング1点，破片製のサイドスクレブロ1点，くちばし状の先端をもつツルハシ様の大型剝片製道具1点(同図6)，また破片・剝片製のノッチ(同図8)や掻器・ナイフ・尖頭器・彫器様の石器10点，加工痕を残すが判別困難な石器破片2点，そしてハンマー10点(同図7)，台石3点がある。この他，剝離の痕跡をとどめる大円礫3点，破片158点，剝片23点が含まれる。

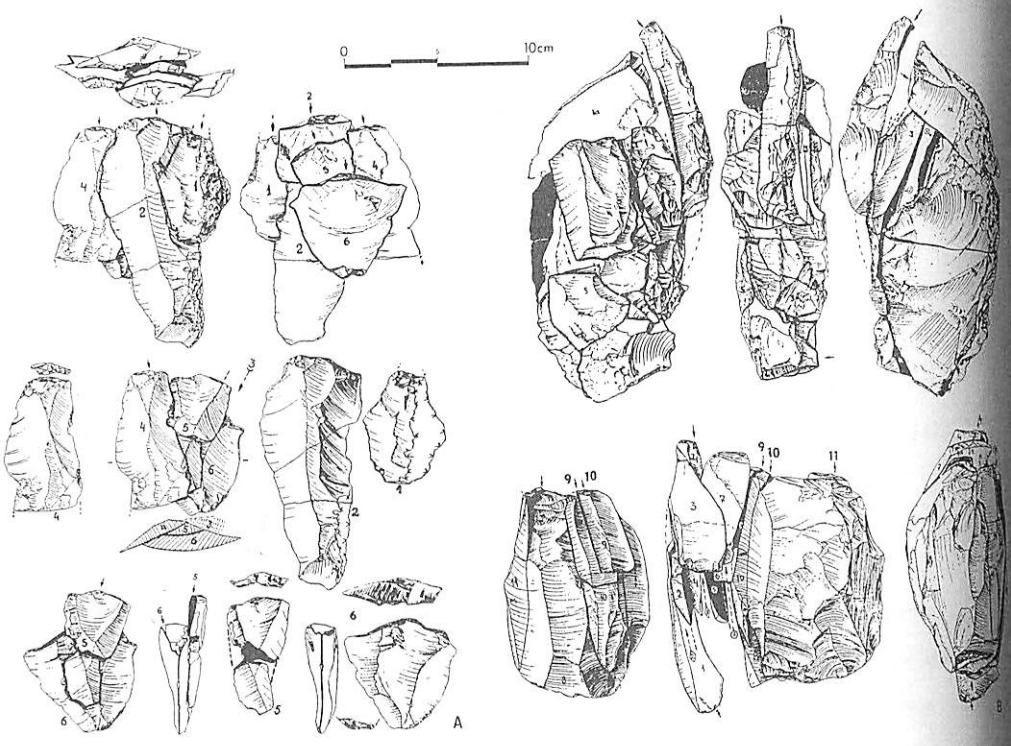
ここでは，233点中の206点が，2つあるいはそれ以上に互いに接合することが調べられている。なかには，普通タイプで末端の長いチョッパー1点，複数の刃部をもつ大形チョッパー，破片57点，剝片3点，合わせて62点が，同一の母材(大円礫)からのものという例もある(同図2a～2e)。そして，石器(未製品や廃棄品を含む)の母岩として，少なくとも礫52個(大円礫33個，円礫7個，大円礫もしくは円礫12個)が用いられたことが調べられている。そのうちの49点(大円礫・円礫)が石英，残り3点(大円礫)が珪質砂岩である。復原推定された円礫の大きさは，7～10cm，大円礫のそれは，11.5～26cmであるという。

普通タイプのチョッパー7点(0.9～1.9kg)は，1個の円礫をそのまま利用したものであるが，他の11点(0.6～1.9kg)は，大きく分割された大型剝片を素材として利用したものである。また2点の大型チョッパー(3.8～4.4kg)は，大きく分割された剝片から，小型のチョッパー(125g)と小型チョピング1点(140g)は，1個の円礫から作られている。ハンマーのうち，重いハンマー(0.7～2.4kg)は，円礫の打割用，軽いもの(0.2～0.6kg)は，刃部の整形用であったと，モチャーノフは推定する。

さてこれまで，打ち欠き法に「原始的」な様相をとどめるシベリアの「礫器」をめぐって，果たして人工品であるかどうかの議論が繰り返されてきた。従来の資料の多くが，採集品であったり，礫層



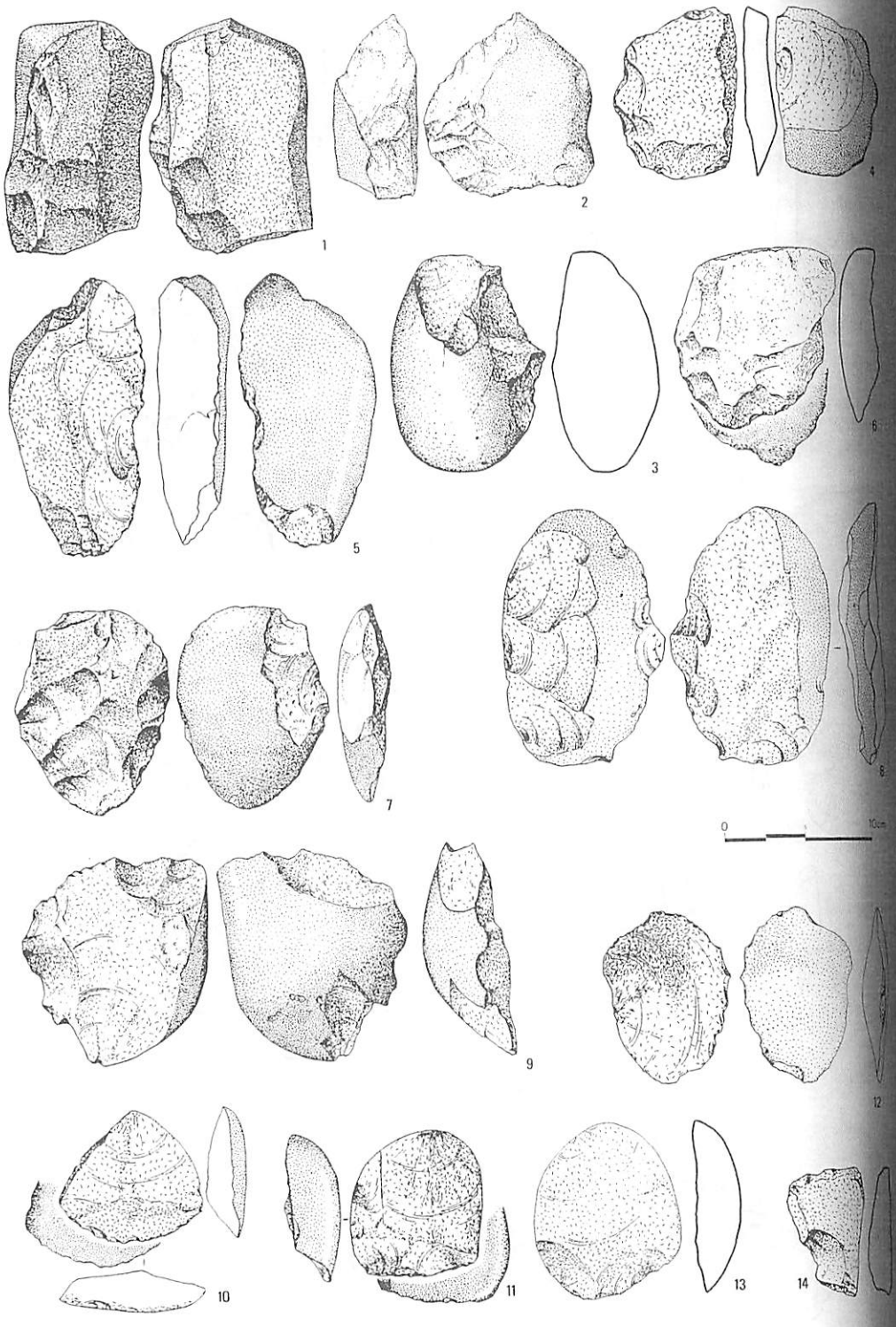

第255図　ディリング・ユリャフ遺跡出土のチョッパー（1～13）とピック様礫器
（Мочанов1988бより）



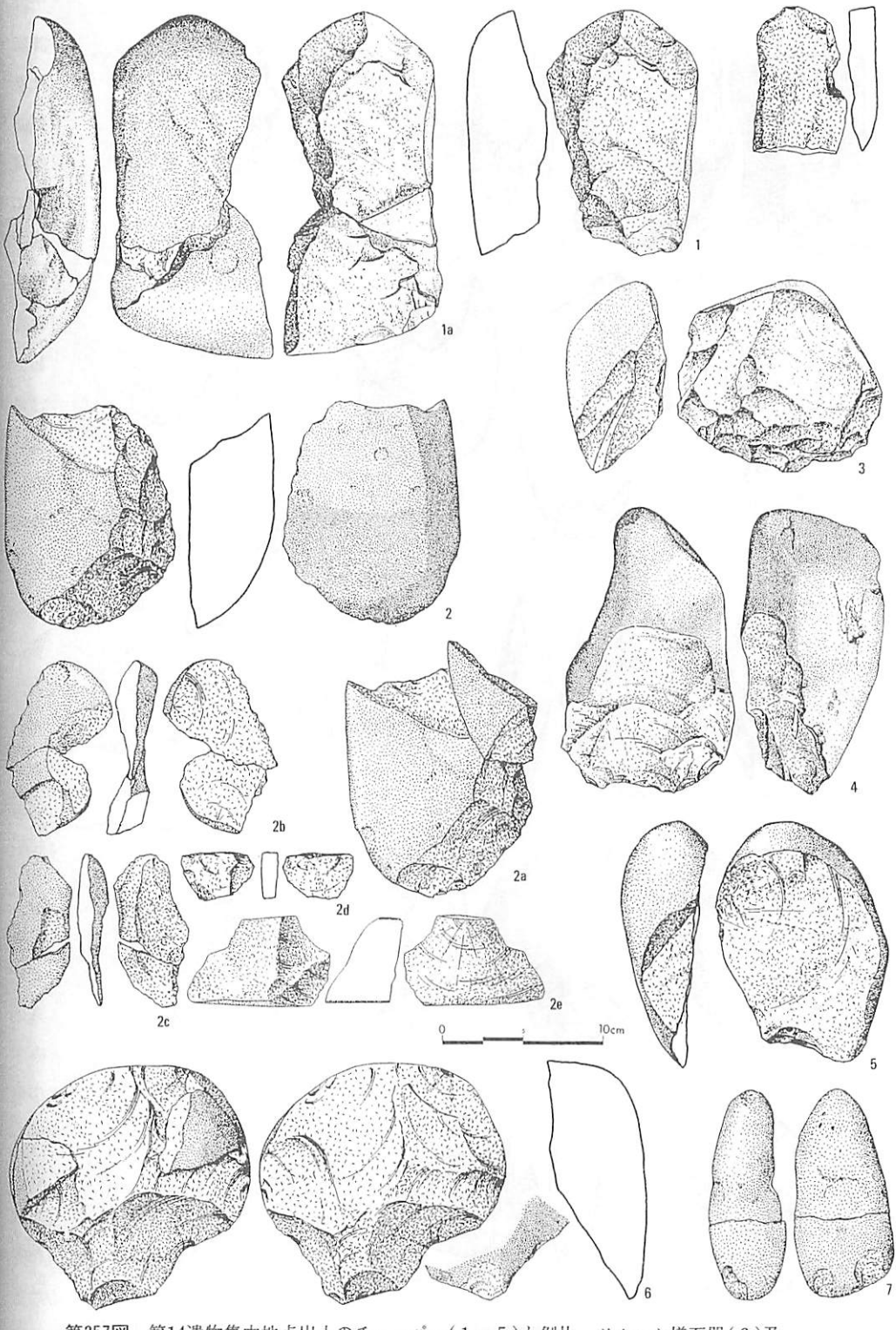

**第246図**　コロリェヴォⅠ遺跡2b層の「ルヴァロワ尖頭器技法」(A)と同Ⅱ遺跡2層の石刃技法(B)(Usik1989より)

「並行剝離」と「求心剝離」の結合がみられるが，前者に関連して剝される石刃もここでは使用されていない。しかしこうした調整技術の改良が，やがて石核表面上のクレステッド・エッジ(予備調整)を生み出し，並行剝離の発展と合まって石刃技法確立へと向かう。コロリェヴォⅡ遺跡第2文化層での資料がそのことを示している(同図B)。

手ごろな原礫から意図的に剝された分厚い剝片を素材とし，通常両端に調整が加えられ二つの打面(両設打面)が用意される。次に石刃の連続剝離を助けるもっとも重要な作業，縦長軸上にクレステッド・エッヂが形成される。ただし，しばしば打面形成の作業と逆転することがある。また，単設打面の例もある。そして，最初のクレステッド・ブレードが剝離され，以後石刃が連続的に生産される。ここでの石核の特徴は，扁平な形態が維持される点にある。ムステリアンの並行剝離においては，クレステッド・ブレードを欠くか，1枚あるかであるが，第2文化層の石刃技法においては，多くのクレステッド・ブレードが剝離されている。クレステッド・エッジの修正，あるいは更新による。石核変形中に，数回繰り返される。しかし，こうした相違にもかかわらず，石核上の稜調整にみられる両者の技術基盤は，非常に近似したものであることが理解される。しかもここでは，求心(放射)状調整の「ルヴァロワ亀甲」技法，あるいは先の並行調整の「ルヴァロワ尖頭器」技法が共存し，また石刃剝離における打面の「面取り」技法(シャポー・ド・ジャンダルムを作り出す技法)が




第256図　ディリング・ユリャフ遺跡出土のチョッパー（1～3），スクレプロ（4～9），使用痕ある剝片（10～13）及びノッチ（14）（Мочанов1988бより）

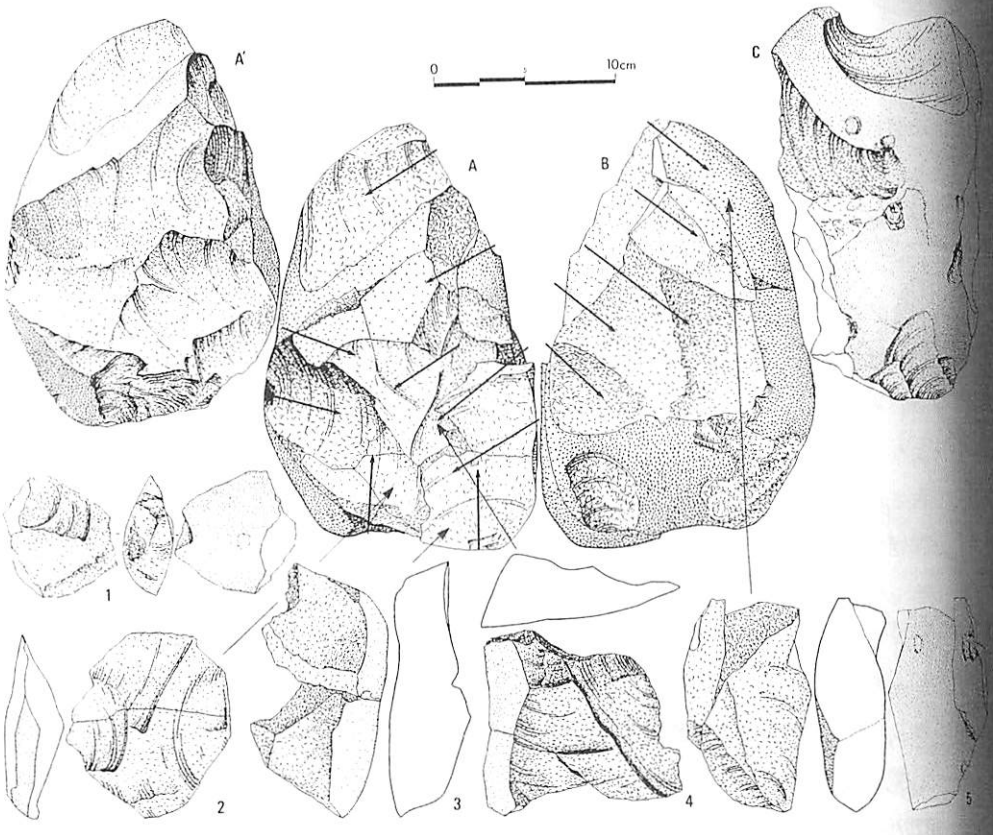



第257図　第14遺物集中地点出土のチョッパー（1～5）と剝片，ツルハシ様石器（6）及びハンマー（7）（Мочанов1988бより）

からの発見であったりしたためである。巧妙な自然の営力のすみずみまでを熟知しているわけではないわれわれが，その礫層の中から選りすぐられた特別の属性をもつ断片的な資料を，正しく評価することはなかなか容易ではない。しかし，ディリング・ユリャフ遺跡の資料は，これまでとは事情をやや異にしている。ここでは，層位的関係はもちろん，資料の平面的な出土状況までよく把握されているからである。すでに紹介したように，遺物が一定のまとまりをもって出土することが調べられており，しかも剝片と石器，あるいは礫と剝片とが接合する関係まで確認されている。中には，集中地点を越えて接合するものもあるという。

第258図は，「礫器」と破片・剝片多数が接合した資料である。剝片剝離（打ち欠き）の方向を推定し，矢印をもって示したが，その手順は，充分に規格性があるとは言い難いものの，自然の破砕とするのはおよそ不可能である。図のA面，右側面からやや斜め下に向かって連続的に剝離が行われている。また反対面においてもそれと対称に連続剝離が行われている。同じような接合資料は，他にも多数知られており，ディリング・ユリャフ遺跡の出土品の多くが人工品であると認めて間違いない。

ところで，ディリング・ユリャフ遺跡から発見されたⅠ類の主体をなす石器を，モチャーノフにならいチョッパー，チョピング・トゥールとしたが，果たして「石核」とどのように区別するのか，




第258図　第14遺物集中地点出土の接合資料（Мочанов1988より）

もう一つの難しい問題がある。剝片の生産(剝離)を目的としたものか，あるいは「ある種の道具(製品)」の製作を目的としたものかは，石器群の基本的性格をも左右する重要な問題であるが，両者を区別する確固とした基準を得るまでに至っていない。

大量の石核とチョッパー，チョッピング・トゥールが出土したことで知られる中央アジアのカラ・ブラ遺跡を例としたギネブルグらの研究は，石核における打角(作業面と打面のなす角度)と，チョピング・トゥール(チョッパー)の刃部の角度とに，明瞭な差があることを示した(Гинэбург他1981)。剝離が進んで誰もが石核と認められるもの64点が選ばれ測定された結果，石核の打角は51～90度に収まる。とりわけ70～90度に集中するという。一方チョピング・トゥール(チョッパー)120点の刃部の角度は，その前後，とりわけ前に集中・分散するという。ここでは，石核は70～90度に近く，チョピング・トゥールはさらに鋭角であるという傾向を示している。

以上の傾向を仮にディリング・ユリャフ遺跡のⅠ群ａの資料に当てはめると，４分の１がチョッパーである。残りについては，チョッパー，石核のいずれとも決し難いものの，70度以下のものが多いという傾向からすると，やはりチョッパーの可能性が強いということになる。もちろん実際は，それほどに単純ではなさそうである。

モチャーノフは，剝片と破片のすべては，円礫・大円礫の第一次打割の産物，もしくは刃部をもつ道具の加工・調整の廃棄品であるという。

ディリング・ユリャフ遺跡では，全部で150例の剝片が発見され，うち23例が第14地点中にあった。半数以上が大きさ3～7㎝，ごくわずかの剝片が大きさ7～10㎝である。10㎝を越えるのは，わずか15例であるという。しかも大部分は，打面と打瘤が不明瞭で，背面にはしばしば礫皮が残されており，破片との類似をさらに強いものにしている。いずれの場合も，円礫の打割に伴うもので，多少とも定形的な剝片も，それらの生産を目的としたものではない，とモチャーノフは考えている。すなわち，特別に準備された石核から剝片をとる意図的な剝離法はここでは認め難く，また，スクレブロとスクレブロ様円盤をのぞくと，ディリング・ユリャフ遺跡には，念入りに加工された剝片製の道具はみあたらない。石器組成が不完全なものであるという疑いを完全には払拭できないが，チョッパーやチョピング・トゥール，スクレブロを特徴とするユニークな石器群であることは認められよう。しかもそれらは，かなりの深さの所から発見されており，また激しく風食を受けている。その古さがかなりのものであることが容易に予想される。果たしてどこまで遡るかが，残された最大の課題である。

モチャーノフは，ディリング・ユリャフ遺跡の石英製のチョッパーを主体とした石器群を，唯一対比できるのがアフリカのオルドヴァイ文化であるとし，ペニコフによる古地磁気の測定結果を考慮し，その年代を180～320万年前と推定した。現在，それらがシベリア最古の石器群であることは言うに及ばず，「アフリカ起源説」に対抗する人類の「多元説」を内容とする大胆な仮説として話題を提供している(Мочанов1988б・в)。

ノヴォシビルスクのグニビデンコは，古地磁気の測定結果に基づき，正の磁極を示した石器の包含層は，ガウス正磁極期(250～336万年前・筆者補註)のケーナ事変かマンモス事変のいずれかであ

り，直下の逆の磁極期は，ギルバート逆磁極期(336万年前以前・筆者補註)のコチティー事変，あるいはヌニヴァク事変，直上の逆磁極期はマツヤマ逆磁極期(70～250万年前・筆者補註)のジャラミロ事変，オルドヴァイ事変，レユニオン事変のいずれかであるという。また，1990年の調査に関係してモスクワ大学地理学教室のO.A.クリコフが行った熱ルミネッセンス法による年代は，1,100,000B.P.＜(第6トレンチ)，1,800,000＜(第4トレンチ)，また1988年のそれが，2,900,000±960,000(第5トレンチ)と測定されている[3]。これらの結果は，モチャーノフの型式学的年代観を更に補強するものとなっている。

しかしながら，年代推定に問題があるとして，地質学者や考古学者の賛同を受けるに至っていない。自らの著書の中に，旧ソ連邦の著名な研究者たち，ウクライナのグラジリン，サンクト・ペテルブルグのグリゴリエフ，リュービン，プラスロフ，ドシャンベのラーノフらが，モチャーノフの考えに批判的であることが記されている(Мочанов1988в)。

1990年7月に現地で開かれた第4紀層序学の国際シンポジウムでの討論の様子が，名古屋市立大学教授の斉藤晨二によって紹介されているが，古地磁気の研究者からも，海洋底の地層から得られた編年表を複雑な段丘堆積物に当てはめ，解釈しようというのに無理があるという意見が出されている(斉藤1990)。また，段丘堆積物のほとんどを第3紀終りの鮮新世後期とするモチャーノフに対し，ロシア科学アカデミー地質学研究所(モスクワ)のアレクセーエフは，礫層を形成した長いブレークを夾む新旧2つの時期に大別し，そのうちの上層に限り第4紀更新世の周氷河環境下において半乾燥状態で堆積したものとする。そして，サンドヴェイの存在，礫層にみられる風磨のあとのファセットやワニス殻などの痕跡，あるいは自然礫と石器との風食程度の差などをよりどころに，人類の居住は，気候の悪化による地層の乱れ，水成層の破壊，凍結など様々な氷成，風食現象の起こった長いインターバルの後，より穏やかな気候環境になってからのこととし，その時期は，更新世初期，しかも上部の逆磁極帯ブリューヌ正磁極期前半におけるエピソード，すなわち69～5万年前のある時点とみなしている。

人類の発祥地がヤクーツクにあったとは考えにくいものの，地質学的な状況，すなわち，強い風によって堆積物が吹き飛び，吹きさらしで自然礫や石器が烈しく風食を受ける時期と，強い風によって厚く風成堆積物が覆う時期とが幾度も繰り返された状況，あるいは氷楔が発達するほどの寒冷期が幾度か繰り返された状況から，他の遺跡よりも古いものであることは認めてよさそうである。ロシアの研究者の中に，後期旧石器時代の特殊な礫器製作址とみなす意見もある。しかしこれまでに，似たような遺跡は知られていない。また後にも触れるが，後期旧石器時代になると礫器の素材として石英を利用する傾向が著しく低下しており，先の意見は必ずしも説得的でない。ここでは，地質学者のアレクセイエフの意見(69～5万年前)や植生から予想される古環境(温暖期を指標とする時期)などを考慮し，トボリスキー間氷期，ヨーロッパで言うミンデル／リス間氷期に仮に位置づけた(第19表)。もちろん，なお確定する状況にはない。

その系統について，常識的には中国の前期旧石器文化の北上と考えるが，中国の前期旧石器(例えば西候度など)から中期旧石器(例えば丁村)にかけて脈々と連なる非常に特徴的な「三稜尖頭器」

が，あるいは韓国の全谷里にみられるそれに近い「ハンドアックス」がシベリアでは欠如しており，にわかには断じ難い。一方で，中央アジアのカザフ，タジキスタン，ウズベキスタンなどにこのような礫器をもった一群が知られており，西からの出自も考慮しておく必要がありそうである。

### 4　シベリアの「礫器伝統」とモビウスの仮説

これまで，年代の確定になお課題を残すものの，シベリアに前期旧石器(筆者の区分で言う第1期)が存在する可能性を説いてきた。しかもその石器群は，チョッパー，チョピング・トゥール，スクレブロを特徴とする石器群であることを示した。この「礫器伝統」が，シベリアの旧石器文化のその後にどのような役割を果たすのか，次に考察したい。

すでに触れたように，近年デレヴャンコやマルキンらによって，シベリアでのアシュール伝統の広がりが注意されるようになってきた。またそれよりも早く，オクラドニコフは，アムール河下流ハバロフスク地方のボゴロツコエから採集した1点の「ハンドアックス」をもとに，アシュール伝統が極東にまで及んでいた可能性を明らかにしている(Окладников1979)。これは，自らが示してきた枠組みの大きな変更を意味している。

果たして，前期にみられた「礫器伝統」と，「アシュール伝統」が，シベリアでどのような関係にあるのか。まさに古くて新しいモビウスの「仮説」にかかわる問題である。とは言え，シベリアにおける第2期の研究は，端緒がようやく開かれたばかりであり，以上が情報のすべてである現状においては，両者の直接的関わりを探ることはおよそ不可能である。しかし，その後の展開を含めて考えると，大きな流れを見通すことが可能である。

第3期に至って，石器製作技術におけるまったく新しいシステム，すなわち剥片剥離技法としてのルヴァロワ技法が，西方から伝わり，普及する。それに関連し，これまでにはみられなかった新たな石材の開発が行われている。フリント，あるいは珪質頁岩や安山岩などが選択される。また円礫というより，大きめの半角礫が利用されている。剥片剥離に必要な打角(50～90度)，あるいは適当な広がりをもった剥片剥離作業面があらかじめ準備されることに関係していることは，想像に難くない。剥片の量産に必要な石材は，その条件の得やすい素材というごく当り前のことの実現である。典型的ムステリアンの遺跡が山地アルタイに集中する原因の一つには，豊富で，恵まれた石材(転礫)の産地であることが関係していよう。またここでは，スクレブロを除くと，チョッパーやチョッピング・トゥールが欠落しており，前期の「礫器伝統」とは明らかに区別される。

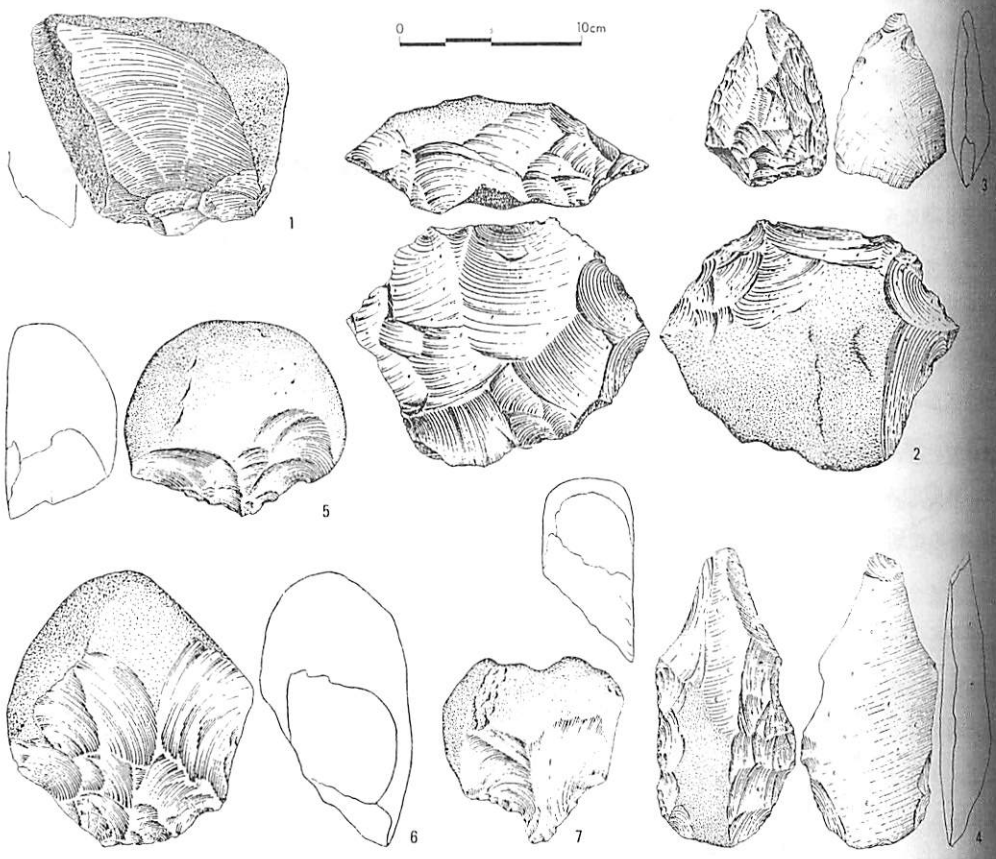
さらにこの時期，あるいはやや遅れてムステリアン伝統が，エニセイ中流域，さらにはバイカル周辺にまで及んでいる可能性を前に述べた。イゲチェイ・ロク遺跡やイゲチェイ浜遺跡，バルシュキナ遺跡などにおいても，ムステリアン「尖頭器」(第259図－3)やルヴァロワ剥片，同石核(同図2)など，ルヴァロワ技法の存在・影響を思わせる資料が含まれている(Медведев1975・1982・1991)。しかしムステリアン「尖頭器」は，素材の剥片が分厚く，刃部も鈍い。むしろスクレブロと呼ぶのがふさわしい。打面が大きく，分厚い作りは，これに限らず，ごく一般的な特徴であり，おそらく素材が石英であることに関係していよう。ちなみに，石材の選択についてイゲチェイ・ロク遺跡を例にすると，資料の91％が石英製である。しかもここでは，「礫器」(同図5～7)の出現率が高い。この

点でも特異である。アルタイの典型的なものとは明らかに様相を異にしている。

ムステリアン伝統の西からの影響を強く受けながらも，石器組成，石材の選択などにおいて前期からの「礫器」伝統が色濃く残っている様子は，東シベリアの旧石器文化を特色づけている。前者の技術的基盤を選択的に受容，融合させたとでも理解できる，似たような，しかも特徴的な様相は，その後もしばしば見られるのである。

極東の後期旧石器時代初頭にみられる技法も，その好例のひとつである。やや大きめの円礫から，蒲鉾を輪切りにするようにして剝片を剝し取る技法である。その特徴的な石核と剝片（第260図－1）が，ルヴァロワ様剝片（同図2・3）とともに地理学協会洞穴で出土している（Окладников他1968）。巨視的にみるならば，ルヴァロワ技法の変形ともみられるが，アブラモワは典型的な「礫器技法」と呼んでいる（Абрамова1989）。

ちなみに，円礫を大きく打ち欠いた剝片，もしくは扁平な円礫を素材として作る大型ナイフ（掻器），すなわちスクレブロ（典型例は第252図－31）は，各時代にみられるシベリア独特の石器である。こうした道具の発達が，第１期の「礫器」製作技術伝統に起源があったことは間違いなかろう。




**第259図**　シベリア中期旧石器時代のスクレブロ(1)，ルヴァロワ石核(2)，ムステリアン尖頭器（スクレブロ・3），ピック様礫器（4～7）

1・デニソワ洞窟（Деревянко　и др.1982д），2～4・バルシュキナ山（Медведев1975より），5～7・イゲチェイ浜（Медведев　и др.1990より）